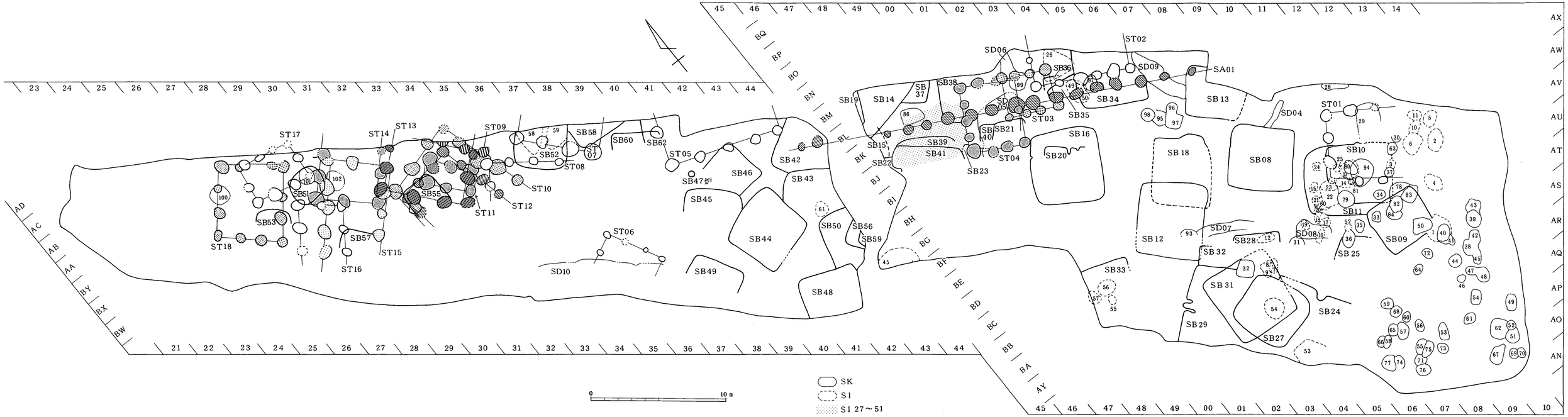
開善寺境内遺跡

かいぜんじけいだいいせき

－本文編－

2002. 3

長野県飯田市教育委員会



付図１　開善寺境内遺跡遺構全体図

開善寺境内遺跡

かいぜんじけいだいいせき

ー本文編ー

2002. 3

長野県飯田市教育委員会

序

わたしたちの飯田市は環境文化都市－人の営みと自然が調和し、文化の質が高く、交流もさかんで、いきいきと豊かな暮らしができるまち－をめざしています。市民の心のよりどころ風越山とはるかに望む中央アルプス・南アルプスの山々、豊穣をもたらす天竜川、名水百選に選ばれた猿庫の泉など、豊かな自然に恵まれています。わけてもここ竜丘地区上川路地籍は、春にギフチョウが舞い、清流久米川で山女魚やカジカが泳ぐ、のどかな田園風景がひろがるところです。また、県史跡御猿堂古墳・馬背塚古墳をはじめとする古墳群、中世には信濃国守護の小笠原氏が帰依した古刹開善寺など多くの文化財に恵まれた、飯田下伊那地方の古来からの政経の中心地です。そして、地区のみなさんと行政が一体となってこうした恵まれた自然や文物を大切にし後世に伝えていこうとして、ギフチョウの保護や塚原古墳群の保存に取り組んでいます。

穏やかな風土、人情と文化の薫り豊かなところですが、暴れ天龍の異名のように幾度となく襲った天竜川本支流の水害に、家財を失っては立ち直るという苦闘の歴史を歩んできた地域でもあります。そこで、飯田市では国・県とともに平成５年度から天竜川治水対策事業として築堤・道路整備・低地のかさ上げなどに取り組んできました。その一環として久米川の改修と今回の発掘調査に関わる県道の付け替え工事が行われることになりました。

この発掘調査では、冒頭に挙げました古墳群の築造にたずさわった人々が生活していたムラの跡や、野辺の送りをした中世から近世にかけての埋・火葬の跡などがあらわれたと聞きおよんでいます。そしてこの地にはじめて私たちの祖先が足跡をとどめたのは１万年ほど前にさかのぼるということです。いつの世にも人々の営みがあったことを窺うことができます。

この治水対策の事業によって、洪水により私たちの生命や財産がおびやかされることはなくなりますし、また、事業に含まれる道路整備や土地区画整理事業により私たちの生活もより豊かなものになっていくでしょう。ただ、洪水対策や生活の利便性向上のためとはいえ、一変した風景や失われた文化財の数々を思うと、私たちがなくしたものがいかに多く、また尊いものであったか思い知らされます。せめて、眠りから覚めそして壊されたしまった文化財を、この報告書に再び眠らせてしまうことなく、地域のために活用することができればという想いでいっぱいです。

最後になりましたが、地権者ならびに発掘調査に関わった方々に多大なご理解とご協力を賜りました。皆さまに深甚なる感謝を捧げまして、発刊の辞といたします。

平成14年３月

飯田市教育委員会

教育長　冨　田　泰　啓

例　　言

1．本書は県単道路改良（飯田市川路地区）事業に先立って実施された、長野県飯田市上川路開善寺境内遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、飯田市教育委員会が直営実施した。

3．調査は、平成13年度に現地作業、整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．本書の記載順は遺構別を優先した。

5．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行った。

6．本書の執筆は第Ⅳ章第２節(1)竪穴住居址・(2)竪穴・(8)埋設土器については伊藤尚志・羽生俊郎・馬場が分担執筆し、他の部分は馬場が行った。執筆者は文末に明示した。なお、遺構に関する記載の一部について馬場が加筆・訂正を行った。

7．本書の編集は馬場が、総括は小林正春が行った。

8．本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

本　文　目　次

例言
目次
第Ⅰ章　調査の経過　1
　第1節　調査に至るまでの経過　1
　第2節　調査の経過　1
　第3節　調査組織　1
第Ⅱ章　遺跡の環境　3
　第1節　自然環境　3
　第2節　歴史環境　5
第Ⅲ章　調査の方法　9
　第1節　発掘調査の方法　9
　第2節　整理作業の方法　15
第Ⅳ章　調査結果　25
　第1節　微地形　25
　第2節　基本層序　25
　第3節　遺構と遺物　25
　　(1) 竪穴住居址　25
　　(2) 竪穴　52
　　(3) 掘立柱建物址　56
　　(4) 柵列・一本柱列　69
　　(5) 土壙墓・土坑　79
　　(6) 集石墓・集石　92
　　(7) 溝址・溝状址　92
　　(8) 埋設土器　92
　　(9) 小柱穴　95
　　(10)遺構外出土遺物　95
第Ⅴ章　総括　105
　引用参考文献　111
　報告書抄録　115

挿　図　目　次

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図　4
挿図2　調査地点周辺地形図および調査区位置図　8
挿図3　基準メッシュ図区画方法1　10
挿図4　基準メッシュ図区画方法2・3　11
挿図5　基準メッシュ図区画方法4・5　12
挿図6　基準メッシュ図区画調査位置　13
挿図7　古代土器の器種分類(1)　20
挿図8　古代土器の器種分類(2)　21
挿図9　古代土器の器種分類(3)　22
挿図10　古代土器の器種分類(4)　23
挿図11　調査区微地形図　26
挿図12　ＳＢ44　27
挿図13　ＳＢ08、ＳＢ10　29
挿図14　ＳＢ11、ＳＢ12　31
挿図15　ＳＢ13、ＳＢ14・19　33
挿図16　ＳＢ15、ＳＢ16、ＳＢ18　34
挿図17　ＳＢ20、ＳＢ21・40、ＳＢ22、ＳＢ23　37
挿図18　ＳＢ24、ＳＢ25　38
挿図19　ＳＢ27、ＳＢ28　40
挿図20　ＳＢ29、ＳＢ31、ＳＢ32　42
挿図21　ＳＢ33、ＳＢ37、ＳＢ38・ＳＤ06、ＳＢ39　44
挿図22　ＳＢ41～ＳＢ43　45
挿図23　ＳＢ45、ＳＢ46、ＳＢ48、ＳＢ49　48
挿図24　ＳＢ50、ＳＢ52、ＳＢ56・59、ＳＢ60、ＳＢ62　50
挿図25　ＳＢ09、ＳＢ34・35、ＳＢ36　53
挿図26　ＳＢ51、ＳＢ53、ＳＢ55、ＳＢ57、ＳＢ58　55
挿図27　ＳＴ01　57

挿図28　ＳＴ02　58
挿図29　ＳＴ03　59
挿図30　ＳＴ04　60
挿図31　ＳＴ05　61
挿図32　ＳＴ06～ＳＴ09　62
挿図33　ＳＴ10　63
挿図34　ＳＴ11・ＳＴ12　64
挿図35　ＳＴ13　65
挿図36　ＳＴ14　66
挿図37　ＳＴ15　67
挿図38　ＳＴ16・ＳＴ17　68
挿図39　ＳＴ18　70
挿図40　ＳＡ01　71
挿図41　ＳＫ28～ＳＫ35　72
挿図42　ＳＫ36～ＳＫ46　73
挿図43　ＳＫ47～ＳＫ56　74
挿図44　ＳＫ57～ＳＫ68　75
挿図45　ＳＫ69～ＳＫ78・ＳＫ83　76
挿図46　ＳＫ79～ＳＫ82・ＳＫ84～ＳＫ87　77
挿図47　ＳＫ88～ＳＫ90・ＳＫ92～ＳＫ99　78
挿図48　ＳＫ100～102　79
挿図49　ＳＩ01～ＳＩ04　80
挿図50　ＳＩ05～ＳＩ07・ＳＩ10・ＳＩ11　81
挿図51　ＳＩ08・ＳＩ09・ＳＩ12～ＳＩ16　82
挿図52　ＳＩ17～ＳＩ23　83
挿図53　ＳＩ24～ＳＩ27　84
挿図54　ＳＩ28～ＳＩ33　85
挿図55　ＳＩ34～ＳＩ39　86
挿図56　ＳＩ40～ＳＩ44・ＳＩ46　87
挿図57　ＳＩ45・ＳＩ47～ＳＩ52・ＳＩ54　88
挿図58　ＳＩ53・ＳＩ55～ＳＩ57・ＳＩ60　89
挿図59　ＳＩ58・ＳＩ59・ＳＩ61　90
挿図60　ＳＩ13～ＳＩ25、ＳＩ27～ＳＩ51　91
挿図61　ＳＤ04・ＳＤ05・ＳＤ07・ＳＤ08　93
挿図62　ＳＤ09・ＳＤ10　94
挿図63　ＳＸ01　95
挿図64　周辺柱穴平面図(1)　98
挿図65　周辺柱穴平面図(2)　99
挿図66　周辺柱穴平面図(3)　100
挿図67　周辺柱穴平面図(4)　101
挿図68　周辺柱穴平面図(5)　102
挿図69　周辺柱穴平面図(6)　103
挿図70　周辺柱穴平面図(7)　104

付　図　目　次

付図１　開善寺境内遺跡遺構全体図

表　目　次

表１　古代土器の器種分類表(1)　17
表２　古代土器の器種分類表(2)　18
表３　古代土器の器種分類表(3)　19
表４　土層図注記(1)　96
表５　土層図注記(2)　97

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

平成12年度末に長野県飯田建設事務所より、飯田市上川路1077番地他における県道改良の計画が提示された。事業計画地は埋蔵文化財包蔵地開善寺境内遺跡にかかる。既に工事が発注済みであったため、急きょ飯田建設事務所・飯田市教育委員会の二者で保護協議を行い、とりあえず試掘調査を実施しその結果に基づいて改めて協議することとなった。

協議に基づいて試掘調査を平成13年４月２～４日に実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居址等の遺構・遺物があり、本調査を実施することが必要であると判断された。そこで再度二者協議を行い、本発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

平成13年４月27日、工事本体に関わる耕土を確保するため、重機を入れて表土剥ぎを行った。５月１日委受託契約を締結し、同月９日本発掘調査に着手した。まず、基準点を設置してグリッド設定を行い、引き続き作業員を入れて遺構検出・同掘り下げ作業を行った。各遺構の精査の後、写真撮影・測量調査・空中写真撮影等を行い、８月30日現地での作業を終了した。

引き続き、飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・拓本とり、遺構図等の作成。トレース作業、写真類の整理、版組み等整理作業を行い、本報告書作成作業にあたった。

第３節　調査組織

（1）調査団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　冨田泰啓

調査担当者　馬場保之・伊藤尚志・羽生俊郎

調　査　員　佐々木嘉和・渋谷恵美子・吉川金利・下平博行・坂井勇雄

作　業　員　伊藤和恵・伊藤孝人・伊東裕子・井上恵資・北沢一嘉・木下貞子・木下義男
木下力弥・熊崎三代吉・小林定雄・佐々木一平・清水三郎・清水恒子・下田芙美子
代田和登・杉山春樹・高橋セキ子・田中　薫・田中直美・田中博人・塚原次郎
中村地香子・仲村　信・野牧　隆・服部光男・林　員子・樋本宣子・牧内　修
松下成司・松下博子・松島　譲・三浦照夫・森山昭吉
新井ゆり子・池田幸子・金井照子・唐沢古千代・木下早苗・木下玲子・小池千津子

小平まなみ・小林千枝・斎藤徳子・佐々木真奈美・佐藤知代子・関島真由美
高木純子・橘　千賀子・筒井千恵子・中沢温子・中田　恵・中平けい子・林勢紀子
林ひとみ・原　昭子・平栗陽子・福沢育子・牧内喜久子・牧内八代・松本恭子
三浦厚子・宮内真理子・森藤美知子・森山律子・吉川悦子・吉川紀美子

(2) 指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課　　財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

(3) 事務局

飯田市教育委員会

久保田裕久（教育次長）
中島　修　（生涯学習課長）
小林正春　（生涯学習課文化財保護係長）
馬場保之　（生涯学習課文化財保護係）
渋谷恵美子（　　〃　　）
吉川金利　（　　〃　　）
伊藤尚志　（　　〃　　）
下平博行　（　　〃　　）
坂井勇雄　（　　〃　　）
羽生俊郎　（　　〃　　）
宮田和久　（学校教育課総務係）
福沢恵子　（　　〃　　）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

飯田市竜丘地区は、飯田市街地から南に約４～８㎞に位置し、飯田市全域から見ればやや南部にあたる。東は天竜川をはさみ龍江地区に、北は毛賀沢川で松尾地区と境を接する。南は久米川をはさみ川路地区となり、西は高位段丘上で伊賀良地区と接する。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。伊那盆地ができはじめたのは250万年位前からで、天竜川が流れ始めたのもこの頃からといわれる。この頃から60万年前までに南アルプスが隆起をはじめ、竜東側に巨大扇状地ができ、60万年前頃から中央アルプスが隆起をはじめ、伊那谷全体が巨大扇状地で埋め尽くされた。そして、10万年前頃から断層運動が活発となり、中央アルプスの上昇とともに盆地全体も上昇し、断層がたくさんできた。また、山地の上昇と気候の温暖化により、天竜川やその支流により段丘および扇状地の開析が進行した。伊那谷の生い立ちを知る上で、最も参考になるのが松尾から竜丘地区を貫く「念通寺断層」である。

竜丘地区では天竜川が東端を南流し、大部分が鵞流峡の狭窄部にあたり、その先時又付近からは流れをやや西側に変えて、広々とした氾濫原を形成する。平坦部は、氾濫原を含め大きく５～６の段丘面で形成されており、それらは火山灰が被らない低位段丘Ⅱと被る低位段丘Ⅰとに大別できる。下位の面が沈降した結果、段丘崖直下には湿地が形成される場合が多い。また、伊賀良と接する中位段丘の標高は500m前後でローム層に覆われた台地で、低位段丘Ⅰとの比高差は約70mを測り、その境が「念通寺断層」である。各段丘面は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流により開析され、複雑な小地形を呈している。

気候面でみれば、飯田市は比較的温和であり、平均気温は、13℃を越え、降水量は年間1,600㎜程度と年間を通して周辺の山地部より少ない。竜丘地区は飯田市の中でもさらに温暖である。これは、地区の大部分が標高370～440mと低いことが主因であり、また、西側に大きな段丘崖を背負っているため、冬の南西からの卓越風から守られる格好になっていることも要因のひとつにあげられる。こうした温和な気候や起伏に富んだ地形に由来して、飯田市をはじめとして下伊那地域は豊かな動植物相を示している。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の分布の接点にあたり、植物の種類も2,500種に及ぶ植生豊かな地域である。また、飯田市から阿智村・下条村・泰阜村に分布するギフチョウは、市内では竜丘・伊賀良・川路・三穂・龍江・千代の各地区に生息しており、平成元年１月31日付で飯田市指定文化財（天然記念物）に指定されたほか、同年４月には地区内桐林のギフチョウ公園が環境庁の「ふるさといきものの里」に指定されている。

開善寺境内遺跡は、地区内南端部、久米川に面した低位段丘上に位置している。

1．開善寺境内遺跡　2．塚原古墳群（二子塚・3号・鏡塚他）　3．小池遺跡
4．前の原遺跡　5．内山遺跡　6．久保尻遺跡　7．安宅遺跡　8．宮城遺跡
9．駄科北平遺跡　10．鈴岡城跡　11．前林廃寺　12．蒜田遺跡・蒜田古墳
13．上の坊遺跡・馬背塚古墳　14．御猿堂古墳　15．久保田遺跡・正清寺古墳
16．龍江城遺跡　17．毛賀御射山遺跡

挿図1　　調査遺跡および周辺遺跡位置図

第2節　歴史環境　（挿図1）

竜丘地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全域が包蔵地であり、殊に、飯田下伊那地方で最も古墳が多く築造されている。竜丘地区での遺跡発掘調査は近年（主に昭和40年代以降）になって増大してきた。これまでに、鏡塚古墳（飯田市教委　1967)、内山・花の木遺跡（同　1968)、大島・安宅遺跡（飯田建設事務所　1969、以上一般国道151号付替えに先立つ調査)、鈴岡城址（飯田市教委　1990)、安宅遺跡（同　1995、以上県道駄科大瀬木線拡幅改良に先立つ調査)、小池・宮城・神送塚古墳（同　1974)、前の原遺跡（同　1975)、駄科北平遺跡（同　1976、以上農業構造改善事業に先立つ調査)、前の原遺跡（同　1990ａ、市立竜丘保育園建設)、蒜田古墳、塚原遺跡・塚原二子塚古墳・ガンドウ洞遺跡（同　1991ｂ、以上治水対策事業運搬道路建設に先立つ調査)、開善寺境内遺跡（同　1974－考古資料館建設、同　1991ａ－集会所建設、同　2001－市道建設)、安宅遺跡、上の坊遺跡、蒜田遺跡、ガンドウ洞遺跡、鈴岡城址、西の塚遺跡、久保尻遺跡（同　1996)、内山遺跡（同　1998、以上民間開発に先立つ調査）等各緊急発掘調査、および宮洞窯址群の学術的な調査や飯田高校考古学クラブによる前の原遺跡調査が行われている。

竜丘地区の歴史を概観すれば、縄文時代以前に遡る遺跡はこれまでに確認されていない。しかし、火山灰が確認される低位段丘Ⅰ（いわゆる「桐林面」・「駄科面」・「長野原面」等）や中位段丘上では、他地区の八幡原遺跡・猿小場遺跡（松尾地区）や下の原遺跡（伊賀良地区）等で旧石器時代の遺物が出土しており、地区内にもこの時代の遺跡がある可能性は高い。

縄文時代前期になると、上の坊遺跡で断片的ながら後葉の土坑や土器・石器が確認されており、氾濫原から20m程の高所での活動が知られるようになる。中期には宮城遺跡・前の原遺跡・安宅遺跡・駄科北平遺跡で竪穴住居址等が調査されており、宮城遺跡では飯田地方では数少ない藤内Ⅱ式期を主とする集落が調査されている。駄科北平遺跡では中期後半の住居址が2軒調査され、さらに終末のものと考えられる石棒を伴う配石墓壙がある。また、開善寺境内遺跡において中期中葉～後葉の遺物が出土している。後期初頭として、宮城遺跡土坑出土の東海地方の影響を受けた土器が注目される。後・晩期から弥生時代中期にかけては、具体的に生活の様子を物語る資料はほとんどない。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は、他地域の状況と同様遺跡数が増加しており、これまで中・高位段丘上での調査事例が主である。安宅遺跡・蒜田遺跡・ガンドウ洞遺跡・鈴岡城跡で住居址が調査されている。本遺跡は少ない低位段丘上での調査例の1つである。川路地区や竜東対岸の龍江地区では、治水対策事業に先立つ調査で氾濫原に面した緩斜面で集落の一部が調査されており、今後低位段丘での調査例も増えると考えられる。また、蒜田遺跡・上の坊遺跡では、貼り石をもつ方形周溝墓が調査されている。蒜田遺跡は方墳と考えられる蒜田古墳に、また、上の坊遺跡は長野県史跡馬背塚古墳がそれぞれ近接した位置にあり、古墳時代の地域的な墓制の特徴を解明する上で、注目される遺跡といえる。

竜丘地区には消滅したものを含めると140基の古墳が築造されており、松尾・座光寺地区とともに古墳が集中する地域である。特に、前方後方墳・前方後円墳および帆立貝型古墳の数が多いことで際立っており、地区内には塚越・権現堂・兼清塚・丸山・大塚・塚原二子塚・金山二子塚・馬背塚・御猿堂といった前方後円墳、それから塚原3号・鏡塚・鎧塚の帆立貝型古墳がある。かつて飯田下伊那地方の古墳は横穴式石室に特徴があるといわれていたが、近年では5世紀代築造と考えられる権現堂・兼清塚・

丸山・大塚・塚原二子塚・塚原3号・鏡塚・鎧塚各古墳があり、横穴式石室に先行して竪穴式石室やそれに類する埋葬施設を持つ古墳と考えられている。そして、当地方5および6世紀の古墳築造の動向は、畿内における大和政権の大古墳築造の動きと通じることが指摘されており、古墳出土の馬具や殉葬馬と絡めて、当地区が馬匹生産で重要な役割を果たしたといわれている。なお、長野県史跡の御猿堂古墳からは重要文化財の画文帯四仏四獣鏡が出土したと伝えられている。

古墳時代後期の集落址は、安宅遺跡・前の原遺跡・ガンドウ洞遺跡等わずかな調査例のみであるが、前述の古墳築造の背景として、相当規模の集落が複数あったと考えられる。前の原遺跡では、一辺が11mを測る大規模な竪穴住居址が調査されており、出土遺物から居住のための施設と考えられるものの、他と懸隔した居住者の性格を物語るものと考えられる。

古墳時代末から奈良時代にかけて地区内桐林に古瓦・瓦塔破片を出土した前林廃寺（大沢　1961)、上川路に多量の古瓦を出土する上川路廃寺があったことが知られており、さらに上の坊遺跡で古瓦、宮洞窯址からは塼仏が出土している（遮那　1966)。また、松尾地区の毛賀御射山遺跡（飯田市教委　1978）でも平安時代の布目瓦や瓦塔片が出土しており、古墳築造に引き続いて新たな権力の象徴として寺院の建立がなされ、当地区が重要な位置を占め続けていたことが窺われる。

安宅遺跡や前の原遺跡では、これまでに奈良・平安時代の集落址の一画が調査されている。前の原遺跡の場合、時期および性格の把握が困難であったが、9×2間の身舎に3面庇を持つ総柱建物址と、これに接して2列に並んだ柱列址が検出されている。古墳時代以降、竜丘地区が飯田下伊那地域の主要な位置を占めていたことをさらに裏付けるものといえる。また、高位段丘の縁の駒沢川に面した部分では、良質な粘土と湧水に恵まれ、陽当たりの良い緩斜面を利用して宮洞・河内洞・堤洞といった須恵器生産の窯址群が集中している。

古代東山道の経路については異論があるが、推定伊那郡衙とされてきた座光寺地区の恒川遺跡で、ようやく奈良時代の正倉と考えられる建物址が確認された。また、松尾地区の久井遺跡でも大規模な掘り方を持つ2棟の掘立柱建物址が調査されており（同　1993a)、古代官衙址に関連した何らかの建物の存在が予想されている。安宅遺跡では官衙ないし寺院の可能性をもつ大型の掘立柱建物址・柱列址があり、かつ灰釉陶器碗の転用硯が出土している。また、駄科北平遺跡では、平成元年度に実施した詳細分布調査に際して、平安時代の円面硯が表採されている。現在のところ、当初からかどうかは別として、竜丘・松尾・座光寺を東山道が通過していたことを強く示唆するといえる。

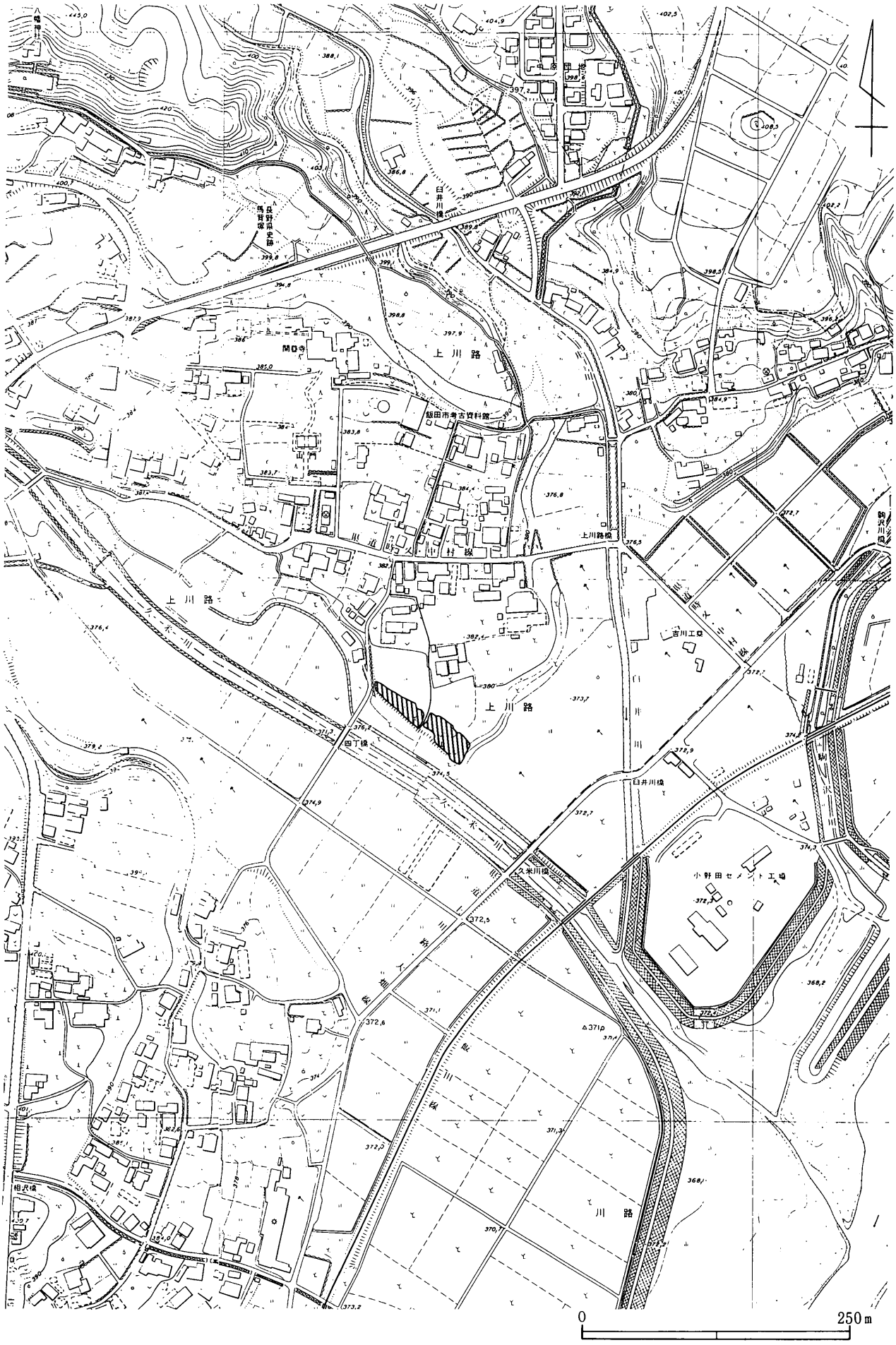
平安時代の末期には、文書に伊賀良庄の名が登場し、地区内の一部が伊賀良庄に含まれている。鎌倉時代末には鎌倉・京都で禅宗が流行したことを承けて、名刹開善寺が開かれた。寺伝により建武2(1335)年領主小笠原貞宗が京都建仁寺より清拙正澄を招請して創建されたとも、また、貞和2(1346)年7月19日の三浦和田文書によれば、地頭江馬氏が寺領として中村・河路両郷を寄進し大鑑清拙を開山として禅刹開禅寺を創建したともいわれる。暦応元(1338)年室町幕府から諸山に、応永34(1427)年十刹に列せられたが、明応8(1499)年に火災に遭い山門を除いて焼失し、衰微した。その後、天文18(1549)年、小笠原信貴が武田信玄の援助を受けて京都妙心寺より速伝を招き復興したが、天正10(1582)年織田信長の信濃侵攻に際し兵火を受け、元禄11(1568)年頃にほぼ現在の寺観に復している。山門は重要文化財、鐘楼は国認定重要美術品となっている。この時期の考古学的な成果は少ないが、昭和48年に飯田市考古資料館建設に先立ち実施した発掘調査では、開善寺旧伽藍の一画にあたると考えられる中世の堂宇が確認さ

れている。

南北朝期には、地区の北端毛賀沢川に面して、小笠原貞宗の次子宗政により鈴岡城が築城され、対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であった。しかし、信濃国守護職を松尾小笠原と争い急速に勢力が衰え、天正10(1582)年織田信長の信濃侵攻により滅亡した。駄科北平遺跡では中世堂址と考えられる遺構や四耳壷・青磁・山茶碗・内耳土器・和鏡等遺物が調査されており、鈴岡小笠原氏と深い関わりがあると考えられる。

地区内時又地籍では、天龍川が深く緩やかに澱んでおり、時又港が置かれた。港は江戸時代初期より飯田藩の江戸御廻米の船出港として栄えており、その他煙草・柿等が青谷（静岡県磐田郡竜山村）などに向け送り出された。明治以降、鉄道が開通したことや道路改修が進んで運送馬車が登場したことから通船は縮小され、竜東や南部山間地への物資の運搬等が中心となった。しかし、明治40年代以降、橋梁が次々に掛けられたり鉄道が延長されたりした結果、徐々に衰退していった（長野県教委　1990)。龍江城遺跡では船着き場と考えられる施設が調査されている（飯田市教委　1997）が、時又地籍の試掘調査では確認されていない。

以上、環境を概観したが、竜丘地区は良好な環境に恵まれ、かつては飯田下伊那地方の政経で中心的役割を果たした地のひとつであったといえる。



挿図２　　調査地点周辺地形図および調査区位置図

第Ⅲ章　調査の方法

第１節 発掘調査の方法

1)調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した。

基準メッシュ図の区画については、１：5,000大縮尺地形図（国土基本図）の区画に準ずる（社団法人日本測量協会　1969　『国土基本図図式　同適用規定』参照)。

投影は、昭和43年建設省告示第3,059号に示す平面直角座標系による「横メルカトール図法」とする。

まず、基準メッシュ図の１図葉は、座標系（飯田市は第Ⅷ座標系に属するので、座標系番号は省略する。）のＹ軸及びＸ軸を基準として、南北300km東西160kmを含む地域を、30km×40kmの長方形に分割して区画を定め、たとえばＬＣのようにアルファベット大文字の組合せによって区画名を表示する。（挿図３)。

次に、30km×40kmの長方形区画を100等分して、３km×４kmの１：5,000図葉に相当する区画に分割する。１：5,000図はアラビア数字で区画番号を定め、座標系の区画を横線に結んだ後に続けて、たとえばＬＣ－83のように表示する（挿図４上)。

さらに、１：5,000図葉を25等分して0.6km×0.8kmの長方形小区画に分割する。区画番号は挿図４下のごとく定め、たとえばＬＣ－83　19のように表示する。

続いて、0.6km×0.8kmの長方形小区画を48分して100ｍ×100ｍの正方形区画に分割する。区画番号は挿図５上のごとく定め、たとえばＬＣ－83　19－16のように表示する。今次調査では、ＭＣ－04　３－６、同３－14、同３－15に該当する。

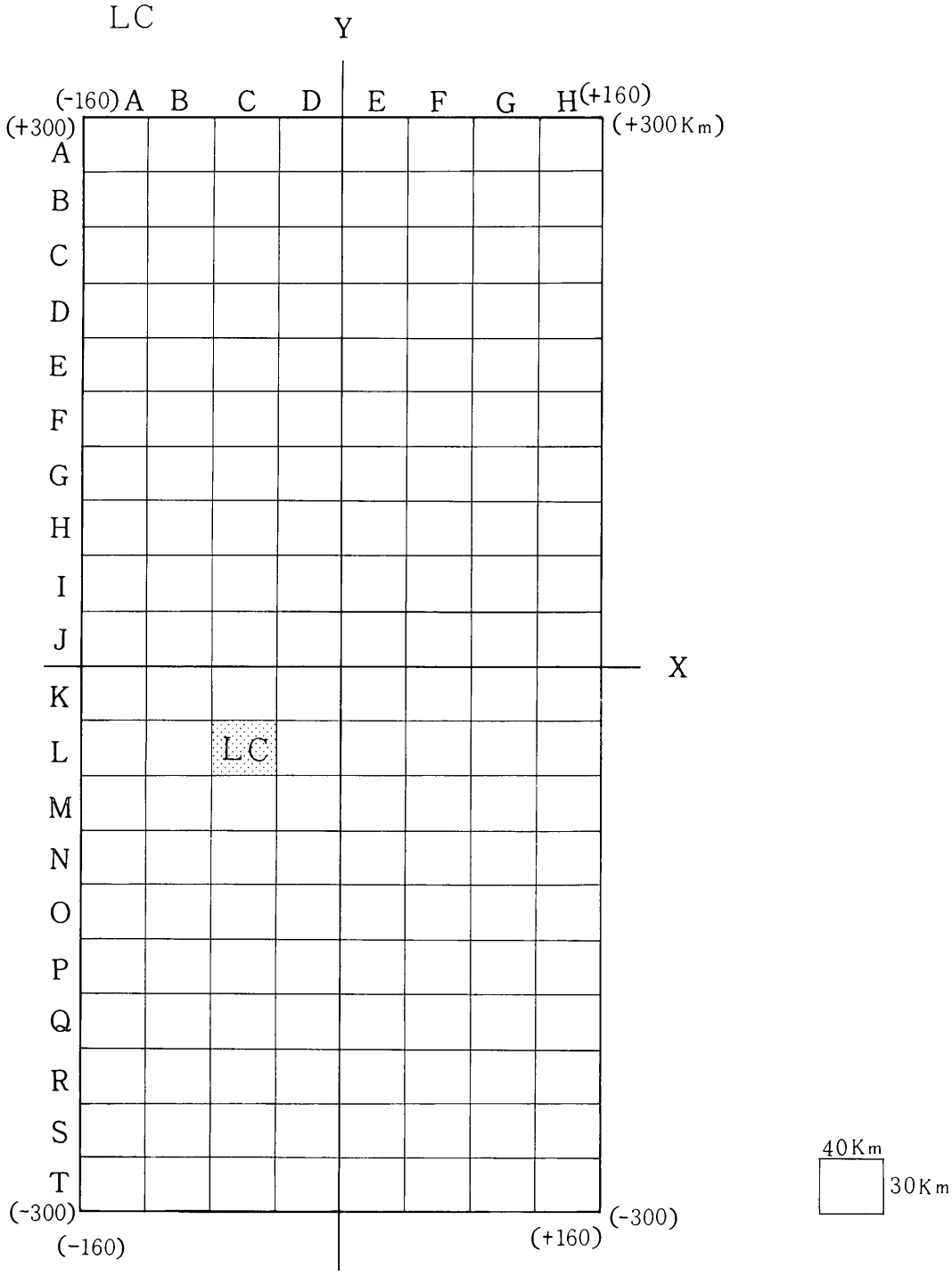
最後に、100ｍ×100ｍの正方形区画を2,500等分して２ｍ×２ｍの正方形小区画（グリッド）に分割する。区画の名称は、正方形区画の南から北に向かってＡＡ～ＡＹ・ＢＡ～ＢＹ、西から東に向かって00～49とし、たとえばＡＩ15のように表示する（挿図５下)。

なお、今次の基準メッシュ図区画調査位置は挿図６のとおりである。

2)遺跡略号、遺構記号と遺構番号

発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてＫＺＫに遺跡内第４番目の調査地点を示すローマ数字を付してＫＺＫ．Ⅳを一貫して用いた。

遺構については主として、遺構検出作業時に平面形に基づいて遺構記号および遺構番号を付した。このため、ＳＢ17・ＳＢ26・ＳＢ30・ＳＢ54・ＳＢ61・ＳＫ91は作業を進める中で欠番となっている。また、グリッドの柱穴はグリッド毎の連続番号とし、グリッド名の後にＰ１・Ｐ２…を付した。掘立柱建物址の柱穴とＳＢ47（ＳＸ01に変更）以外は遺構名の変更はない。ただし、掘立柱建物址の柱穴・ＳＢ47出土遺物の注記変更は行っていない。



挿図3　基準メッシュ図区画方法1

LC-83

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	10									19
2	20									29
3	30									39
4	40									49
5	50									59
6	60									69
7	70									79
8	80			83						89
9	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99

4Km

3Km

基準メッシュ図区画方法２

LC-83　19

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

0.8Km

0.6Km

基準メッシュ図区画方法３

挿図４　　基準メッシュ図区画方法２・３

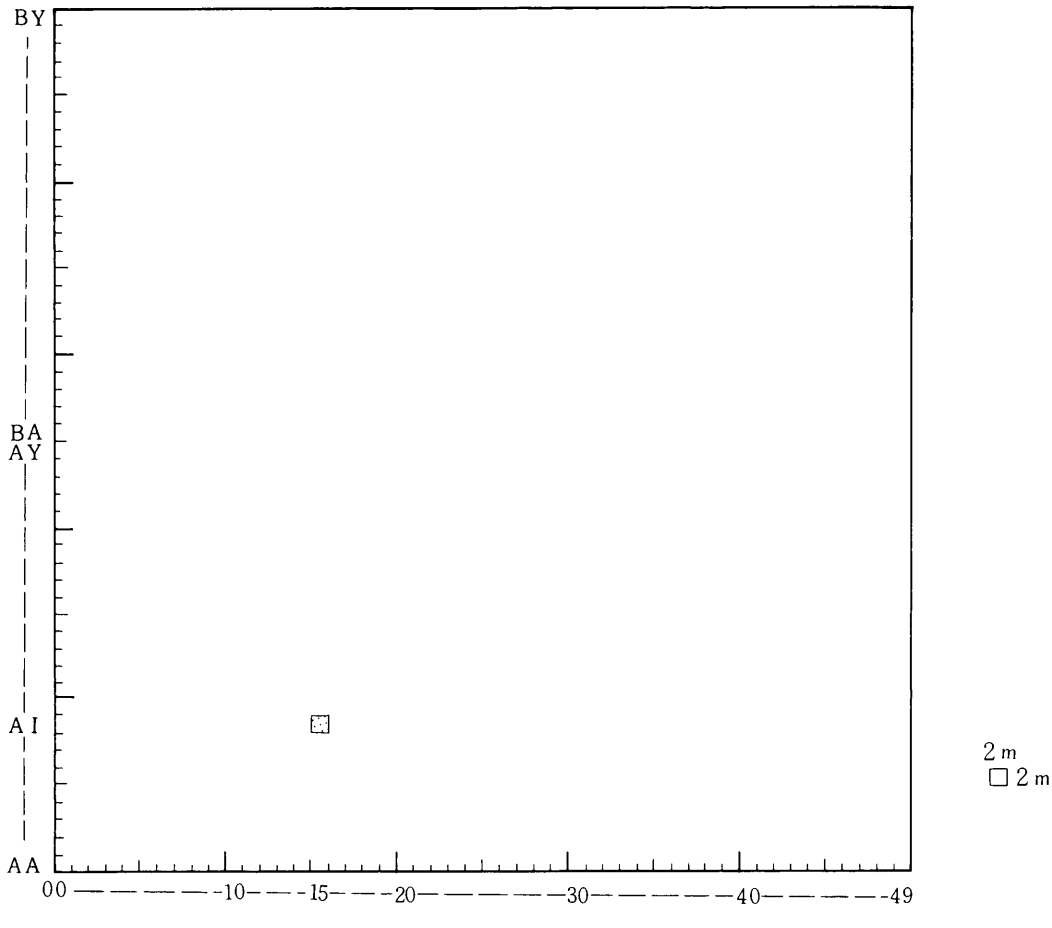
LC-83　19-16

1	2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31	32
33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48

100m
100m

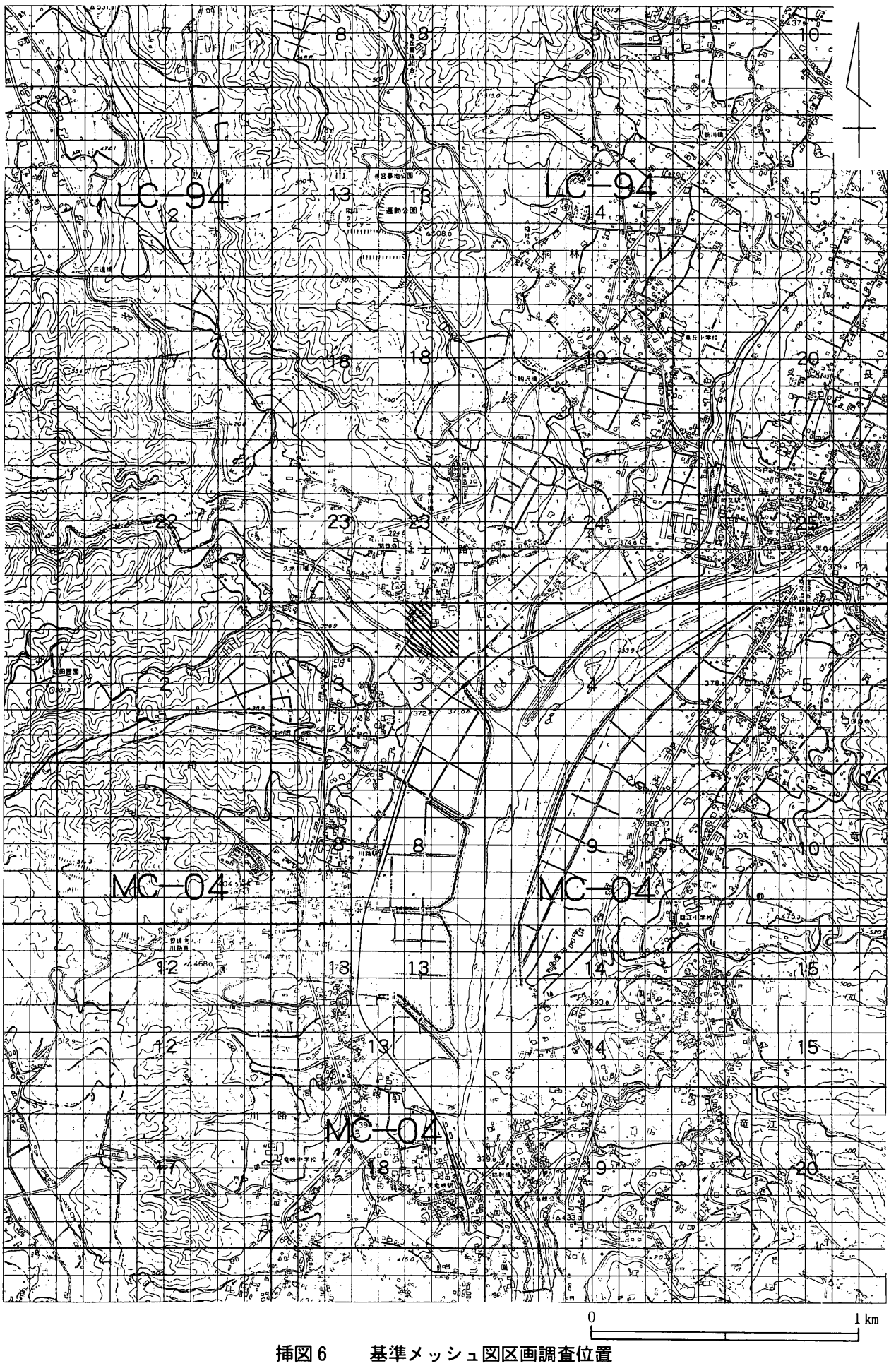
基準メッシュ図区画方法４

LC-83　19-16　AI15



基準メッシュ図区画方法５

挿図５　基準メッシュ図区画方法４・５



挿図 6　　基準メッシュ図区画調査位置

本報告書では以下の遺構略号を使用している。

ＳＡ　－　柵列・一本柱列

ＳＢ　－　竪穴住居址・竪穴（一辺概ね２ｍを超える遺構）

ＳＤ　－　溝址・溝状址（溝ないし溝状を呈する落ち込み）

ＳＩ　－　集石墓・集石（礫が密集した状況で検出されたもの）

ＳＫ　－　土壙墓・土坑（遺構検出時にＳＢ・ＳＤ・ＳＩ等以外の遺構と判断されたもので、概ね60cmを超えるもの）

ＳＴ　－　掘立柱建物址

ＳＸ　－　その他の遺構（埋設土器を含む）

3)遺構の調査方法

検出された遺構は縮尺１／50で見取り図を作成し、遺構記号・遺構番号、新旧関係等を記入した。その後、以下個別の方法で調査を行った。

①ＳＢ

十文字にベルトを残して掘り下げを行ったが、開田の際削平を受けているものが多く、土層の注記のみで取り外しを行ったものが多い。また、調査区が道路路線幅に限定されたため、調査区断面にかかるものは断面観察を行った上で、最低限断面図作成を行い、他は注記にとどめた。遺物については床面付近やカマド周辺の遺存状態の良い遺物は残し、出土位置を記録した。続いて床面を精査・柱穴を検出し、完掘後写真撮影・測量を行った。その後、カマドの断ち割り・精査を行い、床面をはずして掘り方まで掘り下げ、未検出の柱穴の確認等に努めた。

②ＳＴ・ＳＩ

平面検出時に組み合うものの把握に努めたが、同規模・類似埋土の柱穴が密集しており、全体形を把握できるものはほとんどなかった。このためグリッドごとの柱穴として把握し、調査区全体を完掘時にその把握を行った。調査区外に大部分が延びると考えられるものも積極的にＳＴとして扱った。なお、万全を期し、整理作業時にも規模・埋土等の検討から建物址等の抽出を行った。

③ＳＫ

半截して断面観察を行い、必要に応じて断面図を作成し、他は極力注記にとどめた。内部に礫が密集するものが含まれており、ＳＩと同じ形態・性格等を有する遺構を峻別していない可能性がある。なお、生骨の部位や出土位置、それに副葬品の出土位置等の記録は工期との絡みで行っていない。

④ＳＩ

１／10平面図作成後、半截もしくは十文字に断ち割り、断面図を作成して、完掘した。ＳＩ13～ＳＩ25他・ＳＩ27～ＳＩ51他は礫が群集しており、前者の場合は上部の礫を一部取り外してしまっている。礫のサイズ・密集の度合・礫の方向を勘案して、単位の把握に努めた。最終的にそれぞれの掘り方の形状と合わせて修正を行った。

⑤ＳＤ

長辺に直交方向のベルトを残して掘り下げを行い、他の遺構と同様、注記もしくは断面図作成を行った。水田畦畔が土圧により沈み込んだものも平面検出時にはほぼ峻別は困難で、ＳＤを付している。

⑥ＳＸ

１／10平面図作成後、半截して断面図を作成し、完掘した。

⑦グリッドの柱穴

極力半截して断面観察を行い、注記もしくは断面図作成を行った後完掘した。

4)遺構埋土の注記

遺構埋土・土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づく土色計（第一合成株式会社製、ＳＣＲ－１）を用い、マンセル表示で示した。土性区分は調査員が指腹の触感をもって判断し、土壌調査用チャートに則って表記し、粘性・しまりについても同様に触感に拠った。今次調査結果では、隣接地に竪穴住居址・掘立柱建物址が延びているものが多く、グリッド柱穴としたものの中には今後掘立柱建物址等として把握される可能性のあるものも少なくない。このため、本報告書においては遺構埋土・土層の注記表を図版編に付した。

5)測量方法

遺構の測量は上記基準メッシュ図区画に基づいて設定されたグリッドを基準に、遣り方測量により10ｍ×６ｍ毎に１／20平面図を作成した。住居址および１／10詳細図を要するものについては、別途平面図を作成した。

6)写真撮影

遺構・付属施設の近接写真・遺物の出土状況・作業状況等の写真撮影は調査員が行い、ニコンＦ３(35㎜）を用いてモノクロ・カラーリバーサルならびにカラーで撮影した。景観写真撮影は株式会社ジャステックに委託実施した。ペンタックス６×4.5搭載のラジコンヘリによる撮影で、モノクロ・カラーリバーサルで撮影した。

第２節　整理作業の方法

1)遺構

①遺構分布図、遺構図

遺構分布図は時代判別の困難なものがあり、かつ重複が著しいため、一括して作成した。ＳＫ・ＳＩは煩雑さを避けるため、遺構記号を略し、ＳＫは実線、ＳＩは破線で表現した。

また、個別の遺構図は本文と併せて挿図とし、その断面注記については本文編巻末に一括して付した。

②遺構の記述等

竪穴住居址については時代順に掲載し、個別に検出位置・規模・床面積・形態・主軸・重複・調査所見・壁・床面・柱穴・炉址ないしカマド・付属施設・出土遺物・時期等について記述を行った。出土遺物・時期については馬場が一括して担当し、それ以外の項目は調査担当者が分担執筆した。ただし、一部加筆・訂正を馬場が行った部分がある。規模は主軸ないし長軸方向の壁上部差し渡しと、直交方向の

壁上部差し渡し、それに壁の一番高い部分から床までの高さを計測した。全長が計測できない場合で、プランが推定されるものについては括弧付で表記した。床面積は壁下端をプラニメーターで計測した。古墳時代中・後期の住居址ではカマドについての情報が乏しいものが多いため、カマドを含めて面積を計測している。規模と同様、プランが推定されるものについては括弧付で表記した。形態については、調査者の主観に基づいて記述した。主軸の項はカマドの中軸線（炉址の場合には炉址を通る住居址の中軸線）を主軸、住居の中心からカマド・炉址に向かう方向を主軸方向として、座標北に対して何°東西に偏するかで表示した。カマド・炉址がない（あるいは不明な）住居址は長軸をもって主軸に代え、一部しかプランが検出されていない場合には、四辺のうち一辺の方向を参考までに表示した。柱穴の深さは床面からの深さを計測した。竪穴・埋設土器についてもほぼ同様である。

掘立柱建物址の項目も基本的に竪穴住居址と同様であるが、形態・主軸方向・規模・柱間間隔・床面積が異なる。建物址は長辺を桁行、短辺を梁行とし、形態の項では、梁行×桁行を柱間数で4間×3間のように表すとともに、総柱・側柱の別も表記する。主軸方向は桁方向が座標北に対して何°東西に偏するかで表示した。規模は長辺の数値×短辺の数値という形式で表示する。柱間間隔は、柱穴の中心または掘り方の心心間の距離を測り、桁1.8+1.7+1.8m×梁2.1+2.3mのように表記した。なお、桁・梁が明確でなく便宜的に桁方向を決めたものについては（桁）1.8+1.7+1.8m×（梁）2.1+2.3+…mのように、また間の柱穴が欠けており推定距離を計測した場合には1.8+(1.7)+(1.8)+1.7のように、さらに、対辺の柱間間隔が異なる場合には1.8+1.7+1.8（1.8+1.6+1.9）mと表記した。床面積は長辺の数値に短辺の数値を乗じて計算した。なお、個々の柱穴のデータについては図版編に掲載した。

それ以外の遺構については特記事項のみを記載し、それ以外は上記遺構埋土の項と同様、図版編に一括した。なお、ＳＫ・グリッドの柱穴等で2段に掘りくぼんでいる場合には深い方の値を括弧に入れて付した。また、周辺柱穴平面図の中に記した数字は、検出面を基準としたそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。ＳＩの規模は掘り方が把握されたものを頭に「掘」を付した。

2)遺物の分類・記述

①遺物の出土量

遺物の出土量は整理箱（39.5×24.3×14.4cm）換算で1箱以上－多、3／4程度－やや多、1／2程度－少、1／4以下－僅少と表記する。

②土器の分類

出土遺物の記述については、煩雑さをさけるため、古墳時代から平安時代にかけての遺物を下記のとおり分類した。なお、分類にあたっては長野県埋蔵文化財センター刊行の『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－』(1990)、同じく『更埴条里遺跡・屋代遺跡群　古代1編』(1999) および山下誠一他（1999）の分類を基礎として行い、記述も大部分をこれらに拠った。なお、遺物分類作業と分類基準作成作業を並行しながら行ったため、若干分類の精粗がある（主にグリッド柱穴)。

ａ．種類

土師器は、酸化焔焼成の軟質赤焼土器で、非ロクロ調整とロクロ調整があり、後者は内面のみが黒色処理される黒色土器Ａと内外面に黒色処理が施される黒色土器Ｂに区分される。須恵器は還元焔焼成に

飲食具

	器種名	器種説明
土師器	坏　A	ロクロ調整の底部回転糸切りの坏で、体部が直線的に開く。
	坏　D	非ロクロ調整の丸底の坏。体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削り。口縁部にはヨコナデを施す。内面あるいは内外面に横方向のヘラ磨きを施し、黒色処理されるものがある。1類と2類に分類する。 1類は口縁端部を丸く納める。 2類は口縁端部が内斜もしくは若干外反する。
	坏　E	非ロクロ調整の浅い盤状の坏で、成形の手法は坏Dに共通するが、口径は坏Dに比べて大きい。
	坏　F	非ロクロ調整の坏で体部下半に稜をもち、主に上半が外反する。体部内面をヨコヘラ磨き、外面は稜より下を手持ちヘラケズリ後ヘラ磨き、上をヨコヘラ磨きするのが一般的である。4類に分類する。 1類は体部下半の稜がやや不明確で、上半の立ちが小さいもの。 2類は稜が明瞭となり上半と下半の区別が不明確なもの。 3類は下半が痕跡的となって膨らみを帯びるもので、立ちの高い上半はほぼ直線上に開く。 4類は底部が平底状を呈する。
	坏　G	須恵器模倣の坏。2類に分けられる。 1類は須恵器坏の模倣形態で、胴部と底部の外面境に稜を有する。 2類は須恵器高坏身の模倣形態。口縁部は外方に開き、底部は緩やかに湾曲するものの半球形にならない。
	坏蓋　A	ロクロ調整で、坏Aとセットとなる。
	椀	ロクロ調整の有台の椀。セットとなる蓋がある。
	皿　A	ロクロ調整の扁平な土器で、体部が直線的に開く。
	皿　B	皿Aに高台が付されるもの。
	盤　B	足高高台を有する身の浅い椀型の器。
	高坏　A	非ロクロ調整で椀形の坏部に脚台を付したもの。 1類は坏部は外に開き、円錐形の短脚を持つ。 2類は屈折脚高坏のうち、円錐形状の長脚を持つもの。 3類は坏部外面に2カ所の段を持つ。脚は中空の屈折脚で、裾部に1カ所の段を有する。 4類は高坏A2類に類似するものの、胴下部に明確な段があり、円錐形の長脚を持つ。 5類は坏部が坏D2類に類似するものの、高坏に用いられるものは法量が大きく、胴下部に稜があり、円錐形の長脚を持つ。 6類は口縁外部を若干外反させ、胴部は緩やかに湾曲し、稜線を持たない。高坏専用の坏部として製作され、口径が大きい。円錐形の長脚を持つ。 7類は口径が25cm前後と他の器種に比べて非常に大きい。坏部が直線的に延び、底部との境が明瞭である。柱状長脚もしくは円錐形の長脚を持ち、精製品も存在する。 8類は円錐形の長脚で、裾部に稜を持つ。 9類は坏部に坏D2類を用い、円錐形の短脚を持つ。
	高坏　B	須恵器の模倣形態。4類に細分する。 1類は湾曲した胴部を持ち、中央に稜が付く。 2類は坏部が直線的に延び、胴下部に明瞭な稜が付く。円錐形の短脚を持つ。 3類は坏部が直線的に延び、胴下部に明瞭な稜が付く。柱状の長脚を持つ。 4類は坏部の胴下部に明瞭な稜を持つ。円錐形の長脚を持ち、胴中央に三角透かしが入る。2・3類より大きい。
	鉢　A	ロクロ成形の大型のもの。
	鉢　B	非ロクロ成形。小さめの底部から体部は直線的に開き、頸部で緩く締まって口縁部で外反する大型のもの。形態は須恵器鉢Aと類似する。
	鉢　C	非ロクロ成形の大型のもの。形態は多様である。
	鉢　D	非ロクロ成形。口径に比して器高が高い深めの器で、小型のもの。形態は多様である。
	片口	鉢Aの口縁部の一ヶ所に注ぎ口が付されたもの。
黒色	坏　A	切り離しは回転糸切りで多くは未調整であるが、糸切りの後底面・底部端面をヘラ削り調整するものもある。

表1　古代土器の器種分類表（1）

土器A	椀		内湾気味に立ち上がる体部に、高台を付したものである。土師器の椀同様、体部が直線的にのびるものと、腰が強く張るものがある。小型の小椀もある。
	皿	A	ロクロ調整の扁平な土器で、体部が直線的に開く。
	皿	B	皿Aに高台が付されるもの。
須恵器	坏	A	直線的に開く体部をもつ無高台の坏。底部はヘラ切り未調整、ヘラ切り＋ヘラ削り、静止糸切り、回転糸切りなどの調整がある。坏蓋Aとセットをなすものもある。
	坏	B	箱形の体部に高台を付した形態で、坏蓋Bとセットをなす。
	坏	C	坏Bの高台がはずれた形態で、底部切り離し後底部全面あるいは周縁をヘラ削りする。
	坏	H	丸底で蓋受け部分を持ち、受け部から口縁部にかけて立ち上がりを持つ。古墳時代からの伝統的器種である。
	坏蓋	A	坏Aに対応する蓋で、内面に返りが付き、天井部に扁平な宝珠形のつまみを付ける。
	坏蓋	B	坏Bに対応する蓋で、口縁端部を折り曲げる。天井部に扁平なつまみを付ける。
	坏蓋	H	坏Hに対応する蓋で椀形の坏を伏せた形態に近い。
	椀	B	金属鋺を模倣したと考えられるもので高台を付す。体部の越が強く張り、丸味をもって立ち上がり口縁部で外反する。環状のつまみを付す椀蓋と対応する。
	皿	A	扁平で直線的に開く体部を持つ無台の皿。皿Bの高台をはずした形態をもつ。
	皿	B	扁平で直線的に開く体部を持つ有台の皿。灰釉陶器・黒色土器の皿Bに類似する。
	皿	C	浅い体部で、口縁部が短く折り返されたように立ち上がる。
	盤		浅い体部で、口縁部が短く折り返されたように立ち上がる。低い高台が付く。
	高盤		浅い体部で、口縁部が短く折り返されたように立ち上がる。高坏より低く太い脚部が付される。
	器台		一般的な呼称に従う。
	高坏	A	浅めの坏部に高い脚台を付けた器。
	高坏	B	浅めの坏部に円錐状の短脚を付けた器。
	高坏蓋		高坏Aに対応する蓋で、坏蓋Hにつまみを付ける。
	鉢	A	小さめの底部から体部は直線的に開き、頸部で緩く締まって口縁部で外反する鉢形の器。大小の法量がありロクロナデ調整される。2類に細分される。 1類は口縁部の立ち上がりの大きいもの。 2類は立ち上がりが小さいもの。
	鉢	B	丸底または尖り底から体部を開き、口縁部で内湾する鉢。鉄鉢を模倣したと考えられる。
	鉢	D	小さめの底部から体部が直線的に開くもの。
	鉢	E	鉢Dに高台が付されるもの。
灰釉陶器	碗	A	体部がわずかに丸味をもち直線的に開く形態で、梯形あるいは三日月様の高台を付すもの。底部が扁平で体部下半が強く張り出し、体部の立ち上がりが強い形態を取るものがある。
	小碗		小型の碗。
	皿		いわゆる丸皿。
	段皿		いわゆる段皿。
	稜皿		いわゆる稜皿。
	耳皿		いわゆる耳皿で、有台と無台のものがある。

煮沸具

土師器	甕	A	輪積み成形の後、内外面をナデ調整する長胴甕。
	甕	B	器面を刷毛目で調整する長胴甕。
	甕	D	ロクロ調整を行う長胴甕。甕F：球形ないし楕円形の胴部をもつ背の低い甕。器面をヘラ磨きするものが多いが、ナデ調整で仕上げるものもある。 1類は球形胴。 2類は楕円形からラグビーボールに近い形態のもの。
	甕	G	甕Fに共通する球形胴の甕であるが、器面をハケ調整している。
	甕	H	輪積み成形の後、外面をケズリ調整する長胴甕。器壁は厚くケズリの方向も縦方向が主体である。
	小型甕	A	胎土・調整が甕Aに共通する、器面ナデ調整の小型甕。
	小型甕	B	胎土・調整が甕Bに共通する、器面ハケ調整の小型甕。

表2　古代土器の器種分類表（2）

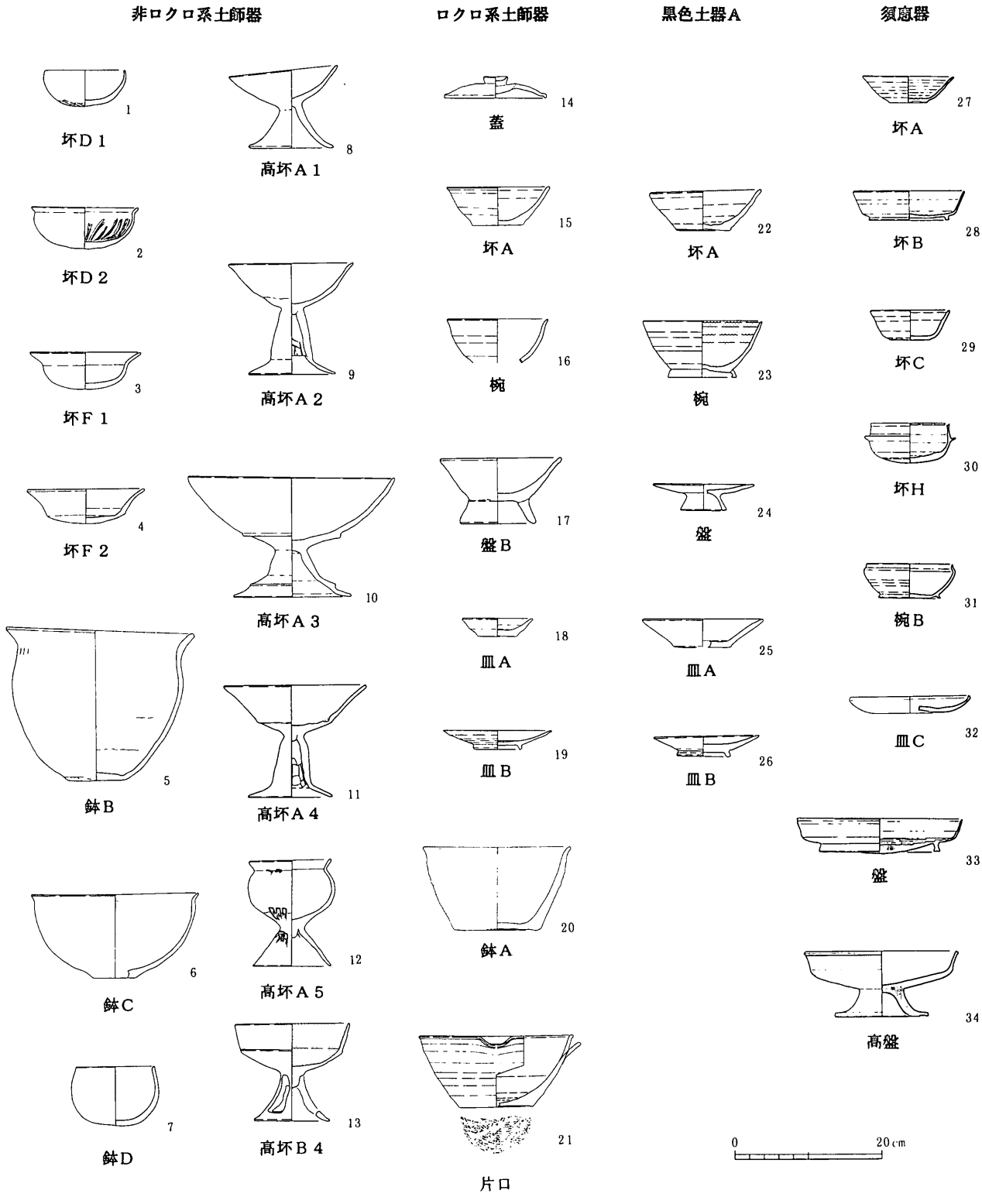
土師器	小型甕　D	ロクロ調整の小型甕で体部にカキ目またはロクロ目を明瞭に残す。底部に糸切り痕を残す。
	小型甕　F	胎土・調整が甕Fに共通する、器面ナデないしミガキ調整の小型甕。
	小型甕　H	輪積み成形の後、外面をケズリ調整する小型甕。
	甑　A	大型甑で体部がバケツ形を呈するもの。 1類は牛角状の把手を有するもの。 2類は把手をもたないもの。
	甑　E	大型甑で体部下半が半球状を呈し、牛角状の把手を有するもの。
	甑　F	中・小型の甑。通常は把手を持たず、単孔のものと多孔のものがある。
	羽釜　A	体部上寄りに鍔状の凸帯を付したもので、厚手。内外面をナデ調整する。平底・丸底の両者がある。体部の調整に叩き技法を用いたものもある。
須恵器	甑　B	厚手大型の甑で、外面叩きが施される。牛角状の把手が付される。

貯蔵具

土師器	壷　A	有段口縁を有する壷。
	壷　B	単純口縁を有する壷。
	壷　C	体部上半に最大径を持ち、肩部の張る逆卵形の壷。
	壷　D	小型の壷。1～3類に区分する。 1類は小型で球胴の精製壷で、古墳時代前期から続く機種をまとめる。口縁部に稜または段を有する形態と口縁部が単純に延びる形態がある。 2類は口縁部が長く直線的に広がり、外面に稜線を有する。体部は小型の球胴形。口径>体部最大径が特徴である。 3類は中期的な小型丸底壷をまとめる。口縁部は直線的に広がり、体部は小型の球胴形であるが、若干扁平である。
	瓻	須恵器瓻の模倣形態。口縁部は直線的に外反し、体部は球胴で、やや扁平な印象がある。体部最大径に比較して口径が小さい。丁寧に模倣した形態も存在する。
須恵器	長頸壷　B	体部は肩の部分で屈曲し、口縁部がラッパ状に開くもの。頸部の接合部分にリング状の凸帯を貼付する。
	短頸壷　B	小型の短頸壷。2類に区分する。 1類は高台が付されないもの。 2類は高台が付されるもの。
	短頸壷　C	体部がやや長い形態で頸部を直立に立てる。底部は回転糸切り無調整のものが多い。
	壷蓋　A	ロクロ調整で、つまみが付されないもの。
	壷蓋　B	ロクロ調整で、つまみが付されるもの。
	甕　A	卵形の体部に外反する口頸部を付するもの。
	甕　C	卵形の体部に強く外反する口頸部を付するもの。
	甕　D	平底の甕で肩部に凸帯を回し、耳状の突起を付するもの。笹沢浩により「凸帯付四耳壷」と称されたもの。
	甕　E	肩の張った広口の甕で、肩部やや下に把手を付するものもある。
	瓻　A	体部に注口を有する壷で、体部は肩の部分で屈曲し、口縁部がラッパ状に開くもの。
	瓻　B	体部に注口を有する壷で、体部が樽形を呈するもの。
	平瓶	扁平な体部で口縁部を天井の一方の端に付す。
	提瓶	扁平で円形の体部の側面に、短い口頸部と一対の把手を付すもの。一般的な呼称に従う。
	横瓶	横に長い俵形の体部の横腹に短い口頸部を付すもの。一般的な呼称に従う。
灰釉陶器	長頸壷	一般的な呼称に従う。
	短頸壷	一般的な呼称に従う。
	平瓶	一般的な呼称に従う。
	小瓶	一般的な呼称に従う。
	瓶類	肩部に把手を持った小瓶。

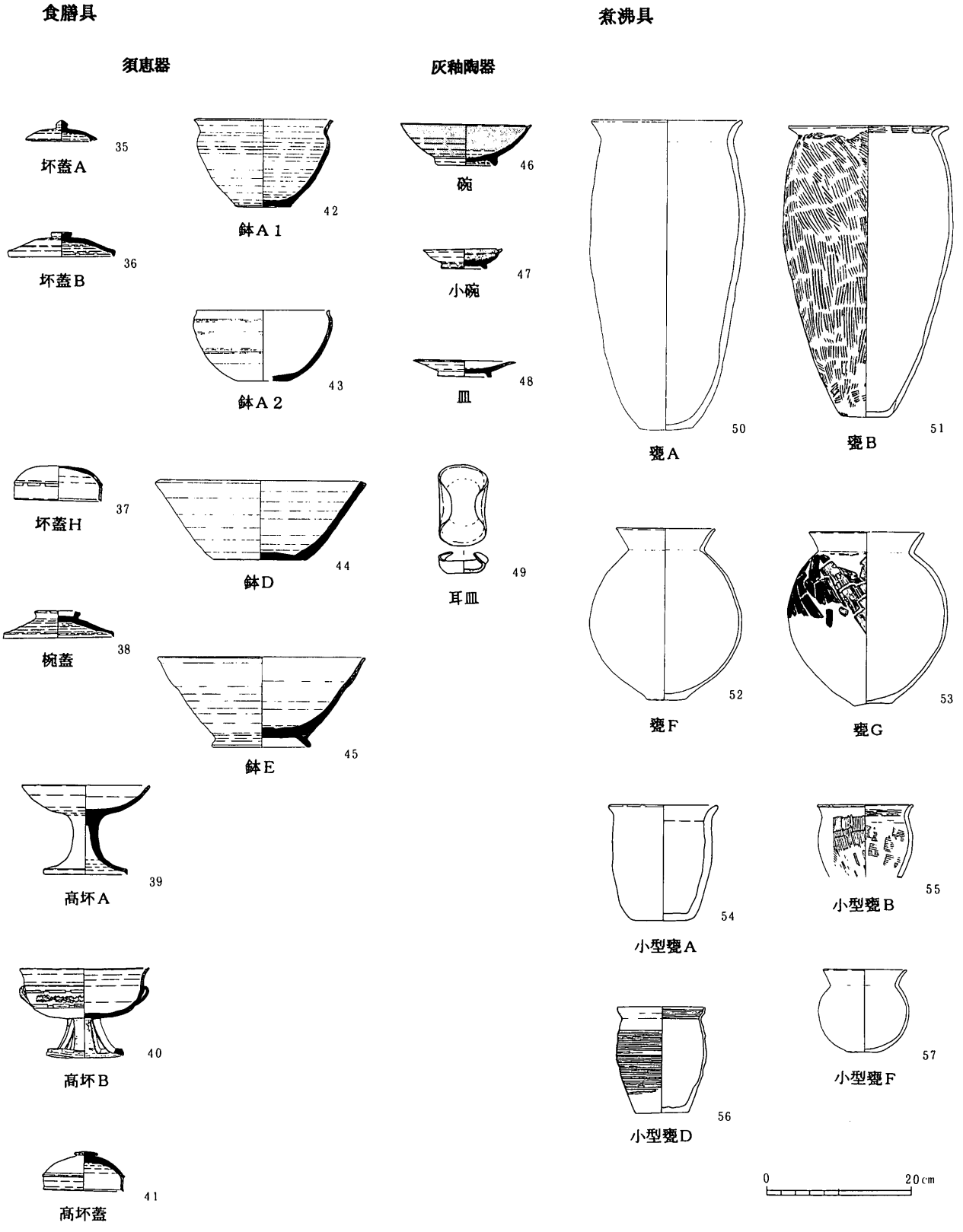
表3　古代土器の器種分類表（3）

食膳具



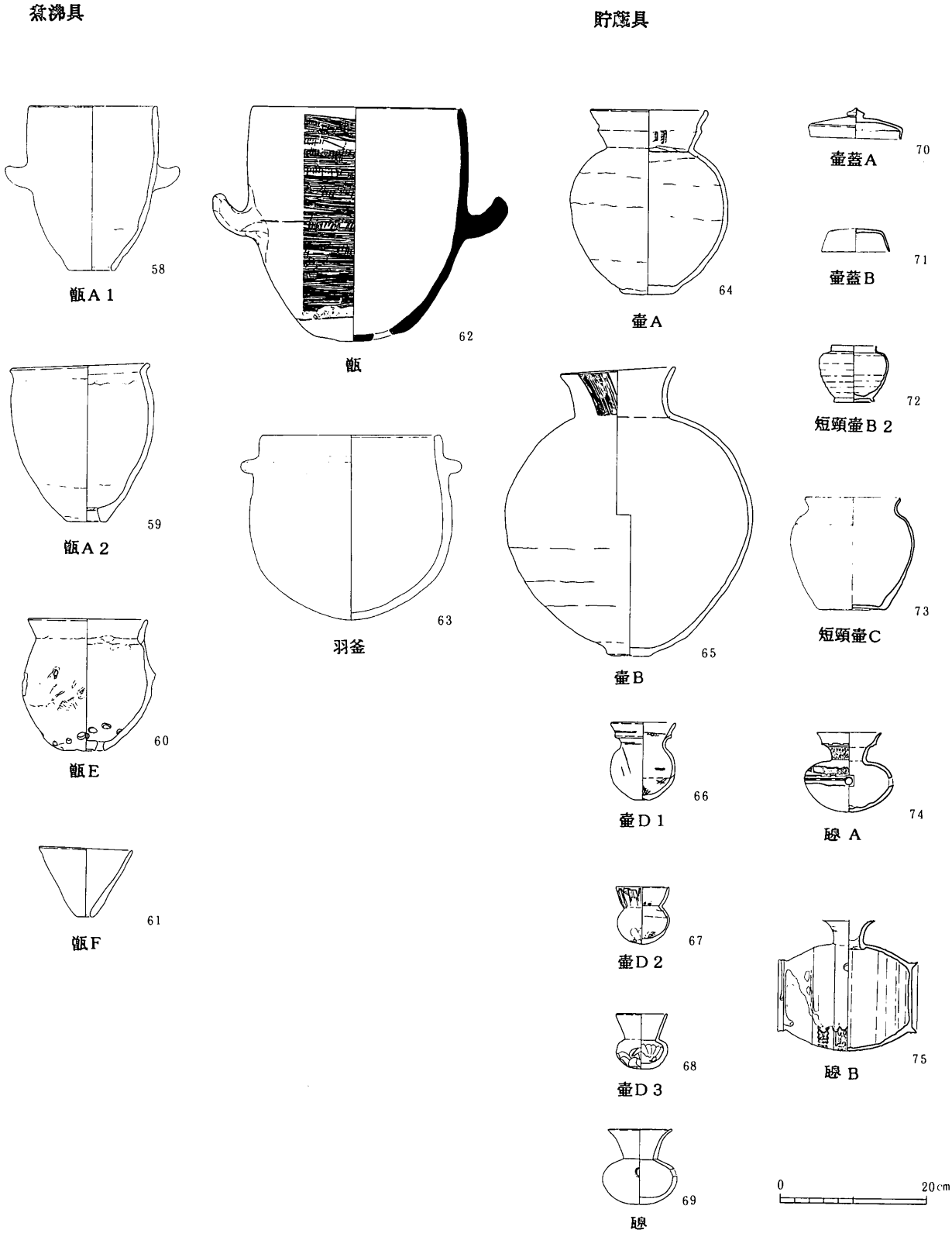
1．細新遺跡ＳＢ02　2．前の原遺跡26住　3．恒川遺跡群倉垣外223住　4．恒川遺跡群新屋敷遺跡144住　5．前の原遺跡29住　6．恒川遺跡群田中・倉垣外138住　7．前の原28住　8．田圃遺跡ＳＭ07　9．細新遺跡ＳＢ60　10．前の原遺跡28住　11．細新遺跡ＳＢ33　12．細新遺跡ＳＢ60　13．細新遺跡ＳＢ02　14．日向田遺跡４住　15．恒川遺跡群田中・倉垣外107住　16．細新遺跡ＳＢ74　17．田圃遺跡ＳＢ75　18．恒川遺跡群新屋敷遺跡遺構外　19．恒川遺跡群田中・倉垣外ＡＣ61遺構不明住居址　20．恒川遺跡群田中・倉垣外107住　21．恒川遺跡群倉垣外遺構外

挿図７　古代土器の器種分類（１）



22. 新井原・石行遺跡ＳＢ21　23. 細新遺跡ＳＢ30　24. 恒川遺跡群田中・倉垣外139住　25. 恒川遺跡群倉垣外遺構外　26. 恒川遺跡群田中・倉垣外139住　27. 前の原遺跡集石１　28. 恒川遺跡群新屋敷遺跡溝址37　29. 田圃遺跡ＳＢ59　30. 恒川遺跡群倉垣外260住　31. 安宅遺跡溝址８　32. 恒川遺跡群田中・倉垣外107住　33. 宮洞３号窯　34. 安宅遺跡溝址８　35. 恒川遺跡群新屋敷遺跡溝址37　36. 前の原遺跡集石１　37. 恒川遺跡群田中・倉垣外遺構外　38. 日向田遺跡ＳＢ02　39. 田圃遺跡ＳＢ74　40. 物見塚古墳　41. 細新遺跡ＳＢ02　42. 高野遺跡溝状址　43. 安宅遺跡遺構外

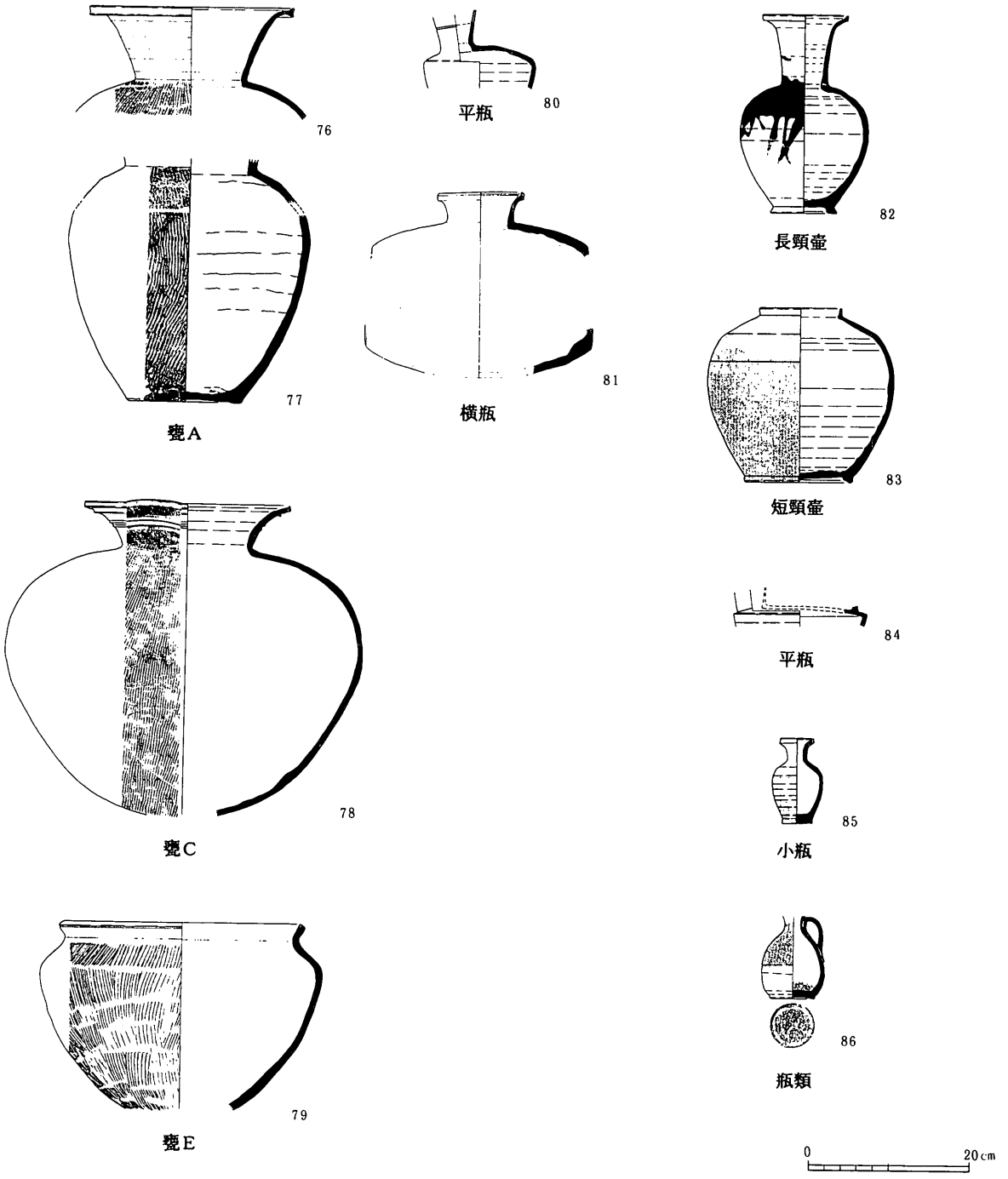
挿図８　古代土器の器種分類（２）



44. 恒川遺跡群倉垣外遺構外　45. 柳添遺跡溝址４　46. 恒川遺跡群倉垣外216住　47. 田圃遺跡ＳＢ79　48. 安宅遺跡遺構外　49. 清水遺跡34住　50. 恒川遺跡群新屋敷遺跡123住　51. 恒川遺跡群田中・倉垣外143住　52. 清水遺跡59住　53. 清水遺跡59住　54. 田圃遺跡ＳＢ59　55. 清水遺跡44・45住　56. 阿智村杉ノ木平遺跡１住　57. 清水遺跡69住　58. 恒川遺跡群新屋敷遺跡144住　59. 前の原遺跡29住　60. 細新遺跡ＳＢ40　61. 恒川遺跡群倉垣外遺構外　62. 細新遺跡ＳＢ18　63. 恒川遺跡群新屋敷遺跡遺構外　64. 細新遺跡ＳＢ96　65. 細新遺跡ＳＢ41　66. 細新遺跡ＳＢ64

挿図９　古代土器の器種分類（３）

貯蔵具



67. 細新遺跡ＳＢ60　68. 細新遺跡ＳＢ77　69. 細新遺跡ＳＢ04　70. 恒川遺跡群田中・倉垣外110住　71. 恒川遺跡群新屋敷遺跡遺構外　72. 宮洞３号窯　73. 恒川遺跡群田中・倉垣外123住　74. 田圃遺跡ＳＭ06　75. 物見塚古墳　76. 恒川遺跡群田中・倉垣外141住　77. 田圃遺跡ＳＢ75　78. 宮垣外遺跡ＳＭ19　79. 恒川遺跡群田中・倉垣外小竪穴９　80. 高屋遺跡遺構外　81. 恒川遺跡群田中・倉垣外土坑38　82. 安宅遺跡竪穴４　83. 新井原・石行遺跡ＳＫ62　84. 新井原・石行遺跡ＳＫ62　85. 日向田遺跡小柱穴　86. 新井原・石行遺跡ＳＫ54

挿図10　　古代土器の器種分類（４）

よる硬質灰色土器で、中に灰白色を呈し軟質の焼き上がりを示す軟質須恵器がある。また、灰釉陶器は灰釉を施す硬質の陶器である。

b．器種分類

形態と製作技法により挿図７～10・表１～３のとおり分類を行った。

c．使用の場における大別

食器・煮沸具・貯蔵具に大別する。食器は主に飲食に供するもので、非加熱の調理器具を含める。坏・椀・蓋・皿・盤・高坏・鉢等がある。煮沸具は煮炊きに用いられる加熱容器で、甕・甑・鍋等である。貯蔵具はものを貯蔵する容器で、壷・甕・瓶類である。

d．個体数算定

開田に伴う破壊等、遺構出土遺物の遺存状況は必ずしも良好でないことから、遺構毎の器種別個体数算定は行っていない。

なお、図版編に掲載された各遺構の出土遺物については、縄文土器を縄、弥生土器を弥、非ロクロ系土師器を土、黒色土器Ａを黒Ａ、黒色土器Ｂを黒Ｂ、須恵器を須、灰釉陶器を灰、陶器を陶、磁器を磁、内面黒色処理を内黒と略記した。

3)遺物実測

①土器

口縁部の残存している個体を中心に、サイズの小さい個体については口縁部の１／４以上、大きい個体は１／６以上の残存を目安に実測した。なお、搬入品等特殊な遺物については極力小破片でも図化を試みた。また、縄文・弥生時代の破片資料は可能な限り拓本・断面を掲載した。なお、縄文土器のうち、胎土に繊維を含むものは断面に網掛けを、内面黒色処理された土師器は内面部分に網掛けを、須恵器は断面塗りつぶしを、灰釉陶器は断面網掛けをそれぞれ行っている。

②石器

ＳＩ・ＳＫから出土した扁平な硬砂岩（以後、扁平礫と表記）を除くと出土量はそれほど多くなく、おおむね１／２以上残存して器種の判るものについて図化を行った。石器実測図の表現は『美女遺跡』（飯田市教委　1998）に準拠した。なお、節理面は斜線で示した。

③土製品・石製品

可能な限り図化を行った。

④金属製品

鉄製品については可能な限り銹落としをし小破片まで実測を試みた。また、銭貨については、銹着いてしまったものはそのままとし、銭文が比較的明瞭なものについて拓本を掲載した。

なお、遺物のうち、グリッド柱穴出土の遺物は遺構外遺物とまとめて掲載した。

4)遺物写真

同一遺構を基本単位として集合写真の撮影を心がけた。西大寺フォトに委託実施し、ジナーＳ４×５を使用し、いずれもモノクロとカラーリバーサルで撮影した。

第Ⅳ章　調査結果

第１節　微地形

今次調査地点は開田の際に切り土・盛り土されており、また、久米川に面した台地の縁辺部の限られた部分にあたるため、微地形の旧状に関する情報は限られる。遺構検出面のコンタ図（挿図11）によれば南東側に向かい緩やかに傾斜していたと考えられる。地山は黄褐色の礫混砂土層であるが、久米川に面した部分に洪水起源の砂層がみられる。弥生時代後期のＳＢ44がこの層を掘り込んでいるため、砂層はそれ以前の年代観が与えられる。

また、調査区外南側は比高差約６ｍで久米川の氾濫源になっている。この斜面部の現況は上半がやや急な傾斜であるのに対し、下半は緩斜面となっている。調査区南側中央付近斜面に設定した試掘トレンチの調査結果では、斜面上部ではかつての傾斜は現状とそれほど変わらないものの、下半は大きく異なっている。すなわち、下半部もほぼ上半の傾斜で推移し、最下端は久米川により削り取られほぼ直に落ちている。この最下端部分には黄褐色砂層が堆積しており、その上部の黒色土からは流れ込みと考えられる非ロクロ系土師器小型甕が出土した。この久米川の浸食は、調査区の北西側ではかなり内湾状に氾濫源が入り込んでおり、かつて久米川が相当蛇行していたことが考えられる。

第２節　基本層序　（挿図15・24）

先述したように、開田による切り盛りを多く受けているために、基本層序を把握するのに適した部分はほとんどない。ＳＢ62断面（挿図24）によれば、Ⅰ層；耕土、Ⅱ層；褐灰のシルト質埴土、Ⅲ層；黒褐のシルト質埴土で地山Ⅳ層になる。遺構の掘り込み面はⅣ層上面である。ＳＢ14断面（挿図15）では耕土を欠くが、２層の下面から遺構が掘り込まれている。

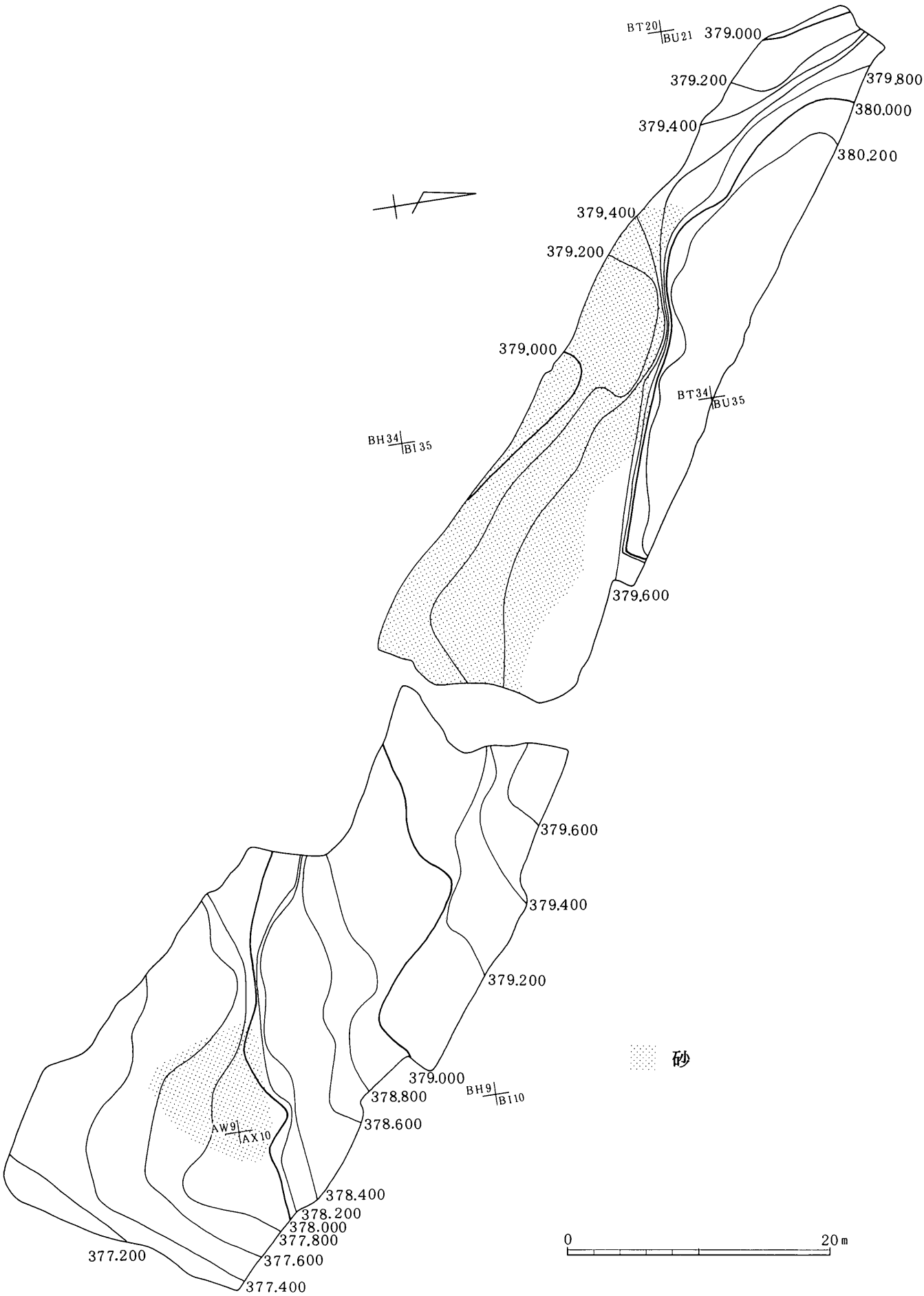
第３節　遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

1)弥生時代後期

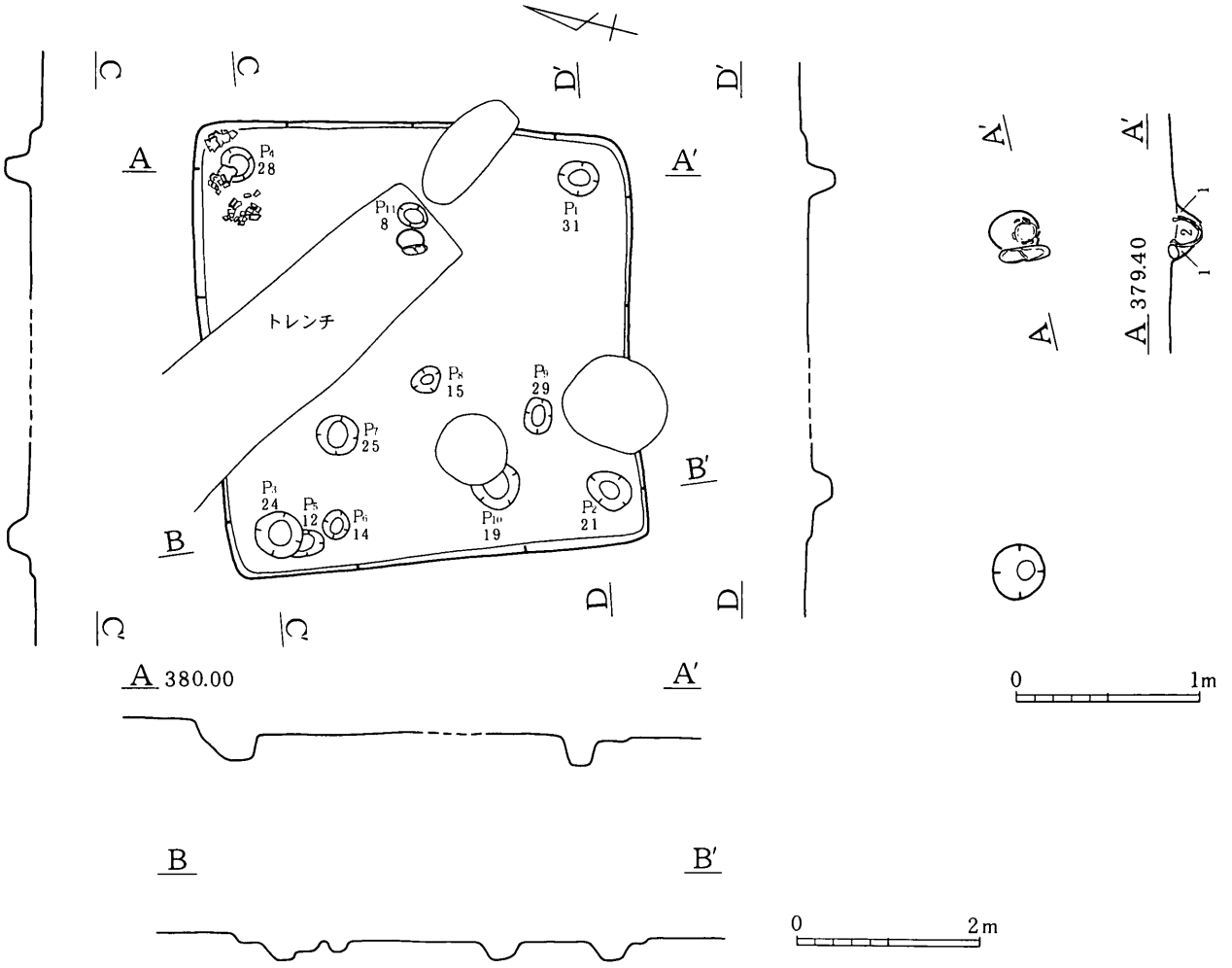
①ＳＢ44（挿図12、第１図、第17図15～第18図３）

［検出位置］ＢＫ41付近　［規模］4.7×4.7m、深さ19cm　［床面積］20.5㎡　［形態］方形　［主軸］N 72° E　［重複］ＳＢ43・ＳＢ45に切られる　［調査所見］試掘調査時に炉体土器が検出され、把握された。表土直下で検出されたが、床面まで浅く遺存状態は悪い。住居址西側・南側は床面の広がりで範囲を判断した。ＳＢ43・ＳＢ45との新旧関係は出土遺物による　［壁］壁は北壁・東壁の約１／２が把握されたのみで、確認できた範囲ではほぼ垂直に立ち上がる　［床］褐色シルト質埴土。住居址の中央付



挿図11　　調査区微地形図

SB 44



挿図12　SB44

近は叩き状で堅固、外に向かうほど軟弱になる ［柱穴］主柱穴4基のほか柱穴を4基確認。主柱穴の掘り込みは比較的なだらかである ［炉址］炉縁石を持つ土器埋設炉。甕が埋設される ［付属施設］なし。　（伊藤尚志）

［出土遺物］出土量多い。北東隅に甕1個体が潰れた状態で出土した他、炉体土器の甕・壷・抉入打製石庖丁が出土。第17図15～第18図3はいずれも硬砂岩製。混入遺物として非ロクロ系土師器－坏D1（内黒）・坏G1・高坏・甕F・甕・壷B・壷、須恵器－坏B、内耳土器がある。また、P4から非ロクロ系土師器－坏？、P5非ロクロ系土師器－甕Fが出土 ［時期］弥生時代後期終末の住居址である ［備考］北西側床面上に礫が集中する。　（馬場保之）

この他、BS36・BS37付近で弥生時代後期後半の壷・甕が多く出土、BT32・BT33付近で弥生時代後期の壷・高坏が出土、BV28・BW28・BW29・BW30・BX28・BX29付近に弥生時代中～後期の壷・甕が多く出土しており、これらの部分に住居址が存在した可能性が指摘できる。

2)古墳時代

①ＳＢ08（挿図13、第２図１～４、第18図４、第24図１・２）

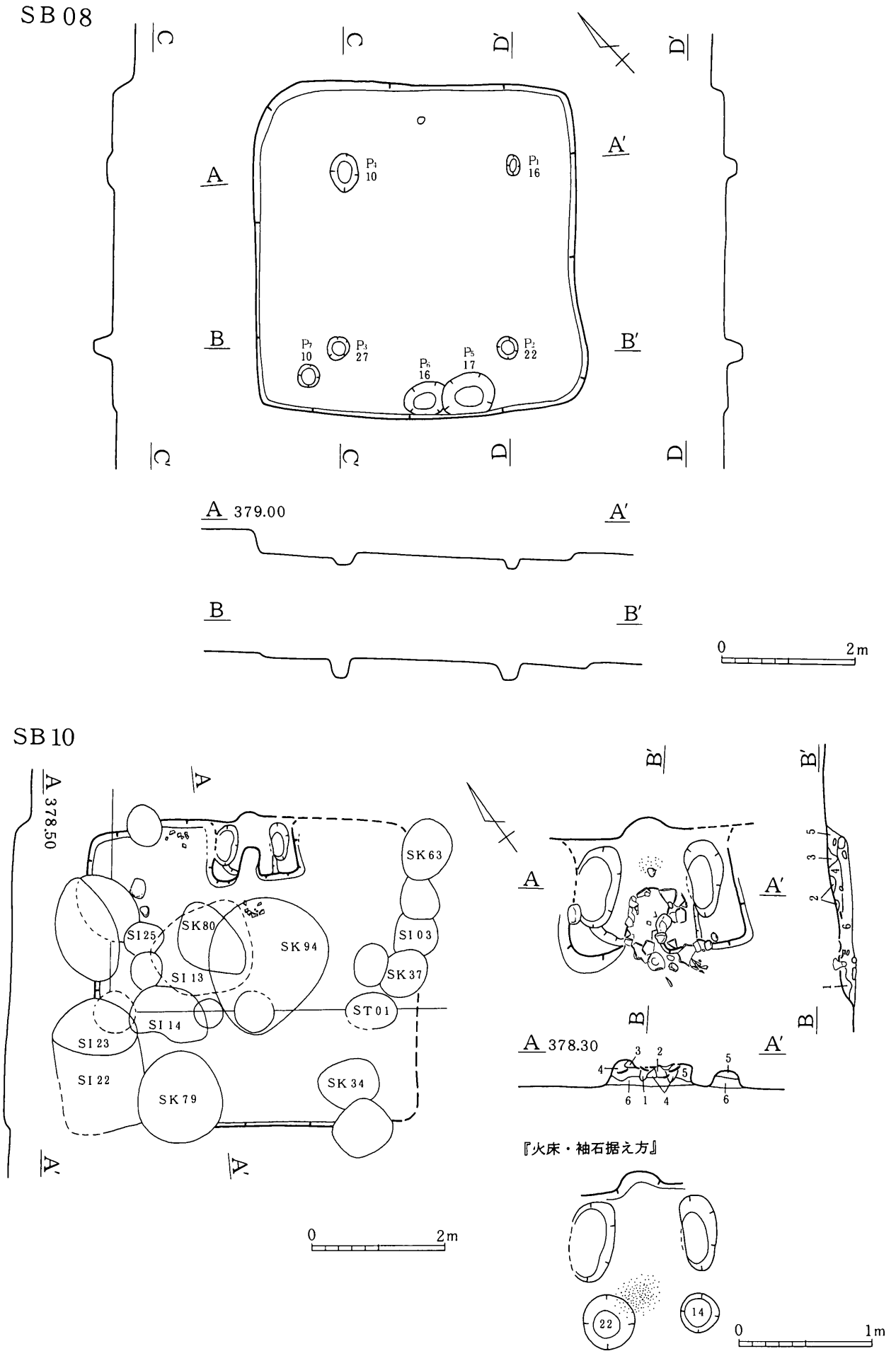
［検出位置］ＢＢ07付近　［規模］4.9×4.8m、深さ35cm　［床面積］21.7㎡　［形態］方形　［主軸］N 42°Ｅ　［重複］ＳＤ04と重複する　［調査所見］開田の際削平を受けて遺存状態はあまり良好でない　［壁］南側は床面まで浅いが、北側では急な立ち上がりを示す　［床］把握できず。掘り方は基盤の砂礫層に達しており、掘った土を埋め戻して床面としたと考えられる　［柱穴］Ｐ１～Ｐ４の４本主柱　［カマド］焼土・炭等は確認されず。北東辺中央壁よりやや離れて支脚と考えられる、焼けた礫がある。また、主柱穴Ｐ４脇に天井石かと考えられる礫あり。北東辺中央にカマドが構築されたと考えられる　［付属施設］カマド想定位置の反対側南西壁ほぼ中央に入り口部と考えられる掘り込みがある　［出土遺物］Ｐ１・Ｐ２間やや中央寄りから土師器甕が出土。また、Ｐ５縁から土師器高坏が出土。出土量はやや多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・坏Ｄ（内黒）・高坏Ａ１・高坏Ａ２・高坏Ａ４・甕Ｆ・小型甕Ａ・甑Ｆ・壷Ｄ３、その他－近世磁器小碗（瀬戸美濃系）・陶器小皿（瀬戸美濃系／鉄釉／見込印花文）混入。他に石製模造品が出土。第18図４は砂岩製　［時期］古墳時代中期後半と考えられる。

（馬場保之）

②ＳＢ10（挿図13、第２図５～11）

［検出位置］ＡＸ10付近　［規模］4.5×－m、深さ27cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方形を呈すると考えられる　［主軸］N34°Ｅ　［重複］ＳＢ11を切り、ＳＴ01・ＳＫ34・ＳＫ37・ＳＫ63・ＳＫ78・ＳＩ03・ＳＩ13・ＳＩ14・ＳＩ22・ＳＩ23・ＳＩ25に切られる。また、ＳＫ79・ＳＫ80・ＳＫ81・ＳＫ82・ＳＫ94と重複する　［調査所見］ＳＩ群が重複し、かつ埋土の差が認められなかったためプラン把握が十分にできなかったこと、また、ＳＢ10と北東壁がほぼ一致するため当初１棟かと考えられた。しかし、ＳＢ10カマドの位置から想定される住居の規模が相当大規模なものであるのに対し、南西辺のプランがそれよりかなり内側で把握されたことから２棟の重複と判断し、ＳＢ11と同時に調査した。新旧関係把握用に断面観察ベルトを設定したが、上述の重複関係のため把握できず。最終的に貼床の範囲で北西辺・南西辺が把握された。また、ＳＢ11との新旧関係はＳＢ10・ＳＢ11カマドの検出状況による。表土剥ぎの際にカマド袖石が除却された　［壁］上部がかなり削平されており、立ち上がりの状況は不明である　［床］貼床される　［柱穴］不明　［カマド］重機により除却されたものの、袖石の痕跡や粘土は良好に残り、石芯粘土カマドである。袖石据え方がないことから、袖石は床面に置かれ粘土で固定されたと考えられる。このため多量の粘土が使われている。天井石・支脚を欠いているが、火床は袖石第１列間に検出された。天井石の残欠と思われる礫がＳＴ01Ｐ４脇にあり、転落したと考えられる。煙道は上部が遺存していないが、壁面に僅かながら張り出しが看取される。焚き口から火床付近に土師器甕・高坏が壊れた状態で集中しており、甕口縁部・高坏脚部が逆位で出土したことから投棄されたと考えられる　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・高坏Ａ２・同（内黒）・高坏Ａ４・高坏Ｂ？・甕Ａ・甕Ｆ・小型甕Ａ・甑Ａ１、須恵器－坏蓋Ｈ・高坏・甕Ｃ（生焼け）、その他－縄文時代早期後葉条痕文土器・近世陶器小瓶混入　［時期］古墳時代中期後半から後期前半と考えらえる。

（馬場保之）



挿図13　　ＳＢ08、ＳＢ10

③ＳＢ11（挿図14、第３図１～10、第18図５、第25図24）

［検出位置］ＡＹ08付近　［規模］5.3×－m、深さ44cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不整長方形　［主軸］N39°Ｅ　［重複］ＳＢ10・ＳＴ01・ＳＩ15・ＳＩ18・ＳＩ20～ＳＩ24等に切られる　［調査所見］ＳＢ10と同様の検出状況である。カマド火床の痕跡がＳＢ10掘り方で確認され、ＳＢ10に切られると判断された　［壁］やや急な立ち上がりを示す　［床］貼床や硬い部分は検出されず。掘り方が北側では地山の砂礫層に達していることから、掘り方を埋め戻して床面としたと考えられる　［柱穴］検出位置からＰ１・Ｐ２・Ｐ５が主柱穴と考えられる　［カマド］ＳＢ10に破壊されており、火床の痕跡が北東壁際ほぼ中央で確認された。袖石据え方等はない　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１（内黒）・坏Ｄ２・高坏Ａ１・高坏Ａ２・鉢Ｄ・甕Ａ・甕Ｆ・甕Ｇ・小型甕Ｈ・甑Ｆ、須恵器－甕・瓹、土製紡錘車。磨面を持つ剥片（第18図５、安山岩製）［時期］古墳時代中期後半と考えられる。　（馬場保之）

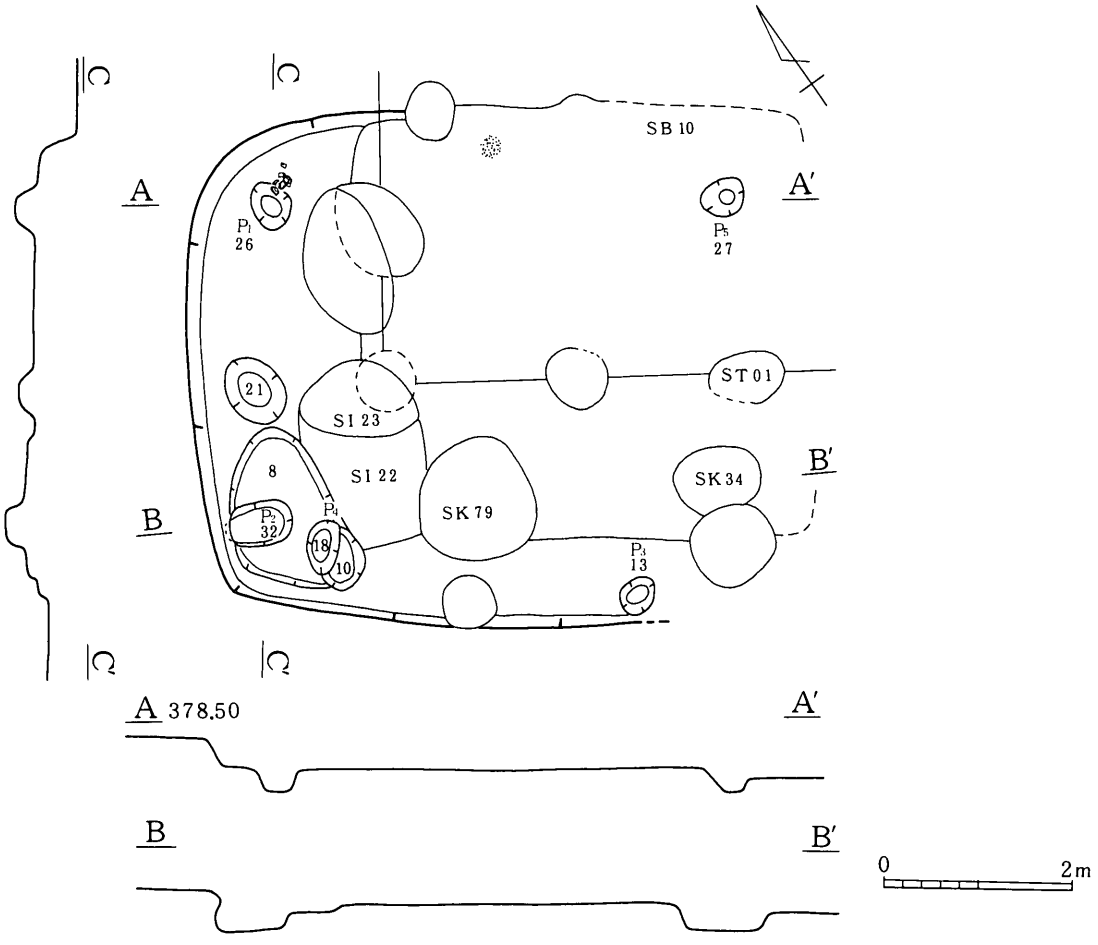
④ＳＢ12（挿図14）

［検出位置］ＢＢ03付近　［規模］5.7×5.0m、深さ10cm　［床面積］26.5㎡　［形態］長方形　［長軸］N44°Ｅ　［重複］ＳＢ18と重複するが新旧関係は不明である　［調査所見］試掘調査時に主柱穴Ｐ３を確認。プランは耕土直下で把握されたが、開田の際削平を受けており、遺物がほとんど出土しないこと、底面まで浅いことやカマド等が確認されないことから床面より下位で検出された可能性が高い　［壁］検出状況から立ち上がりの状態は不明である　［床］硬い部分等はなく不明である。ＳＢ10で検出された貼床より床面が明確に捉えられない住居址と類似しており、掘り方を埋め戻して床面とした可能性が考えられる　［柱穴］試掘調査時２トレンチで主柱穴Ｐ２がとばされてしまったが、他の３本の主柱穴が把握された　［カマド］出土遺物から詳細時期は判然としないが、周囲の他の住居址と同様、カマドを有する可能性が高い。煙道・火床・袖石据え方等の痕跡も確認されず　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は僅少。非ロクロ系土師器－高坏・壷、Ｐ１から非ロクロ系土師器－坏Ｄ・高坏Ａ・甕、須恵器－甕、Ｐ３から非ロクロ系土師器－甕　［時期］古墳時代中期の住居址と考えられる。　（馬場保之）

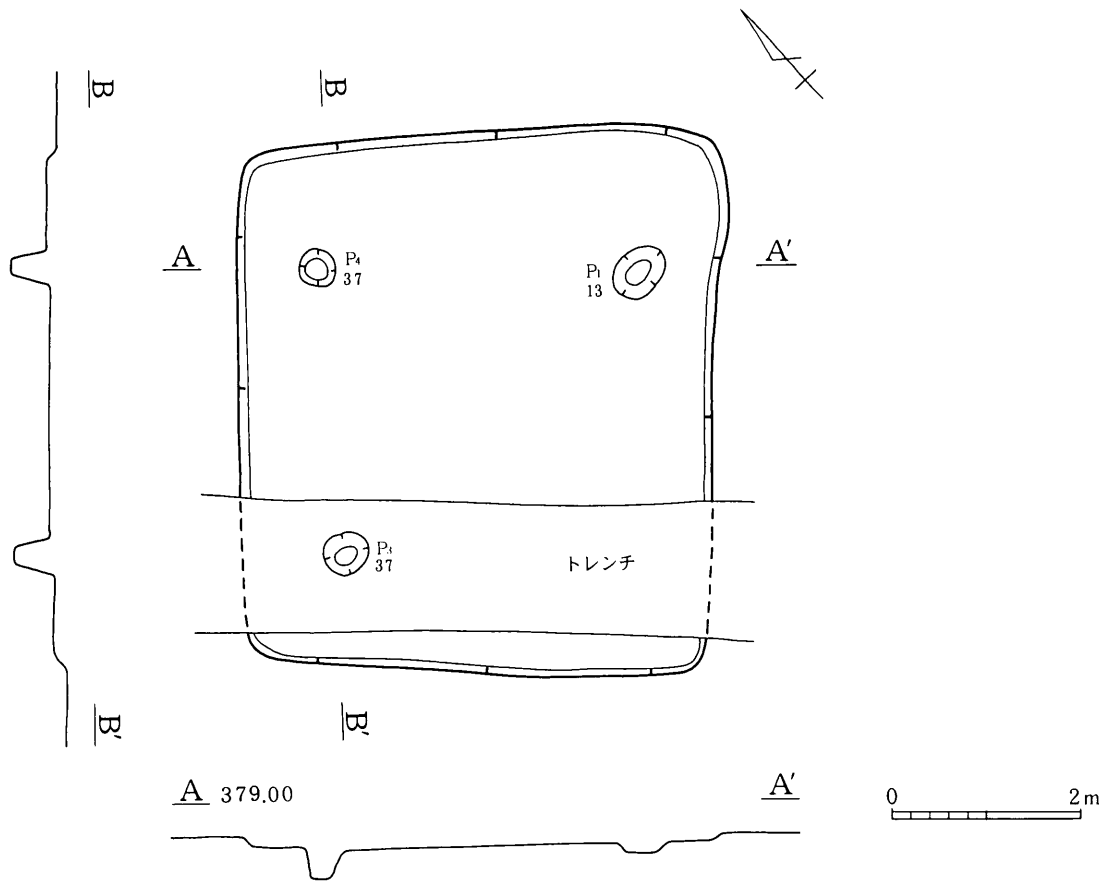
⑤ＳＢ13（挿図15、第３図11）

［検出位置］ＢＥ07付近　［規模］3.9×－m、深さ21cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方形を呈すると考えられる　［主軸］北西辺の方向N42°Ｅ　［重複］ＳＤ09を切る　［調査所見］一部調査区外にかかる。南東側は耕地化の際に削平を受け、プランが確認できず。自然埋没と考えられ、礫がほぼ全体に入る　［壁］部分的に西側は明確であり、ゆるやかな立ち上がりを示す　［床］掘り方が地山の砂礫層に達しており、掘り方を埋め戻して床面としたと考えられるが、把握できず。調査区壁面で観察した限りでは貼床もされていない。中央やや北西寄りで検出された焼土は掘り方より浮いており、おそらく焼土の高さが床面と考えられる　［柱穴］主柱穴２本が検出された。柱痕は確認できず　［カマド等］ほぼ中央で検出された焼土は炉址に伴うとも考えられず。出土遺物の時期からみてカマドを有すると考えられ、北東辺中央調査区外にあると考えられる　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は僅少で、中央を中心として破片が出土している。床面中央付近で須恵器甕が出土、遺棄されたと考えられる。非ロクロ系土師器－坏Ｄ・高坏Ａ４・鉢Ｃ・甕Ｂ・甕Ｆ・壷Ａ、黒色土器Ａ－坏Ａ、須恵器－甕・瓹、灰釉陶器－碗

SB 11



SB 12



挿図14　　SB11、SB12

がある。またＰ３より非ロクロ系土師器－甕・小型甕Ａ、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５より非ロクロ系土師器－甕が出土 ［時期］古墳時代と平安時代の遺物があるが、古墳時代中期後半の住居址と考えられる ［備考］中央で検出された焼土以外に炭化材等は出土せず、焼失ないし焼却住居の可能性は低い。カマドから掻き出された焼土がカマド前面に残されたと考えられる。 （馬場保之）

⑥ＳＢ14（挿図15、第３図12～第４図12・第18図６～８）

［検出位置］ＢＬ47付近 ［規模］－×－m、深さ24cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］不明 ［主軸］南辺の方向N75° E ［重複］ＳＢ15・ＳＢ19・ＳＢ37を切る ［調査所見］カマドの残がいと住居址の一部を調査した。主軸は正確に計測できないが、南東方向を向いていたと考えられる ［壁］確認できた部分では、ほぼ垂直 ［床］褐色シルト質埴土。比較的堅固であった。弥生時代の遺物も多く、重複して該期の遺構があった可能性が高い ［柱穴］主柱穴１本を確認。ほぼ垂直に掘り込まれている ［カマド］石芯粘土カマド。カマド本体はほとんど原型を止めておらず、住居廃棄時に破壊されたと思われる ［付属施設］なし。 （伊藤尚志）

［出土遺物］出土量はやや多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・高坏Ａ２・鉢Ｄ・甕Ｆ・小型甕・台付甕・甑Ａ１・壷Ｂ・壷・ミニチュア土器、須恵器－坏蓋Ｈ・甕、弥生土器－中期後半～後期の壷・甕・高坏、弥生時代石器―抉入打製石庖丁（第18図６）・有肩扇状形石器（同７）・敲打器（同８、以上いずれも硬砂岩）、その他－縄文時代早期後葉条痕文土器・同前期土器 ［時期］古墳時代中期後半の住居址である。 （馬場保之）

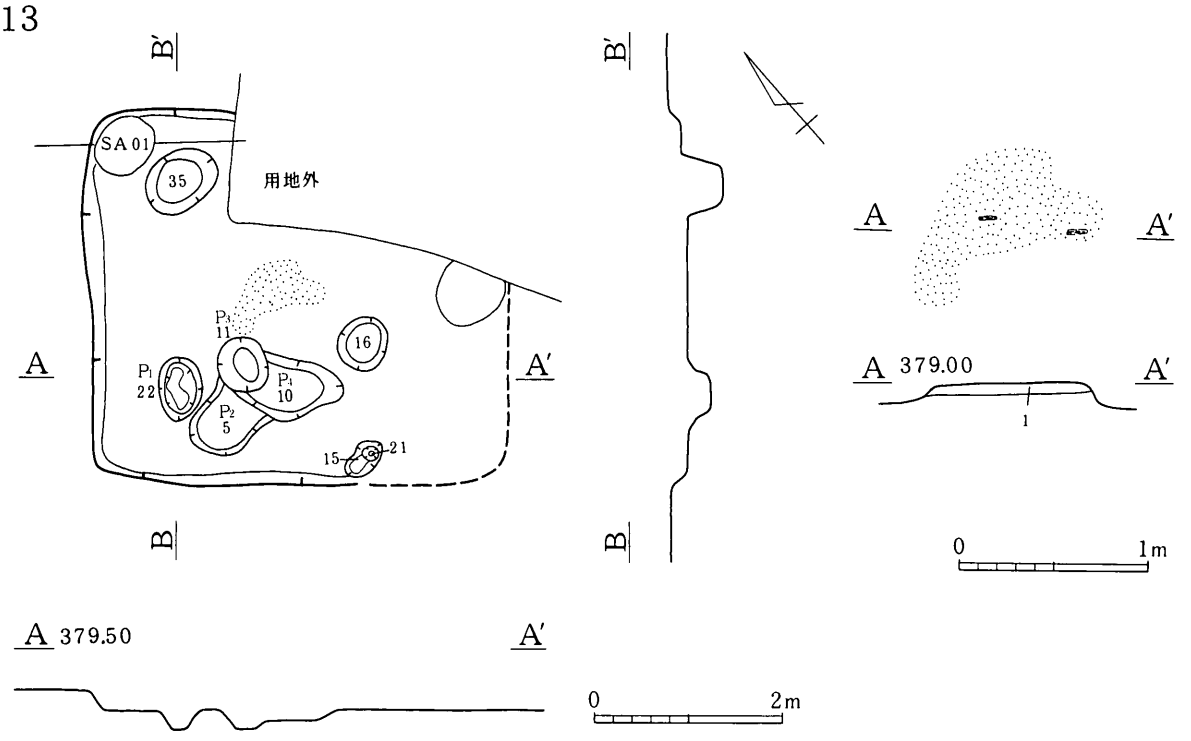
⑦ＳＢ15（挿図16、第４図13～第５図２）

［検出位置］ＢＬ46付近 ［規模］－×－m、深さ－cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］不明 ［主軸］ － ［重複］ＳＢ14に切られ、ＳＢ22を切る ［調査所見］調査区際で土師器甕等遺物が集中して出土したため、住居址とした。遺物の下部で把握された掘り方は遺物分布より内側で一致しておらず。遺物はＳＢ14上部まで分布しておらず、また、ＳＢ22上部にはみられることから、ＳＢ14に切られ、ＳＢ22を切ると判断された。先行して設けた排水用側溝の西側は水路脇に石積みされた畦畔部分にあたり、断面ではＳＢ14・ＳＢ22との新旧関係は把握できず ［壁］検出面から浅く、立ち上がりの状態は不明である ［床］遺物基底が床面と考えられ、掘り方底面より上位である ［柱穴］不明 ［カマド等］不明 ［付属施設］不明 ［出土遺物］出土量はやや多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ・坏Ｄ２・坏Ｅ（内黒）・高坏Ａ２・高坏Ａ３・高坏Ａ４・同（内黒）・高坏Ａ・同（内黒）・甕Ｆ・小型甕Ａ・甑Ａ１・甑Ｆ・壷Ｄ？・壷、須恵器－坏Ｈ、その他－陶器中皿 ［時期］古墳時代中期後半に属すと考えられる。 （馬場保之）

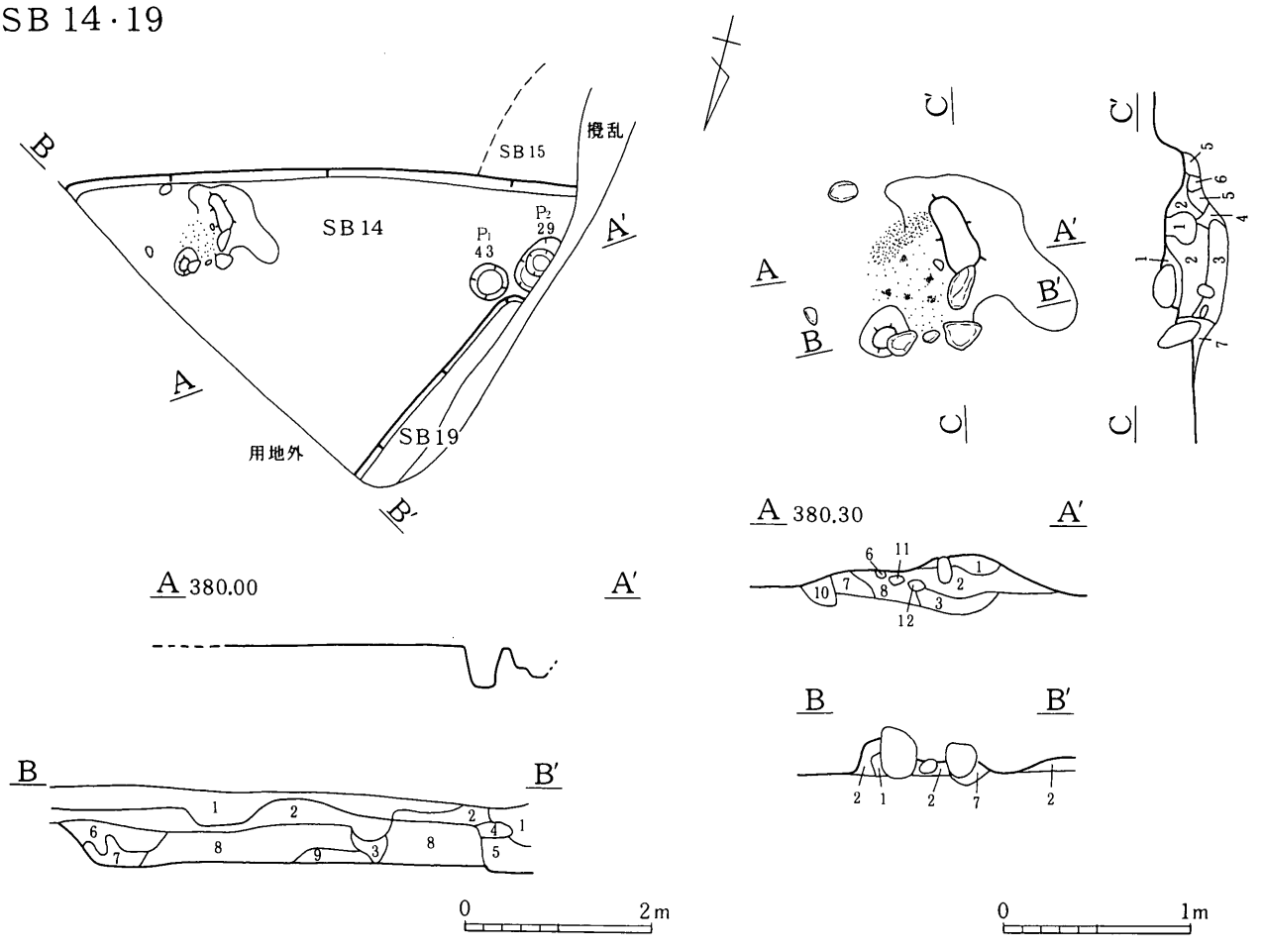
⑧ＳＢ16（挿図16、第５図３～８）

［検出位置］ＢＦ01付近 ［規模］5.2×5.7m、深さ15cm ［床面積］26.1㎡ ［形態］方形 ［主軸］N 60° W ［重複］ＳＢ20に切られる ［調査所見］検出時点で床面が露出したため、床面の広がりで住居址の範囲を判断。掘り方まで掘り下げて実測を行う ［壁］ほぼ垂直 ［床］暗褐色シルト質埴土。あまり堅固な部分は認められなかった ［柱穴］主柱穴４本を確認。掘り込みはあまり深くなく、なだらかである ［カマド］石芯粘土カマド。カマド本体は遺存状態が悪く、住居廃棄時に破壊されたと思われ

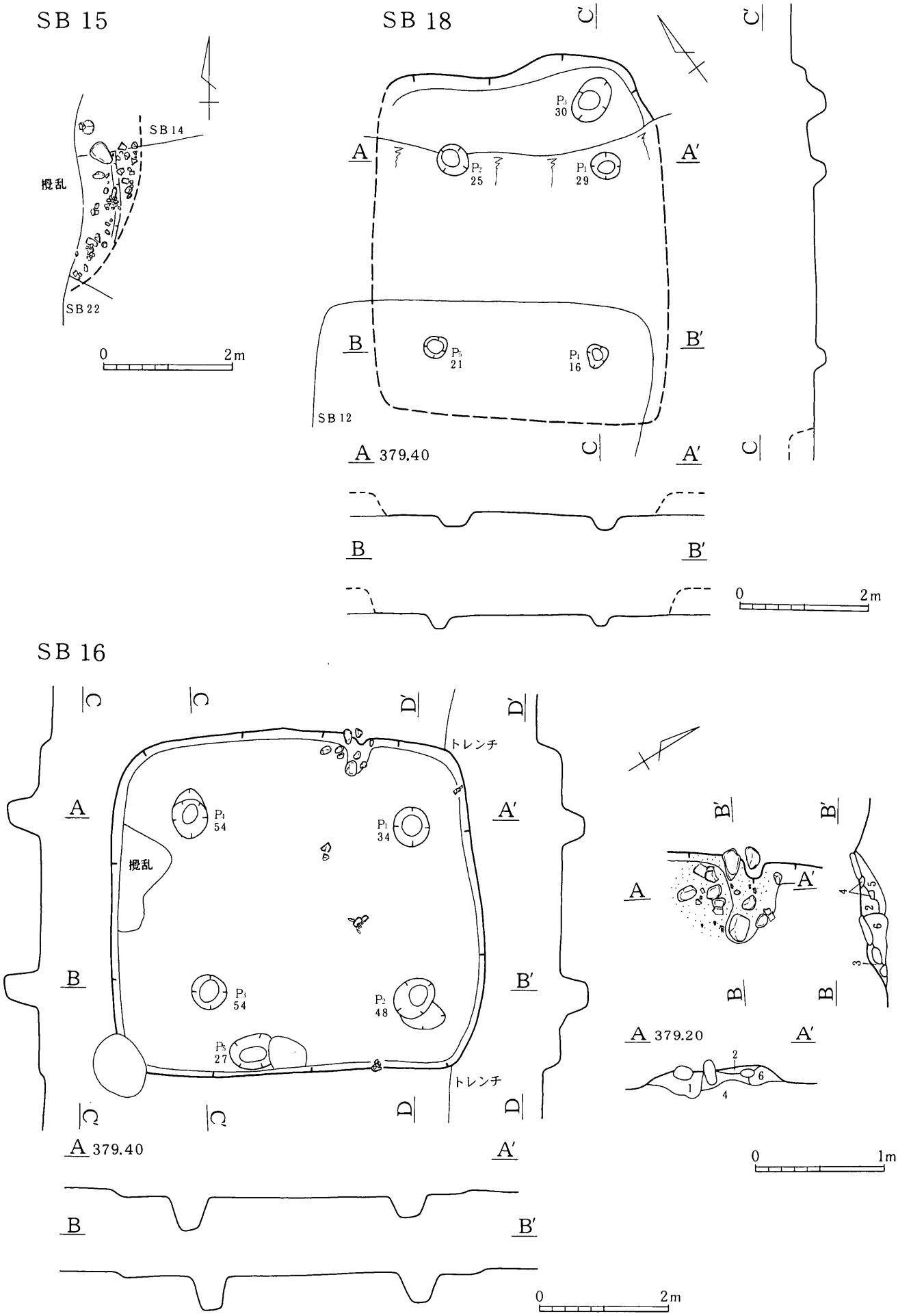
SB 13



SB 14・19



挿図15　　ＳＢ13、ＳＢ14・19



挿図16　ＳＢ15、ＳＢ16、ＳＢ18

る。左側袖は耕作により削られ、痕跡も確認できなかった ［付属施設］なし。 （伊藤尚志）
［出土遺物］出土量多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・同（内黒）・高坏Ａ２・高坏Ａ３・高坏・同（内黒）・鉢Ｄ・甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｆ・小型甕Ａ・甑Ｆ、須恵器－蓋坏Ｈ・高坏Ｂ・高坏・甕・長頸壷、鞴羽口、その他－灰釉施釉の陶器混入。Ｐ１から非ロクロ系土師器－坏Ｄ・高坏・甕、Ｐ２から非ロクロ系土師器－坏Ｄ・甕・小型甕Ａ・甑Ｆ、Ｐ４より非ロクロ系土師器－小型甕Ａ出土 ［時期］古墳時代後期前半に属すと考えられる。 （馬場保之）

⑨ＳＢ18（挿図16、第５図９～11）
［検出位置］ＢＢ03他 ［規模］－×－ｍ、深さ30㎝ ［床面積］ － ㎡ ［形態］不整長方形を呈すると考えられる ［主軸］N38° E ［重複］ＳＢ12と重複する ［調査所見］開田の際にほぼ全体が削平されており、北東壁寄りが僅かに遺存する。削平は掘り方より下位まで達する。主柱穴が４本検出されたことにより、プラン・規模が推定把握された。東隅に礫が集積する ［壁］下半はやや急であるが、上半は緩やかな立ち上がりを示す ［床］遺存状況が良好でないこともあって床面は把握できず。掘り方を埋め戻して床面とした可能性が高い ［柱穴］Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５の４本の主柱穴をもつ ［カマド等］カマドを有すると考えられるが、北東壁側には焼土等カマドの痕跡はない。削平を受けた北西辺に設けられていたと考えられる ［付属施設］なし ［出土遺物］Ｐ２・Ｐ３間から土師器甕が出土。出土量少量。非ロクロ系土師器－高坏・甕Ａ・甕Ｂ・小型甕Ａ・小型甕Ｆ、須恵器－甕 ［時期］詳細時期不明であるが、土師器甕から古墳時代後期と考えられる。 （馬場保之）

⑩ＳＢ20（挿図17、第６図１～３）
［検出位置］ＢＦ02等 ［規模］－×－ｍ、深さ22㎝ ［床面積］ － ㎡ ［形態］不明 ［主軸］N39° E ［重複］ＳＢ16を切る ［調査所見］ＳＢ16検出時にカマドが把握され、検出位置からこれと別住居址であることが判明した。しかし、埋土の差はなく、プランは把握できなかった。北東辺のプランもカマドからの推定である。埋土中に礫を多く含む ［壁］上述の検出状況から立ち上がりの状態は不明である ［床］カマド火床検出レベルが床面レベルと考えたが、硬い部分等は検出できず ［柱穴］不明である。ＢＦ01Ｐ１・ＢＦ02Ｐ１・同Ｐ２が配置からみて主柱穴の可能性も考えられたが、南側の１本は検出できず。また、カマドとの位置関係が近すぎること、同時期他の住居址に比較して深すぎることから本址に伴わないと判断した ［カマド］良好に支脚・右袖・火床が残り、左袖は基部の袖石の他、その前面側袖石据え方も検出された。袖石３対の石芯粘土カマドである ［付属施設］不明 ［出土遺物］出土量はやや多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ２・坏Ｄ（内黒）・高坏・甕Ａ・甕Ｆ・甕？・小型甕Ａ・壷Ｂ、須恵器－坏蓋 ［時期］古墳時代中期後半から後期前半の遺物があり、後期前半と考えられる。（馬場保之）

⑪ＳＢ21（挿図17、第６図４）
［検出位置］ＢＨ01付近 ［規模］2.1×－ｍ、深さ16㎝ ［床面積］ － ㎡ ［形態］不整方形を呈すると考えられる ［主軸］北辺の方向N62° W ［重複］ＳＢ40を切り、ＳＴ04と重複する ［調査所見］南側は開田の際に削平を受け、遺存せず。試掘調査３トレンチで一部を破壊。ＳＢ40との新旧関係は検出時平面で確認 ［壁］東辺はだらだらと緩やかに立ち上がる ［床］硬い部分はなく、貼床もない

［柱穴］不明　［カマド等］不明　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は少ない。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・高坏・鉢Ｄ・鉢（内黒）・甕Ｆ・壷Ｄ？、須恵器－坏蓋Ｈ　［時期］古墳時代中期後半と考えられる。　（馬場保之）

⑫ＳＢ22（挿図17）

［検出位置］ＢＪ46付近　［規模］－×－ｍ、深さ11㎝　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］北辺の方向Ｎ60°Ｗ　［重複］ＳＢ15・ＳＢ39・ＳＢ41に切られる　［調査所見］ごく一部が調査されたのみである。ＳＢ15との新旧関係は、ＳＢ15の遺物分布による。また、ＳＢ39カマドが本址に壊されていないことから、ＳＢ39・ＳＢ41に切られると判断された　［壁］床面まで浅く立ち上がりの状態は不明である　［床］平坦でない　［柱穴］不明　［カマド等］不明　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は僅少である。非ロクロ系土師器－高坏・甕Ｆ、須恵器－坏蓋Ｈ　［時期］古墳時代中ないし後期と考えられる。　（馬場保之）

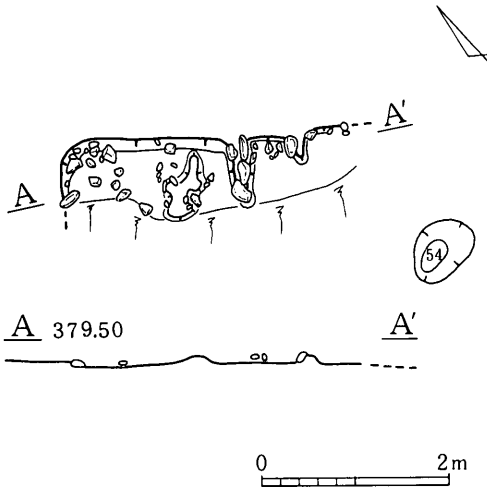
⑬ＳＢ23（挿図17）

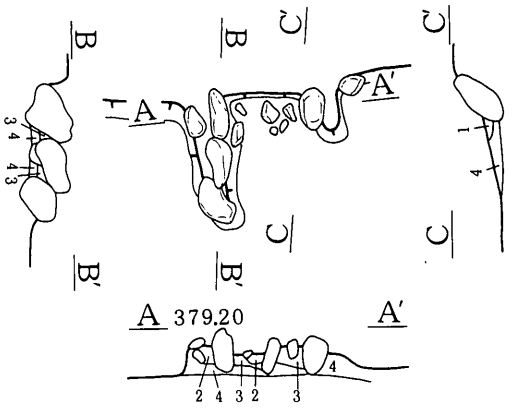
［検出位置］ＢＩ49付近　［規模］－×－ｍ、深さ14㎝　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］北東辺の方向Ｎ42°Ｗ　［重複］ＳＢ21・ＳＢ40・ＳＴ04と重複する　［調査所見］開田に際して削平を受け、また重複遺構のために遺存状態が不良である。このため他遺構との新旧関係は不明である　［壁］検出面から浅く、立ち上がりの状態は不明である　［床］硬い部分は把握できず　［柱穴］不明　［カマド等］不明　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は僅少である。非ロクロ系土師器－坏・甕・甑・壷　［時期］古墳時代中ないし後期と考えられる。　（馬場保之）

⑭ＳＢ24（挿図18、第６図５～14・第18図９）

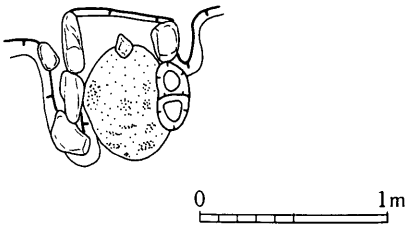
［検出位置］ＡＵ05付近　［規模］－×－ｍ、深さ14㎝　［床面積］　－　㎡　［形態］方形を呈すると考えられる　［主軸］Ｎ61°Ｅ　［重複］ＳＢ27・ＳＢ31に切られる　［調査所見］南東側は開田の際の削平により遺存せず。北隅とカマドの位置から大規模な住居址と考えられ、とすると、南西辺は調査区外に位置する。この部分は久米川に向かう急斜面に当たり、調査時には遺存していなかったと考えられる。当初ＳＢ24・ＳＢ27・ＳＢ31の新旧関係の把握に努めたが、畦畔沿いに設定された暗渠排水による破壊のため新旧関係は把握できず。床面の高さやカマドの遺存状況から、古い順にＳＢ24→ＳＢ27→ＳＢ31であると考えられる　［壁］検出面から床面までは浅く、壁の立ち上がりの状態は不明である　［床］硬い部分は把握できなかったものの、火床と同じレベルで床面が把握された。掘り方を埋め戻して床面とした　［柱穴］開田により削平された部分で、やや深いもののカマド寄り左側の主柱穴と考えられる柱穴が把握された　［カマド］北東辺中央と考えられる位置に構築される。袖石２対の石芯粘土カマドで、天井石を欠くものの遺存状態は良好である　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・同（内黒）・坏Ｅ（内黒）・高坏Ａ４・高坏Ａ・同（内黒）・甕Ａ・甕Ｆ・甕Ｈ・小型甕Ａ・壷Ｂ、黒色土器Ａ－皿、須恵器－坏Ｂ・坏蓋Ｈ・高坏・甕Ａ・甕・長頸壷Ｂ、その他－陶器碗混入、砂岩製敲打器（第18図９）、柱穴より非ロクロ系土師器－高坏・甕Ｇ？出土　［時期］一部奈良時代の遺物が混じるものの、古墳時代後期前半に属すと考えられる。　（馬場保之）

SB 20

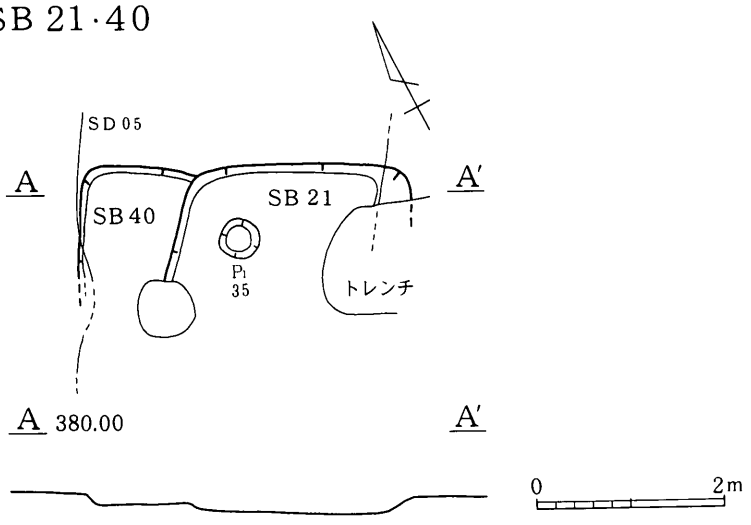




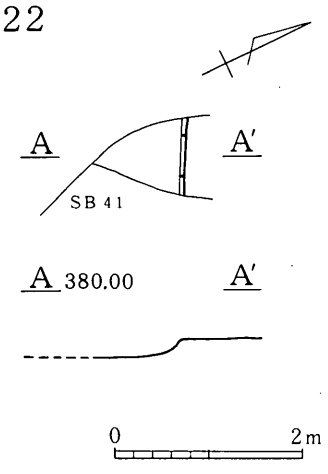
『火床・袖石および据え方』



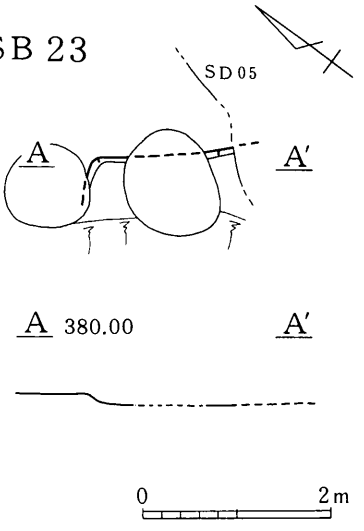
SB 21·40



SB 22

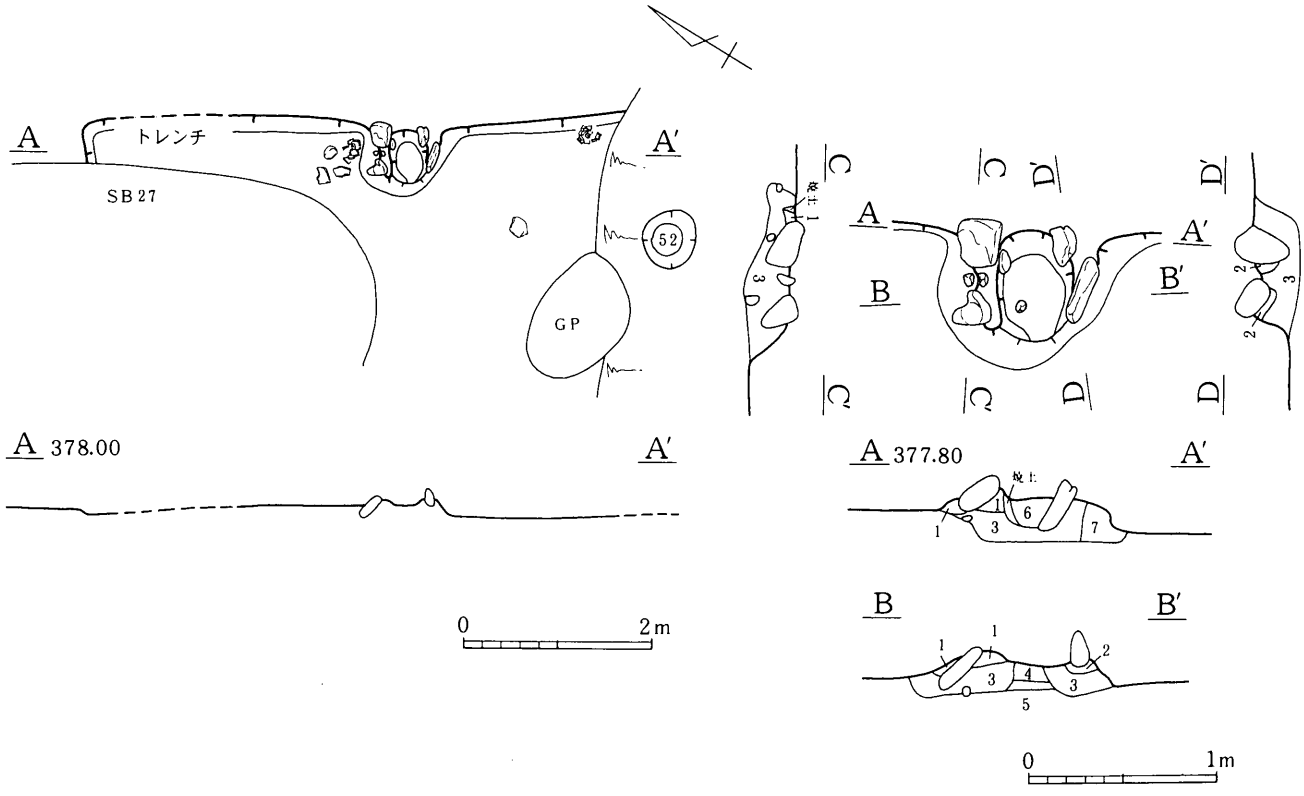


SB 23

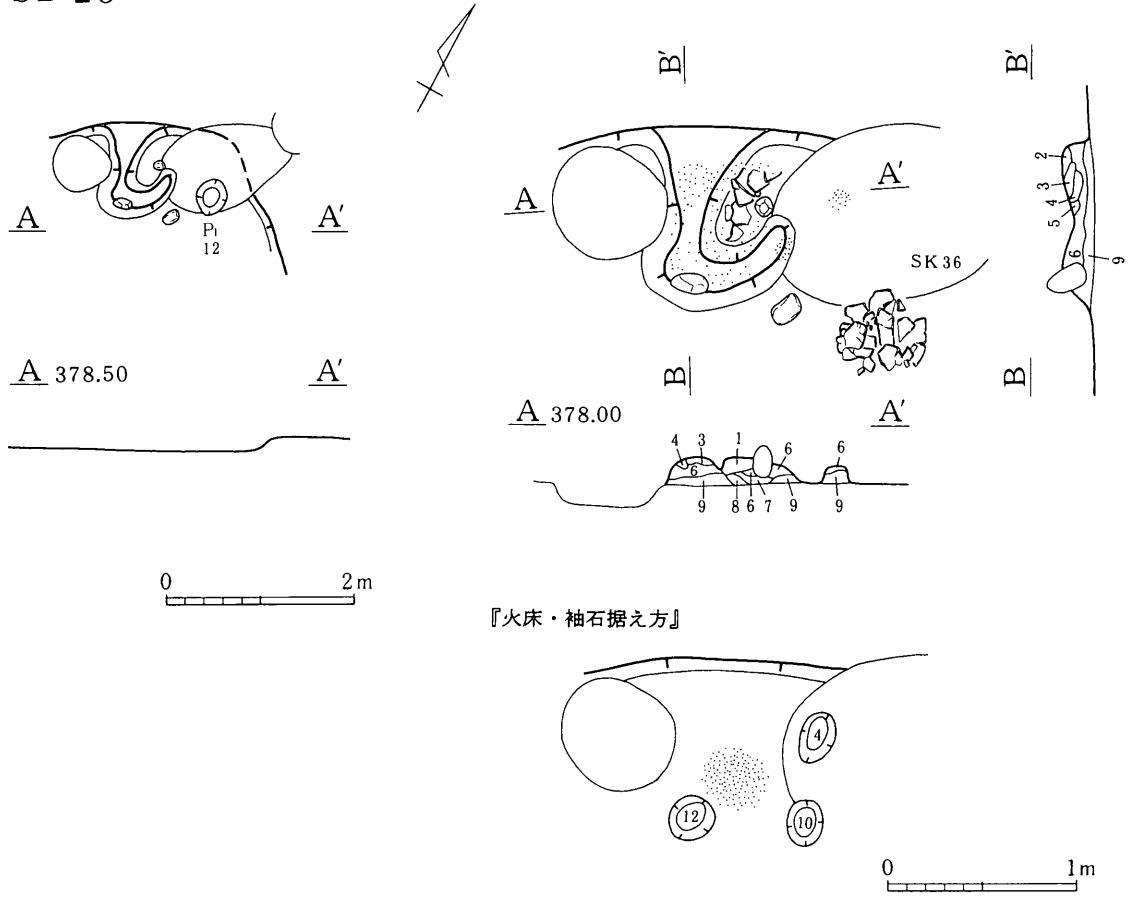


挿図17　　ＳＢ20、ＳＢ21・40、ＳＢ22、ＳＢ23

SB 24



SB 25



挿図18　　ＳＢ24、ＳＢ25

⑮ＳＢ25（挿図18、第７図１～５）

［検出位置］ＡＶ08付近　［規模］－×－m、深さ13cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］Ｎ32°Ｗ　［重複］ＳＫ36に切られる　［調査所見］南半は開田に際して削平を受けており、遺存せず。まずカマドと考えられる多量の焼土が検出され、精査の結果、北東壁・北西壁の一部が把握された。カマドの検出位置から小規模な住居址と考えられる　［壁］遺存状態が不良で立ち上がりの状態は不明である　［床］掘り方と同レベルでカマド火床が確認されており、掘り方が床面と考えられる　［柱穴］北隅寄りに主柱穴と考えられるＰ１を検出したが、他は不明　［カマド］右袖粘土・火床及び袖石据え方が検出され、石芯粘土カマドと考えられる。火床上部に土師器甕が遺棄される。焼土が上部から顕著であったことから、破却されたと考えられる　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は少ない。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１（内黒）・坏Ｄ２・坏Ｄ（内黒）・坏Ｆ２（内黒）・高坏Ａ４？・鉢Ｄ・甕Ｆ・甕Ｇ・小型甕Ａ　［時期］古墳時代後期前半と考えられる。　（馬場保之）

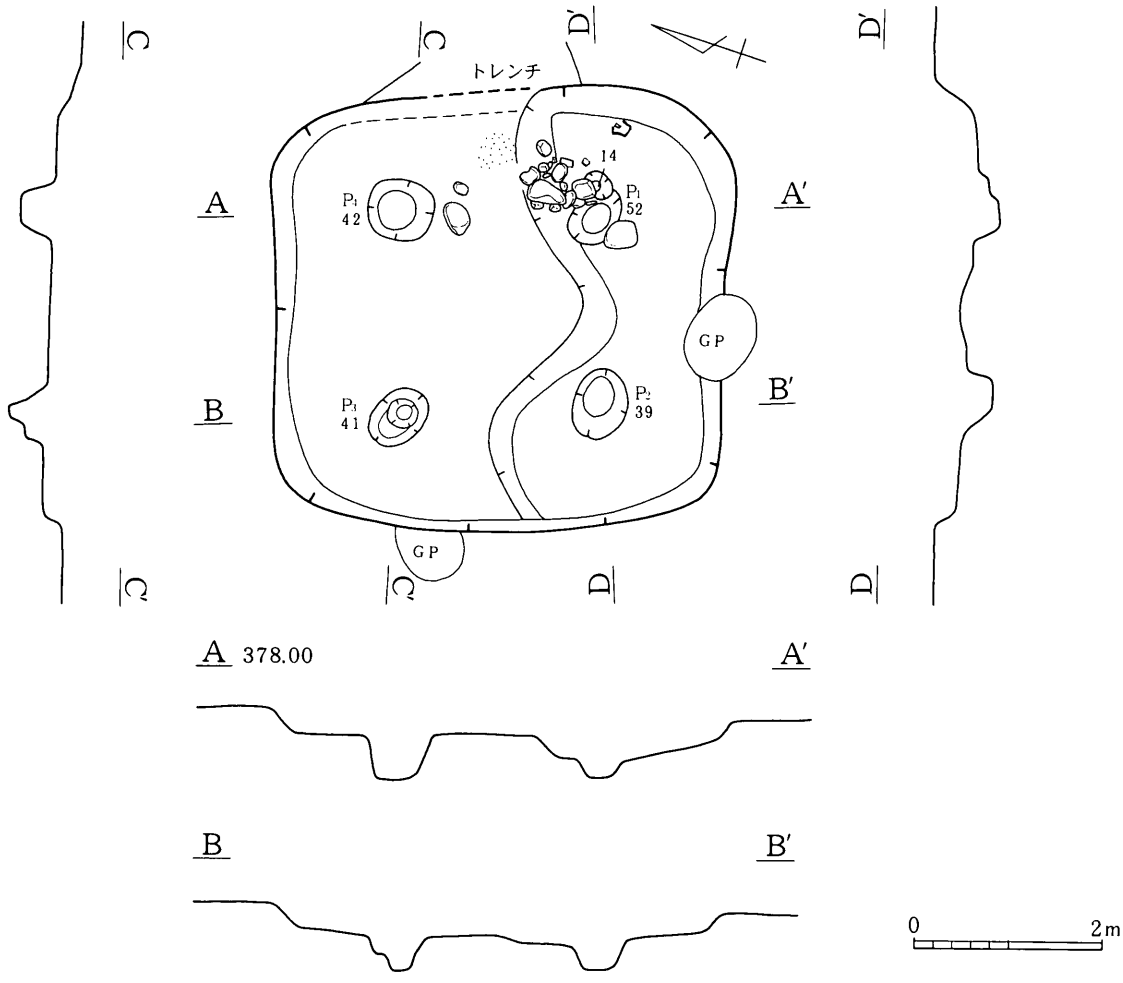
⑯ＳＢ27（挿図19、第７図６～11）

［検出位置］ＡＶ04付近　［規模］4.8×4.6m、深さ12cm　［床面積］17.3㎡　［形態］隅丸方形　［主軸］Ｎ70°Ｅ　［重複］ＳＢ31に切られ、ＳＢ24を切る。ＳＢ29との新旧関係は不明である　［調査所見］ＳＢ24と同様の検出状況である。ＳＢ31の床面下位で検出され、カマドがＳＢ31により削平を受けている。ＳＢ29との新旧関係はＳＢ31・小柱穴との重複のため把握できず　［壁］緩やかな立ち上がりを示す　［床］カマド前面の一部に貼り床が残存　［柱穴］４本主柱穴。Ｐ１～Ｐ３は不整楕円形、Ｐ４は円形を呈し、長径30～40cm・深さ39～52cmを測る　［カマド］ＳＢ31による削平を受け遺存状態は悪い。火床および袖構築材の粘土を確認した。袖石据え方も確認されていないが、石芯粘土カマドと考えられる。左脇に土師器甕が集中　［付属施設］南側は周溝状にだらだらと掘りくぼむ　［出土遺物］出土量は多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１（内黒）・坏Ｄ２・坏Ｄ・同（内黒）・高坏・同（内黒）・鉢Ｃ・甕Ａ・甕Ｂ・小型甕Ａ・小型甕Ｂ・甑Ａ１・壷Ｂ・壷Ｄ３・壷、須恵器－高坏？・長頸壷Ｂ？・壷？、不明土製品が、またＰ２から非ロクロ系土師器－坏・甕、Ｐ４から非ロクロ系土師器－高坏？が出土　［時期］古墳時代後期前半に属すと考えられる。　（馬場保之）

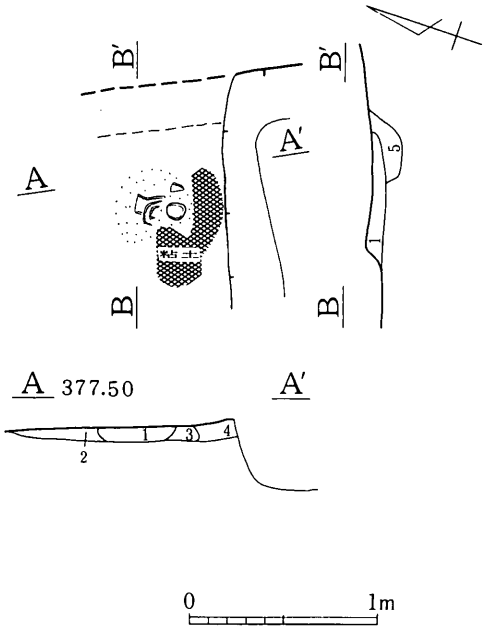
⑰ＳＢ28（挿図19、第８図１）

［検出位置］ＡＸ06付近　［規模］3.4×－m、深さ50cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方形を呈すると考えられる　［主軸］北東辺の方向Ｎ58°Ｗ　［重複］ＳＢ29・ＳＢ31と重複する　［調査所見］試掘調査の２トレンチにかかり、ごく一部を調査したにとどまる。その南西側は開田の際削平を受けており把握できず。このため他住居址との新旧関係も不明である　［壁］急な立ち上がりを示す　［床］把握されたが、硬い部分等なし。掘り方を埋め戻して床面としたと考えられる　［柱穴］不明　［カマド等］北東辺では痕跡が把握できず、不明である　［周溝］なし　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は僅少である。非ロクロ系土師器－高坏Ａ４（内黒）・高坏Ａ（内黒）・高坏・小型甕・甑？　［時期］古墳時代中期の住居址と考えられるが、詳細時期不明である。　（馬場保之）

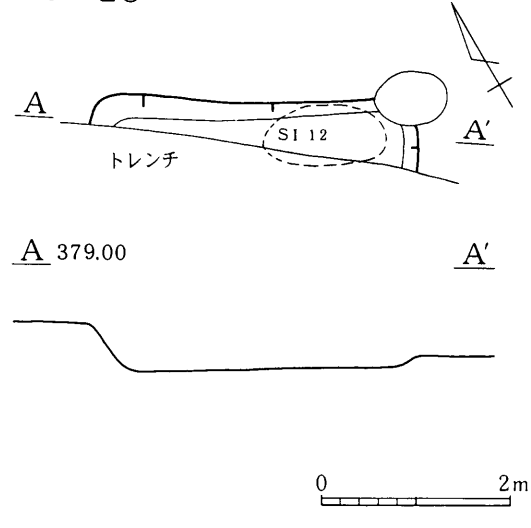
SB 27



SB 27 『火床』



SB 28



挿図19　　ＳＢ27、ＳＢ28

⑱ＳＢ29（挿図20、第18図10）

［検出位置］ＡＸ02付近　［規模］－×－m、深さ25cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方形を呈すると考えられる　［主軸］N40°Ｗ　［重複］ＳＢ31・ＳＢ32・ＳＫ32に切られ、ＳＢ27と重複する　［調査所見］ＳＢ31との新旧関係は平面形検出による　［壁］検出面からあまり深くなく、遺存状態は良くないが、やや急に立ち上がると考えられる　［床］底面で一部地山礫が露出しており、掘り方を埋め戻して床とした可能性が考えられるが、把握できず　［柱穴］カマド寄り右側で検出された柱穴が主柱穴と考えられる。他の３本は不明　［カマド］小柱穴により一部破壊されており、右袖石は床面より高い位置に浮いている。小柱穴北東側に袖石据え方かと考えられる掘り込みがある。袖構築材の粘土も残っており、石芯粘土カマドと考えられる。火床の一部・煙道の基部が把握されたが、支脚等は不明　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量は多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ・同（内黒）・高坏Ａ１・高坏Ａ４・高坏・甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｆ・小型甕Ａ・甑Ｆ・壷Ｂ・壷Ｄ３、須恵器－坏蓋・甕・短頸壷Ｂ・壷蓋Ｂ・長頸壷・鍋、横刃型石器（第18図10、硬砂岩）［時期］古墳時代中期後半の住居址と考えられる。（馬場保之）

⑲ＳＢ31（挿図20）

［検出位置］ＡＷ04付近　［規模］5.5×5.4m、深さ17cm　［床面積］26.9㎡　［形態］方形　［主軸］Ｎ６°Ｅ　［重複］ＳＢ27・ＳＢ29を切る。ＳＢ24との切り合いは不明　［調査所見］住居址の重複と、耕作の撹乱が激しかったため、かろうじて床面と思われる部分を確認した　［壁］ゆるやかに立ち上がる　［床］暗褐色シルト質埴土。あまり堅固な部分は認められなかった　［柱穴］１本を確認。ただし、主柱穴かは判断できなかった　［カマド等］不明　［付属施設］なし。　（伊藤尚志）

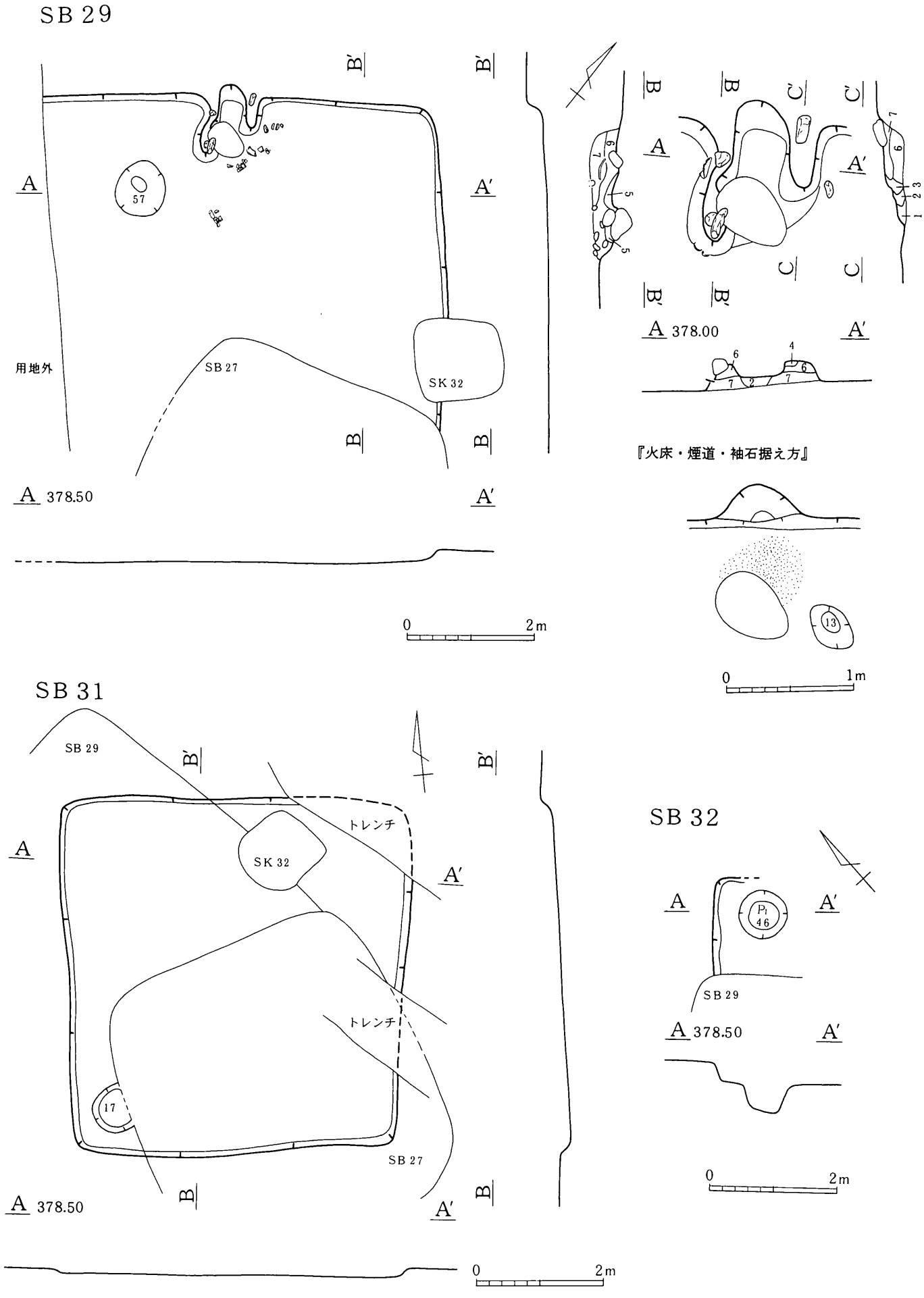
［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏・高坏・甕・小型甕・壷、須恵器－坏蓋　［時期］古墳時代中ないし後期の住居址と考えられる。　（馬場保之）

⑳ＳＢ32（挿図20、第８図２～７・第18図11）

［検出位置］ＡＹ03付近　［規模］－×－m、深さ58cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方ないし長方形を呈すると考えられる　［主軸］北西辺の方向N42°Ｅ　［重複］ＳＢ29を切り、ＳＢ31に切られる　［調査所見］試掘調査時に２トレンチで把握された。他住居址との重複の他、南西側は開田の際に削平を受け、北隅を把握したにとどまる。ＳＢ29との新旧関係は土師器甕がＳＢ29上部まで分布することによる。また平面検出時にＳＢ31との新旧関係が把握された　［壁］急な立ち上がりを示す　［床］上述の検出状況のため詳細は不明である。土師器甕下面が地山となっており、掘り方が床面とされた可能性が指摘される　［柱穴］主柱穴Ｐ１が把握されたのみで他は不明　［カマド］試掘２トレンチ内では確認されなかったことから、田地の削平を受けた北西辺に構築された可能性が指摘される　［付属施設］不明　［出土遺物］出土量はやや多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・同（内黒）・坏Ｄ２・高坏Ａ３・高坏・鉢Ｃ・甕Ａ・甕Ｆ・小型甕Ａ・小型甕Ｆ・甑Ａ１・壷Ｂ？・壷、砥石？（第18図11、硬砂岩）［時期］古墳時代後期前半に属すと考えられる。　（馬場保之）

㉑ＳＢ33（挿図21図、第８図８～11・第25図１）

［検出位置］ＢＢ00付近　［規模］－×－m、深さ44cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方ないし長方形を



挿図20　ＳＢ29、ＳＢ31、ＳＢ32

呈すると考えられる ［主軸］北辺の方向N107° E ［重複］ＳＩ55～ＳＩ57に切られる ［調査所見］南側の大部分が開田の際削平を受け、また一部調査区外にかかる ［壁］急な立ち上がりを示す ［床］硬い部分は把握できず。掘り方は平坦ではなく、かつ地山礫まで達していることから、掘り方を埋め戻し床面とした可能性が考えられる ［柱穴］重複して検出された小柱穴の中で本址の柱穴の可能性があるものがあるが、規模が小さいことから本址に伴わないと判断 ［カマド等］不明 ［付属施設］不明 ［出土遺物］出土量はやや多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２（内黒）・坏Ｆ２（内黒）・高坏Ｂ・高坏・同（内黒）・鉢・甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｆ・小型甕Ａ・甑・壷Ｂ・壷Ｄ、須恵器－坏蓋Ｈ・甕・短頸壷Ｂ ［時期］一部奈良時代の遺物が混入するが、古墳時代後期前半の住居址と考えられる。（馬場保之）

㉒ＳＢ37（挿図21、第９図１～６）

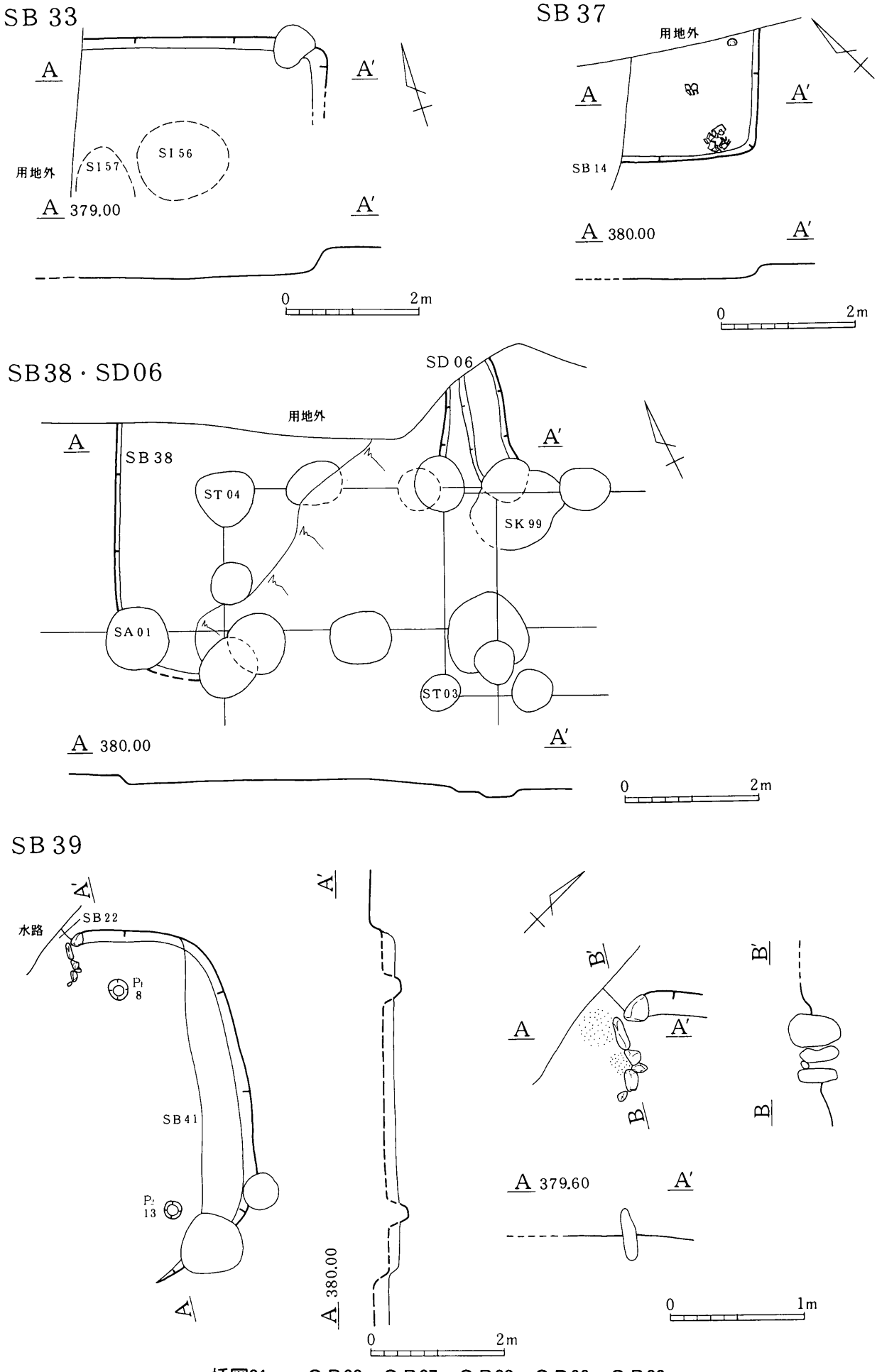
［検出位置］ＢＬ49付近 ［規模］－×－m、深さ16cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］方ないし長方形を呈すると考えられる ［主軸］南東辺の方向N42° E ［重複］ＳＢ14に切られる ［調査所見］調査区外にかかる。ＳＢ14との新旧関係は平面形検出時に把握され、調査区壁面で追認された。弥生時代の遺物がやや多く該期の住居址との重複が考えられるが、把握できなかった ［壁］床面まで浅いが緩やかな立ち上がりを示すと考えられる ［床］掘り方は砂質ローム中で止まる。硬い部分は確認されず、調査区壁面の観察結果から掘り方底面が床面と考えられる ［柱穴］不明 ［カマド等］不明 ［付属施設］不明 ［出土遺物］南隅から土師器甕、南東壁寄りから土師器坏が出土している。出土量は少ない。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・同（内黒）甕Ａ・甕Ｆ・小型甕Ａ・壷Ｂ、弥生土器－壷・甕・高坏 ［時期］古墳時代後期前半と考えられる。 （馬場保之）

㉓ＳＢ38（挿図21、第９図７～９）

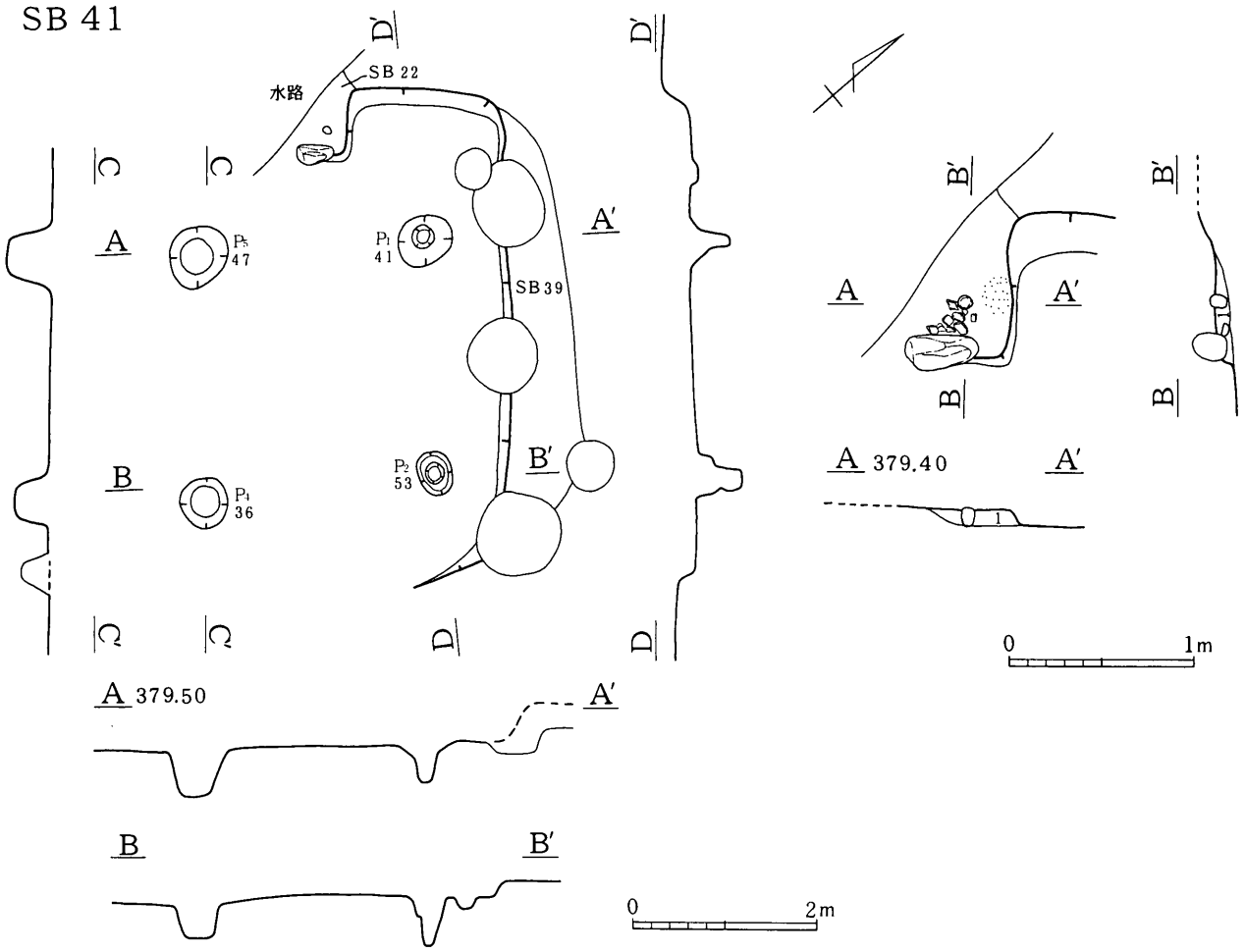
［検出位置］ＢＫ00付近 ［規模］－×－m、深さ12cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］方形を呈すると考えられる ［主軸］北西辺の方向N28° E ［重複］ＳＴ03・ＳＴ04・ＳＡ01と重複する ［調査所見］一部調査区外にかかり、南側は開田に際して削平を受けている。この削平部のため明確ではないが、ＳＤ06南東辺が本址南東辺にあたる可能性がある ［壁］検出面から床面まで浅く、立ち上がりの状態は不明である ［床］貼床される ［柱穴］南東側の主柱穴と思われる柱穴が把握された ［カマド等］不明 ［付属施設］不明 ［出土遺物］出土量は少なく、非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・坏・高坏Ａ２・高坏・甕Ｆ・小型甕Ａ・壷Ａ・壷Ｄ？、その他－縄文土器・弥生土器混入 ［時期］古墳時代中期前半と考えられる。 （馬場保之）

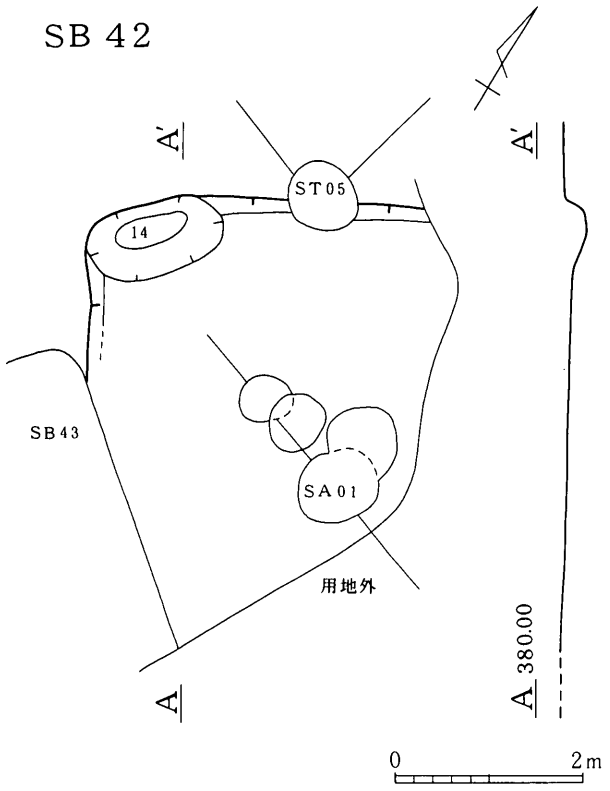
㉔ＳＢ39（挿図21、第９図10・第19図１）

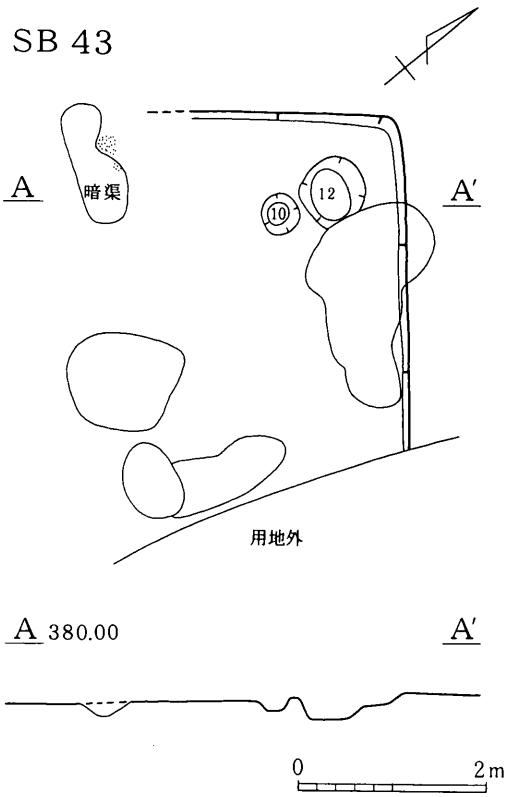
［検出位置］ＢＪ48付近 ［規模］5.2×－m、深さ33cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］隅丸方形を呈すると考えられる ［主軸］N58° W ［重複］ＳＢ41を切る ［調査所見］南西側約１／２が開田に際し削平されている。本址の底面でＳＢ41が把握された際、床面が把握できなかったことから、ＳＢ41が新しいと判断しＳＢ41の調査を先行実施した。しかし、カマド精査の結果、カマドがＳＢ41床面より浮いてＳＢ39床面と同じ高さに構築されていることから、新旧関係が逆であることが把握された ［壁］やや急な立ち上がりを示す ［床］床面は把握できなかったが、掘り方レベルとカマド火床レベルにレベル



挿図21　ＳＢ33、ＳＢ37、ＳＢ38・ＳＤ06、ＳＢ39







挿図22　ＳＢ41～ＳＢ43

差があり、掘り方まで掘削後埋め戻して床面としたと考えられる ［柱穴］主柱穴２本がＳＢ41床面精査時に把握された。他の２本は削平を受け把握できず ［カマド］左袖及び火床が北西辺ほぼ中央で検出された。袖石３対の石芯粘土カマドと考えられる ［付属施設］不明 ［出土遺物］出土量は僅少である。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１（内黒）・坏Ｆ（内黒）・坏（内黒）・高坏Ｂ４・高坏Ｂ・高坏（内黒）・甕Ａ・甕Ｆ・小型甕Ａ・壷、須恵器－高坏・甕、その他－縄文時代中期後葉土器・弥生時代甕混入、横刃型石器（第19図１、硬砂岩） ［時期］古墳時代後期前半と考えられる。 （馬場保之）

㉕ＳＢ41（挿図22、第９図11～14・第19図２）

［検出位置］ＢＩ47付近 ［規模］5.2×－m、深さ44cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］長方形を呈すると考えられる ［主軸］N51° W ［重複］ＳＢ39に切られる ［調査所見］ＳＢ39調査時に底面でプランが把握された。南西側２／３が開田に際して削平されている ［壁］やや急な立ち上がりを示す ［床］硬い明確な床面は把握できず。掘り方まで掘削後埋め戻して床面としたと考えられる ［柱穴］Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５の４本主柱 ［カマド］ＳＢ39カマドの下位から天井石と考えられる火を受けた礫が出土しており、この位置に構築されたと考えられるが、火床等は確認できず不明 ［付属施設］不明 ［出土遺物］ほぼ全体から出土したが、量は少ない。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１（内黒）・坏Ｆ４（内黒）・坏・高坏Ａ４・高坏（内黒）・甕Ａ？・甕Ｆ・小型甕Ａ・壷Ｂ、須恵器－甕、その他－縄文時代早期後葉土器混入、剥片石器（第19図２、硬砂岩）。また、Ｐ１より非ロクロ系土師器－坏・同（内黒）・高坏（内黒）・甕、Ｐ４より非ロクロ系土師器－坏Ｄ出土 ［時期］古墳時代後期前半と考えられる。 （馬場保之）

㉖ＳＢ42（挿図22）

［検出位置］ＢＭ44付近 ［規模］－×－m、深さ４cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］不明 ［主軸］北辺の方向N60° E ［重複］ＳＢ43と重複するが、新旧は判断できなかった ［調査所見］耕作の削平により、掘り方の一部しか確認できなかった。検出時に既に貼床中に達していると思われる。貼床の下部、中央付近に黒褐色土が分布 ［壁］不明 ［床］貼床（黄褐色土）される ［柱穴］不明 ［カマド等］不明 ［付属施設］なし。 （伊藤尚志）

［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－甕・小型甕・壷Ｄ ［時期］古墳時代中ないし後期の住居址と考えられる。 （馬場保之）

㉗ＳＢ43（挿図22、第９図15・16、第25図２）

［検出位置］ＢＫ43付近 ［規模］－×－m、深さ８cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］方ないし長方形を呈すると考えられる ［主軸］北東辺の方向N62° W ［重複］ＳＢ42・ＳＢ44を切り、ＳＢ50と重複する ［調査所見］開田に際して削平され、遺存状態は不良である。暗渠排水により壊される。検出面は貼床中にあたる。ＳＢ42との新旧関係は平面検出、また、ＳＢ44との新旧関係は出土遺物による ［壁］検出状況から立ち上がりの状態は不明である ［床］貼床（黄土混黒褐色土）されるが、硬い部分なし ［柱穴］北隅寄りに主柱穴とおぼしき柱穴が把握された ［カマド等］暗渠脇にカマドに伴うと考えられる焼土あり ［付属施設］不明 ［出土遺物］鉄製品出土。出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏・高坏・甕Ｆ・壷Ｄ３ ［時期］古墳時代中期後半の住居址と考えられる。 （馬場保之）

㉘ＳＢ45（挿図23、第９図17）

［検出位置］ＢＭ40付近　［規模］－×4.6m、深さ18cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］北東辺の方向Ｎ45°Ｅ　［重複］ＳＢ44・ＳＢ46と重複するが新旧は不明　［調査所見］住居址の掘り方の一部を確認。住居址の南西側は耕作の削平により確認できなかった　［壁］確認できた範囲ではほぼ垂直　［床］不明　［柱穴］掘り込みは浅いが、２基確認。ほぼ垂直に掘り込まれていた　［カマド等］不明　［付属施設］なし。　（伊藤尚志）

［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・坏Ｄ（内黒）・高坏・同（内黒）・甕・小型甕Ｆ・台付甕、その他－縄文土器混入　［時期］古墳時代中期の住居址と考えられる。（馬場保之）

㉙ＳＢ46（挿図23、第10図１・２）

［検出位置］ＢＮ41付近　［規模］3.7×－m、深さ７cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］不明　［重複］ＳＢ45・ＳＢ47と重複するが、新旧は不明　［調査所見］耕作の削平により、床面の一部のみを確認　［壁］不明　［床］確認できた部分は、暗褐色シルト質埴土。あまり堅固ではなかった　［柱穴］１基確認。比較的大型で、掘り込みも深い。ほぼ垂直に掘り込まれていた　［カマド等］不明　［付属施設］なし。　（伊藤尚志）

［出土遺物］出土量僅少で、非ロクロ系土師器－高坏・鉢Ｄ・甕・小型甕Ａ・壷Ａがある。また、Ｐ２より非ロクロ系土師器－坏Ｄ２・高坏・甕・小型甕Ｆおよび弥生土器壷、Ｐ３より非ロクロ系土師器－高坏・鉢Ｄ・甕Ｆが出土　［時期］古墳時代中期後半と考えられる。　（馬場保之）

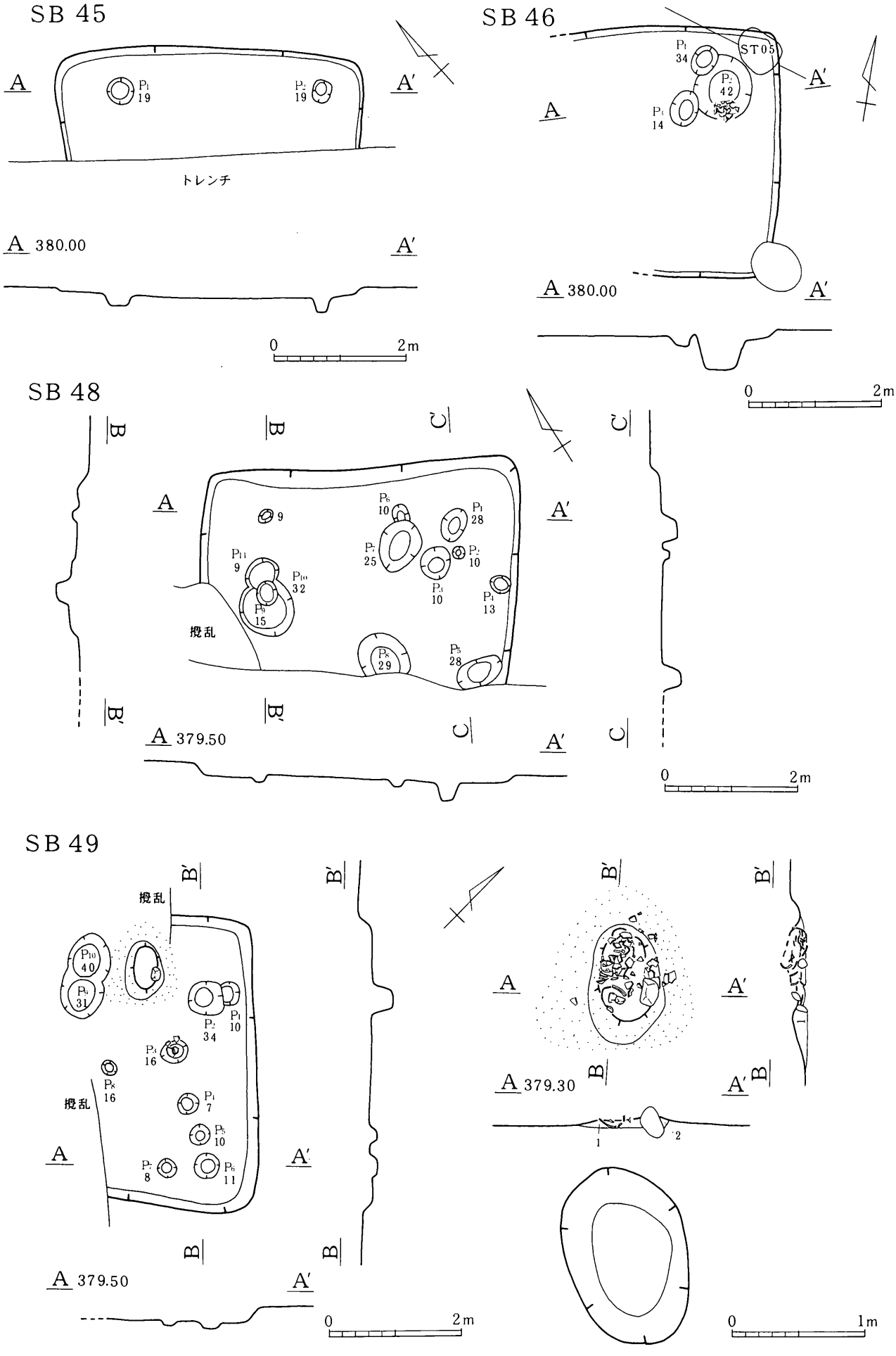
㉚ＳＢ48（挿図23、第10図３～８・第19図３）

［検出位置］ＢＨ42付近　［規模］－×4.8m、深さ21cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方形　［主軸］北東辺の方向Ｎ33°Ｅ　［重複］ＳＢ50を切る　［調査所見］住居の南側４分の１程を久米川の浸食により失う　［壁］緩やか　［床］黒褐色シルト質埴土。軟弱なため確認が難しく、掘り方まで掘り下げて実測　［柱穴］主柱穴２本を確認。ほぼ垂直に掘り込まれている　［カマド等］不明　［付属施設］住居に付属するかは不明だが、ピットを10基確認した。　（羽生俊郎）

［出土遺物］出土量少ない。非ロクロ系土師器－坏Ｄ・坏Ｅ（内黒）・甕Ａ・甕Ｆ・小型甕Ａ・壷、須恵器－坏Ｂ？・坏蓋Ｂ・甕・壷、その他－弥生時代後期後半甕・陶器鉢？混入、打製石庖丁（第19図３、硬砂岩）。Ｐ５より非ロクロ系土師器－甑？、Ｐ７より非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・高坏・鉢Ｄ（内黒）・甕Ａ、Ｐ８より非ロクロ系土師器－甕Ａ・甑？、Ｐ10より非ロクロ系土師器－小型甕Ａが出土。Ｐ７の非ロクロ系土師器鉢Ｄ（内黒）はＳＢ50に同一個体があり、上述の新旧関係が裏づけられる　［時期］古墳時代後期の住居址と考えられる。　（馬場保之）

㉛ＳＢ49（挿図23、第10図９～第11図４）

［検出位置］ＢＫ38付近　［規模］－×4.4m、深さ25cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方形　［主軸］Ｎ42°Ｗ　［重複］なし　［調査所見］埋土と地山の区分が難しく、住居の壁は明確に判断できなかった。西側約半分を撹乱および久米川の侵食により失う　［壁］緩やか　［床］灰黄褐色シルト質埴土。住居址のほぼ中央で堅固な部分が認められた　［柱穴］主柱穴２本を確認。掘り込みはあまり深くなく、なだ



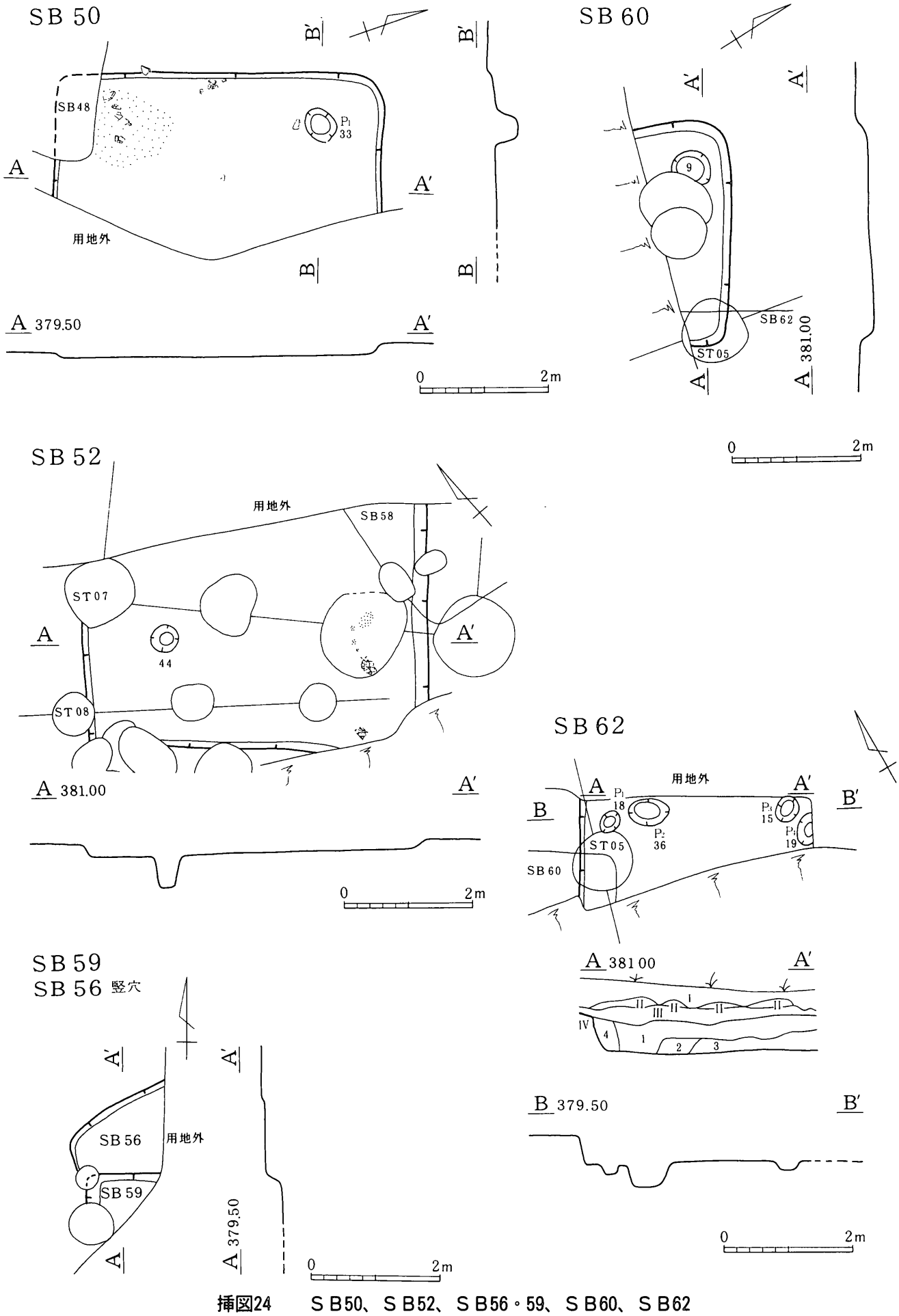
挿図23　ＳＢ45、ＳＢ46、ＳＢ48、ＳＢ49

らかである ［カマド］カマド本体は遺存状態が悪く、住居廃棄時に破壊されたと思われ、形態は不明である。火床の一部および支脚と考えられる石を確認した ［付属施設］ピットを８基確認したが、本住居址に付属するかは不明である。 （羽生俊郎）
［出土遺物］カマドかと思われる部分に土師器甕があり、この周辺からの出土が多い。他に住居址中央から土師器甕、南東隅から台石が出土。出土量はやや多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１（内黒）・坏Ｄ２・同（内黒）・高坏Ａ４（内黒）・高坏・鉢Ｃ・甕Ａ・甕Ｆ・甕Ｇ・小型甕Ａ・小型甕Ｆ・甑Ａ１・壷Ｂ？・壷。他にＰ２より非ロクロ系土師器－甕？、Ｐ３より非ロクロ系土師器－坏Ｄ（内黒）・甕Ｆ、Ｐ９より非ロクロ系土師器－壷Ｄ出土 ［時期］古墳時代後期前半の住居址と考えられる。（馬場保之）

㉜ＳＢ50（挿図24、第11図５～９）
［検出位置］ＢＩ43付近 ［規模］－×5.0m、深さ12cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］方形 ［主軸］Ｎ72° Ｗ ［重複］ＳＢ56・ＳＢ59を切り、ＳＢ48に切られる。ＳＡ02との切りあいは不明 ［調査所見］耕作の削平により床が浅く、埋土と地山との区別が困難であり、加えて他の遺構と重複があったため、かろうじて床面と思われる部分を確認した。東側半分を水路により失う ［壁］ゆるやかに立ち上がる ［床］暗褐色シルト質埴土。一部堅固な部分が認められた ［柱穴］１本を確認 ［カマド］カマドと思われる焼土及び土器の分布を確認したが、本住居址に付随するかは不明 ［付属施設］なし。 （羽生俊郎）
［出土遺物］出土量少ない。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・同（内黒）・坏Ｄ・同（内黒）・高坏Ａ５・高坏Ａ（内黒）・鉢Ｂ・鉢Ｃ・鉢Ｄ（内黒）・鉢・甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｆ・甕・小型甕Ａ・壷Ａ、須恵器－坏蓋Ａ・坏蓋Ｈ、磨石（第19図４、硬砂岩） ［時期］一部７世紀代の遺物が混入するが、古墳時代後期前半に属すと考えられる ［備考］磨石（第19図４）は縄文時代早期押型文土器に伴うと思われる。
（馬場保之）

㉝ＳＢ52（挿図24、第11図10・11、第19図５）
［検出位置］ＢＳ37付近 ［規模］－×5.3m、深さ17cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］不明 ［主軸］南東辺の方向Ｎ41° Ｅ ［重複］ＳＢ58を切り、ＳＩ51・ＳＩ59に切られる。ＳＢ58との新旧関係は調査区際の断面での確認による ［調査所見］地山と埋土が非常に似ており、住居址の壁は明確に判断できなかった ［壁］ゆるやかに立ち上がる ［床］暗褐色シルト質埴土。不明確で軟弱 ［柱穴］１基確認。ほぼ垂直に掘り込む ［カマド等］不明 ［付属施設］なし。 （伊藤尚志）
［出土遺物］出土量少ない。非ロクロ系土師器－高坏・甕Ｂ・甕Ｆ・台付甕・壷Ｂ・ミニチュア土器、須恵器－高坏、その他－弥生土器壷・甕・高坏混入、打製石斧（第19図５、硬砂岩） ［時期］古墳時代中期の住居址と考えられる。 （馬場保之）

㉞ＳＢ59（挿図24）
［検出位置］ＢＨ44付近 ［規模］－×－m、深さ26cm ［床面積］ － ㎡ ［形態］方ないし長方形を呈すると考えられる ［主軸］北辺の方向Ｎ90° Ｗ ［重複］ＳＢ50に切られる。ＳＢ56と重複するが新旧は不明 ［調査所見］ＳＢ56同様ＳＢ50を掘り下げた時点で確認し、やはりコーナーの一部を確認したのみである ［壁］確認できた範囲ではやや緩やか ［床］不明 ［柱穴］不明 ［カマド等］不明



挿図24　ＳＢ50、ＳＢ52、ＳＢ56・59、ＳＢ60、ＳＢ62

［付属施設］不明。　（羽生俊郎）
［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ？・甕Ｆ？・小型甕Ａ　［時期］古墳時代中ないし後期と考えられる。　（馬場保之）

㉟ＳＢ60（挿図24、第12図１）
［検出位置］ＢＱ39付近　［規模］3.4×－m、深さ22cm　［床面積］　－　㎡　［形態］方形　［主軸］北東辺の方向Ｎ60°Ｗ　［重複］ＳＢ62・ＳＴ05と重複するが新旧は不明　［調査所見］ＳＢ62・ＳＴ05の埋土とよく似る。南側半分以上を耕作の削平により失う　［壁］確認できた範囲では緩やか　［床］暗褐色シルト質埴土。強固な部分は認められなかった　［柱穴］緩やかな浅い掘り込みのものを、１基確認。他の遺構に切られている　［カマド等］不明　［付属施設］なし。　（羽生俊郎）
［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ２・坏Ｄ・高坏・甕Ａ・小型甕、須恵器－甕、その他－弥生土器壷・陶器甕混入　［時期］古墳時代後期前半と考えられる。　（馬場保之）

㊱ＳＢ62（挿図24、第12図２）
［検出位置］ＢＱ40付近　［規模］－×－m、深さ46cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］北西辺Ｎ32°Ｅ　［重複］ＳＢ60・ＳＴ05と重複するが、新旧は不明　［調査所見］開田の際の削平・他の遺構との重複・調査区外に掛かっているため、住居址全体を検出するには至らなかった。他の遺構に切られている、あるいは新旧不明なため、壁をごくわずかに確認したのみである　［壁］確認した範囲ではほぼ垂直　［床］黒褐色シルト質埴土。軟弱で不明確　［柱穴］４基確認。ただし主柱穴かは判断できなかった　［カマド等］不明　［付属施設］なし。　（羽生俊郎）
［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・坏Ｄ（内黒）・坏Ｆ・高坏Ａ３・高坏Ａ・高坏・甕Ｆ・甕・小型甕Ａ・小型甕Ｆ・台付甕、須恵器－坏・坏蓋・高坏・甕、その他－弥生土器甕混入。Ｐ３から非ロクロ系土師器－甕Ａ出土　［時期］古墳時代中期後半の住居址と考えられる。
（馬場保之）

3)時期不明

①ＳＢ19（挿図15）
［検出位置］ＢＭ47付近　［規模］－×－m、深さ22cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］東辺の方向Ｎ25°Ｅ　［重複］ＳＢ14を切る　［調査所見］調査区際で確認され、大部分が調査区外にかかる。ＳＢ14床面で把握したが、ＳＢ14柱穴を切っており、調査区壁面でもこの新旧関係が確認された。なお、西側調査区ＳＢ42付近では開田による削平がＳＢ19床面より上位レベルで止まっているが、ＳＢ19北西辺は把握できず、調査区外にあると考えられる　［壁］調査区壁面で把握された立ち上がりはほぼ直である　［床］硬い部分は検出されず、調査区壁面でも貼床等の痕跡は確認できず　［柱穴］不明　［カマド等］不明　［付属施設］不明　［出土遺物］上記の調査状況のために出土遺物はほとんどない　［時期］時期不明である。　（馬場保之）

②ＳＢ56（挿図24）

［検出位置］ＢＩ44付近　［規模］－×－m、深さ８cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］　－　［重複］ＳＢ50に切られる。ＳＢ59と重複するが、新旧は判断できなかった　［調査所見］ＳＢ50を掘り下げた時点で確認した。ＳＢ50・ＳＢ59と埋土が似る。大半を水路により失っているためコーナーの一部を調査したのみである　［壁］ごくわずかを確認したのみであるが、緩やかである　［床］不明　［柱穴］不明　［カマド等］不明　［付属施設］なし。　（羽生俊郎）

［出土遺物］なし　［時期］不明。　（馬場保之）

(2) 竪穴

①ＳＢ09（挿図25）

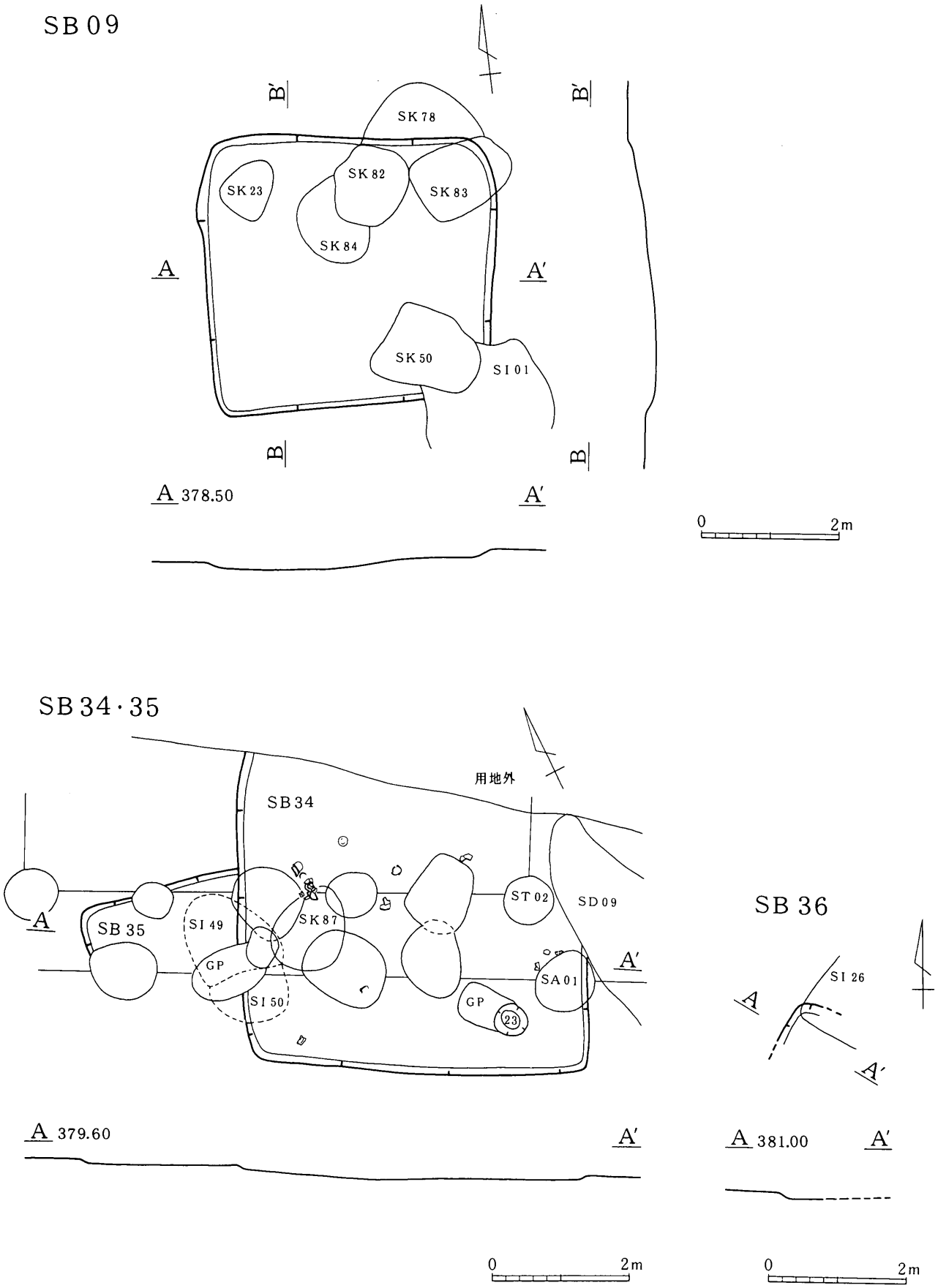
［検出位置］ＡＵ10付近　［規模］4.2×3.8m、深さ20cm　［底面積］14.37㎡　［形態］不整方形　［主軸］Ｎ６°Ｅ　［重複］ＳＩ01に切られ、ＳＫ23・ＳＫ50・ＳＫ78・ＳＫ82～ＳＫ84と重複する　［調査所見］埋土が周囲と若干異なり、ＳＢと把握した。自然埋没と考えられる。混入の近世遺物は土葬墓の副葬品と考えられる　［壁］緩やかに立ち上がる　［底面］平坦でなく、硬い部分はない　［柱穴］なし　［付属施設等］なし　［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏・高坏・甕、その他－弥生時代甕・陶器薄手酒坏（近世）・磁器仏飯器？（染付／近世）混入　［時期］古墳時代中ないし後期と考えられる。　（馬場保之）

②ＳＢ34（挿図25、第12図３～17、第19図６・７）

［検出位置］ＢＧ05付近　［規模］－×5.0m、深さ７cm　［底面積］　－　㎡　［形態］不整方ないし長方形　［主軸］Ｎ25°Ｅ　［重複］ＳＤ09・ＳＫ87・ＳＩ49・ＳＩ50に切られ、ＳＢ35を切る。ＳＴ02・ＳＡ01と重複するが新旧関係は不明　［調査所見］ＳＫ87の検出位置や多量の焼土を含まれる状況から、ＳＫ87が本址カマドである可能性も想定した。しかし、床面よりも焼土が浮いていること、焼土中に多量の焼骨が含まれることから、本址と別遺構と判断した。また、平面形からは住居址の可能性が考えられるが、南東辺が明確に把握されたのに対して、他の辺は不明瞭であったことから、一応竪穴として扱った　［壁］検出面から浅いため立ち上がりの状態は不明　［底面］硬い部分なし　［柱穴］不明　［付属施設等］不明　［出土遺物］西壁中央やや中央寄り・ＳＫ87付近に遺物が集中。出土量はやや多く、その中で土師器甑の個体数が多い。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・坏Ｄ２・同（内黒）・坏Ｄ・坏Ｆ２（内黒）・坏Ｆ（内黒）・高坏Ａ４・高坏Ａ・高坏Ｂ・鉢Ｄ・甕Ｂ・甕Ｆ・小型甕Ａ・小型甕Ｆ・甑Ａ２・甑Ｆ・甑・壷Ａ・壷Ｂ・壷、須恵器－坏Ｈ？・坏蓋Ｈ・高坏・短頸壷Ｂ？・短頸壷Ｃ・壷、その他－弥生時代後期甕、台石（第19図６，花崗岩）・敲打器（同７、硬砂岩）　［時期］古墳時代後期前半と考えられる。　（馬場保之）

③ＳＢ35（挿図25、第13図１～３）

［検出位置］ＢＨ03付近　［規模］－×－m、深さ９cm　［底面積］　－　㎡　［形態］方ないし長方形を呈すると考えられる　［主軸］西辺の方向Ｎ11°Ｅ　［重複］ＳＢ34・ＳＩ49に切られ、ＳＢ36を切る。



挿図25　ＳＢ09、ＳＢ34・35、ＳＢ36

ＳＴ02・ＳＡ01と重複する ［調査所見］不明瞭であるが方形の落ち込みの一部が把握されたため、竪穴とした ［壁］検出面から浅いため、立ち上がりの状態は不明である ［底面］硬い部分なし ［柱穴］不明 ［付属施設等］不明 ［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・同（内黒）・高坏・甕・小型甕Ａ・小型甕Ｂ？、須恵器－坏蓋Ｈ ［時期］古墳時代中ないし後期と考えられる。 （馬場保之）

④ＳＢ36（挿図25）

［検出位置］ＢＩ03付近 ［規模］－×－m、深さ８cm ［底面積］ － ㎡ ［形態］方ないし長方形を呈すると考えられる ［主軸］北西辺の方向N32° Ｅ ［重複］ＳＢ35・ＳＩ26に切られる ［調査所見］ＳＢ35とともに不明瞭ながらも方形の落ち込みの一部が把握されたため、竪穴とした ［壁］立ち上がりの状態は不明である ［底面］硬い部分なし ［柱穴］なし ［付属施設等］不明 ［出土遺物］なし ［時期］時期不明である。 （馬場保之）

⑤ＳＢ40（挿図17）

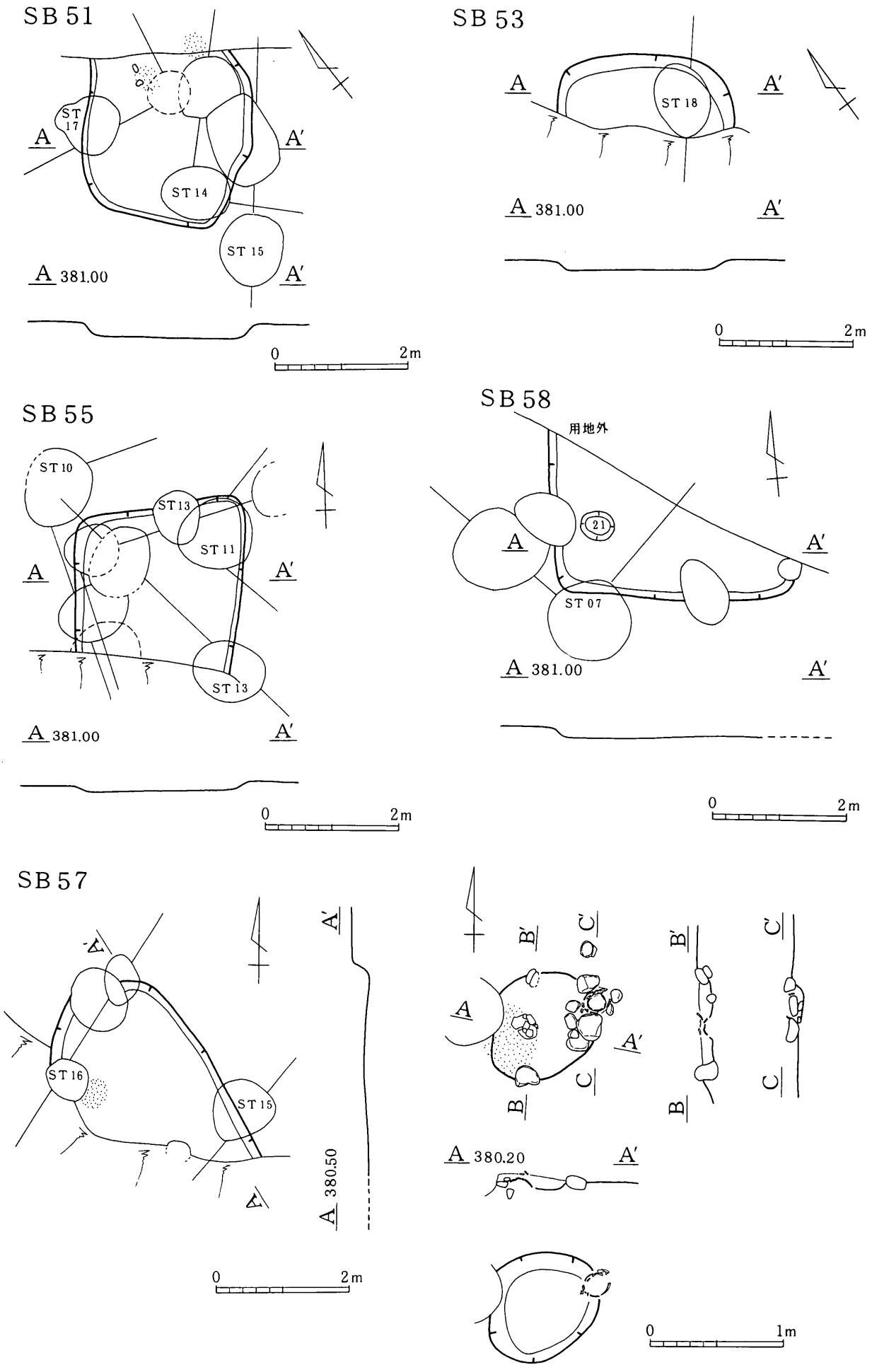
［検出位置］ＢＨ00付近 ［規模］－×－m、深さ13cm ［底面積］ － ㎡ ［形態］方ないし長方形を呈する ［主軸］北辺の方向N62° Ｗ ［重複］ＳＢ21に切られる ［調査所見］ＳＢ21とともに検出され、北辺が揃うことから同一遺構である可能性も想定したが、埋土の差で新旧関係が把握された。また、底面がレベル差を持つことから、最終的に別遺構と判断 ［壁］検出面から浅く、立ち上がりの状態は不明である ［底面］平坦であるが、硬い部分はない ［柱穴］なし ［付属施設等］なし ［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏・高坏Ａ・甕Ｆ ［時期］古墳時代中期と考えられる。 （馬場保之）

⑥ＳＢ51（挿図26）

［検出位置］ＢＷ29付近 ［規模］－×2.5m、深さ18cm ［底面積］ － ㎡ ［形態］不整長方形 ［主軸］N41° Ｅ ［重複］ＳＫ101に切られ、ＳＴ14～ＳＴ17と重複する ［調査所見］平面で焼土が把握され、地山が底面の一部で検出され、掘り下げを停止した ［壁］急な立ち上がりを示す ［底面］硬い部分等なし ［柱穴］検出できず ［付属施設等］埋土中に焼土が多く含まれており、カマドの残骸の可能性とも考えられる。しかし袖石等なし ［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｆ（内黒）・高坏・甕、その他－弥生時代後期前半～後半壷・甕混入 ［時期］詳細時期は不明であるが、古墳時代後期の遺構と考えられる。 （馬場保之）

⑦ＳＢ53（挿図26）

［検出位置］ＢＷ27付近 ［規模］2.6×－m、深さ12cm ［底面積］ － ㎡ ［形態］隅丸方形を呈すると考えられる ［主軸］不明 ［重複］ＳＴ18と重複する ［調査所見］南側は開田の際の削平を受け、遺存せず。周辺柱穴と本址プランの外側が一致しており、複数の柱穴を一つの遺構と把握した可能性がある ［壁］緩やかな立ち上がりを示す ［底面］硬い部分等は確認できず ［柱穴］不明 ［付属施設等］不明 ［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏・甕・壷Ｄ ［時期］古墳時代中期と考えられる。 （馬場保之）



挿図26　ＳＢ51、ＳＢ53、ＳＢ55、ＳＢ57、ＳＢ58

⑧ＳＢ55（挿図26）

［検出位置］ＢＴ32付近　［規模］－×1.7m、深さ10cm　［底面積］　－　㎡　［形態］不整長方形を呈すると考えられる　［主軸］Ｎ９°Ｅ　［重複］ＳＴ12に切られ、ＳＴ10・ＳＴ11・ＳＴ13と重複する　［調査所見］床面と考えられる高さで焼土・柱穴が把握されたため、掘り下げを停止した　［壁］検出面から底面まで浅いが、ほぼ垂直に立ち上がると考えられる　［底面］硬い部分は把握されず　［柱穴］不明　［付属施設等］　［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－高坏、須恵器－坏蓋Ｈ　［時期］古墳時代中ないし後期の遺構と考えられる。　（馬場保之）

⑨ＳＢ57（挿図26、第13図４～６）

［検出位置］ＢＴ28付近　［規模］－×－m、深さ27cm　［底面積］　－　㎡　［形態］不整形　［主軸］東辺の方向N32°Ｗ　［重複］ＳＴ15と重複する　［調査所見］南側は開田に際して削平される。北西壁際底面で、柱穴に切られて焼土が検出された。焼土東側に20～40cm大の礫が密集する　［壁］やや急に立ち上がる　［底面］硬い部分はない　［柱穴］不明　［付属施設等］不明　［出土遺物］焼土部分およびその東側礫間から比較的遺存良好な土師器が出土。出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ２・高坏Ａ２・高坏・鉢Ｄ・甕Ｇ・台付甕・小型甕Ｆ　［時期］古墳時代中期後半と考えられる。　（馬場保之）

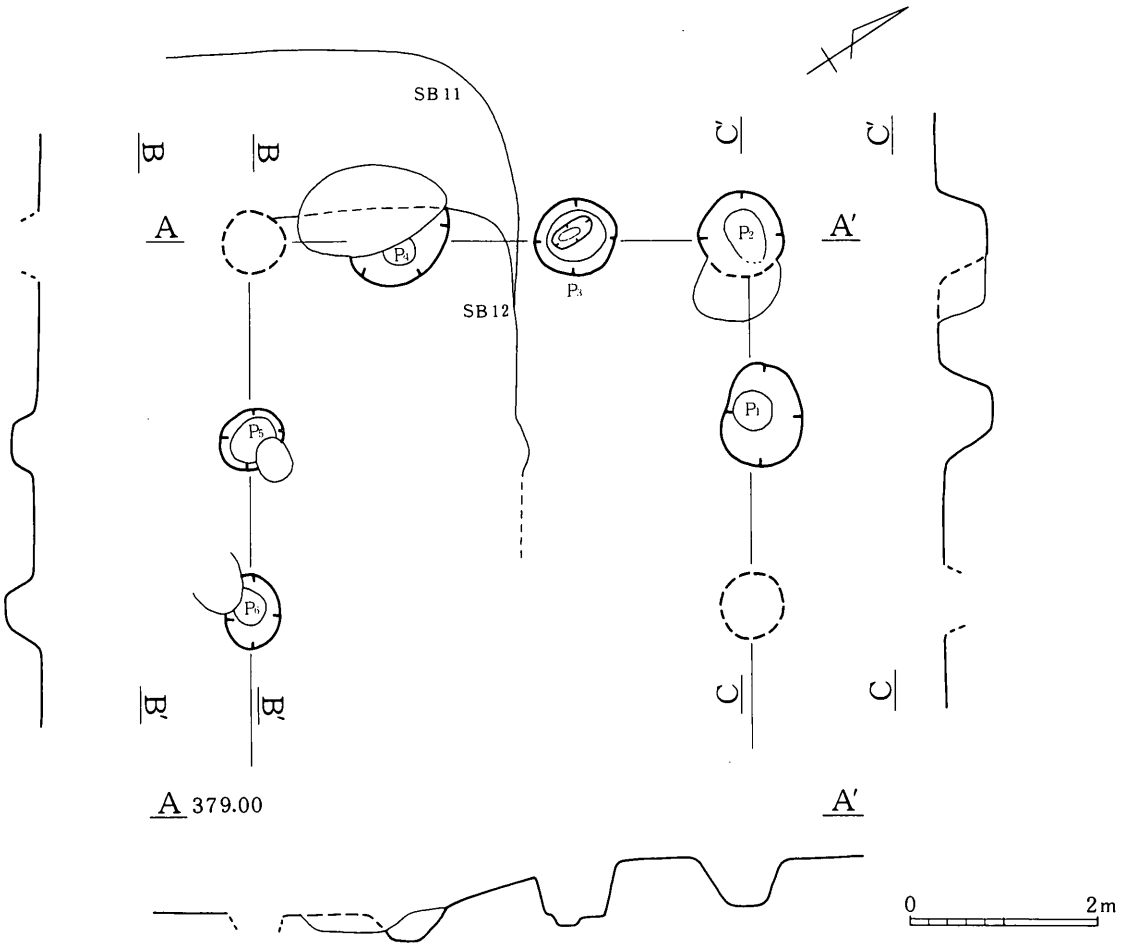
⑩ＳＢ58（挿図26、第13図７～10）

［検出位置］ＢＲ38付近　［規模］－×－m、深さ18cm　［底面積］　－　㎡　［形態］方ないし長方形を呈すると考えられる　［主軸］Ｎ６°Ｅ　［重複］ＳＢ52に切られ、ＳＴ07と重複する　［調査所見］大半が調査区外にかかる。住居址と異なり埋土中に地山起源と考えられる礫が多量に入る　［壁］やや急な立ち上がりを示す　［底面］ほぼ平坦であるが、硬い部分はない　［柱穴］南西隅寄りに本址に伴うと考えられる柱穴１基が把握された　［付属施設等］不明　［出土遺物］出土量僅少。非ロクロ系土師器－坏Ｄ１・同（内黒）・高坏・甕Ｆ・小型甕Ｆ？、須恵器－坏Ｂ、その他－弥生時代後期甕　［時期］一部奈良時代の遺物が混じるものの、遺物の主体は古墳時代中ないし後期である。ＳＢ52との新旧関係から古墳時代中期に属すと考えられる。　（馬場保之）

（3）掘立柱建物址

①ＳＴ01（挿図27）

［検出位置］ＡＹ10付近　［形態］３間以上×３間の側柱建物址　［主軸方向］Ｎ34°Ｅ　［規模］（5.2）m×－m　［柱間間隔］（桁）1.8＋1.7＋(1.7)m×（梁）1.9＋1.9＋…m　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＢ10・11を切る　［柱穴］径58～110cm、深さ26～70cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏・高坏・鉢？・甕Ｆ・甕Ｇ・甕・小型甕　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。



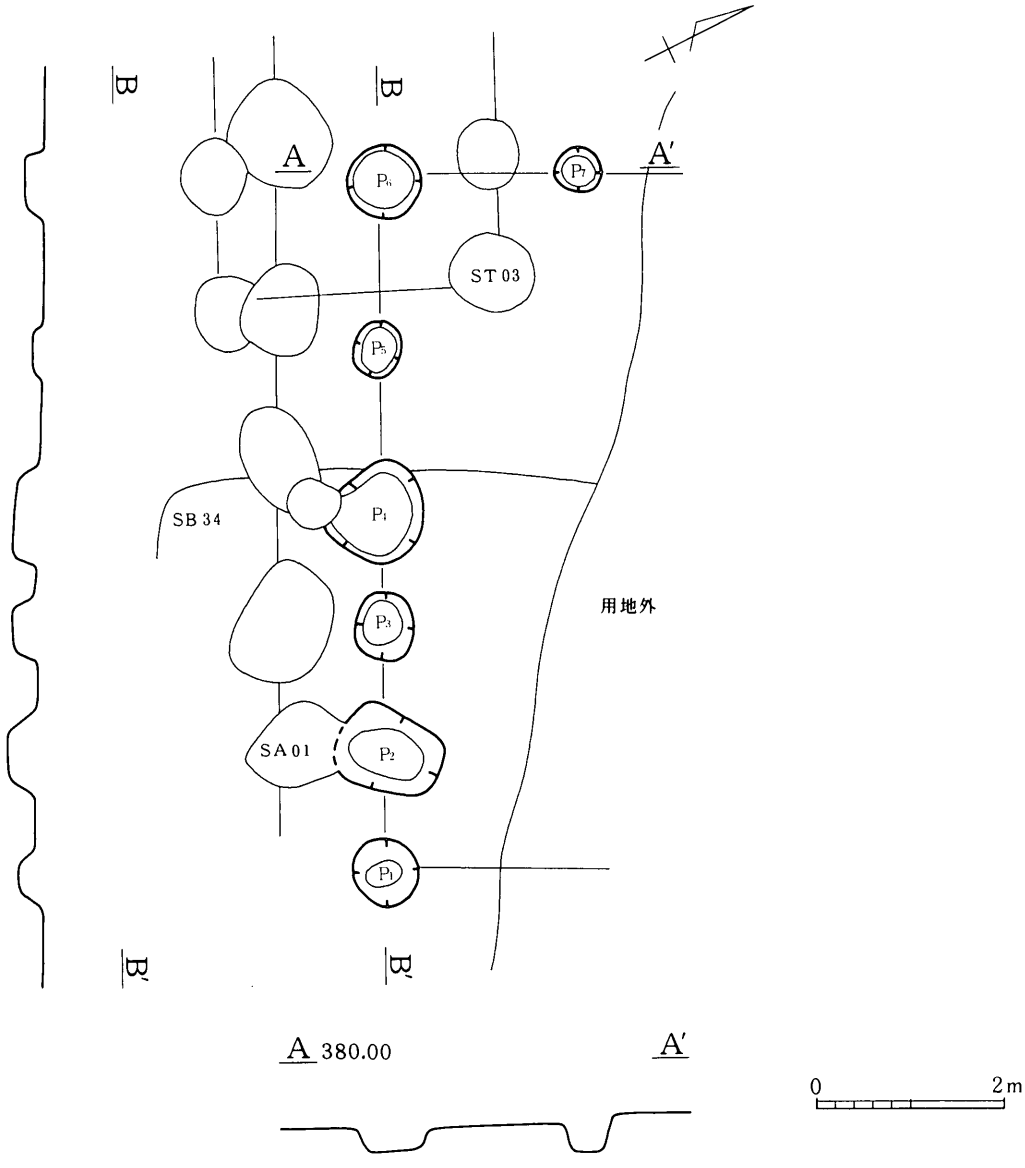
挿図27　ＳＴ01

②ＳＴ02（挿図28）

［検出位置］ＢＩ03付近　［形態］５間×２間以上の側柱建物址　［主軸方向］N64°Ｗ　［規模］7.2ｍ×－ｍ　［柱間間隔］（桁）1.8＋1.7＋1.2＋1.3＋1.2ｍ×（梁）2.1＋…ｍ　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＢ34、ＳＴ03と重複する　［検出状況］調査区外にかかると考えられる。ＳＡ01と近接、並行しており、密接な関係を有すると考えられる　［柱穴］径48～110㎝、深さ12～38㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・同（内黒）・高坏Ａ・高坏・甕Ｆ・甕・小型甕Ａ・小型甕・台付甕・甑Ａ？・甑・壷？、須恵器－高坏？・甕・壷？　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期不明である。

③ＳＴ03（挿図29）

［検出位置］ＢＩ02付近　［形態］３間×１間の側柱建物址　［主軸方向］N66°Ｗ　［規模］3.6ｍ×3.0ｍ　［柱間間隔］桁1.2＋1.2＋1.2ｍ×梁3.0ｍ　［床面積］10.8㎡　［重複関係］ＳＩ26に切られる。ＳＴ02・ＳＴ04・ＳＡ01と重複する　［検出状況］Ｐ４は焼土を含む。ＳＴ02・ＳＡ01と同方向をとることから近接した時期である可能性が考えられる　［柱穴］径58～90㎝、深さ10～40㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・坏・高坏・甕Ｆ・甕・小型甕Ａ・甑　［時期］古墳時代中期以降に位置



挿図28　ＳＴ02

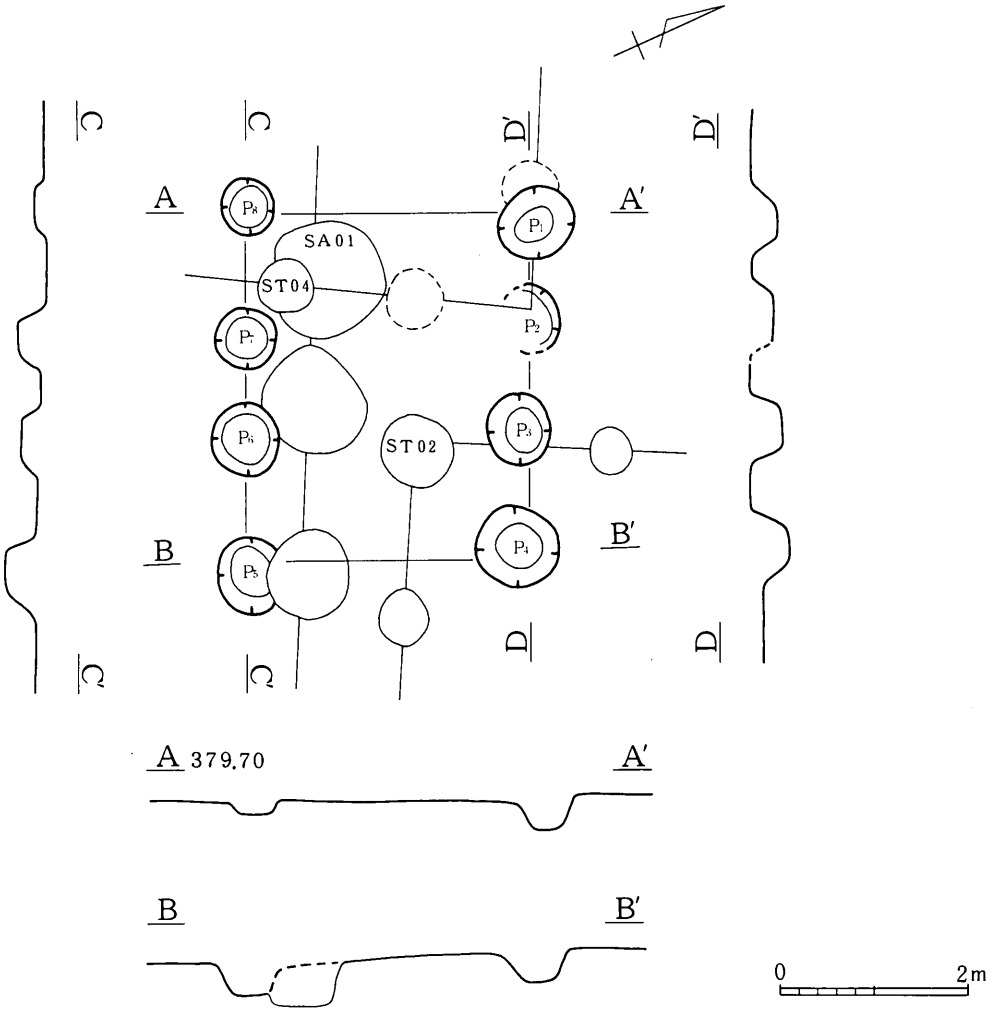
づくが詳細時期不明である。

④ＳＴ04（挿図30）

［検出位置］ＢＩ01付近　［形態］４間×３間の側柱建物址　［主軸方向］N27°Ｅ　［規模］5.2m×4.0m　［柱間間隔］桁1.3＋1.3＋1.3＋1.3m×梁1.4＋1.3＋1.3m　［床面積］20.7㎡　［重複関係］ＳＢ21・ＳＢ40・ＳＴ03と重複する　［検出状況］Ｐ７・Ｐ８は炭を含む。周辺の他の建物址と桁方向がほぼ90°振る　［柱穴］径62～110cm、深さ30～50cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ（内黒）・坏・同（内黒）？・高坏・鉢Ｄ・甕Ｆ・甕・小型甕Ａ・小型甕、須恵器－？、陶器－大鉢　［時期］古墳時代中期以降と考えられる。

⑤ＳＴ05（挿図31）

［検出位置］ＢＯ41付近　［形態］４間×２間以上の側柱建物址　［主軸方向］N73°Ｗ　［規模］8.4



挿図29　ＳＴ03

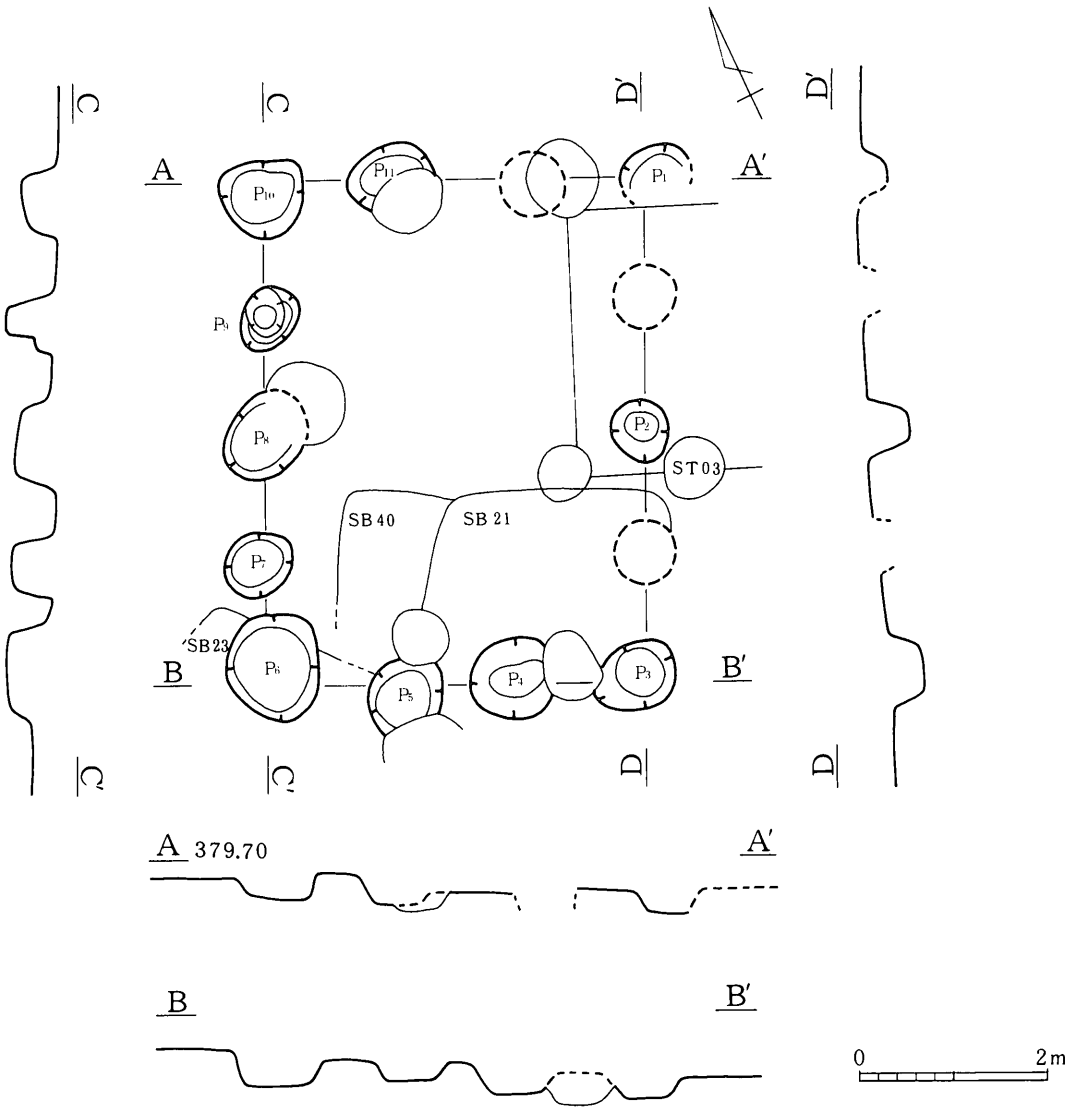
ｍ×－ｍ　［柱間間隔］（桁）2.3＋2.3＋2.0＋1.8ｍ×（梁）3.0＋…ｍ　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＢ42・ＳＢ46と重複する　［検出状況］調査区外にかかる　［柱穴］径70～100㎝、深さ24～50㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ２・坏Ｄ・甕・壷Ａ？　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。

⑥ＳＴ06（挿図32）

［検出位置］ＢＭ36付近　［形態］３間×２間以上の側柱建物址　［主軸方向］Ｎ28°Ｗ　［規模］4.4ｍ×－ｍ　［柱間間隔］（桁）（1.5）＋（1.6）＋1.3ｍ×（梁）1.5＋…ｍ　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＤ10と重複する　［柱穴］径34～50㎝、深さ14～40㎝で他より規模が小さい　［出土遺物］なし　［時期］不明である。他の掘立柱建物址とは柱穴の規模・柱間が小さいことから別時期と考えられる。

⑦ＳＴ07（挿図32）

［検出位置］ＢＲ37付近　［形態］３間×１間以上の側柱建物址　［主軸方向］Ｎ41°Ｗ　［規模］5.8ｍ×－ｍ　［柱間間隔］（桁）2.0＋1.9＋1.9ｍ×（梁）－ｍ　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＩ

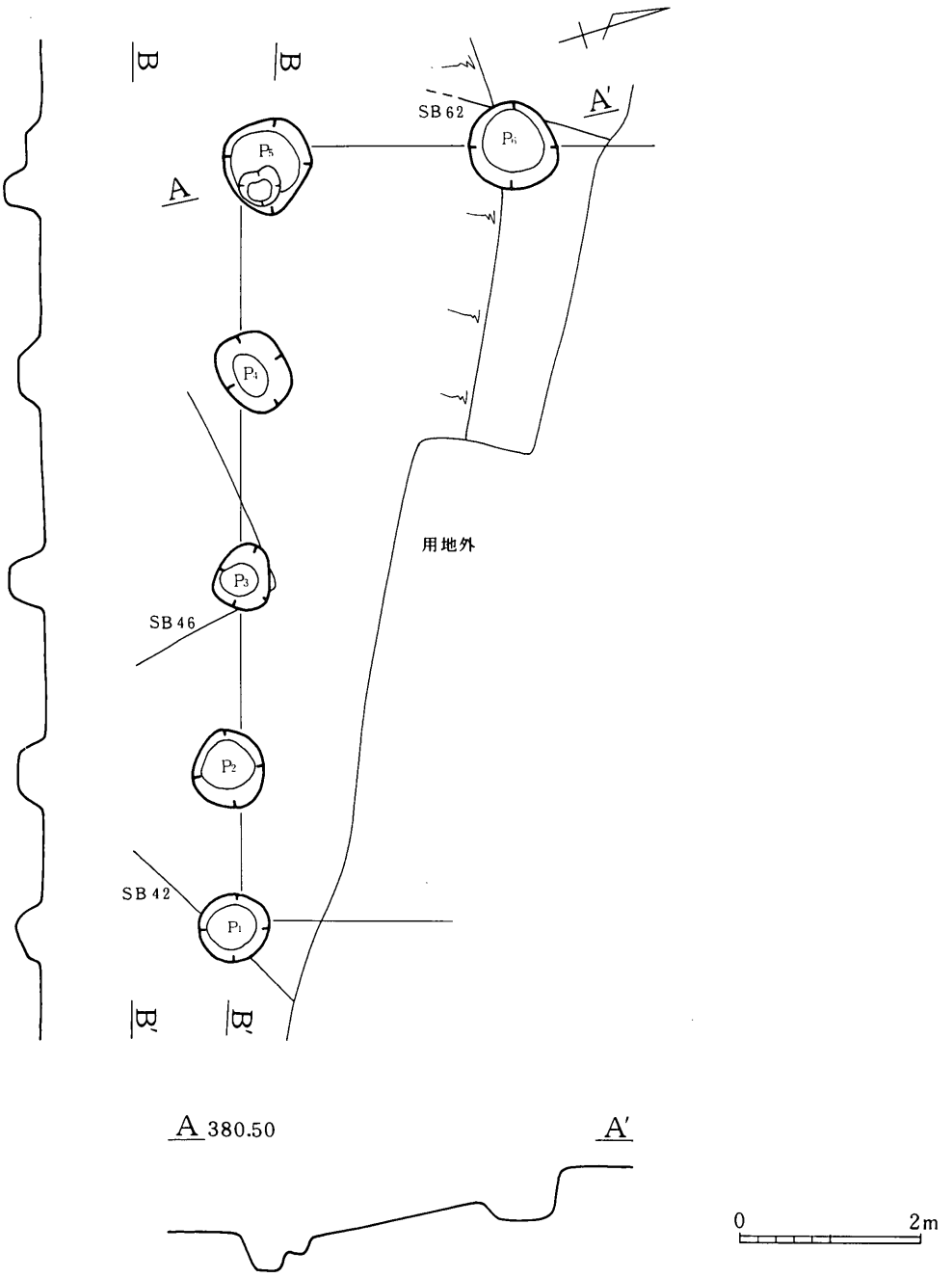


挿図30　ＳＴ04

58・59に切られ、ＳＢ52・58と重複する　［検出状況］調査区外にかかる。Ｐ２が少量焼土を、Ｐ３が炭を含む。ＳＢ52のカマドが把握できなかったことから、Ｐ２が壊した可能性も考えられる。一方でＳＴ13と同方向をとることから、焼失建物の可能性もある　［柱穴］径96～140cm、深さ52～72cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・坏？・高坏？・甕Ｂ・甕Ｆ・甕・台付甕・甑Ａ１　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。

⑧ＳＴ08（挿図32）

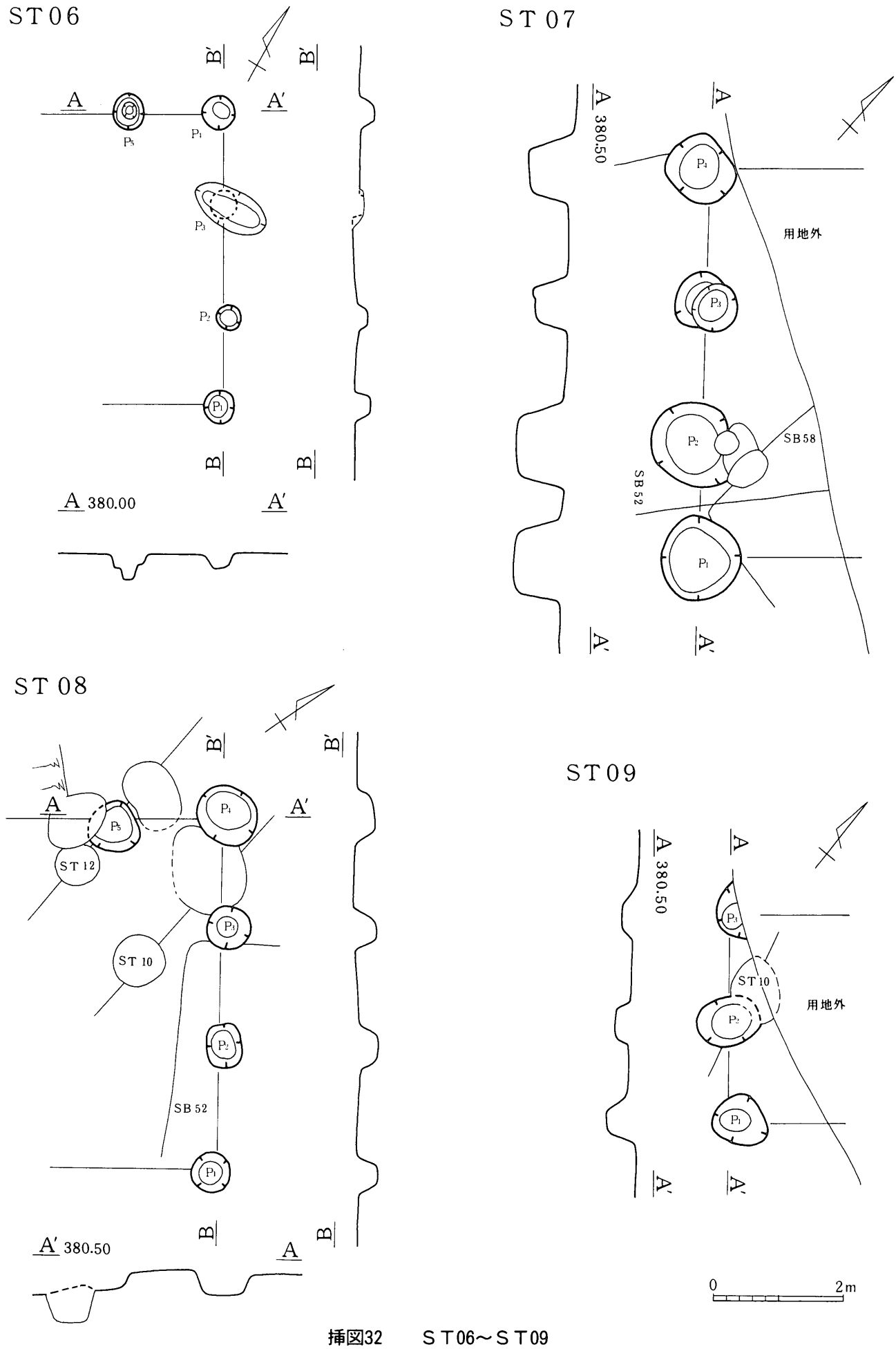
［検出位置］ＢＲ35付近　［形態］３間×２間以上の側柱建物址　［主軸方向］N55°Ｗ　［規模］5.3ｍ×－ｍ　［柱間間隔］（桁）1.7＋1.8＋1.8ｍ×（梁）1.7＋…ｍ　［床面積］－　㎡　［重複関係］ＳＢ52・ＳＴ10・ＳＴ12と重複する　［検出状況］開田の際の削平を受け南側は把握できず　［柱穴］径60～92cm、深さ26～34cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏・高坏・甕・壷　［時期］古墳時代以降であるが、時期不明である。



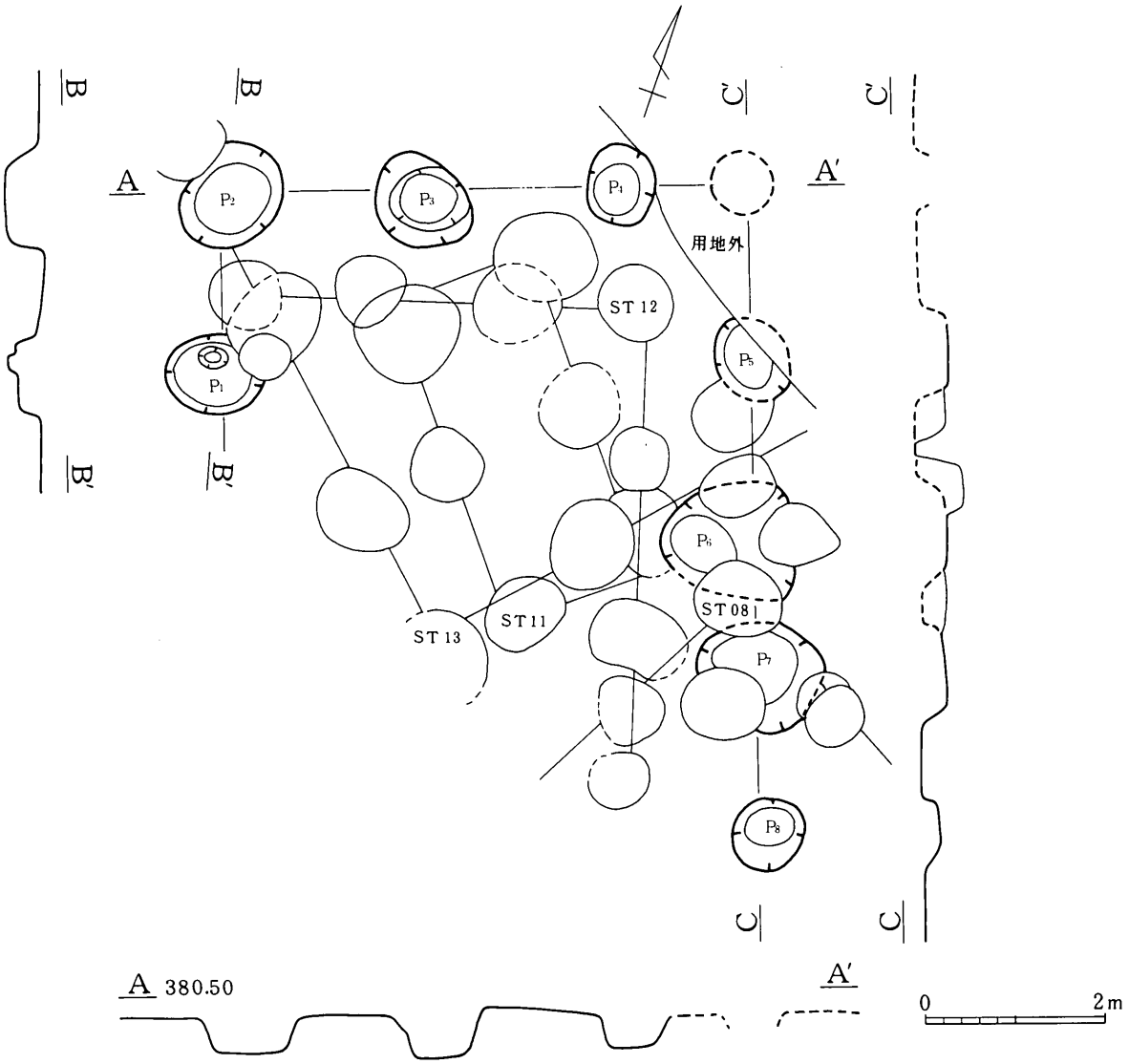
挿図31　ＳＴ05

⑨ＳＴ09（挿図32）

［検出位置］ＢＵ34付近　［形態］２間×１間以上の側柱建物址　［主軸方向］N38° W　［規模］3.2ｍ×－ｍ　［柱間間隔］（桁）1.6＋1.6ｍ×（梁）－ｍ　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＴ10と重複する　［検出状況］大部分が調査区外にかかる。Ｐ２は焼土を含み、焼失建物の可能性がある　［柱穴］径90～96㎝、深さ20～44㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－甕　［時期］詳細時期不明である。



挿図32　ＳＴ06～ＳＴ09



挿図33　ＳＴ10

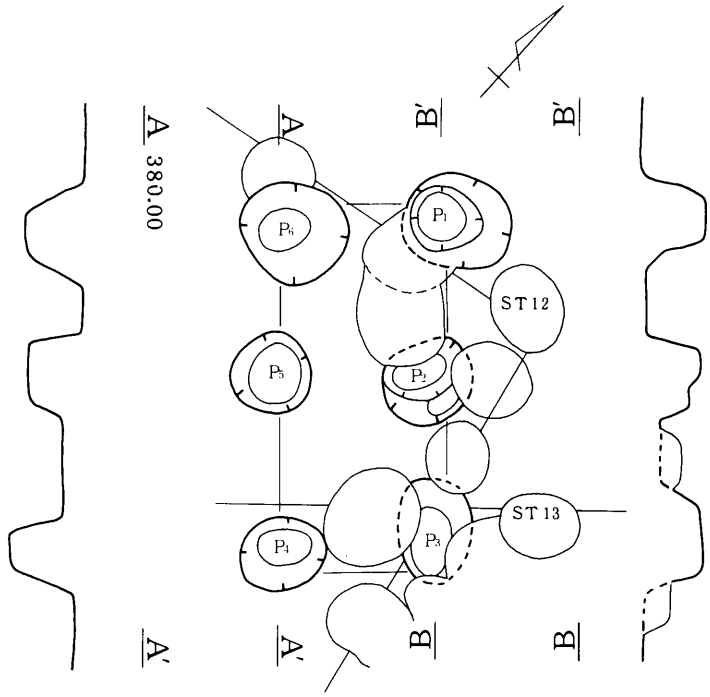
⑩ＳＴ10（挿図33）

［検出位置］ＢＴ33付近　［形態］４間×３間の側柱建物址　［主軸方向］N18°Ｗ　［規模］－ｍ×(5.9)ｍ　［柱間間隔］桁1.8＋1.8＋1.7＋1.7＋…ｍ×梁(1.5)＋2.1＋2.3ｍ　［床面積］－　㎡　［重複関係］ＳＢ55・ＳＴ08・ＳＴ09・ＳＴ11・ＳＴ13と重複する　［検出状況］一部調査区外にかかり、南側は開田により削平される。ＳＴ12とともに、他の建物址と大きく方向を異にする。Ｐ３が焼土・炭を、Ｐ５が焼土を多量に含むことから、焼失建物と考えられる　［柱穴］径80～150㎝、深さ20～50㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・高坏・甕Ｆ・甕・小型甕　［時期］古墳時代中期以降の建物址であるが、詳細時期は不明である。

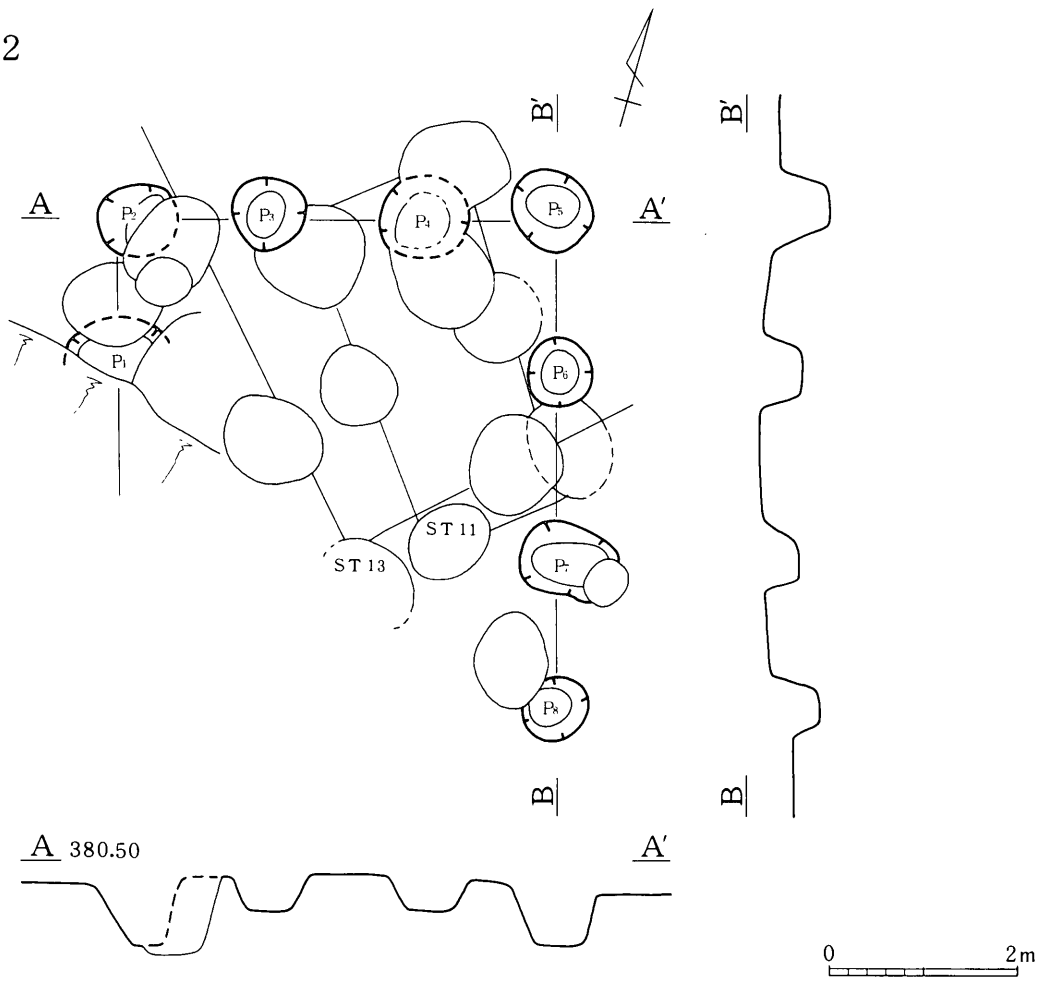
⑪ＳＴ11（挿図34）

［検出位置］ＢＴ33付近　［形態］２間×１間の側柱建物址　［主軸方向］N40°Ｗ　［規模］3.3ｍ×1.8ｍ　［柱間間隔］桁1.6＋1.7ｍ×梁1.8ｍ　［床面積］5.9㎡　［重複関係］ＳＢ55・ＳＴ10・ＳＴ

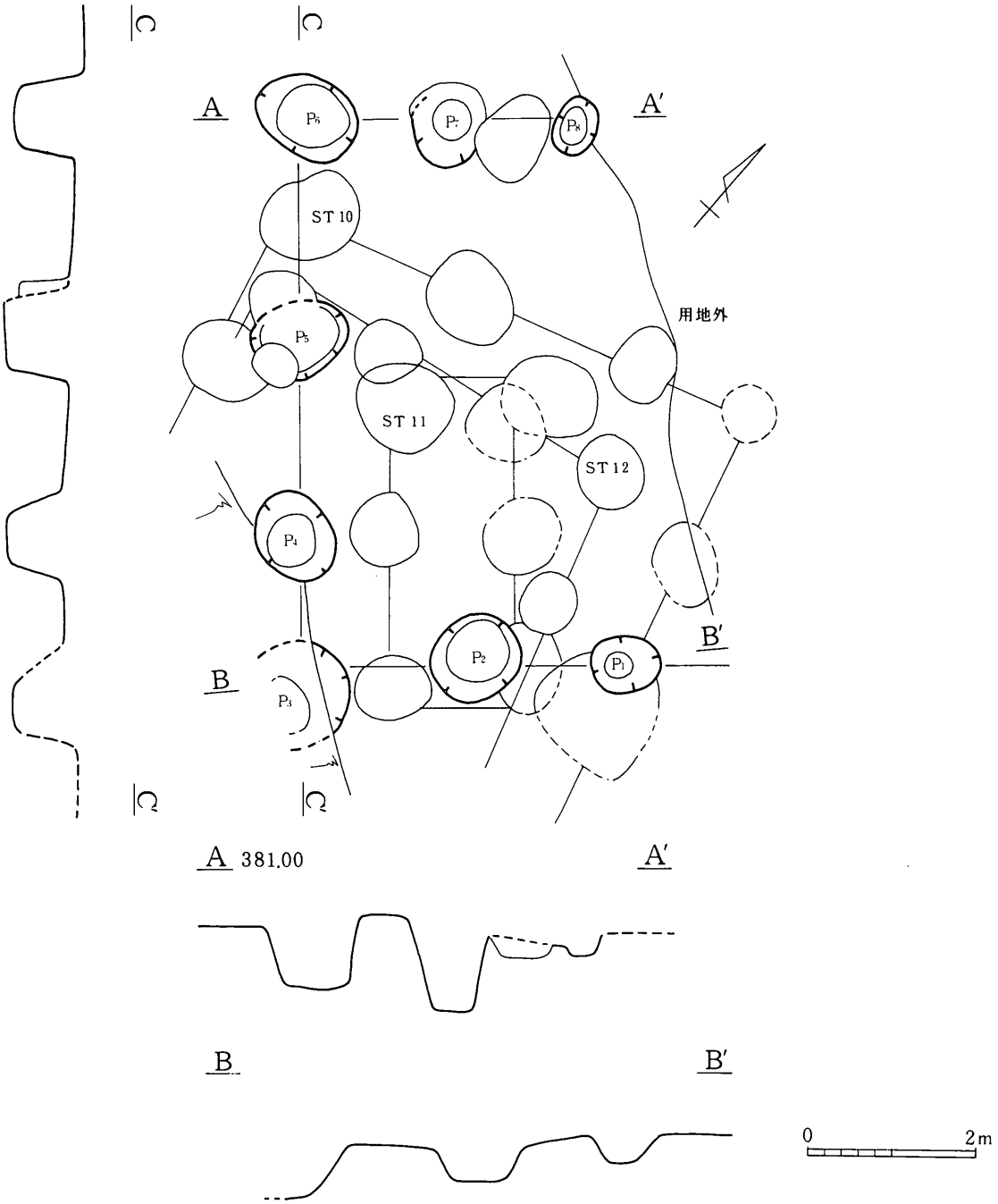
ST 11



ST 12



挿図34　ＳＴ11・ＳＴ12

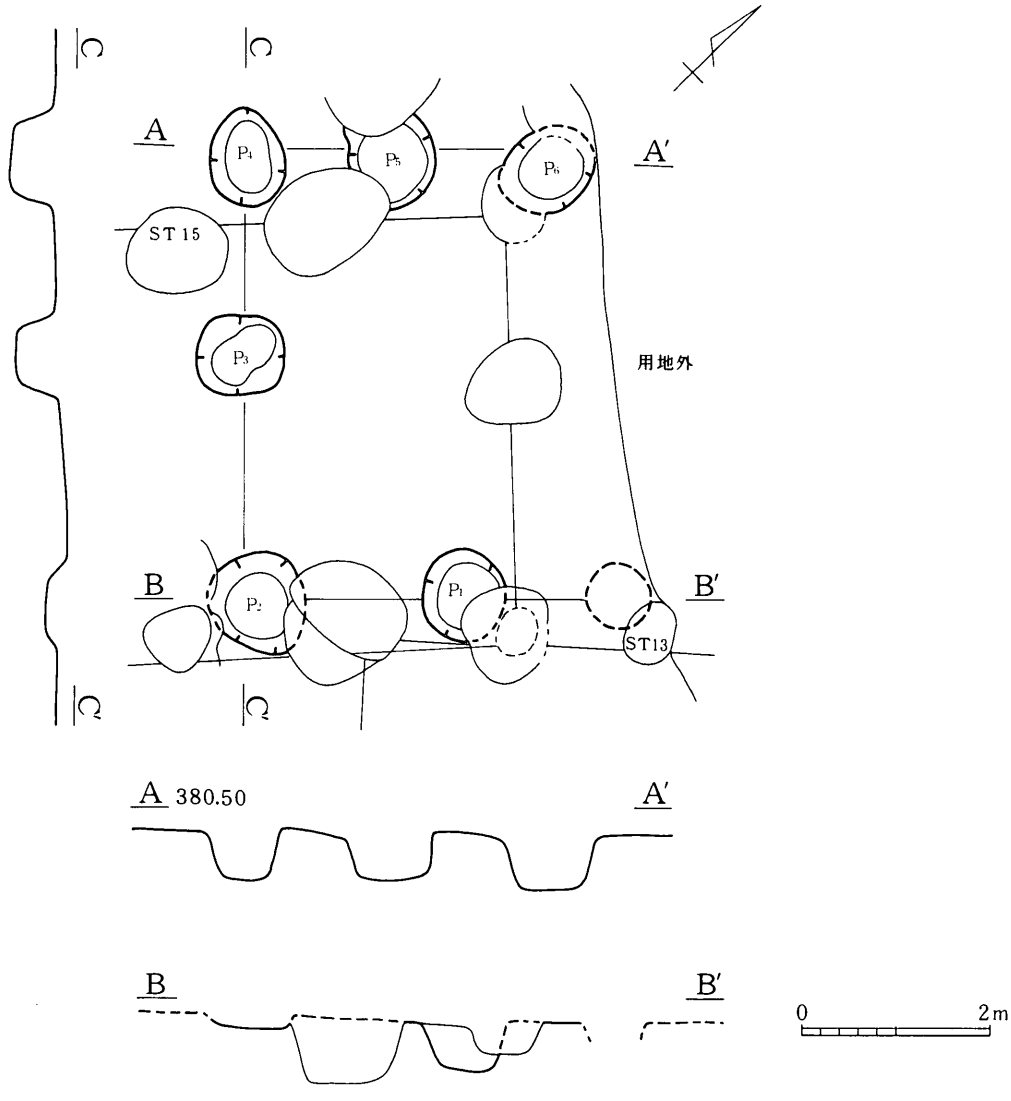


挿図35　ＳＴ13

12・ＳＴ13と重複する　［検出状況］ＳＴ09と並行する。Ｐ２は焼土・炭を多量に含んでおり、ＳＴ09・ＳＴ10とともに焼失建物の可能性あり。一方でこの付近に焼失住居等があった可能性もある　［柱穴］径84～116cm、深さ54～68cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・同（内黒）・甕・壷？、須恵器－甕　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。

⑫ＳＴ12（挿図34）

［検出位置］ＢＳ33付近　［形態］４間以上×３間の側柱建物址　［主軸方向］Ｎ15°Ｗ　［規模］－

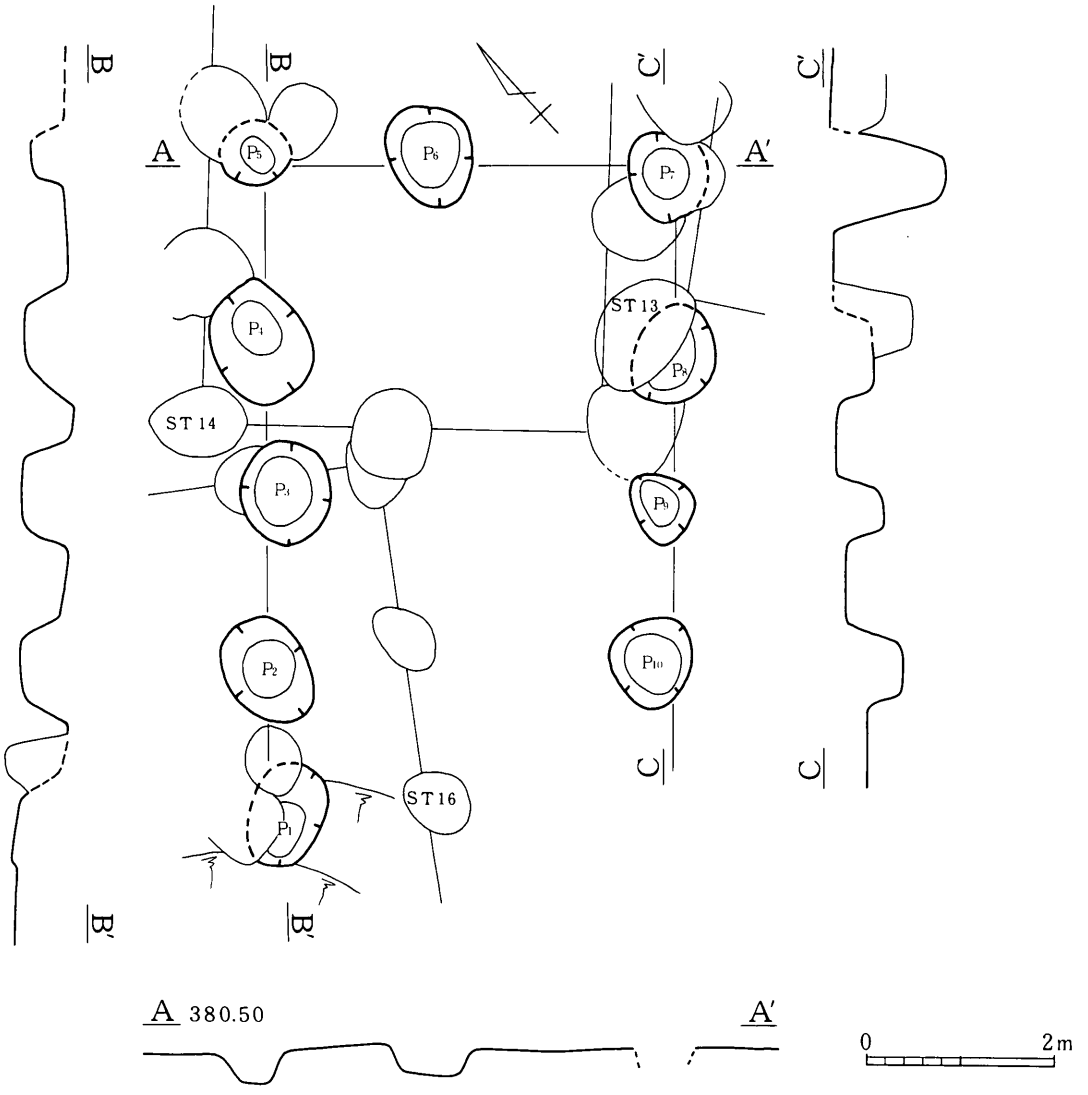


挿図36　ＳＴ14

m×4.6m　［柱間間隔］桁1.7＋1.8＋1.6＋…m×梁(1.5)＋(1.6)＋1.5m　［床面積］－　㎡　［重複関係］ＳＢ55・ＳＴ10・ＳＴ11・ＳＴ13と重複する　［検出状況］南側を開田により削平される。ＳＴ10と同方向をとり、建て替えの可能性が考えられる　［柱穴］径70～104cm、深さ40～70cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・高坏・甕Ｆ、須恵器－甕　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。

⑬ＳＴ13（挿図35）

［検出位置］ＢＵ32付近　［形態］３間×３間以上の側柱建物址　［主軸方向］N42°Ｗ　［規模］6.2m×－m　［柱間間隔］（桁）2.3＋2.3＋1.6m×（梁）1.8＋1.5（2.1＋1.7）m　［床面積］－　㎡　［重複関係］ＳＴ15を切る。また、ＳＢ55・ＳＴ09～ＳＴ12・ＳＴ14と重複する　［検出状況］Ｐ４は底部に微量の焼土を、Ｐ５は炭を、Ｐ６・Ｐ７は焼土・炭を含むことから、焼失建物と考えられる。ＳＴ07と同方向　［柱穴］径66～124cm、深さ28～112cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・同（内



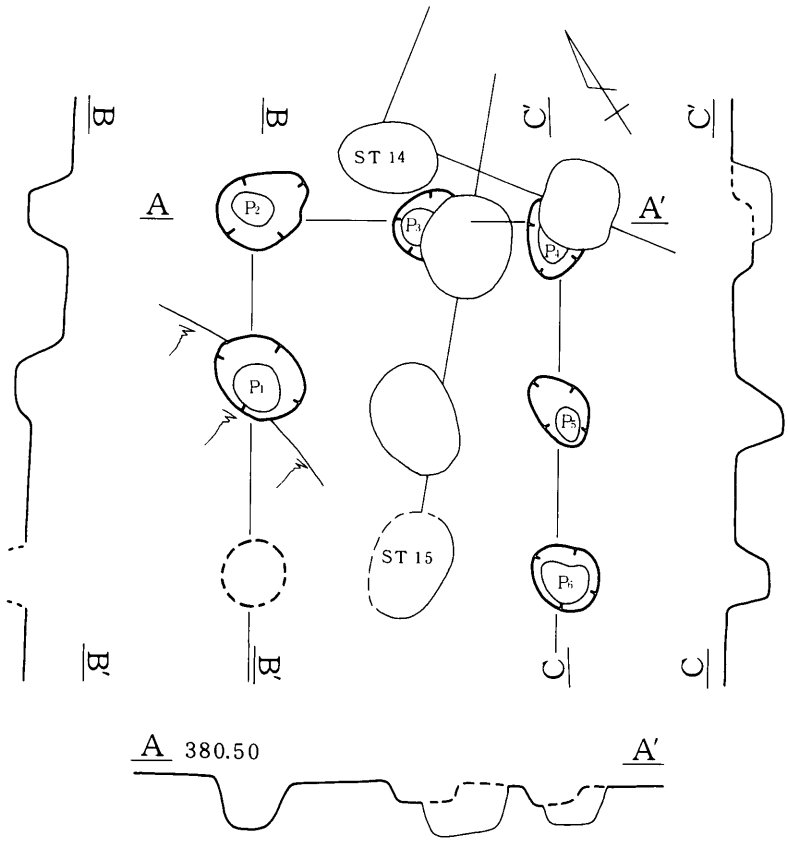
挿図37　ＳＴ15

黒)・坏・高坏（内黒)・高坏・甕Ｆ・甕・小型甕、須恵器－甕・長頸壷Ａ　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期不明である。

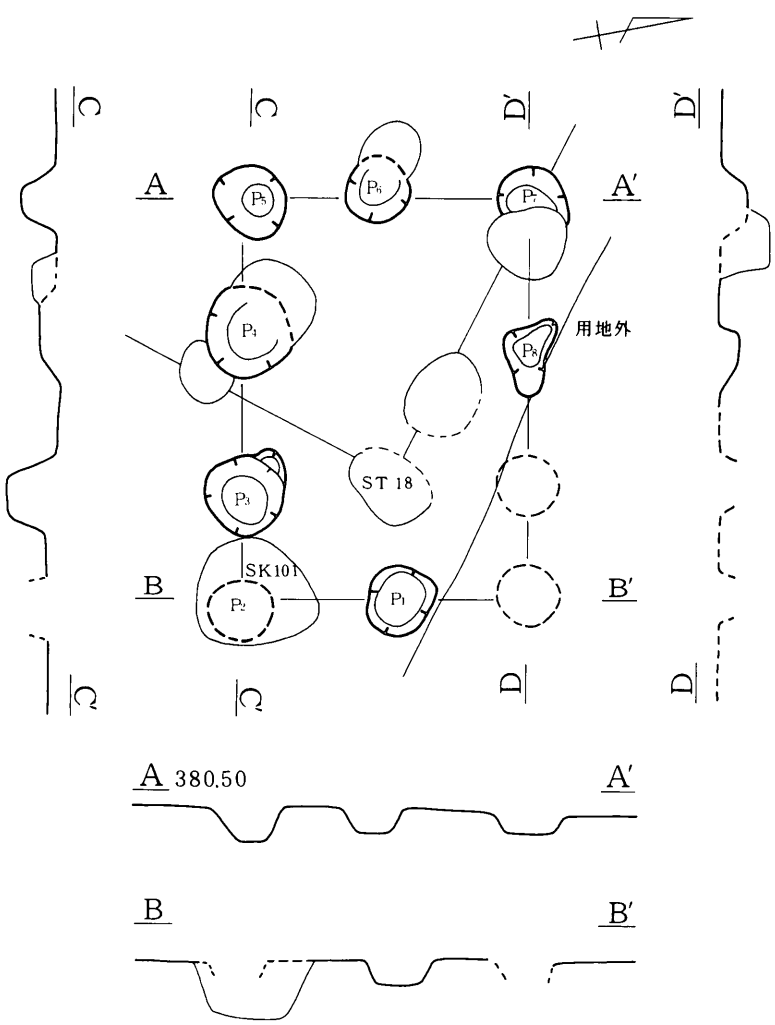
⑭ＳＴ14（挿図36）

［検出位置］ＢＷ30付近　［形態］３間以上×２間の側柱建物址　［主軸方向］Ｎ45°Ｅ　［規模］－ｍ×4.6ｍ　［柱間間隔］（桁）1.6＋1.6＋…（2.3＋1.6＋…）ｍ×梁2.3＋2.3ｍ　［床面積］－　㎡　［重複関係］ＳＢ51・ＳＴ13・ＳＴ15～ＳＴ17・ＳＫ101・ＳＫ102と重複する　［検出状況］調査区外にかかる。ＳＴ13・ＳＴ15・ＳＴ18とほぼ同方向をとり、近接した時期が考えられる。Ｐ６は焼土を少量含む　［柱穴］径92～110㎝、深さ20～56㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－高坏・甕・小型甕　［時期］古墳時代以降であるが、詳細時期は不明である。

ST 16



ST 17



挿図38　ＳＴ16・ＳＴ17

⑮ＳＴ15（挿図37）

［検出位置］ＢＵ29付近　［形態］５間以上×２間の側柱建物址　［主軸方向］N49°Ｅ　［規模］－ｍ×(4.3)ｍ　［柱間間隔］桁1.8＋1.7＋1.7＋…ｍ×梁1.8＋(2.5)ｍ　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＴ13に切られる。また、ＳＢ51・ＳＢ57・ＳＴ14・ＳＴ16・ＳＫ102と重複する　［検出状況］開田により南側を削平される。Ｐ１が炭化物を、Ｐ６が焼土を、Ｐ７～Ｐ９が焼土・炭を含むことから、焼失建物と考えられる　［柱穴］径70～120㎝、深さ34～116㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・同（内黒）・坏・高坏・高坏（内黒）？・甕Ｆ・甕・小型甕・台付甕　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。

⑯ＳＴ16（挿図38）

［検出位置］ＢＵ28付近　［形態］３間以上×２間の側柱建物址　［主軸方向］N30°Ｅ　［規模］－ｍ×3.2ｍ　［柱間間隔］桁1.9＋1.8＋…ｍ×梁1.6＋1.6ｍ　［床面積］　－　㎡　［重複関係］ＳＢ57・ＳＴ14・ＳＴ15と重複する　［検出状況］南側を開田により削平される　［柱穴］径75～100㎝、深さ20～56㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・高坏・甕　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期不明である。

⑰ＳＴ17（挿図38）

［検出位置］ＢＸ28付近　［形態］３間×２間の側柱建物址　［主軸方向］N76°Ｗ　［規模］(4.2)ｍ×3.0ｍ　［柱間間隔］桁1.5＋1.6＋(1.2)ｍ×梁1.5＋1.5ｍ　［床面積］(12.5)㎡　［重複関係］ＳＢ51・ＳＴ14・ＳＴ18・ＳＫ101と重複する　［検出状況］Ｐ８が焼土を少量含む　［柱穴］径72～90㎝、深さ20～50㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－高坏・甕・小型甕Ｂ・小型甕　［時期］古墳時代以降と考えられるが、詳細時期不明である。

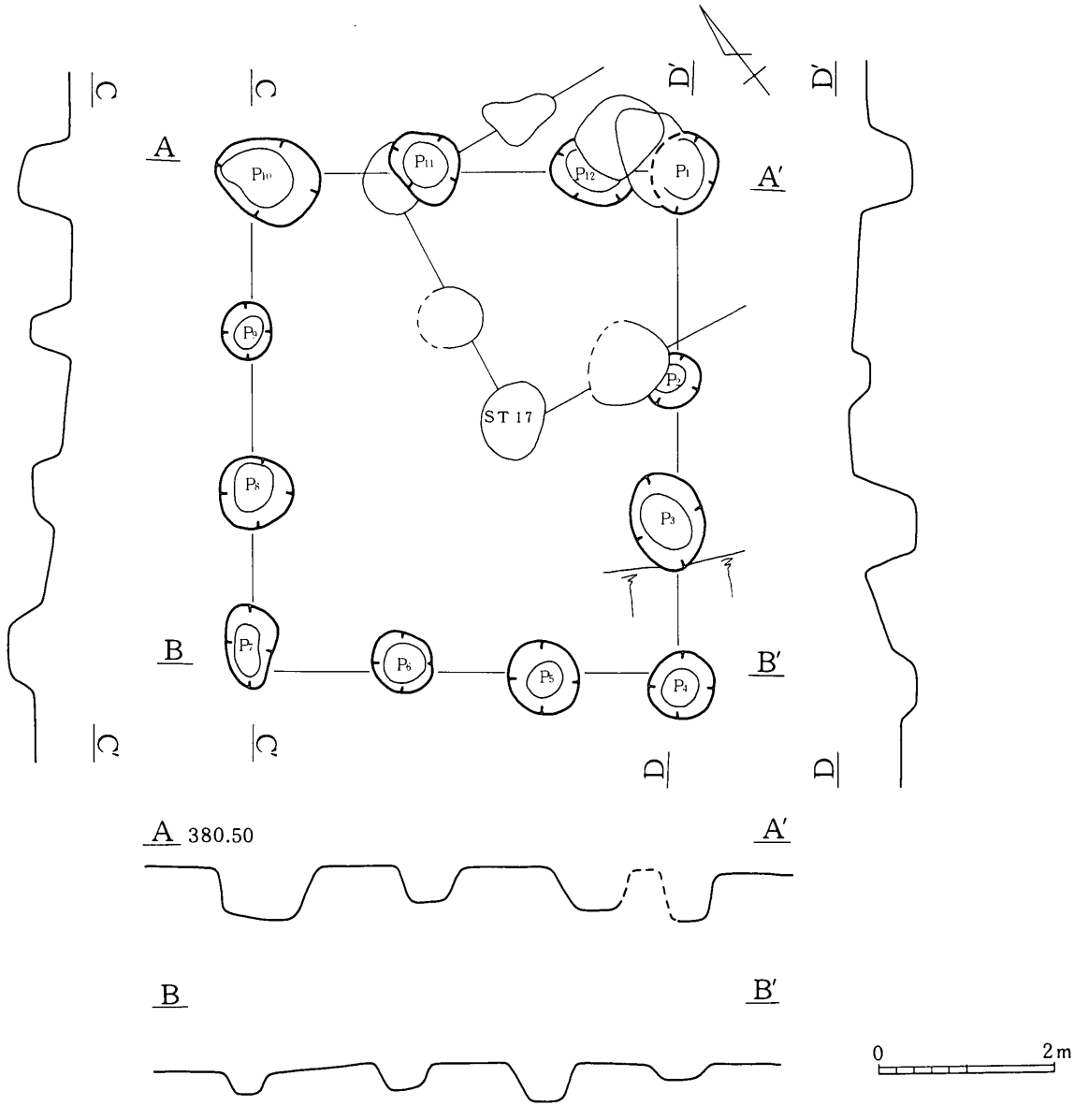
⑱ＳＴ18（挿図39）

［検出位置］ＢＸ27付近　［形態］３間×３間の側柱建物址　［主軸方向］N40°Ｅ　［規模］5.5ｍ×4.8ｍ　［柱間間隔］桁2.2＋1.6＋1.7（1.8＋1.8＋1.9)ｍ×梁1.1＋1.8＋1.9（1.5＋1.6＋1.7)ｍ　［床面積］26.3㎡　［重複関係］ＳＢ53・ＳＴ17と重複する　［検出状況］ＳＴ13～ＳＴ15とほぼ同方向をとり、近接した時期が考えられる　［柱穴］径62～120㎝、深さ16～66㎝　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・同（内黒）・高坏・甕Ｆ・甕、須恵器－坏　［時期］古墳時代中期以降と考えられるが、詳細時期不明である。

(4) 柵列・一本柱列

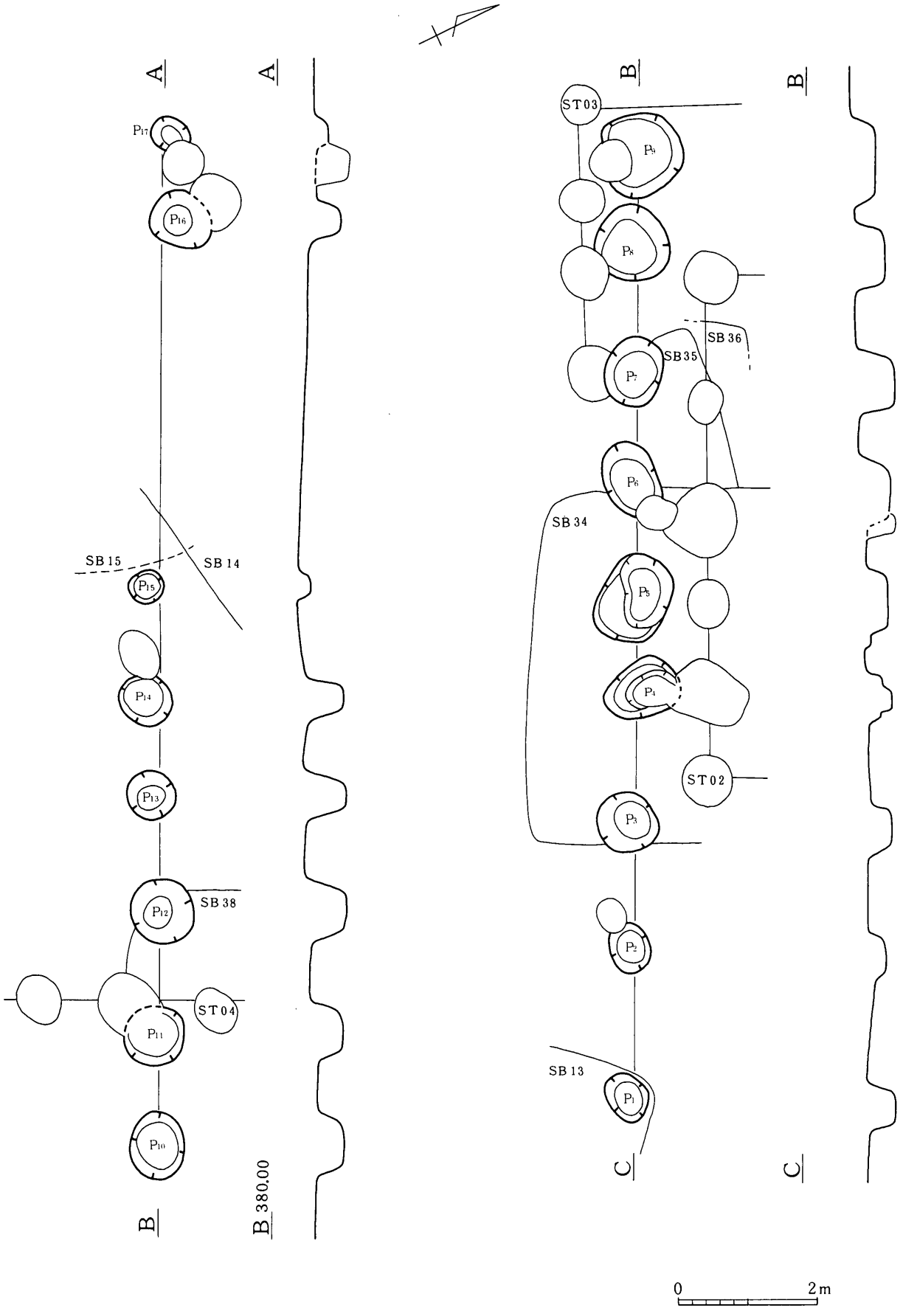
①ＳＡ01（挿図40）

［検出位置］ＢＭ44～ＢＦ08付近　［形態］直線　［主軸方向］N27°Ｗ　［規模］延長30ｍ以上　［柱間間隔］1.3～2.1ｍ　［重複関係］ＳＩ49・ＳＩ50等に切られ、ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ34・ＳＢ35・ＳＢ38・ＳＢ42・ＳＴ03・ＳＴ04・ＳＫ87・ＳＤ05・ＳＤ09と重複する　［検出状況］柱穴の規模や

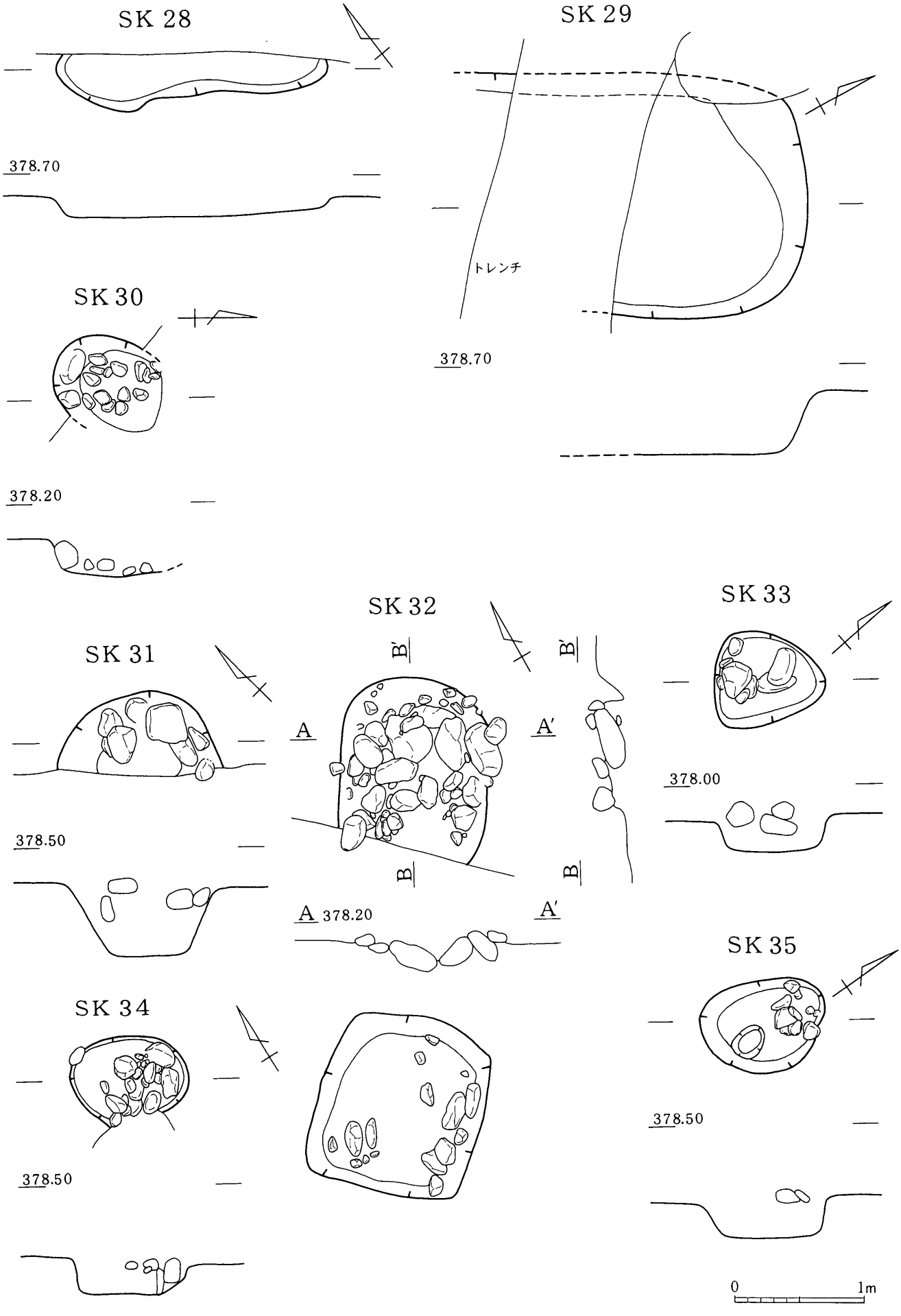


挿図39　ＳＴ18

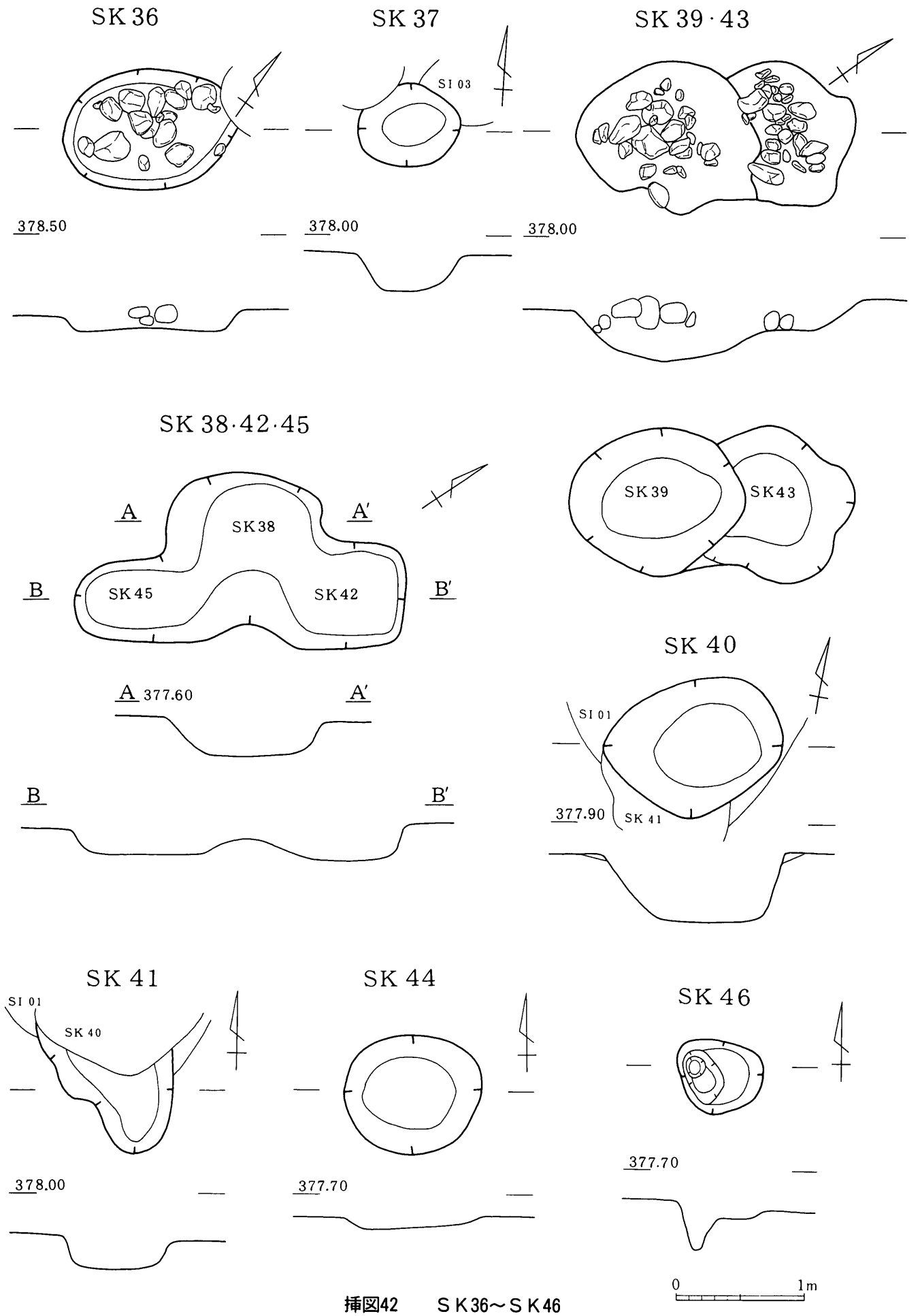
柱間にばらつきがあり、４群ほどに分けて考えることも可能である。この場合北側区外にかけて建物址があった可能性が考えられる。しかし、ＳＢ38付近で組み合う柱穴を検出できなかったことから、柵列ないし一本柱列と判断した。ＳＢ42と重複部分から西側は把握できず、ここから北東に方向を変えると考えられる。ＳＴ02・ＳＴ03とほぼ同方向をとり、近接した時期が考えられる　［柱穴］径45～130×45～110cm、深さ16～63cm　［出土遺物］非ロクロ系土師器－坏Ｄ・同（内黒）・坏Ｆ２（内黒）・高坏・同（内黒）・鉢Ｄ・鉢（内黒）？・甕Ｂ・甕Ｆ・甕・小型甕Ａ・小型甕・壷？、須恵器－甕、円筒埴輪　［時期］古墳時代後期以降と考えられるが、詳細時期は不明である。


A
A
B
B
B 380.00
P17
P16
SB 15
SB 14
P15
P14
P13
P12
SB 38
ST04
P11
P10
ST03
P9
P8
SB 36
SB35
P7
P6
SB 34
P5
P4
ST02
P3
P2
SB 13
P1
C
C
0
2m

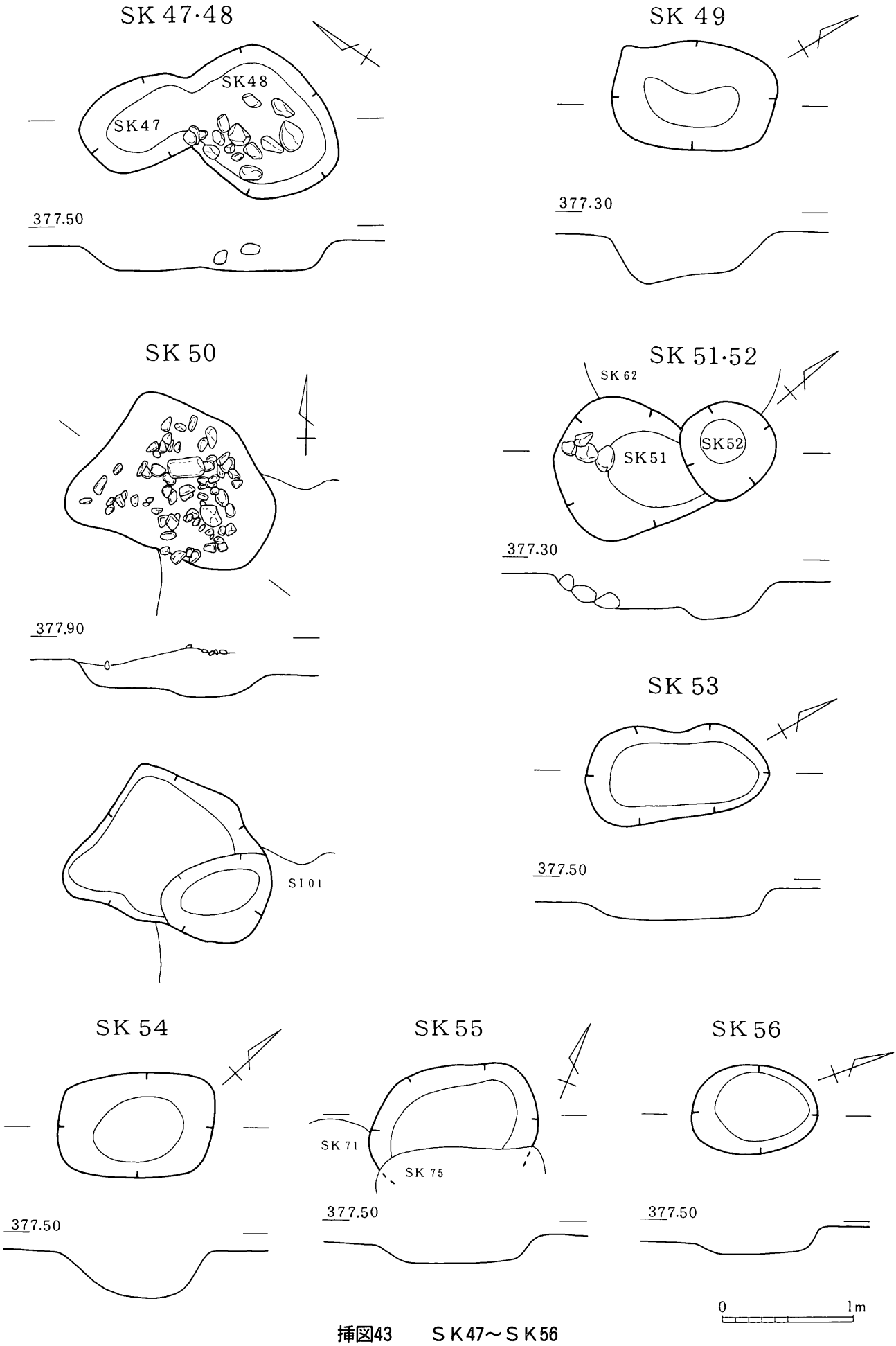
挿図40　　ＳＡ01



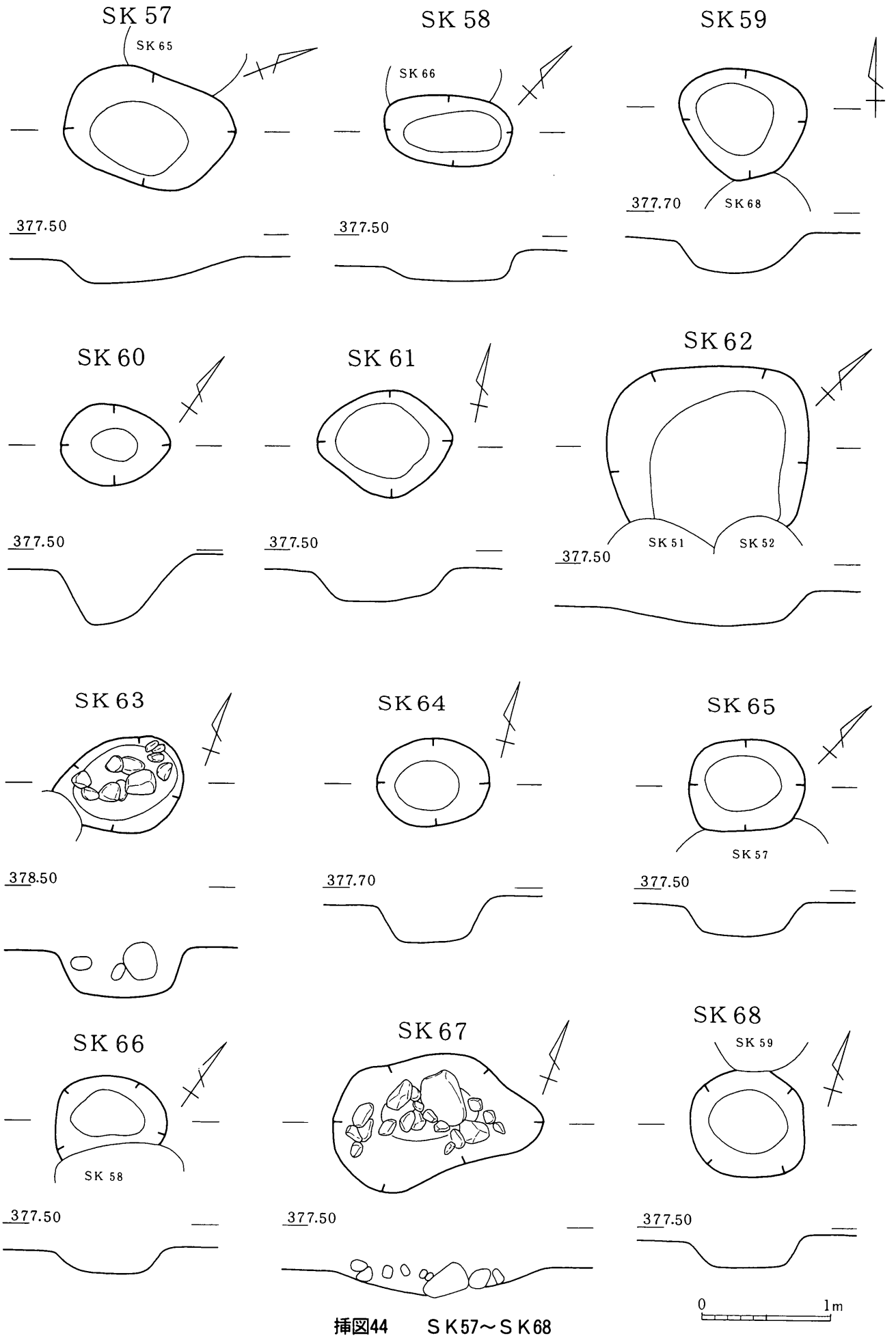
挿図41　　ＳＫ28～ＳＫ35



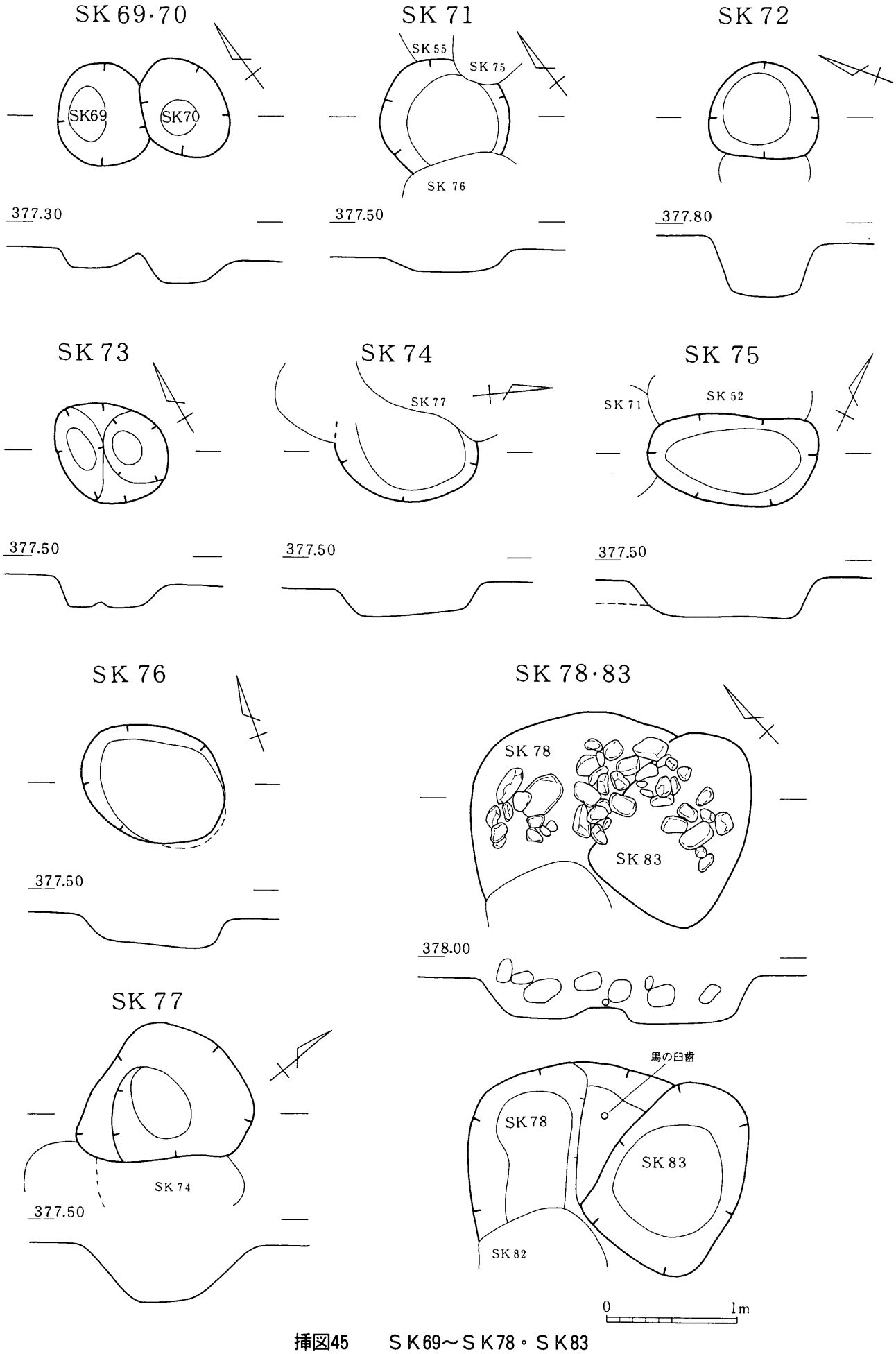
挿図42　ＳＫ36～ＳＫ46



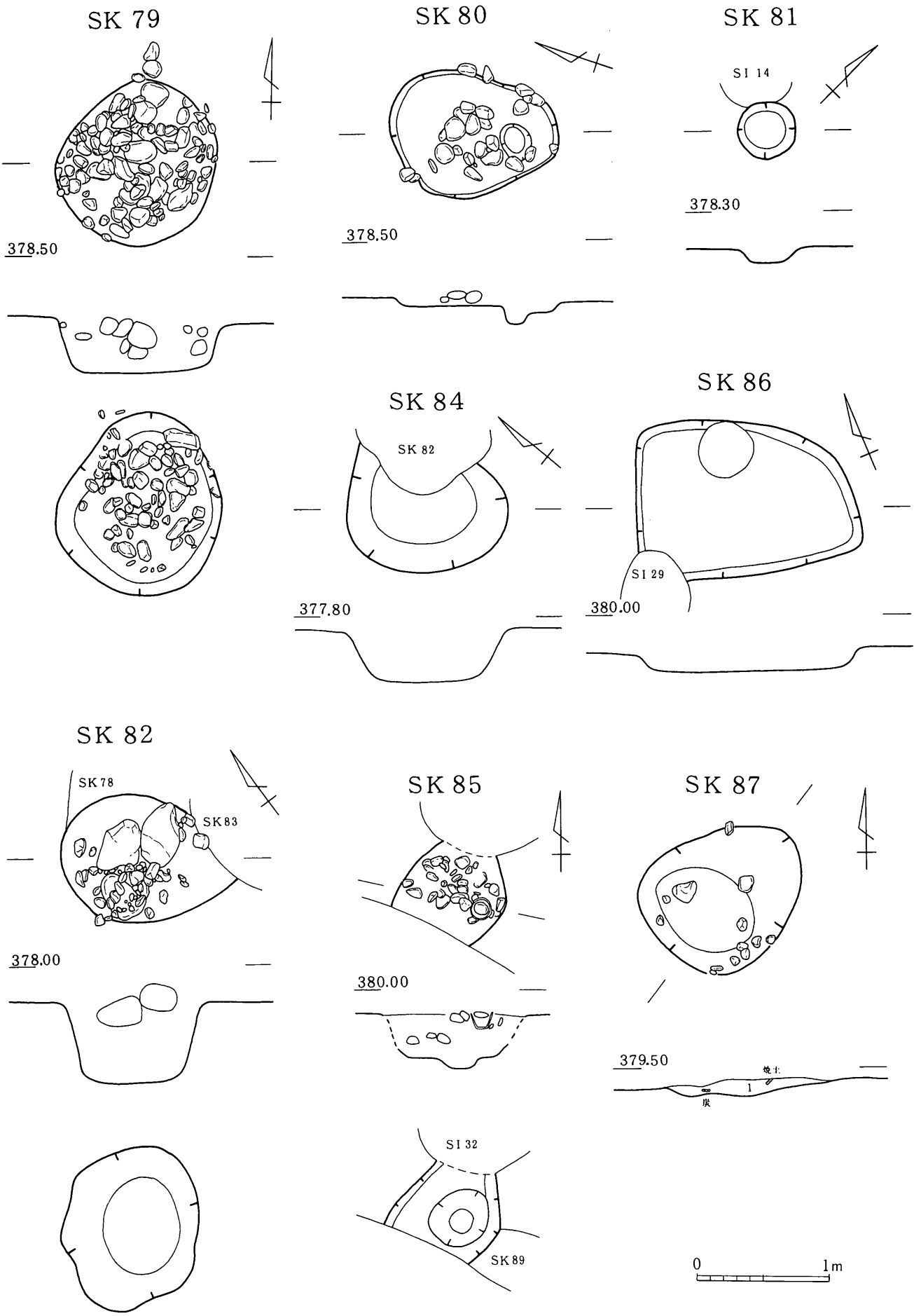
挿図43　　ＳＫ47～ＳＫ56



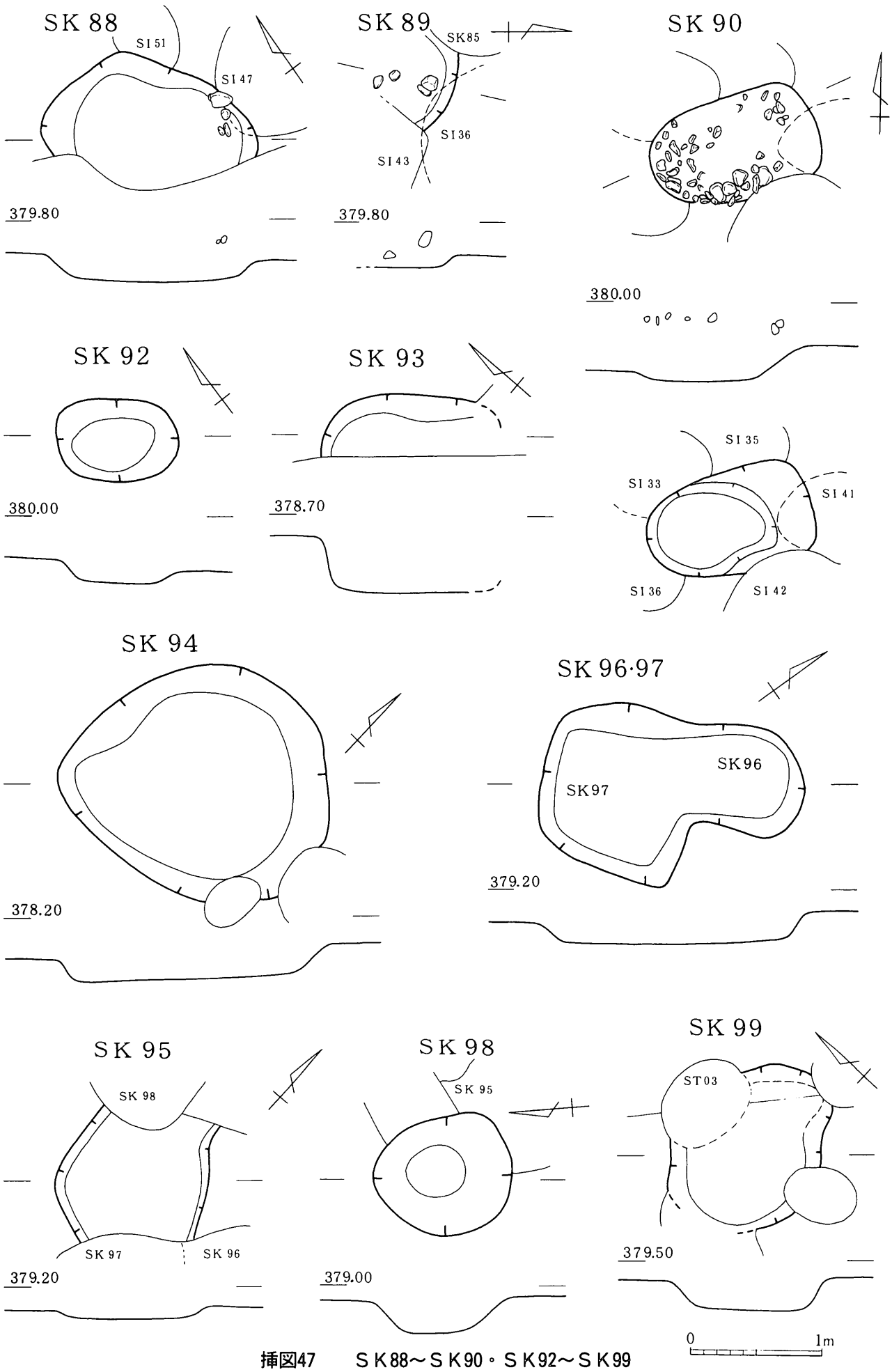
挿図44　ＳＫ57～ＳＫ68



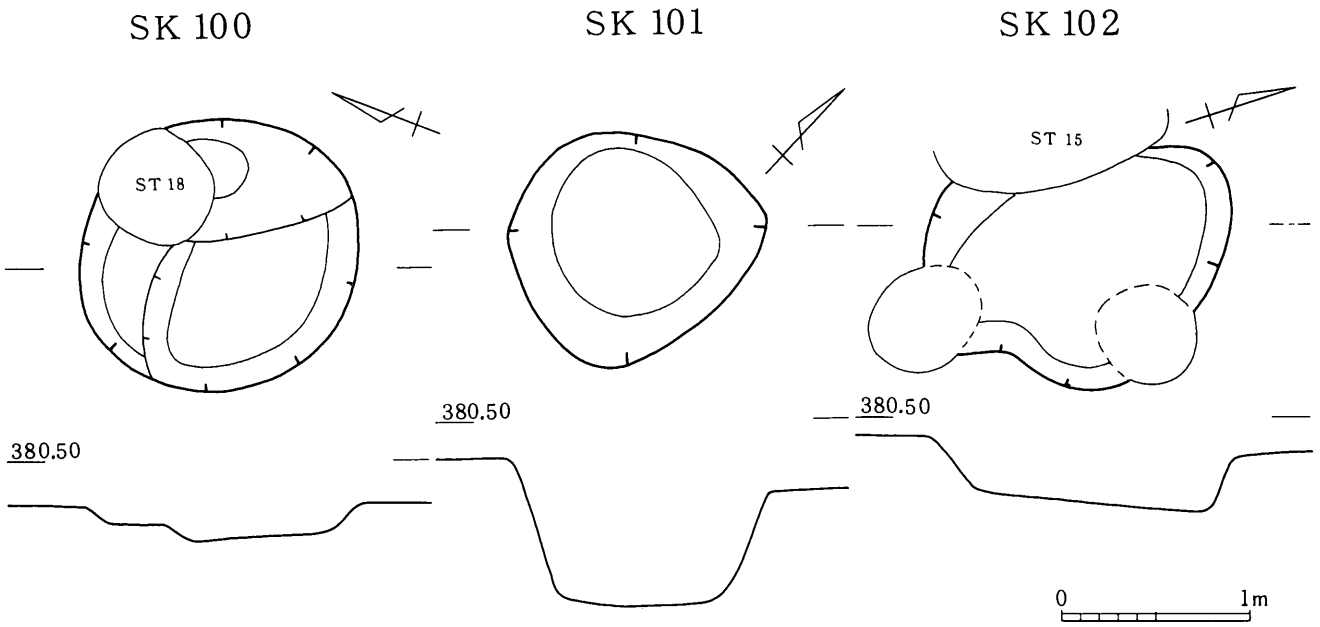
挿図45　ＳＫ69～ＳＫ78・ＳＫ83



挿図46　ＳＫ79～ＳＫ82・ＳＫ84～ＳＫ87



挿図47　ＳＫ88～ＳＫ90・ＳＫ92～ＳＫ99



挿図48　　ＳＫ100～102

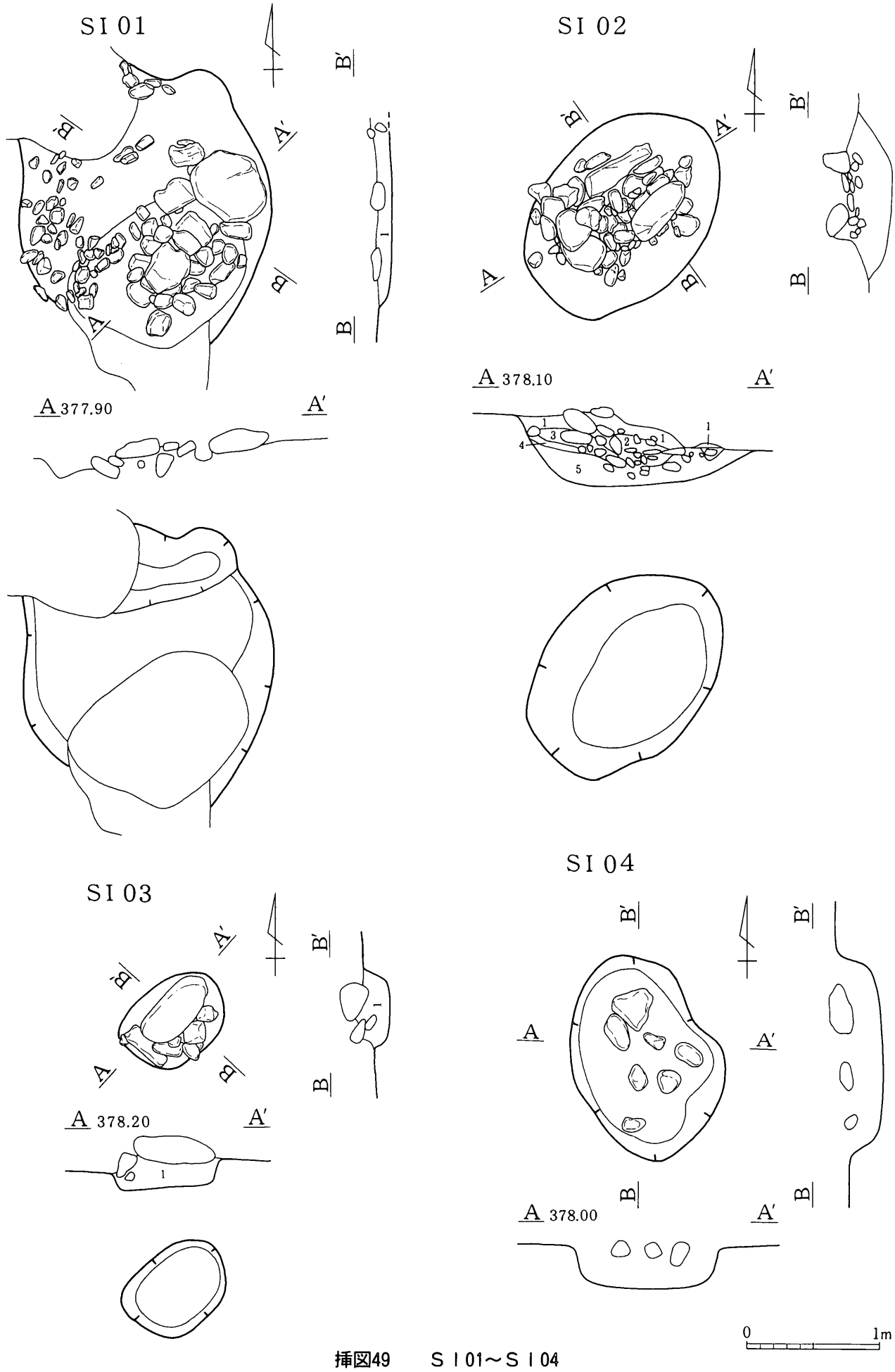
以下、特記されるものについてのみ記述する。

(5) 土壙墓・土坑

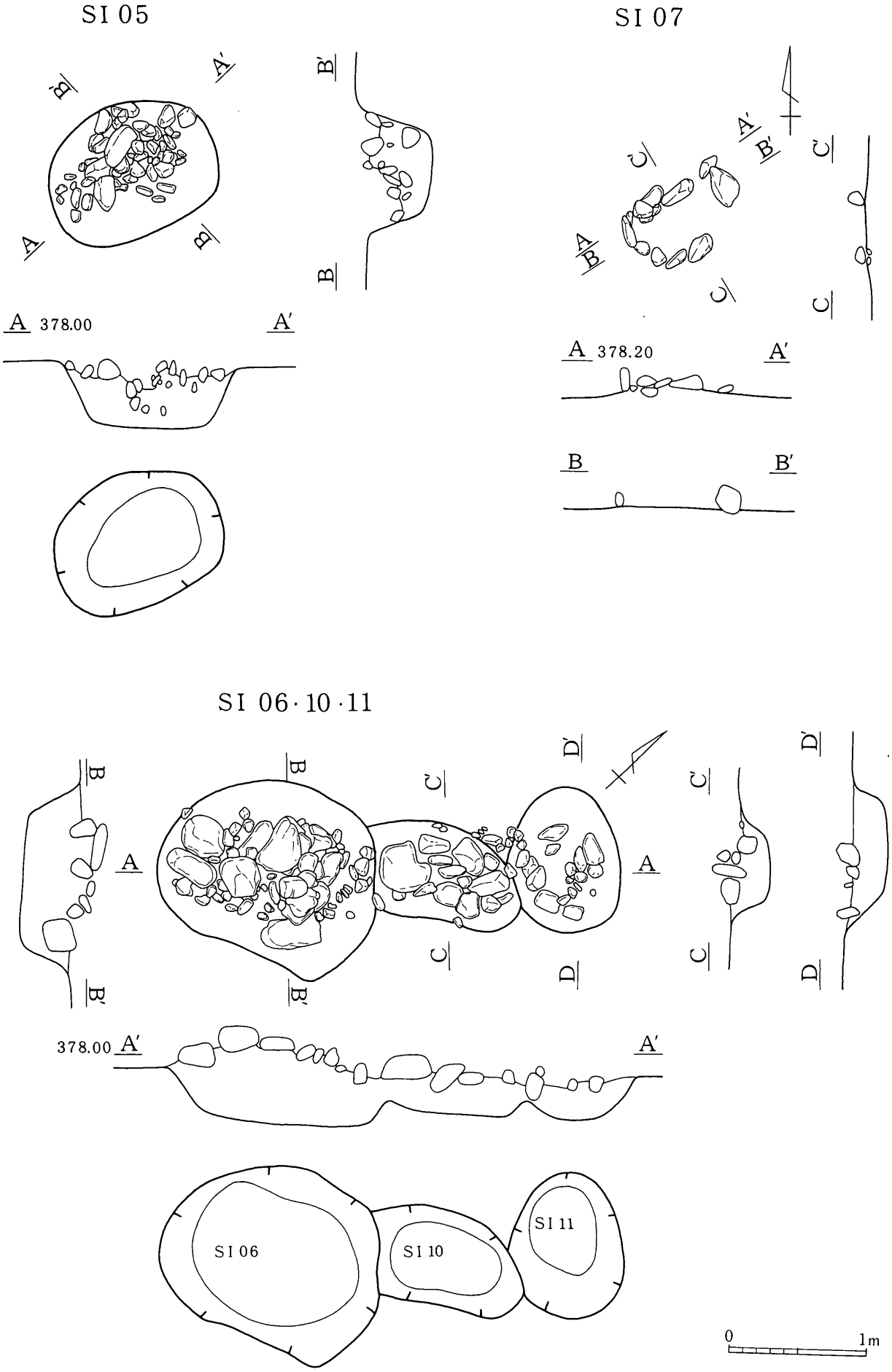
ＳＫ78は北東側壁際の礫下馬臼歯が出土しており、馬墓と考えられる。調査区内では円筒埴輪片が僅かに出土しているが、ＳＤ09に古墳周溝の可能性をみる以外周辺を含めて古墳はない。人の墓と馬墓を結びつけて考えるのは危険であるが、近世の土葬墓が占地する部分であること、それからＳＢ09から近世の陶器薄手酒坏・磁器仏飯器？が出土していることから、近世の馬墓と考えられる。ＳＫ85はＳＩ群検出に先行して、開田で削り取られた肩から見つかり、ＳＫ番号を付したが、本来ＳＩとして扱った方が妥当かもしれない。底部に外側から穿孔した古瀬戸の灰釉梅瓶に焼骨が納められており、硬砂岩の扁平礫で蓋され、立位の状態で見つかった。口縁部を欠いていたが、周辺から口縁部破片が出土。扁平礫で蓋されていたことから、墓が浅いため後に欠失したのではなく、故意に破壊したと考えられる。内部には焼骨と土が詰まっていた。検出状況から周辺の集石墓群と同時期と考えられる。ＳＫ87は底面や壁面が焼け締まる状況ではなかったが、多量の焼骨が含まれ、かつ焼土が発達していることから、火葬施設の可能性も考えられる。

ＳＫ51・ＳＫ54・ＳＫ58・ＳＫ62・ＳＫ73・ＳＩ06から出土した銭貨は、銹で密着したものが多く、銭文が判読できる例や銹着していなかった銭貨があるＳＫ54・ＳＫ58・ＳＫ73・ＳＩ06では、いずれも寛永通宝である。これは「被葬者の胸元ないし組み合わせた掌の中に、布や紙で包んだ六道銭を持たせ」た結果である（鈴木　1999）といわれる。これらについては近世の土葬墓と考えてよかろう。

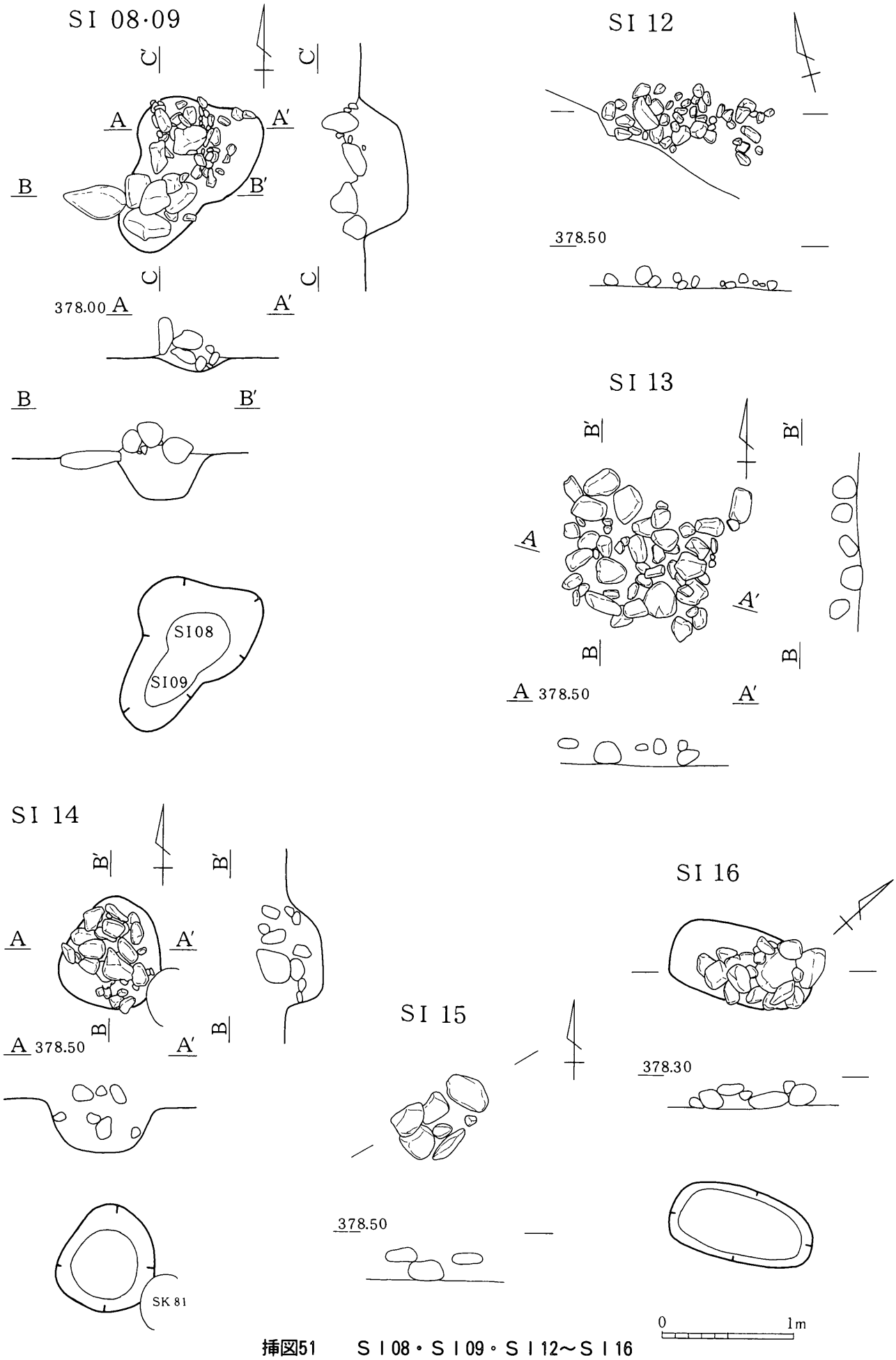
ＳＫ78より硬砂岩製横刃型石器（第20図１）、ＳＫ90より同じく打製石斧（同２）が出土している。



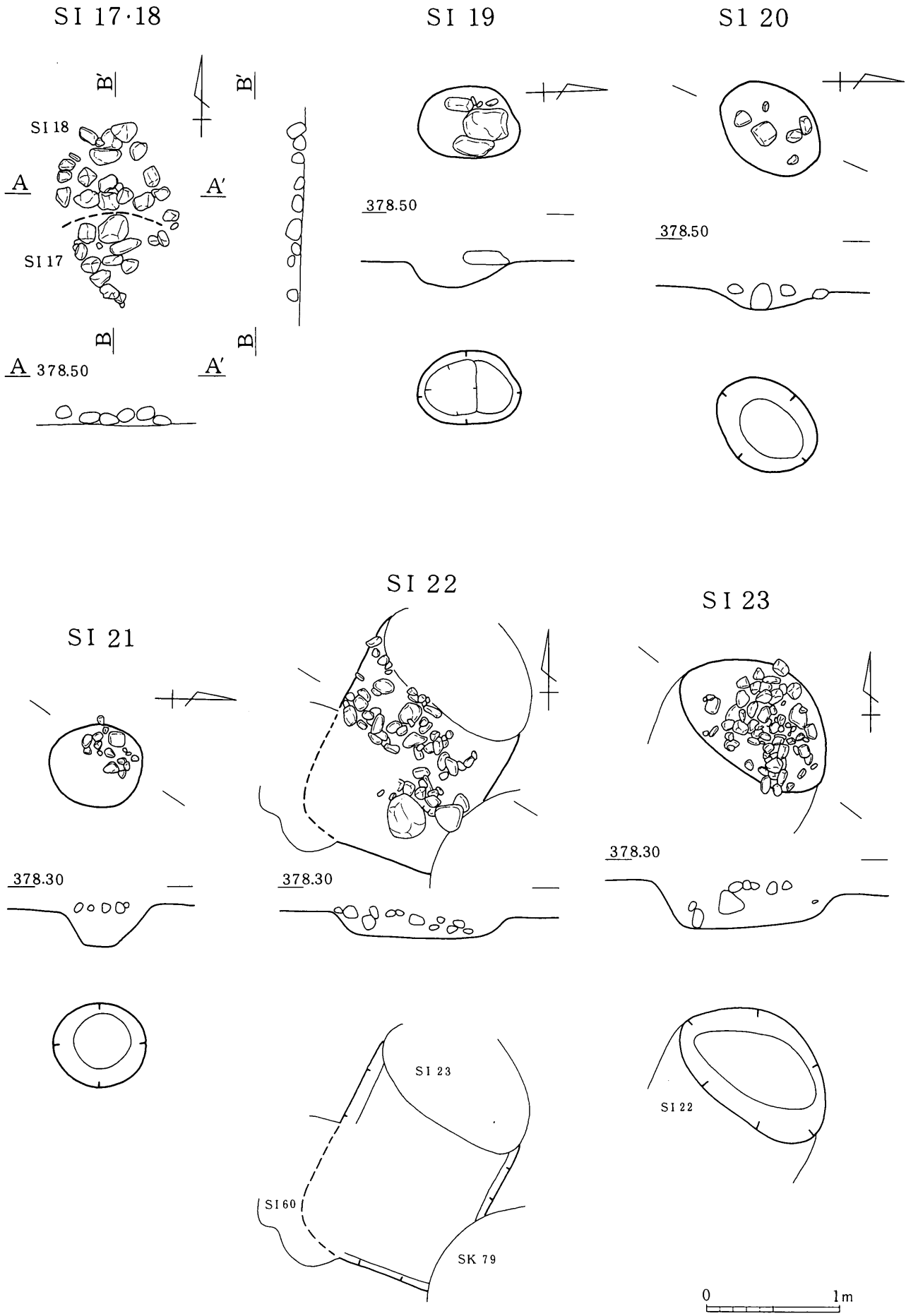
挿図49　S I 01～S I 04



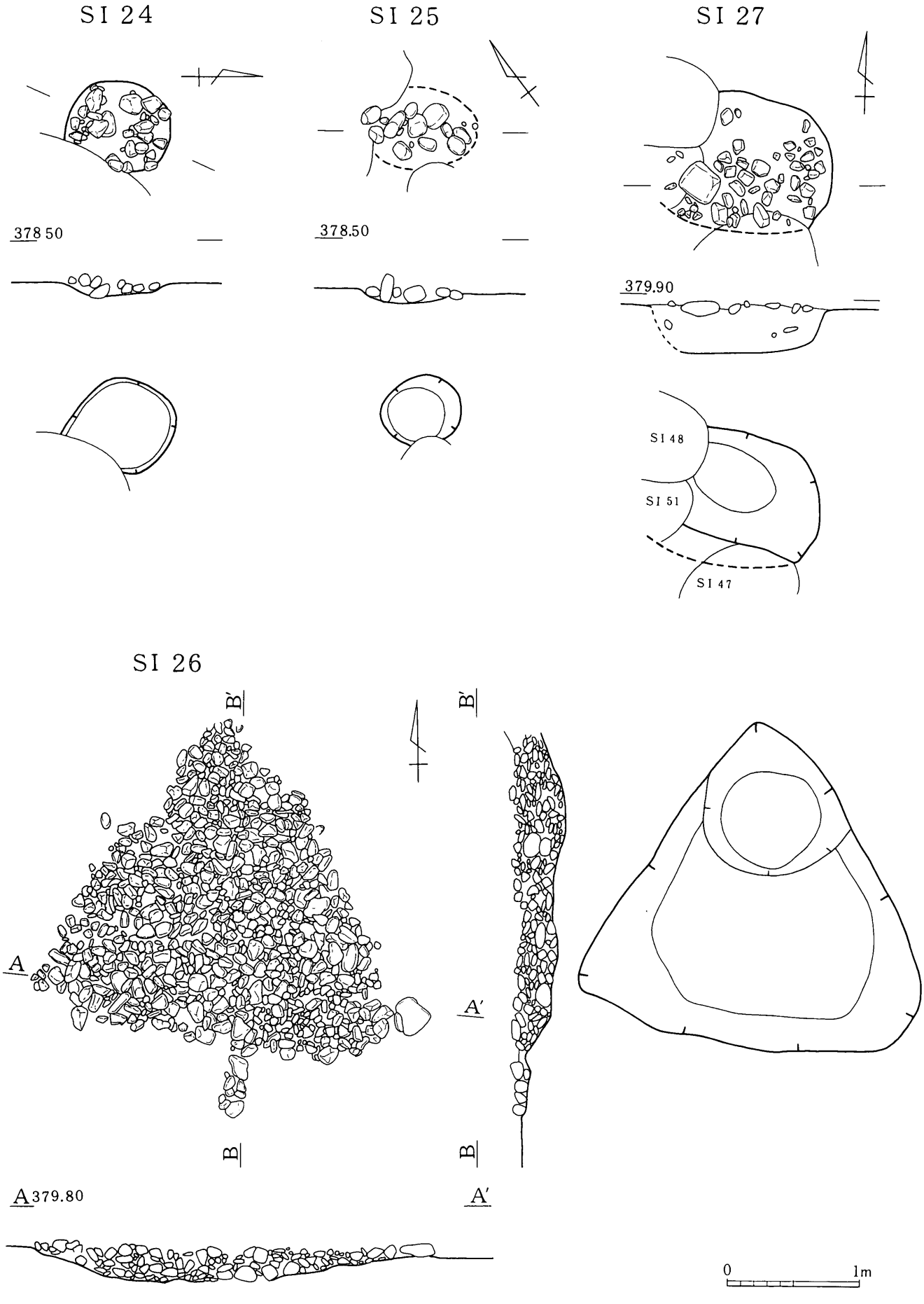
挿図50　S I 05～S I 07・S I 10・S I 11



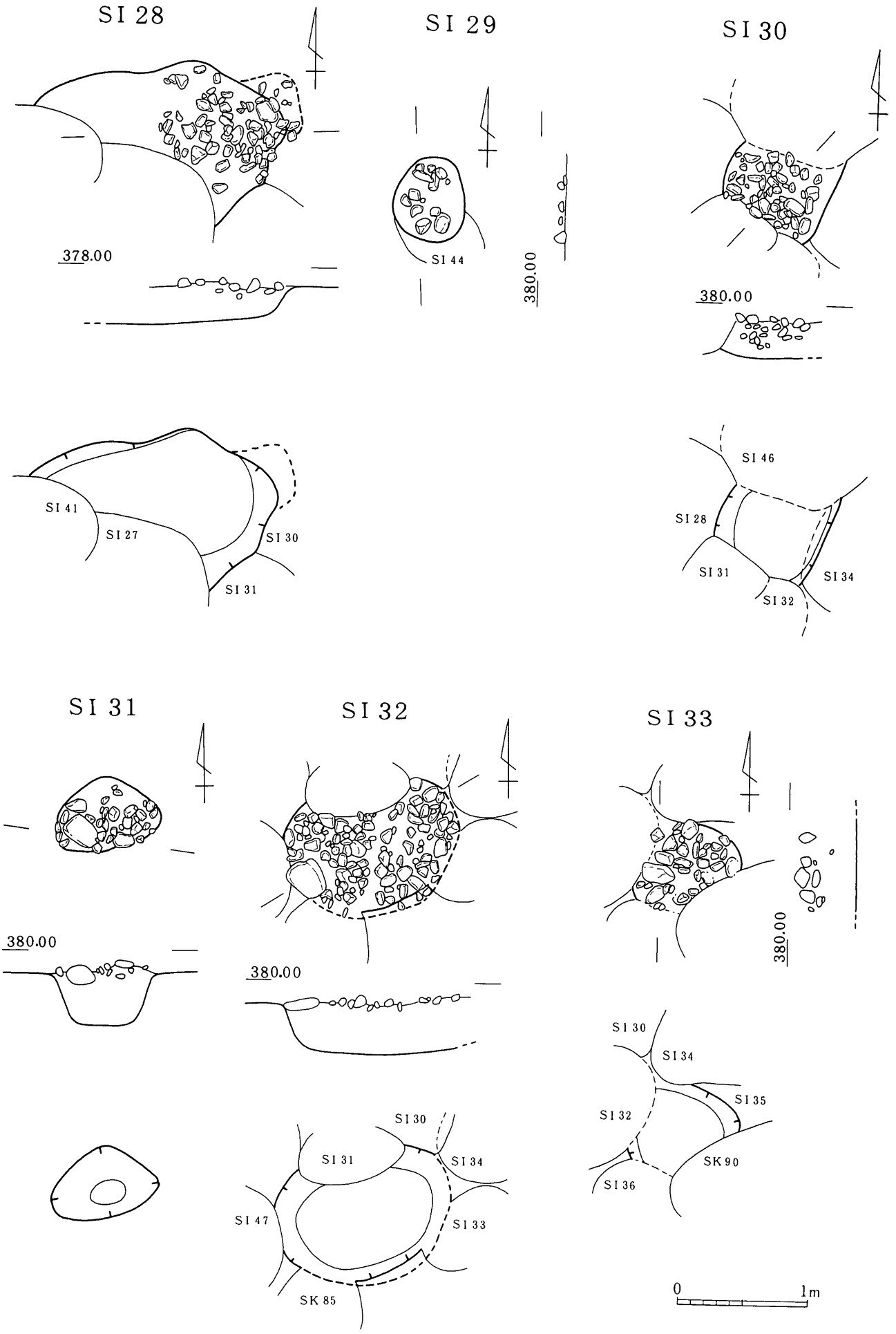
挿図51　S I 08・S I 09・S I 12～S I 16



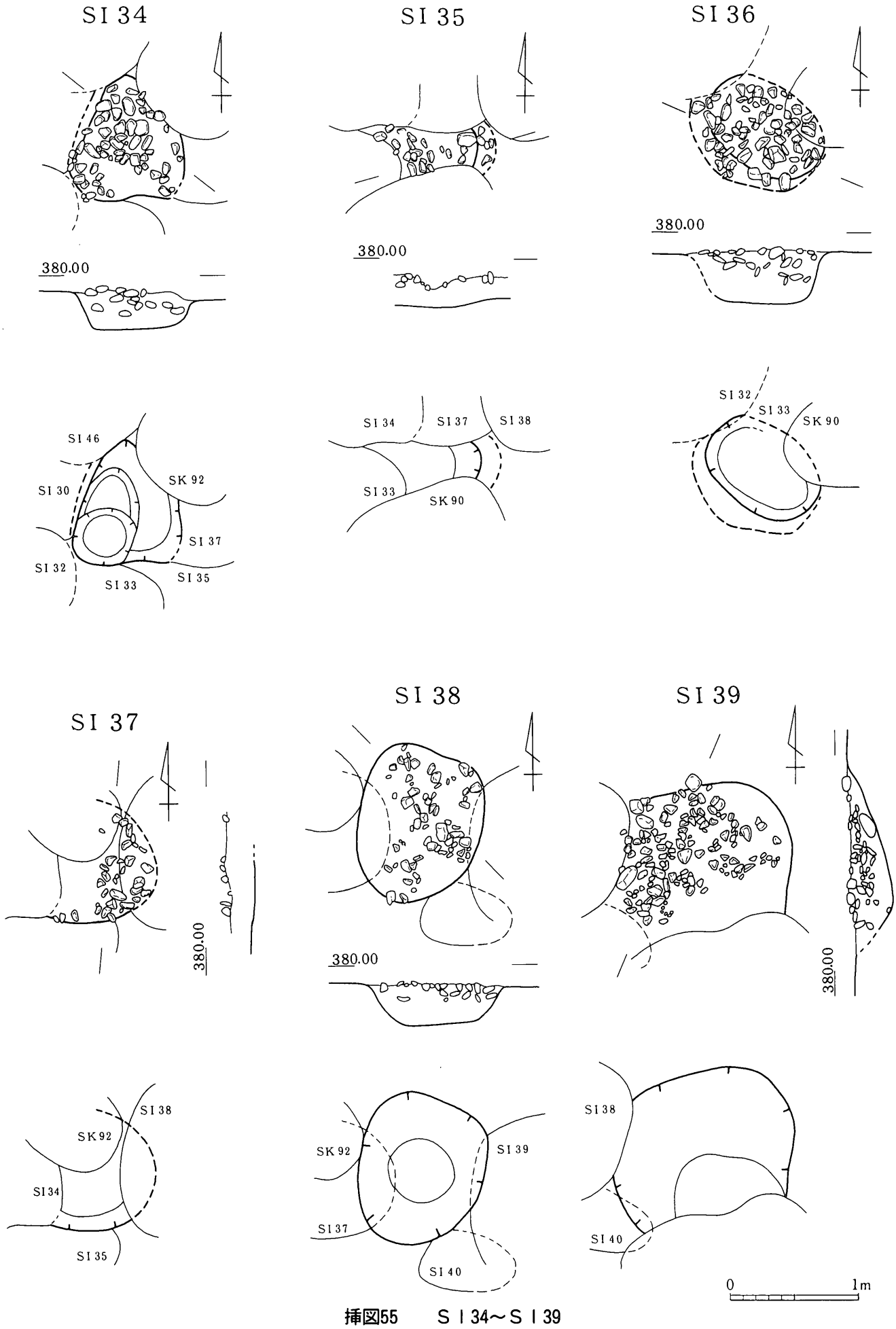
挿図52　S I 17～S I 23



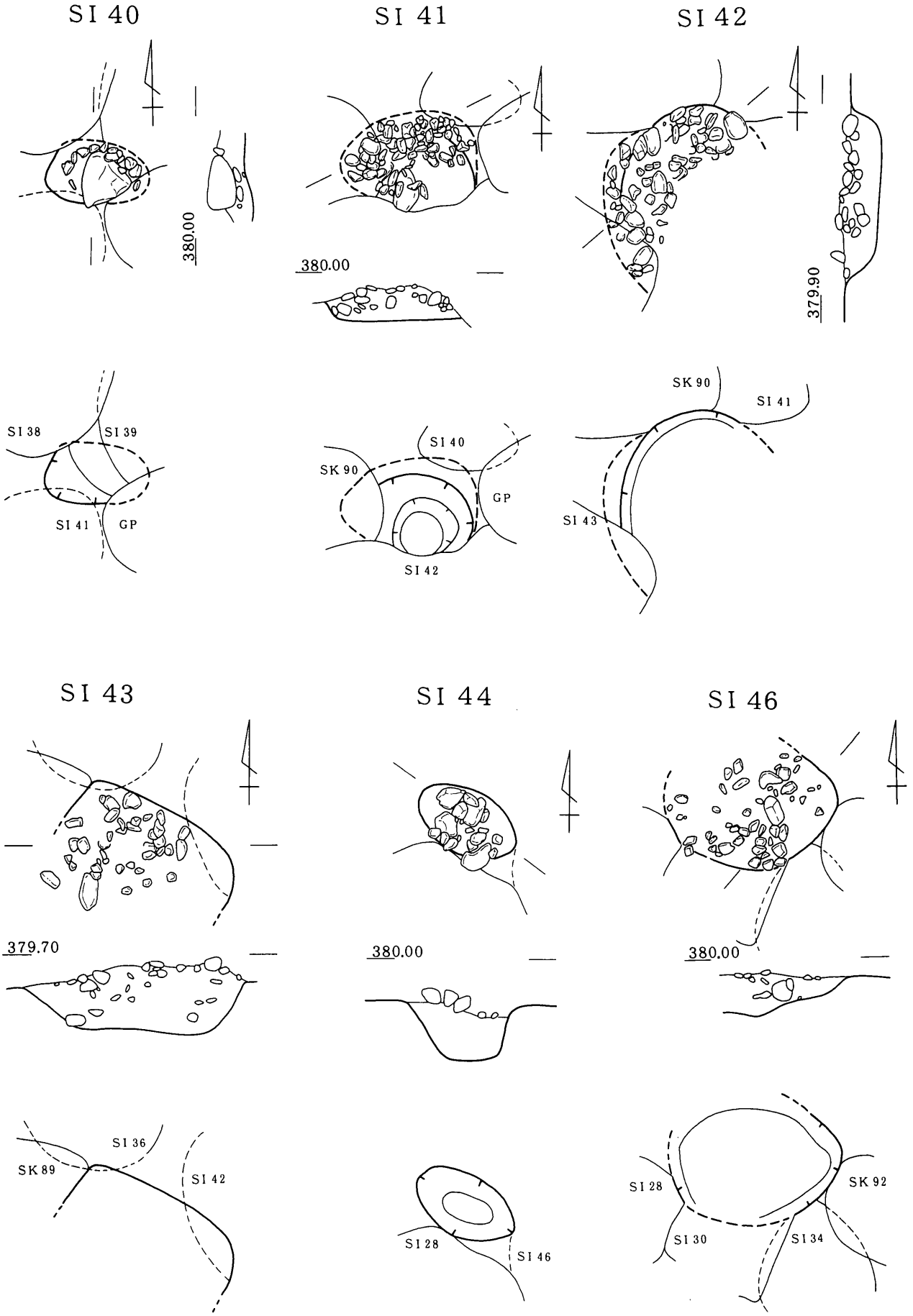
挿図53　S I 24～S I 27



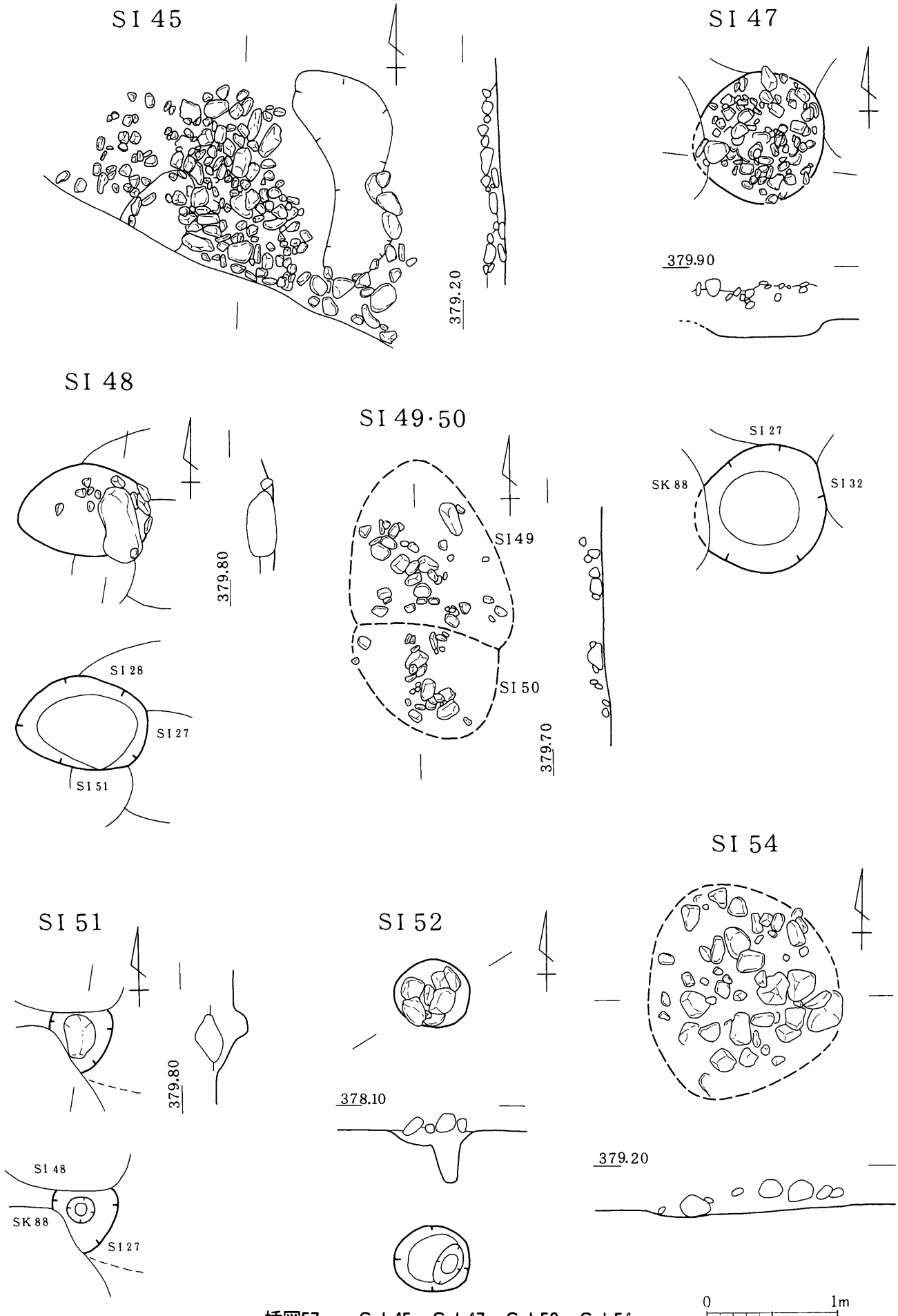
挿図54　　S I 28～S I 33



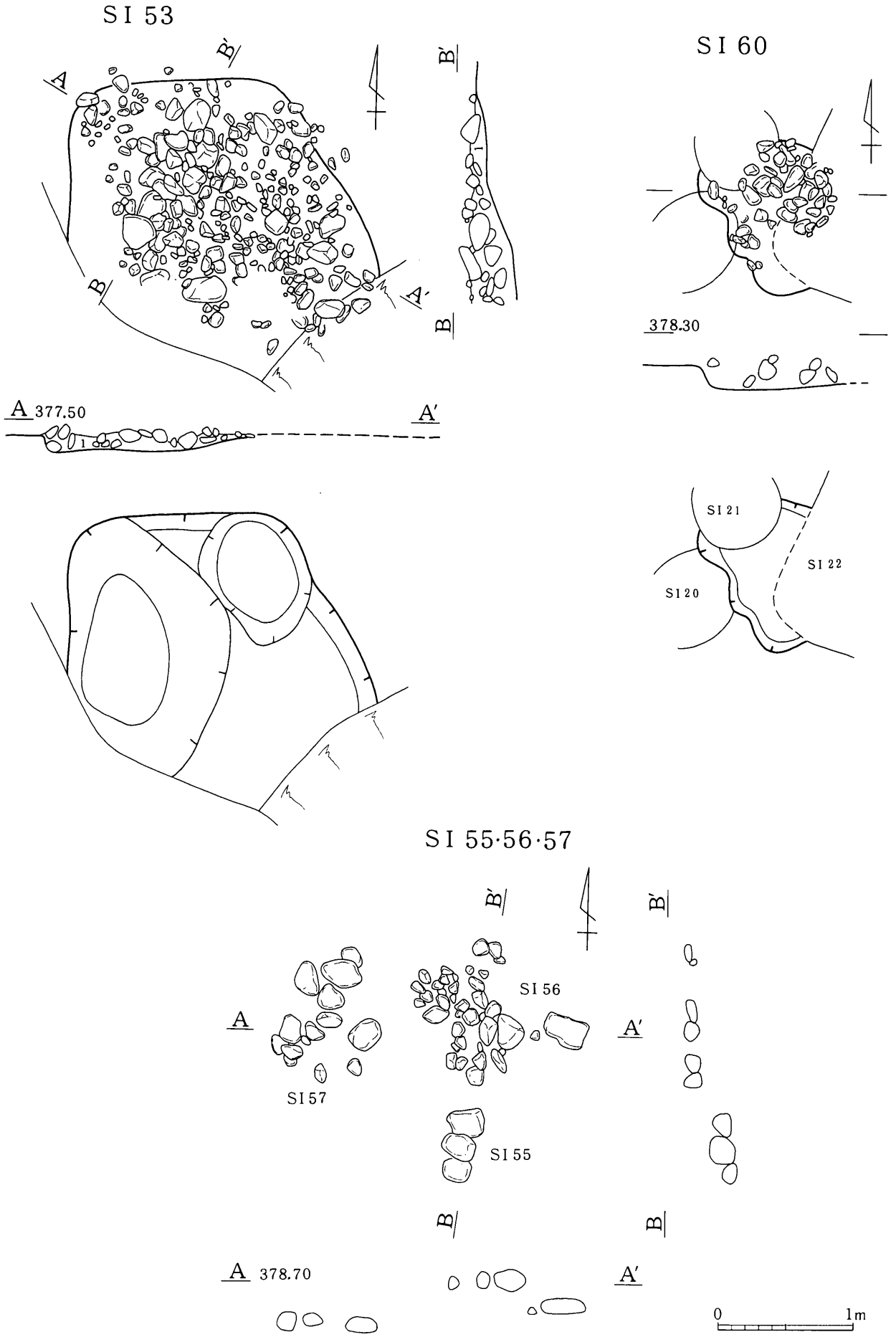
挿図55　　ＳＩ34～ＳＩ39



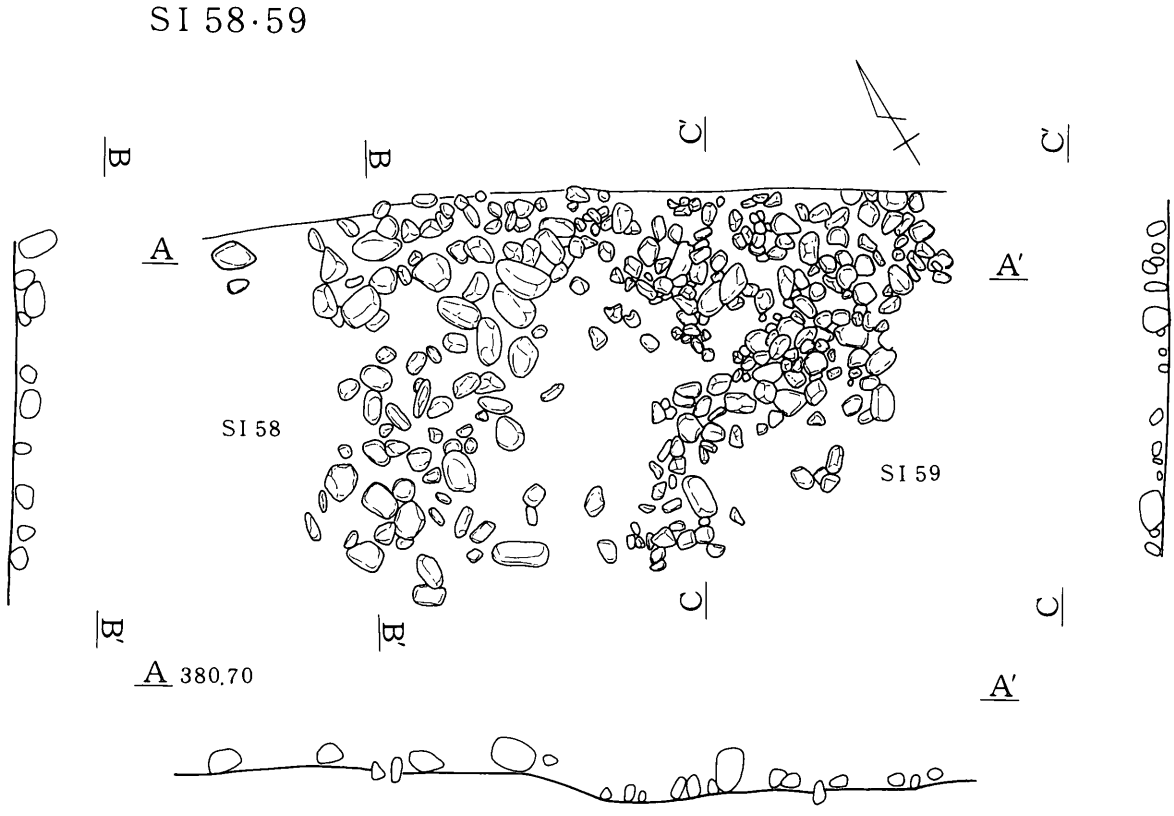
挿図56　S I 40～S I 44・S I 46

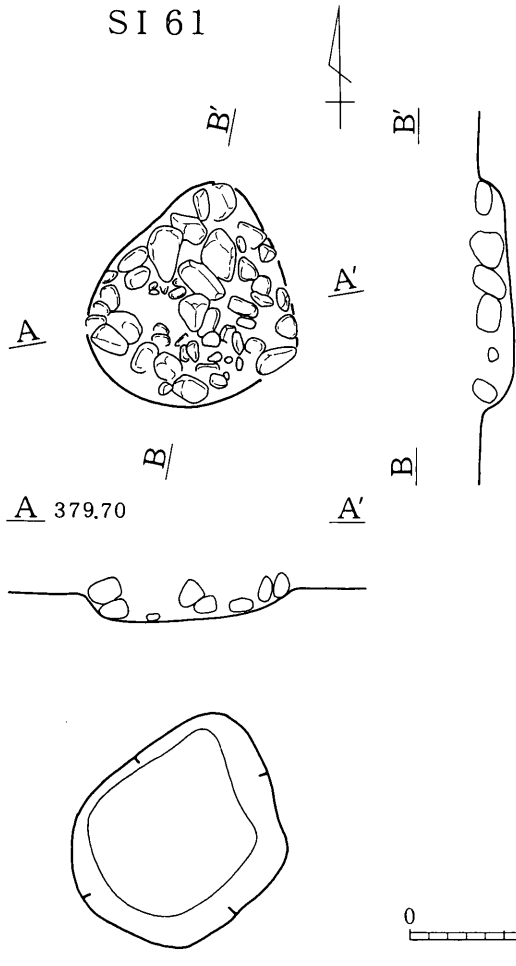


挿図57　S I 45・S I 47～S I 52・S I 54



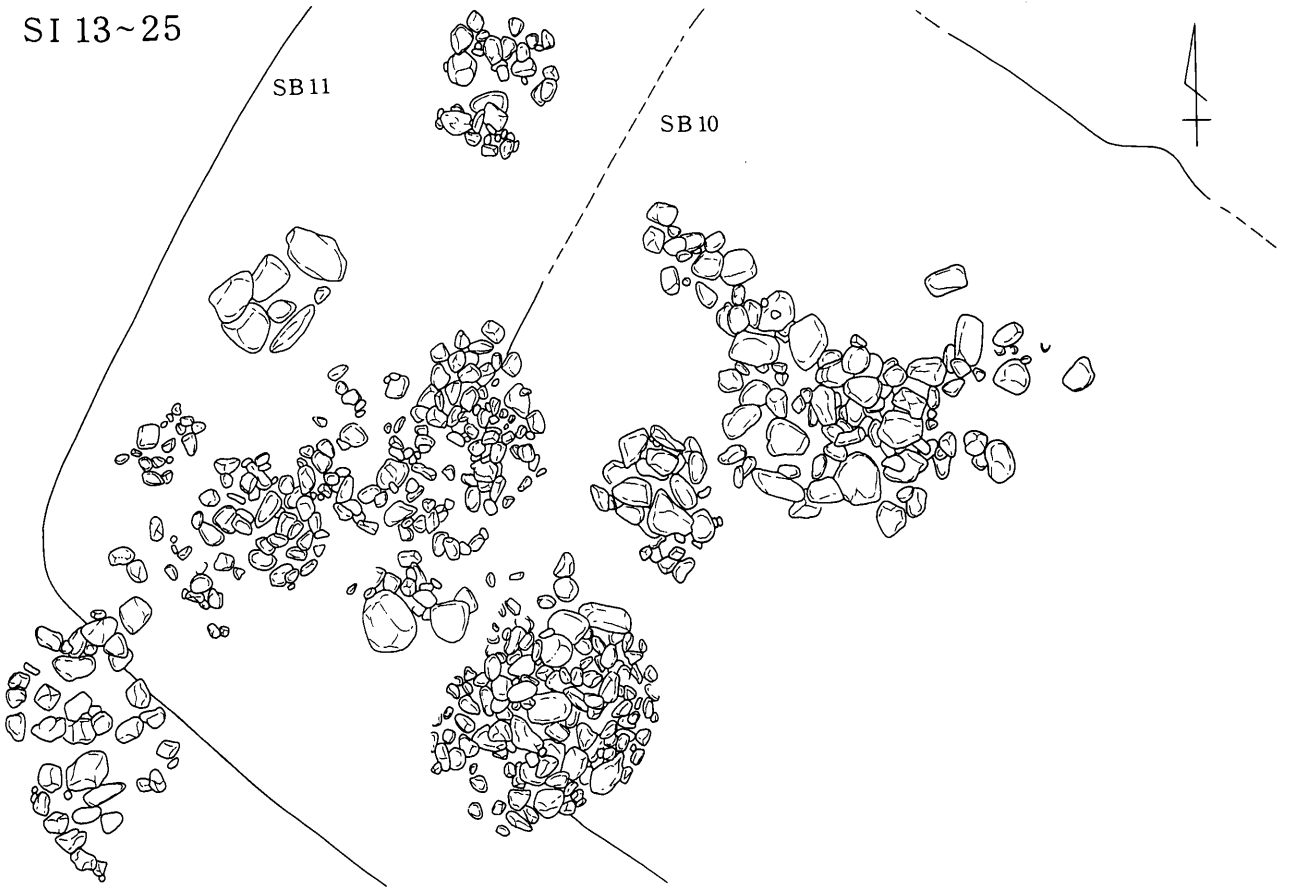
挿図58　S I 53・S I 55～S I 57・S I 60





挿図59　S I 58・S I 59・S I 61

SI 13~25



SI 27~51

挿図60　　S I 13～S I 25、S I 27～S I 51

(6) 集石墓・集石

ＳＩ01は大きな平たい礫や焼けた礫からなる。多量の炭・焼骨がある。ＳＫ40の上部で確認され、分布がＳＫ40とずれることから、別遺構と判断された。ＳＫ40内に炭が含まれるが、ＳＩ01掘り方を掘り切っていないことが原因と考えられる。「熙寧元宝」が出土したことから中世に位置づくと考えられる。ＳＩ03は長辺65cmほどの礫が上部にあったが、検出位置からみると坑のほぼ中央、長軸方向と揃っていることから、立てられてはいなかったと考えられる。内部から焼骨・永楽通宝が出土しており、火葬骨を納め、その上を20～40cm程の礫で被い、さらに大きな礫を墓標代わりに置いたものと考えられる。ＳＩ06は前項で触れたように、近世の土葬墓と考えられる。出土した銭貨には穿に通した繊維が遺存している。ＳＩ07はやや扁平な石を不整長方形に立て並べている。ＳＩ26は形態が特異で目を引くが、機能あるいは用途等については不明である。ＳＢ38付近の耕土下部には耕作の際出てきた礫を集めて埋めた箇所が数ヶ所あり、その可能性も考慮して精査したが、礫を埋め立てたものは埋土が柔らかなのに対して、本址の礫間の土は比較的締まっていたことから、遺構として取り扱った。ＳＩ53の西側は大きな礫が井桁状に組まれていた。下部１段目は長軸を同一方向に揃え、２段目はこれとは直交方向に大きめの礫を据え、上段には２段目と直交方向にさらに礫を置いている。

ＳＩとして把握したものには、ＳＩ02・ＳＩ03・ＳＩ05・ＳＩ06・ＳＩ10・ＳＩ11のように近接しているものと、ＳＩ13～ＳＩ25等・ＳＩ27～ＳＩ51等群集しているものがある。後者のうち、ＳＩ27～ＳＩ51等はＳＫ85とほぼ同時期と考えられ、14世紀代に位置づく。

なお、ＳＩ32より硬砂岩製打製石斧（第20図３）、ＳＩ48より変成岩素材と思われる磨製石斧片（同４）が出土した。

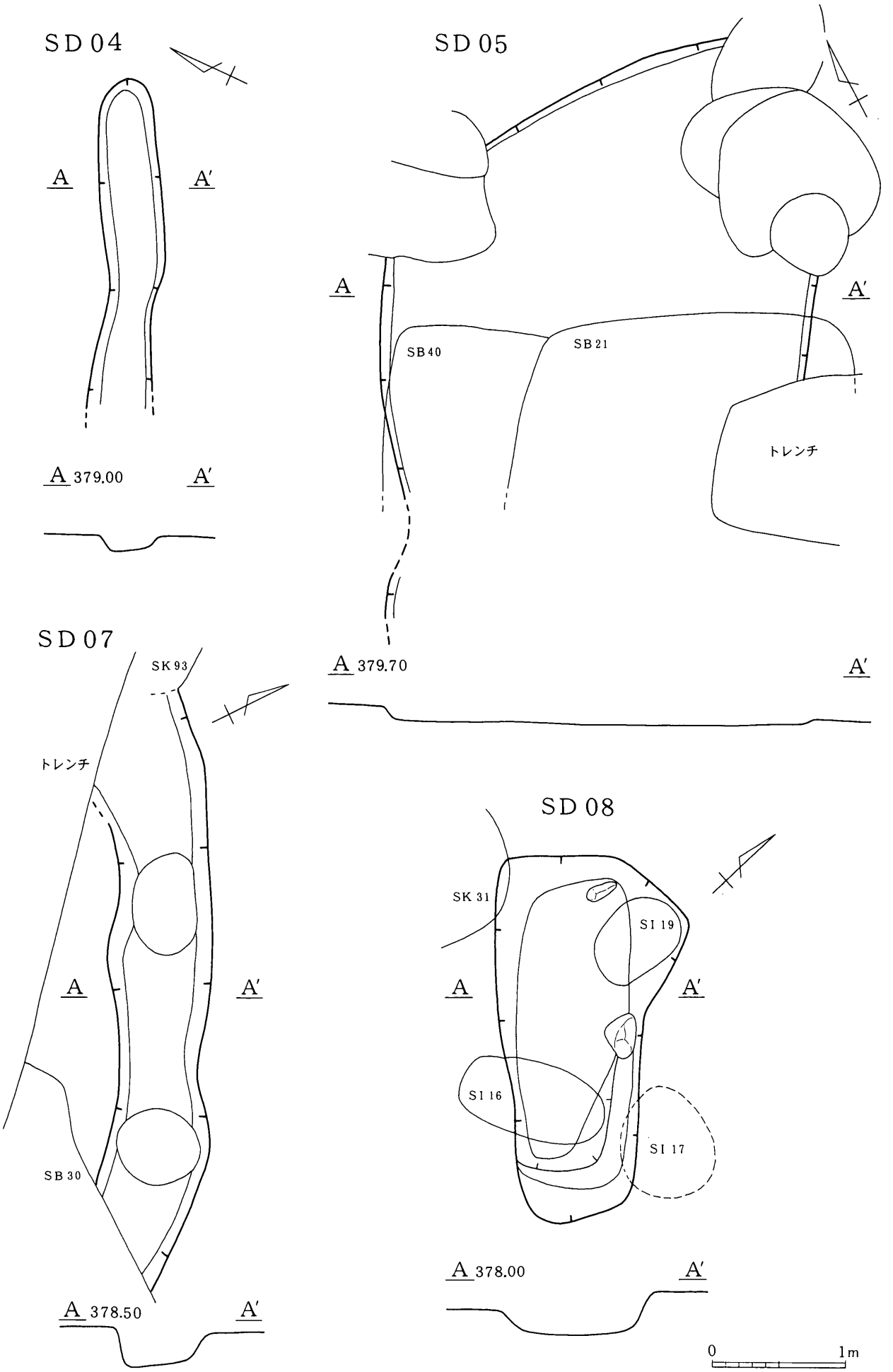
(7) 溝址・溝状址

ＳＤ05は底面が平坦であるが、不整形で付属施設等と考えられるものがないため、ＳＤとした。硬砂岩製の打製石器（第20図５）が出土した。ＳＤ06はそのすぐ西側にあった開田による段差のため、ＳＢ37調査に先行して把握した。整理作業時に、ＳＢ38周溝の可能性もあると考えた。ＳＤ07はごく一部分を把握したのみで周溝墓の周溝の可能性も否定できないが、断面Ｕ字状を呈し、周溝墓の断面形とは異なる。古墳時代中期後半から後期にかけての遺物が出土している。ＳＤ09はＢＨ06付近で埋土上層に礫があり、また底面に凹凸があることから、自然流路と考えられる。ＳＤ10は水の流れた痕跡はない。浅く、明確な掘り込みが確認されないことから、畦畔が土圧により押し潰された跡の可能性が考えられる。硬砂岩製打製石器（同６）が出土した。

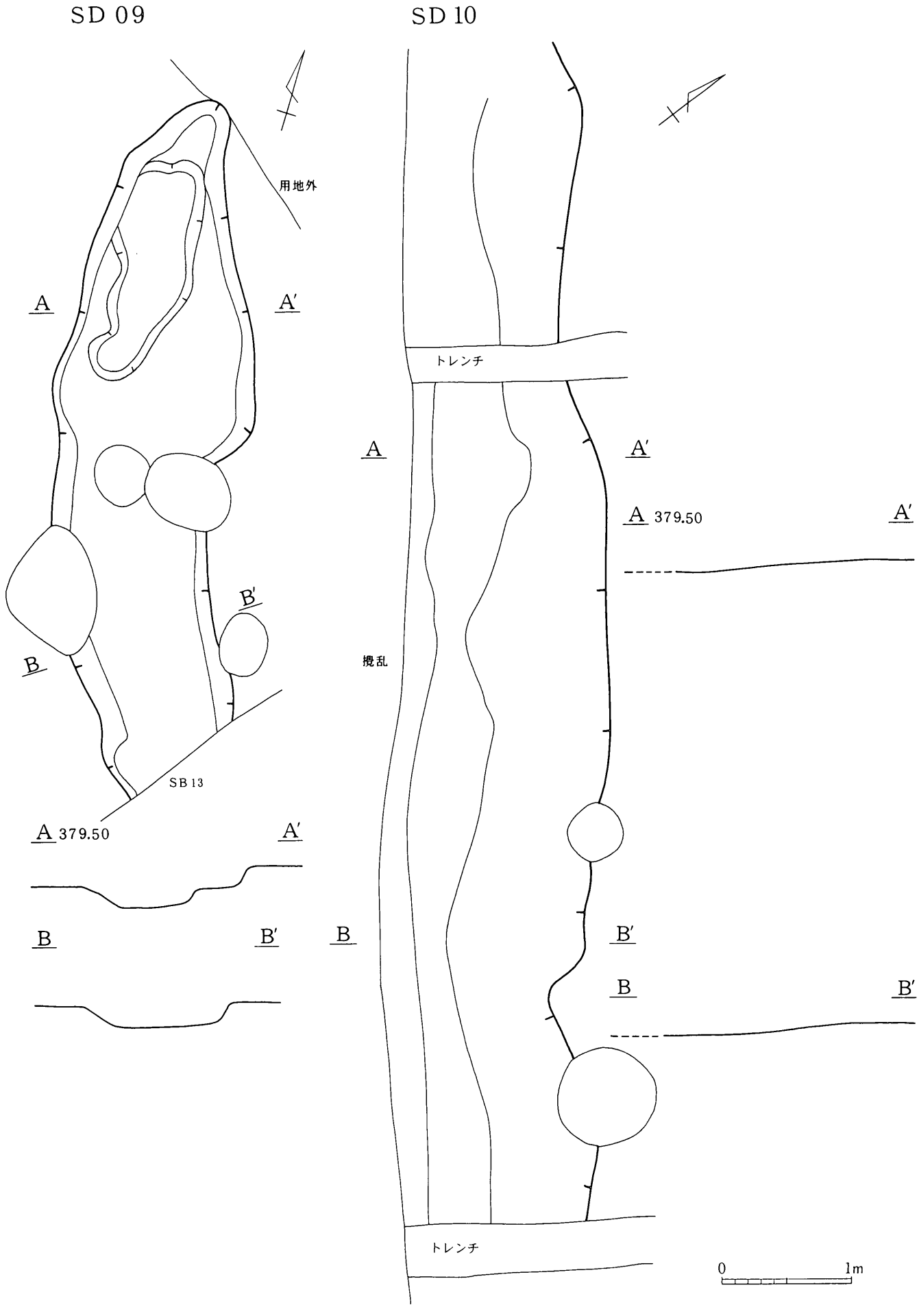
(8) 埋設土器

①ＳＸ01（挿図63、第14図４）

［検出位置］ＢＯ40付近　［規模］－×－m、深さ－cm　［床面積］　－　㎡　［形態］不明　［主軸］　－　［重複］ＳＢ45・ＳＢ46に切られる。新旧関係は遺物の年代観による　［調査所見］耕作の削平により、埋設土器を確認できただけである　［壁］不明　［床］削平されており、確認できなかった　［柱穴］不



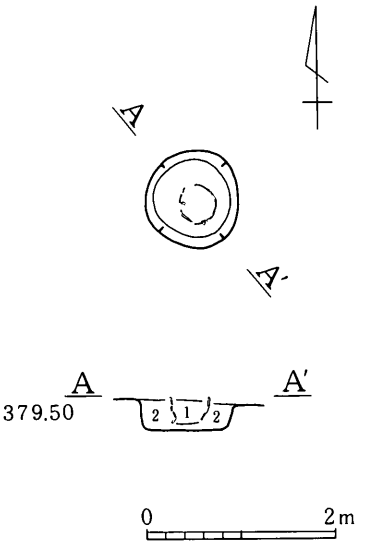
挿図61　ＳＤ04・ＳＤ05・ＳＤ07・ＳＤ08



挿図62　ＳＤ09・ＳＤ10

明　［炉］土器埋設炉の可能性が考えられる。炉縁石があったかは不明　［付属施設］なし。　（伊藤尚志）

［出土遺物］非ロクロ系土師器－甕、弥生時代後期壷　［時期］古墳時代前期前半　［備考］当初ＳＢ47としたが、埋設された土器が古墳時代の土器と考えられることから、埋設土器として扱った。ただ、弥生時代後期終末に位置づくＳＢ44に非ロクロ系土師器－甕（第１図９）が含まれることから、ほぼ同時期の遺構と考えた方が妥当かもしれない。　（馬場保之）



挿図63　ＳＸ01

(9) 小柱穴（挿図64～70）

ＳＴ・ＳＡが把握された一画を中心にグリッド毎に把握した多数の柱穴がある。開田による削平や細長い調査範囲のため、組み合うものが把握できなかったものであるが、規模・形状等からＳＴ・ＳＡの柱穴と考えられるものが多い。

(10)遺構外出土遺物（第14図５～第17図14、第20図７～第23図、第24図４～８、第25図12～23）

第14図５は内面に横位の擦痕、外面に指頭痕が残る無文土器で、器面に空気が抜けたような孔がある。胎土・焼成から縄文時代草創期土器の一群と考えられる。６は原体ＬＲＬの縦方向回転で縁帯部をもつ。多縄文土器の可能性がある。７は外面を欠損しているが、内面は原体ＬＲが横方向に回転施文される。草創期～早期の表裏縄文土器である。５はＢＱ39、６はＢＰ34、７はＢＱ33付近で出土しておりこの付近に縄文時代草創期の遺構があった可能性が指摘できる。８は乳房状の尖底部で、外面胴部下半に擦痕が残る。早期の押型文土器と考えられる。９～17は胎土に繊維を含む早期後半～前期初頭にかけての土器である。９は波状縁の厚手の土器で、胎土に粗い石英等多く含む。胎土は立野式土器に似るが、文様は明確でない。早期後葉から前期に位置づくと考えられる。10は内外面に条痕が施される。11は胴上部の破片で、弧状に爪形文が配される。10・11は粕畑式と考えられる。12は隆帯上に爪形文が施される。13は隆帯上に平行する爪形文列が施されており、隆帯の上端はミミズ腫れ状を呈している。内面に指頭痕が残る。14は横走および蛇行する隆帯上に爪形文が施され、隆帯の下端がミミズ腫れ状を呈する。内面に横方向の条痕が施された後、ナデ消される。17は外面に擦痕および指頭痕が残る。12～14・17は入海２式と考えられる。15は幅の狭い隆帯上に刺突が施される。早期末葉に位置づくと考えられ、関東の隆帯文系土器の可能性がある。16は痕跡的であるが爪形文が施される。ごく微量繊維を含み、石山式と考えられる。18は前期末葉の晴ヶ峯式、19・20は中期の小破片である。

第14図21～第15図６は弥生時代中期後半の壷、７～26は甕を一括した。小破片が多く不明な点が多いが、恒川式が主体で一部北原式も含まれると考えられる。27～37は後期後半の壷、38～第16図８は甕、９は高坏を掲載した。

第16図10～第17図12は古墳時代の遺物で、一部グリッドの柱穴出土遺物が含まれる。第17図６・７は

内面の調整から蓋と判断した。9は一対の把手状の耳がつく。11は須恵器器台で最下段に三角形、その上段に方形の透かしがつく。

第17図14は摘みを中心に同心円状に細線で文様がつけられる陶器鉄釉土瓶蓋で内面に「尒駄知」の印が押される。瀬戸・美濃系と考えられる。

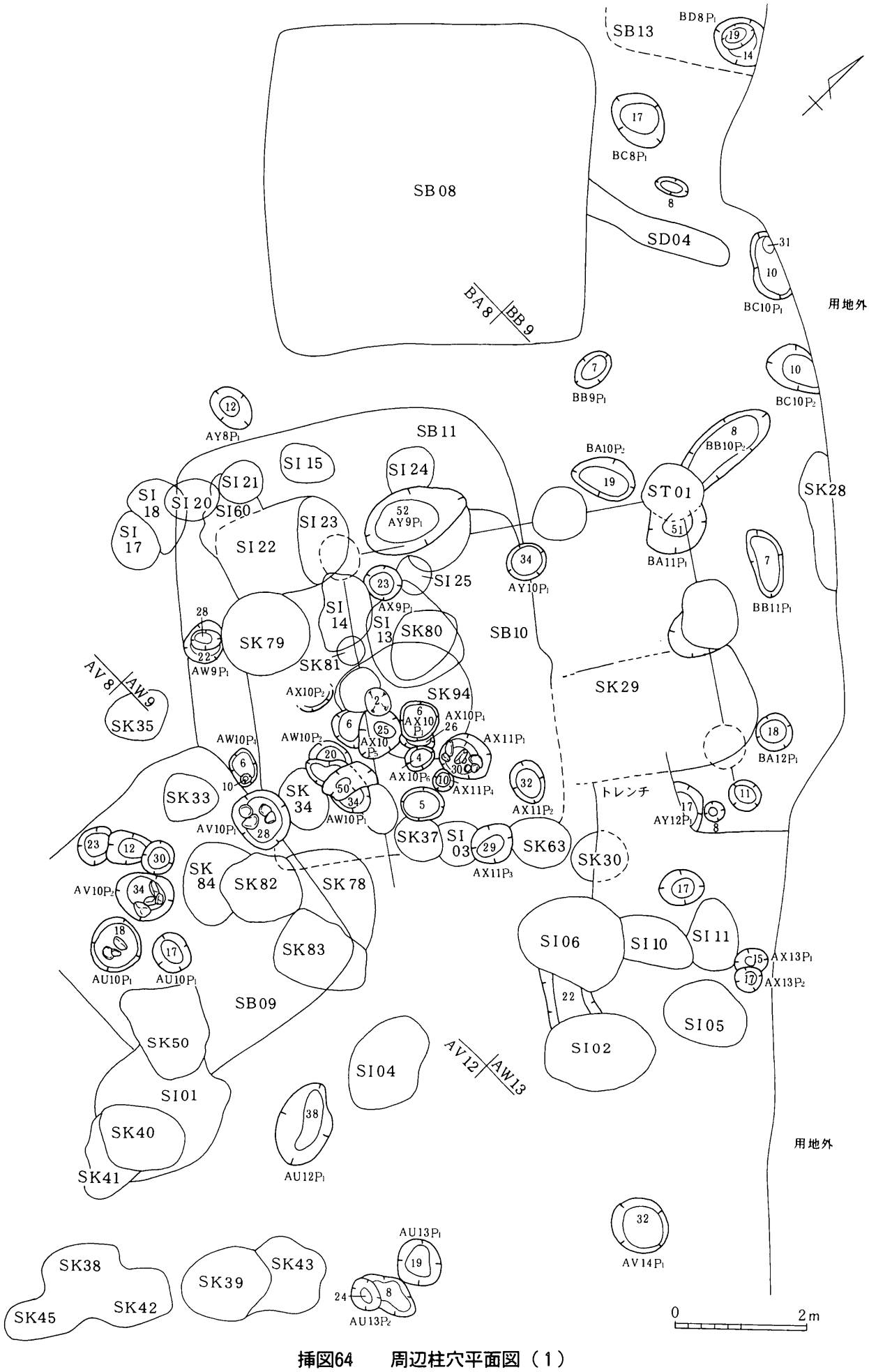
第20図7～第21図6は打製石斧を一括した。いずれも硬砂岩製である。7～第22図1は小型の打製石器を一括、第21図7・10は緑色岩製、他は硬砂岩製である。第22図2～7は横刃型石器で、3は緑色岩、7は安山岩、他は硬砂岩である。8は珪質片岩と思われる石材を使用する扁平片刃、9は緑色岩製磨製石斧、10は同じく緑色岩製の小型の磨製石斧である。11～第23図1は摩面を持つもので、11・12は硬砂岩、第23図1は変成岩と思われる。2・3は硬砂岩製の敲打器、5は変成岩製の敲石、6は硬砂岩製の磨石、7は花崗岩製の台石である。第24図は小型の石器類を一括した。2・3・6は黒曜石製、4は珪岩製、8は水晶を石材としている。7は弥生時代の磨製石鏃の未成品で、珪質片岩を石材に使用している。第25図23は環状の土製耳飾りで、縄文時代晩期のものと考えられる。

遺構名	層	JIS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
SB10　カマド	1層	7.5YR4／2	灰褐	SiC	良	なし	
	2層	2.5Y4／3	にぶい赤褐	SiC	良	なし	
	3層	焼土	－	－	－	－	
	4層	7.5YR4／1	褐灰	LiC	良	なし	
	5層	5YR3／2	暗赤褐	SiC	良	なし	
	6層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	
SB13　焼土	1層	7.5YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	
SB14・19	1層	7.5YR4／2	灰褐	SC	やや良	ややあり	φ5～20cmの礫多く含む
	2層	10YR4／2	灰黄褐	SiC	良	ややあり	
	3層	7.5YR3／1	黒褐	SiC	良	あり	
	4層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	ややあり	
	5層	10YR2／2	黒褐	SiC	良	ややあり	
	6層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	ややあり	
	7層	10YR2／1	黒	SiC	良	あり	
	8層	10YR3／1	黒褐	SiC	良	ややあり	炭を含む
	9層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	ややあり	
SB14　カマド	1層	10YR4／2	灰黄褐	SiC	不良	あり	カマドの粘土
	2層	2.5YR3／3	暗赤褐	SiC	不良	なし	焼土がわずかに混じる
	3層	10YR3／2	黒褐	HC	不良	なし	
	4層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	ややあり	
	5層	2.5YR3／2	暗赤褐	SL	不良	なし	
	6層	10YR4／4	褐	SiC	不良	なし	地山の砂が混じる
	7層	7.5YR3／2	黒褐	SiC	不良	なし	
	8層	10YR3／3	暗褐	SiC	不良	ややあり	焼土が混じる
	9層	2.5YR3／1	暗赤灰	SiC	不良	ややあり	焼土がわずかに混じる
	10層	5YR3／1	黒褐	SiC	不良	ややあり	
	11層	焼土	－	－	－	－	
	12層	10YR4／2	灰黄褐	SiC	不良	あり	1層のブロック（混じり）
SB16　カマド	1層	2.5YR3／1	暗赤灰	SiC	良	ややあり	
	2層	2.5YR4／2	灰赤	LiC	良	あり	

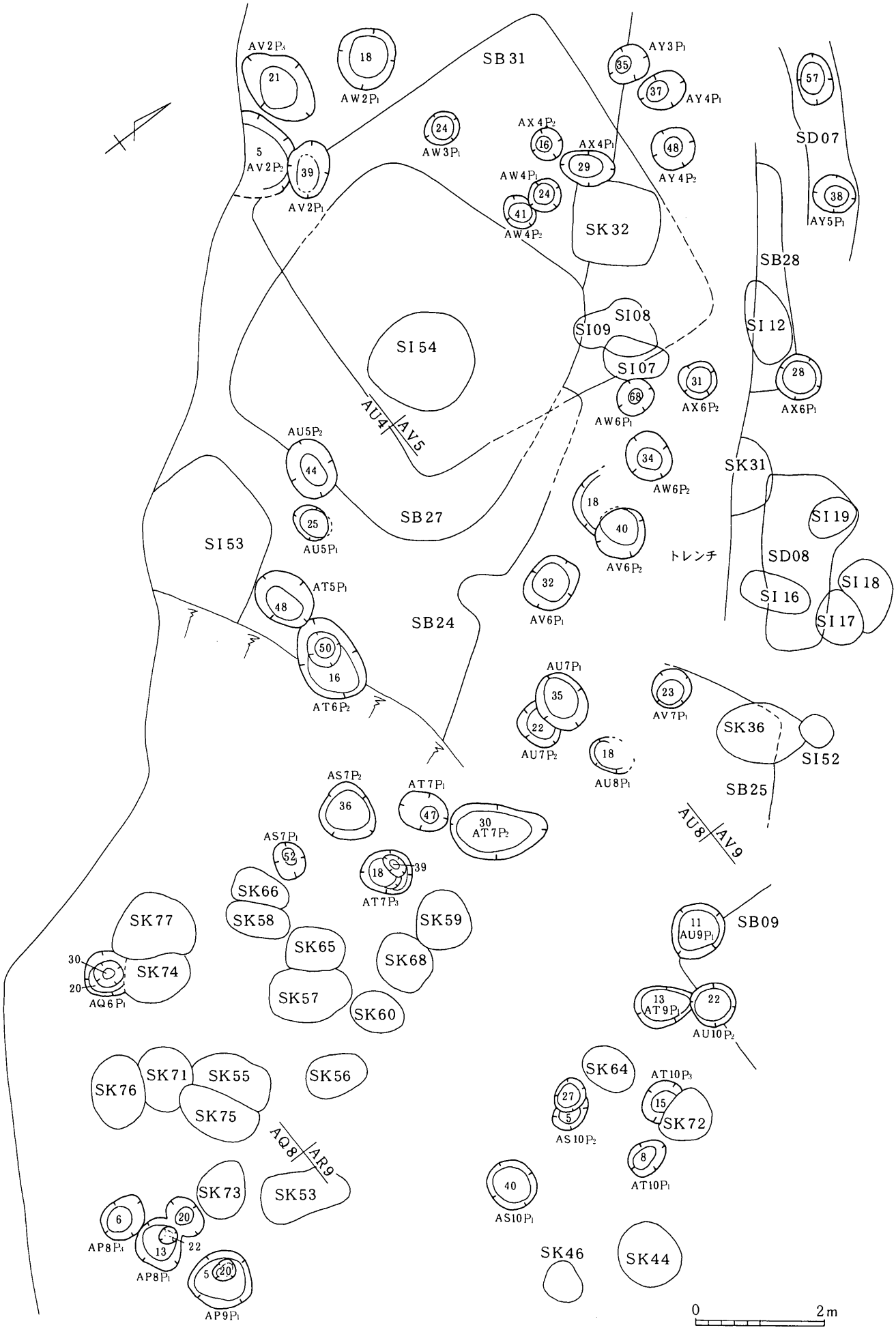
表4　土層図注記（1）

遺構名		層	ＪＩＳ標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
SB16	カマド	3層	5YR3／1	黒褐	SiC	良	ややあり	
		4層	焼土	―	SiC	良	ややあり	
		5層	10Y3／2	オリーブ黒	SiC	良	ややあり	
		6層	5Y3／2	オリーブ黒	HC	良	あり	袖構築材
SB20	カマド	1層	5YR4／3	にぶい赤灰	LiC	不良	あり	
		2層	2.5YR4／1	赤灰	LiC	良	ややあり	
		3層	10YR3／2	黒褐	LiC	良	ややあり	焼土・炭・灰を含む
		4層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	ややあり	
SB24	カマド	1層	7.5YR3／2	黒褐	SiC	不良	なし	
		2層	2.5YR3／1	暗赤灰	SiC	不良	なし	
		3層	10YR3／2	黒褐	SiC	不良	なし	
		4層	10YR3／3	暗褐	SiC	不良	なし	
		5層	7.5YR3／3	暗褐	SiC	不良	なし	
		6層	2.5YR3／3	暗赤褐	SiC	不良	なし	
		7層	10YR3／4	暗褐	SiC	不良	なし	
SB25	カマド	1層	7.5YR5／3	にぶい褐	SiC	良	なし	
		2層	10YR5／4	にぶい黄褐	SiC	良	なし	焼土を含む
		3層	7.5YR4／3	褐	SiC	良	なし	焼土を多量に含む
		4層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	ややあり	
		5層	7.5YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	焼土をやや多く含む
		6層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	焼土を少量含む
		7層	10YR4／2	灰黄褐	SiC	良	なし	
		8層	10YR4／2	灰黄褐	SiC	良	なし	焼土を少量含む
		9層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	
SB27	カマド	1層	7.5YR4／3	褐	SiC	不良	なし	
		2層	10YR3／2	黒褐	SiL	不良	なし	
		3層	10YR3／4	暗褐	SiC	不良	なし	
		4層	10YR4／4	褐	SiC	不良	あり	
		5層	10YR4／2	灰黄褐	SiC	不良	なし	
SB29	カマド	1層	2.5YR3／2	暗赤褐	SiC	良	なし	
		2層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	
		3層	7.5YR3／3	暗褐	SiC	良	なし	焼土を多量に含む
		4層	10YR5／3	にぶい黄褐	SC	良	なし	
		5層	7.5YR3／1	黒褐	SiC	良	なし	
		6層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	焼土を少量含む
		7層	7.5YR3／1	黒褐	SiC	良	なし	
SB41	カマド	1層	10YR2／3	黒褐	SiC	やや良	なし	
SB44	炉	1層	10YR3／2	黒褐	SiC	不良	なし	
		2層	10YR3／2	黒褐	SiC	不良	なし	
SB62		Ⅰ層	耕土	―	―	―	―	
		Ⅱ層	7.5YR4／1	褐灰	SiC	良	なし	
		Ⅲ層	10YR2／3	黒褐	SiC	良	なし	
		1層	10YR2／3	黒褐	SiC	良	なし	炭を含む
		2層	2.5YR3／1	暗赤灰	SiC	良	なし	
		3層	10YR3／1	黒褐	SiC	良	なし	
SI01		1層	10YR1.7／1	黒	SC	不良	なし	
		2層	10YR2／2	黒褐	SC	不良	なし	3層が混じる
		3層	10YR3／4	暗褐	SC	不良	なし	ブロック
SI02		1層	10YR2／2	黒褐	SC	不良	なし	
		2層	10YR2／1	黒	SC	不良	なし	
		3層	10YR3／2	黒褐	SC	不良	なし	
		4層	10YR3／4	暗褐	SC	不良	なし	
		5層	10YR3／3	暗褐	SC	不良	なし	
SI53		1層	10YR3／2	黒褐	SiC	良	なし	
SX01		1層	2.5Y4／1	黄灰	SiC	良	ややあり	
		2層	10YR3／1	黒褐	SiC	良	なし	

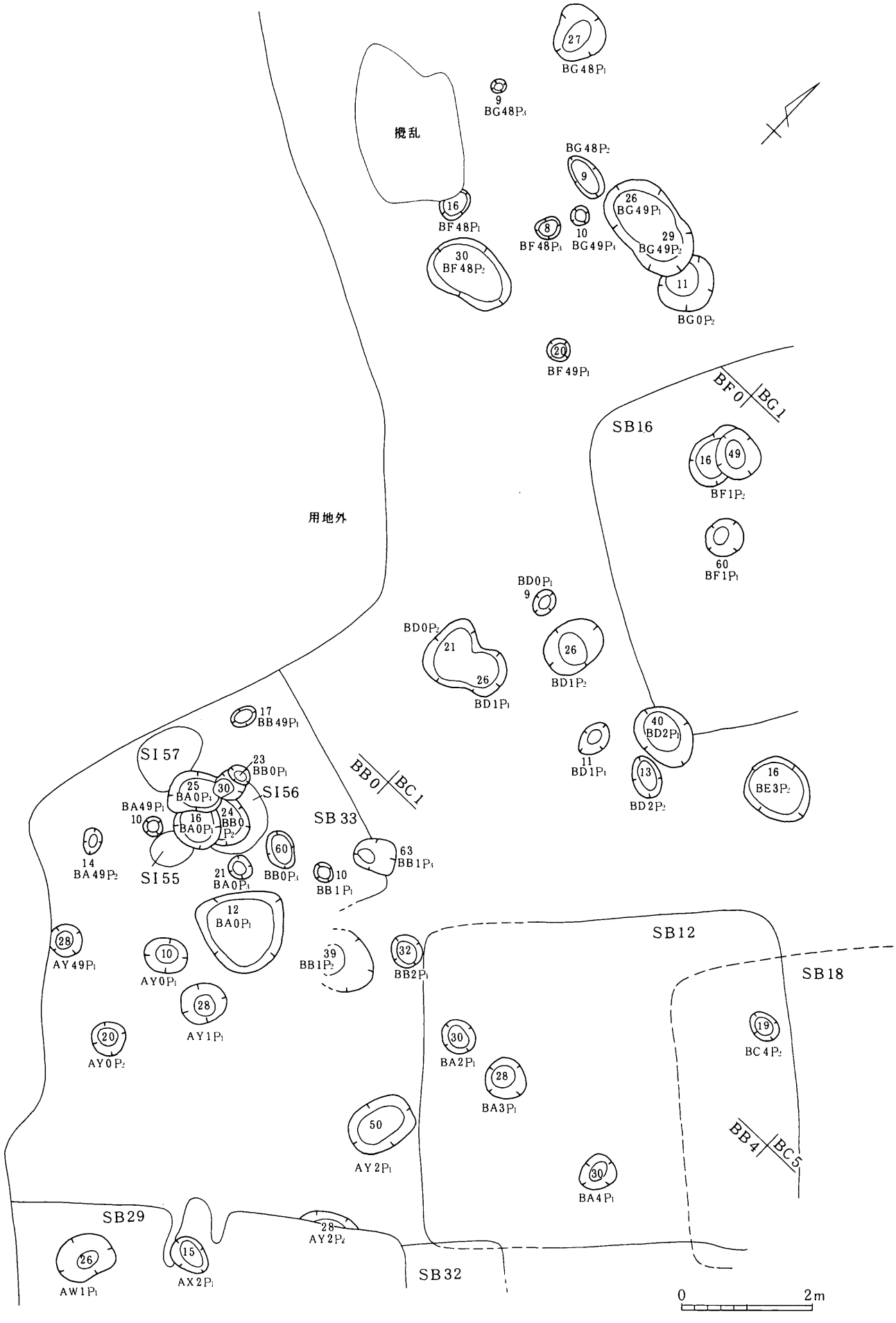
表5　土層図注記（2）



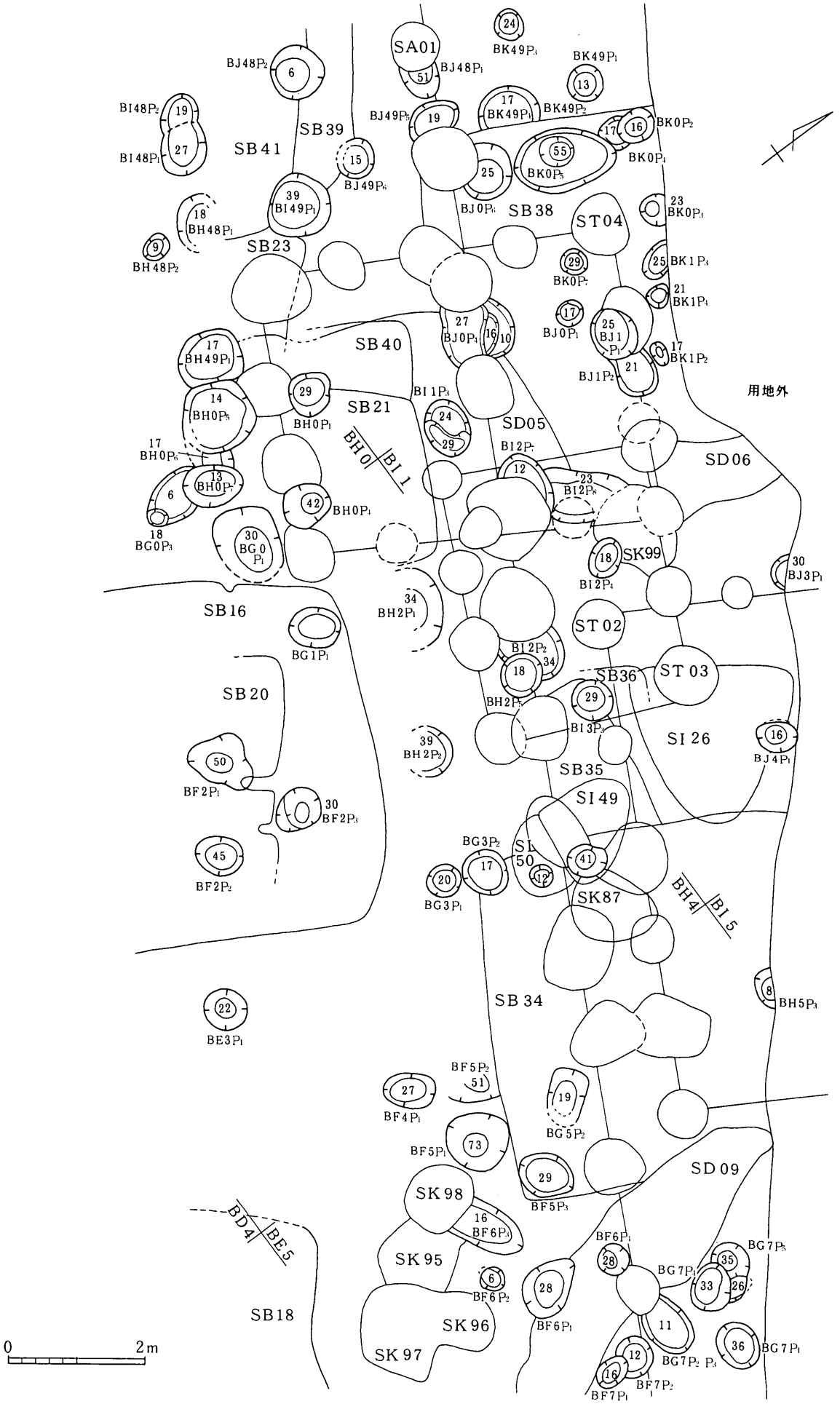
挿図64　周辺柱穴平面図（1）



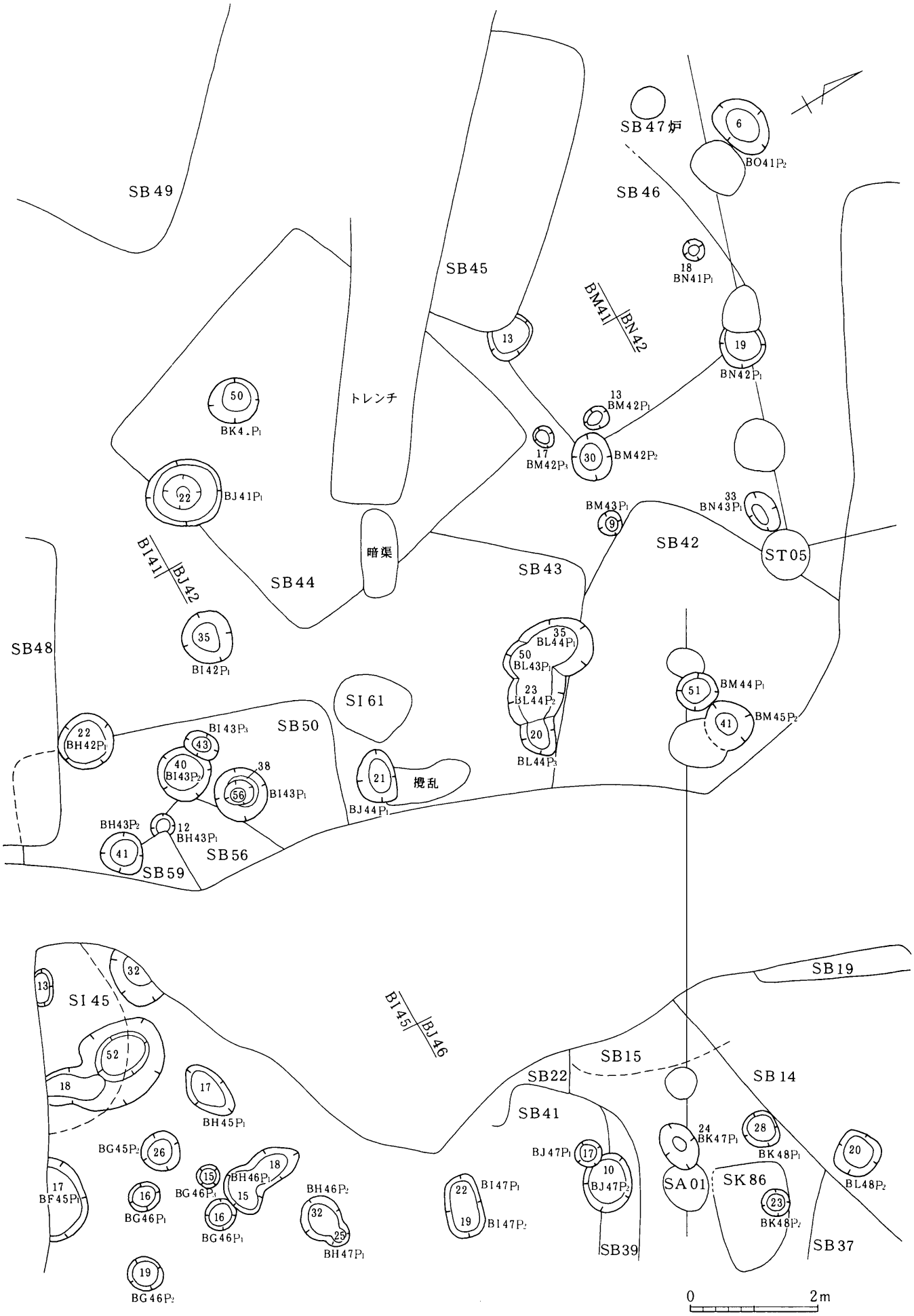
挿図65　周辺柱穴平面図（2）



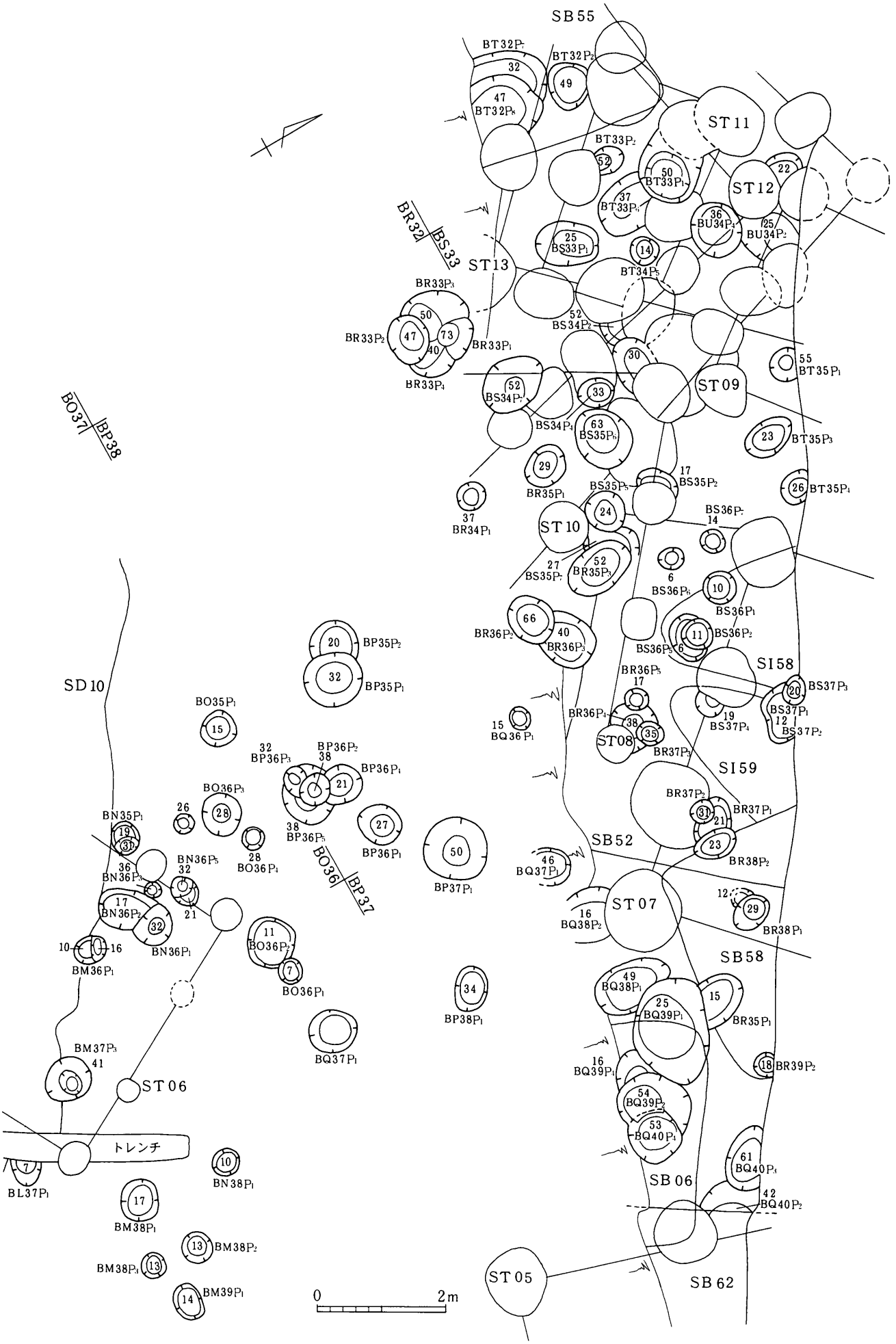
挿図66　周辺柱穴平面図（3）



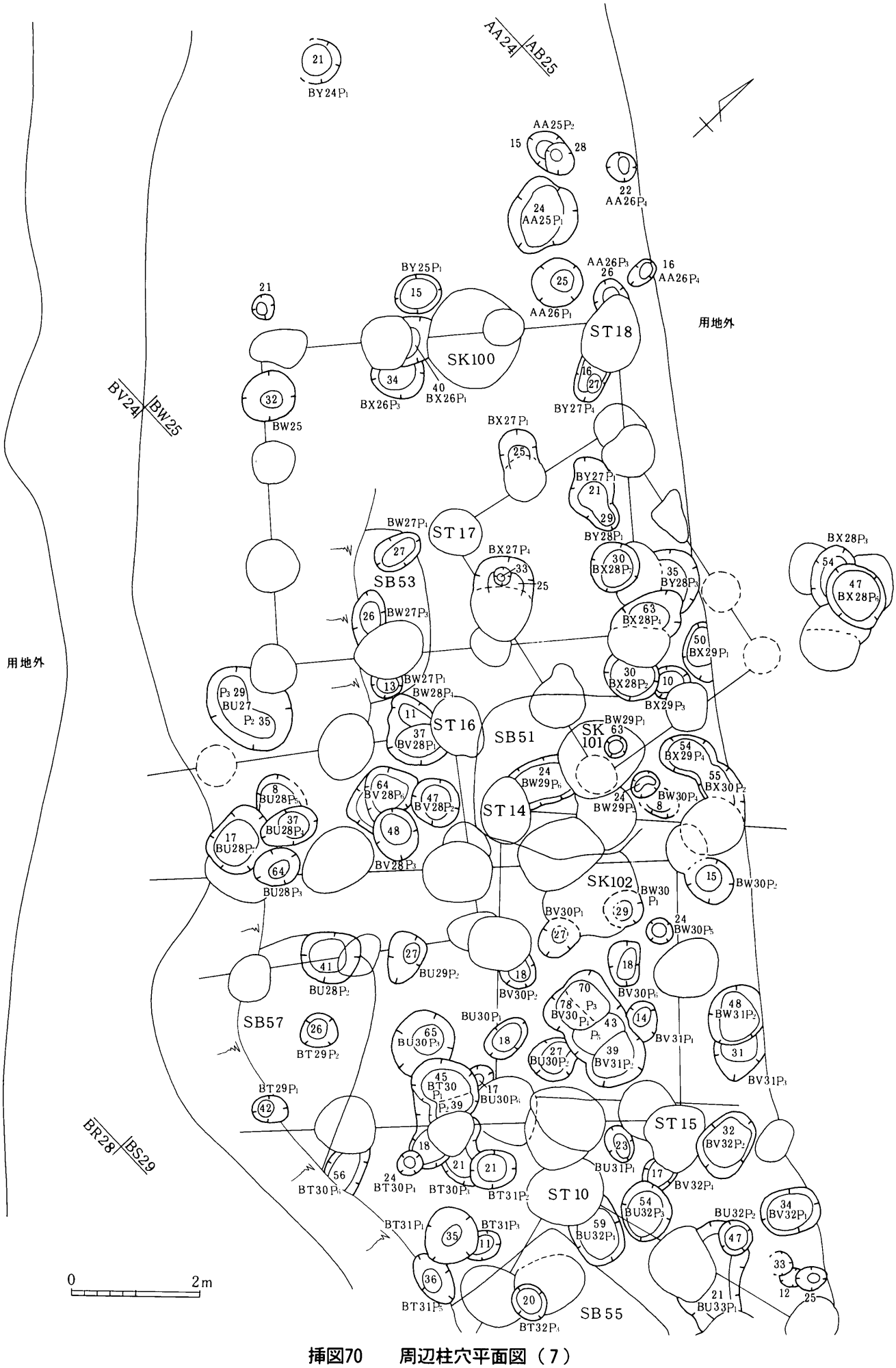
挿図67　周辺柱穴平面図（4）



挿図68　周辺柱穴平面図（5）



挿図69　周辺柱穴平面図（6）



挿図70　周辺柱穴平面図（7）

第V章　総　括

これまでみてきたとおり、調査の結果、古代以前は集落、そして中世以降は墓域として一帯が利用されてきた様子が窺える。時代毎に概括し課題を挙げてまとめとしたい。

1．縄文時代

今時調査では、縄文時代の遺構は確認されなかったものの、縄文時代草創期から晩期にかけての遺物が断片的ながら出土している。

草創期の遺物は地区内では初めての確認であり、こうした低位段丘からの該期の遺物出土として、座光寺新井原石行遺跡（岡田正彦　1986）・上郷宮垣外遺跡（飯田市教委　2000）・松尾上溝遺跡（下伊那誌編纂会　1991）・川路殿村遺跡（未報告）からの有舌尖頭器がある。低位段丘での人間活動の痕跡が補強されたといえる。市内ではこの他、中・高位段丘上では、座光寺美女遺跡で絡条帯圧痕文と爪形文の施文された土器がＳＫ525から出土した他、伊賀良北方北の原遺跡・同中島平遺跡等からの遺物出土がある程度で、当時の生活の具体的な姿を描くにはほど遠い状況といえ、今後の資料集積を待たなければならない。

続く早期～晩期についても、草創期同様断片的な遺物出土がある程度で、早期前半の押型文土器期、早期末葉～前期初頭、前期末葉、中期後葉、晩期前葉の各時期の遺物が認められる。残念ながら遺構は確認されておらず、具体的な生活の様子は把握できない。しかし、本遺跡周辺では一段上位に立地する上の坊遺跡や川路今洞遺跡（下伊那誌編纂会　1991）で前期後葉の集落の一画が調査されているし、本遺跡でも公会堂建設に先立つ調査で中期中葉の遺物が多出している。また、市内では早期には低位段丘上に集落がみられるようになることから、小規模かもしれないが、これら各時期に調査地点周辺で集落が営まれた可能性を指摘できる。

2．弥生時代

調査された遺構は後期終末の住居址ＳＢ44のみであるが、中期後半および後期後半の遺物が集中する部分が何箇所かある。これら遺物の出土状況からみる限りでは、当時の集落景観は散在的であったのか、それとも集落内の周縁的状況であるのかは判断がつかない。

これまでの本遺跡の調査結果では、該期の遺構は具体的に把握されておらず、平成11年度調査部分でも断片的に後期前半から後半の遺物が出土しているのみである。しかし、今回の調査箇所より低位にあたる川路井戸下遺跡（飯田市教委　2001）で中期阿島式期の住居址３棟や後期後半の中島式期の住居址６棟が調査されているのをはじめ、同一段丘面にあたる殿村遺跡・辻前遺跡でも住居址が調査されており、本遺跡内においても相当規模の集落があったのではないかと考えられる。

3．古墳時代

今次調査地点では、主に古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居址36棟・掘立柱建物址17棟の集落の一部を調査した。平成11年度の調査地点でも、同時期の住居址４棟が調査されている。

また、久米川対岸の久保田遺跡では古墳時代中期の集落址が調査されており、正清寺古墳の築造前後に集落は廃絶している。久保田遺跡の存続期間等詳細については平成14年度に予定されている本報告を待ちたいが、正清寺古墳・御猿堂古墳・馬背塚古墳が同一勢力により築造されたと考えられていることから、両集落間には緊密な関係があったことが考えられる。久保田遺跡の集落存続期間が本遺跡のそれに先行するものであることは、正清寺古墳（5世紀末～6世紀初）→御猿堂古墳（6世紀前半～中頃）→馬背塚古墳（6世紀後半）という年代観と整合する。すなわち正清寺古墳築造により意図的に集落が移されたことも考えられ、次代には上川路に前方後円墳が築造されたことと連動した事象とも捉えられる。

ＳＴ06以外の17棟の掘立柱建物址と一本柱列は、古墳時代中・後期の竪穴住居址より新しいものの、残念ながら詳細時期は不明である。竪穴住居址が6世紀代でほぼ終わっていることから、これに引き続く可能性が考えられ、集落内での当該地点が単なる居住域から変化した姿も推察される。こうした推定を可能とするものとして、本地域ではこれ以降に馬背塚古墳前方部石室築造（6世紀末～7世紀前半）および上川路廃寺の建立という有力勢力が存続する状況がある。段丘端部という地形状況や一本柱列や掘立柱建物址の分布状況からみて、やはり集落の縁辺部分の調査にとどまった感は否めず、全体的な集落景観等を復元する術はないが、一つ特徴的なこととして、焼失（あるいは焼却かもしれないが）建物が多いことが挙げられる。

今次調査地点には、これまで古墳の存在は知られていない。新屋敷古墳・町並古墳・開善寺境内古墳からもやや離れている。しかし、断片的であるが円筒埴輪片の出土もあり、調査地点からそう離れていない部分に古墳が存在した可能性も指摘できる。

4．中世－火葬を中心として－

調査地周辺は現在でも「三味処（さんましょ）」と呼ばれ、かつて後産や行き倒れの人を埋葬したといわれている。三味は三昧からの転化と考えられる。サンマ（あるいはサンマイ等）は墓地を表す言葉であり、葬送の場における念仏三昧が墓地の呼称になっていったと考えられている。三昧は本来精神の散乱を静める修行をさすが、平安時代中期以降には浄土教思想が高揚し、それに伴って念仏三昧が盛行した（新谷尚紀　1991)。死者は穢れており、そのままでは浮かばれないとして、「火葬による鎮魂、浄化儀礼を施」したのが三昧聖であったといわれる（塩入伸一　1988)。この三昧聖については、「関西地方では、本来律寺開山墓などの墓守法師であった斎戒衆（下級の聖）が次第に特権的な葬送営業権を獲得していった過程が判明しており、墓地に伴う墓寺が活動の場と考えられる。」（桃崎裕輔　1995)、「律宗は勧進システムを整備していく過程で前代からの念仏聖なども包括し、一部は特殊化した葬送集団を形成し火葬の担い手となった。当初の活動は寺院付属の墓寺の管理であったが、末寺の全国拡大や安定社会の中での造墓階層の拡大の中で石工・大工・瓦工・仏師などとも連動して各地に三昧と墓寺を形成した。（中略）こうしたシステムは他の念仏・禅系宗派や日蓮宗にも取り入れられ、仏教諸宗派は葬送を通じ、地位の上昇した民衆の救済を目指した。」（桃崎　同前）と歴史的展開が明らかにされている。では、今次調査地点に墓所が設けられたのはいつ頃のことであったろうか。

まず、サンマイという地名は墓所における三昧堂から由来するという説がある（佐藤米司　1971）が、そうした堂宇の痕跡は調査された範囲では把握されていない。三昧堂は平安時代に貴族等の上流階級が

建立したものであり、必ずしも三昧堂がそこにあったことを示すのではないだろう。次に、新谷尚紀（1991）は、「サンマイ」という地名が近畿地方を中心に、東は新潟・長野・静岡の各県を結ぶ近畿地方周辺一帯までしか伝播しなかったとし、その時期がおよそ平安時代末から鎌倉期にかけての時期と推定している。この時期は、先の桃崎（1995）によれば、律宗ないし念仏宗派の三昧僧の活動した時期と考えられる。しかし、今次調査地点ではこれに関連する遺構・遺物は見いだすことはできなかった。

では、律宗等に遅れて葬送に関与するようになった禅宗導入以降はどうであろうか。ＳＫ85から出土した蔵骨器は14世紀代の年代が与えられる。長野県内出土の蔵骨器を中心として古瀬戸を集成した藤沢良祐（1979）は古瀬戸蔵骨器が南信地方、特に天竜川流域に多いことを指摘しているが、13世紀代を中心とする製品が多く、14世紀以降の製品が極端に減少するとしている。こうした傾向は東海地方でも同様で、蔵骨器は12世紀末から15世紀後半までみられるが、13世紀後半にピークを迎え以後急速に減少するという（尾野善裕　1995）。本遺跡の場合にも伝世という問題を考慮しなければならないが、下ってもせいぜい15世紀といえる。

また、飯田下伊那地方では、これまで『経塚』とされてきたものの中に中世前半の墳墓群が含まれると考えられ（飯田市教委　1999）、座光寺新井原・石行遺跡や下伊那郡高森町上ノ平遺跡（今村善興　1992、高森町教委　1996）で礫石経・扁平礫が出土している。本遺跡でも、経塚の存否はともかくとして、扁平礫が出土していることからこうした系譜上に位置づく可能性がある。勝田　至（1993）は12～13世紀ごろから経塚が作られるとその周囲に近隣の人々が造墓することにより大きな共同墓地が出現することを指摘しているし、集石墓の起源についてその平面形や経塚の思想的背景、経塚の周囲に集石墓がみられる例があることから、経塚からの発生が考えられている。

さらに、群集する集石墓のうち区画性なく不整形のものについては、東海地方では15世紀を中心に一部16世紀に下るものがあるとされる（瀬戸市埋文センター　1994）。

このような遺構・遺物の年代観や共同墓地の成因からすると、今次調査された火葬墓群は中世後期に位置づくと考えられ、直接的に禅宗との関係を示すものはないが、指呼の間にある開善寺を視野にいれる必要がある。すなわち、開善寺の開基が禅宗であり、その創建が14世紀代と伝えられることは注目される。今のところ、今次調査地点の中世の墓地は禅宗の僧により葬送が執り行われた場と考えることが妥当であろう。

余談であるが、今次調査地点での経塚の存否については、上述のとおり保留した。火葬の広まる以前においては一般民衆の間には風葬や林葬といった遺棄葬があったのではないかといわれている。兼康保明は律令期には山川藪沢が公共のものとされ拓かれて墓地として利用された可能性、『続日本紀』や『三代実録』に鴨河原に遺骸等が散乱するさまが描かれていること、鎌倉時代の『餓鬼草紙』に墓地に遺棄された様々な遺骸が遺棄された様子が描かれていること（1976）等々を挙げ、遺棄葬の存在を考えている。また、中世前半の鎌倉ではやぐらや浜地の土壙墓に埋葬されたよりもはるかに多くの人達が生活しており、下層民衆の多くは風葬・鳥葬・水葬等が行われたのではないかと考えられている（鎌倉考古学研究所　1994）。このように葬送の痕跡が残りにくく可能性が指摘されている遺棄葬であるが、その一つとして、佐藤米司（1971）はサイノカワラを挙げ、サイノカワラが寺の境内または境内に接する地に多くみられ、室町時代以降、庶民の仏教受容や地蔵信仰の繁昌とともに広まったとしている。本遺跡の地山が礫を主体としている状況を思い浮かべるとき、調査地点周辺が当初はサイノカワラのような

ステバカであったのではないかと想定される。

先述のとおり、本遺跡では硬砂岩を主とする扁平礫がＳＩを中心に出土している。その石材は、火葬墓を構成する礫が地山に含まれる花崗岩等を主としているのに対して、天竜川本流から持ち込まれ、意識的に副葬されたと考えられる。この副葬品という観点については、先に新井原・石行遺跡や上ノ平遺跡例から字が書かれていなくても経石として考えられ、六道思想定着以前には経石を副葬する葬送儀礼が存在する可能性を指摘したところである（飯田市教委　1999)。それは、礫石経が鎮魂具・地鎮具的な機能をもち経塚に埋納されること（田代　孝　1993)、上述の集石墓の起源が経塚に求められることからも肯首されよう。殊に、ＳＫ85例や松尾北の原遺跡（上の城地籍ＳＫ44）例のように、蔵骨器に扁平礫で蓋をすることは鎮魂具的な機能を持っていたことを表している。こうした機能の他に、経が悪霊を追い払う力を持っていることから呪術的な役割を果たしていた可能性もある。長野・山梨・群馬・新潟等にみられる墓上に小石をおいて魔除けにする例（井之口章次　1979）はこの一例といえる。また、中世の銭貨副葬については、六道思想の他に領域結界、棺を納める墓壙の内部を鎮めるための呪具、棺に土砂をかけ埋納する時に使用する呪具等の役割が指摘されている（小林義孝　1999)。想像を逞しくすると、扁平礫の丸い平らな形状は銭貨を連想させ、経石と銭貨が葬制において同類利用された可能性も考えられる。

一般に、石には霊の憑り代となる観念が広い地域にわたってみられる（佐藤米司　1971）とされている。今後、墓内から出土する礫について注意を要する。

これまでみてきた火葬墓の他に、中世には土葬墓もまたその存在が知られており、通常の場合、前者がより上層の人々の墓であることが明らかにされている。中野市安源寺遺跡や松本市向井畑遺跡では北頭位西面屈葬があり、北関東や中部の広い範囲にこの葬法の分布がみられる。こうした葬法の背景には浄土思想の流行が指摘されている。ただ、神奈川県鎌倉市長勝寺遺跡では男性は北頭位西面屈葬であるのに対し、女性は西を向かせない規制が強かったことが指摘されており（田代郁夫　1997)、また全国的にみても男性も必ずしも北頭位と限らないことから、地域や性別により差があった可能性がある。

今次調査地点では、ＳＩ01の下部からＳＫ40が検出されており、火葬墓に先行して土葬墓があったことが明らかにされた。ＳＫ40は掘り方が円形を呈すると考えられ、該期の土葬墓が方ないし長方形を基調としているのとは異なる。こうした円形を呈するものとして、市内羽場曙遺跡や方角東遺跡の土葬墓が挙げられ、他に殿原遺跡井戸１（飯田市教委　1992）も可能性がある。伊豆地方では14～15世紀代と考えられる直径約１ｍの円形の土葬墓があり（原　茂光　1997)、こうした形態の墓も類例を求めれば数が増すであろう。なお、円形の土葬墓や火葬墓といっても（北頭位）西面屈葬例があり、浄土思想に基づいて葬送が行われたものがある。

以上のように、今次調査では中世後半には火葬と土葬の両方が行われていることが明らかとなった。こうした葬制の違いは、主に階層差に起因することが既に明らかにされている。上部施設の状況がわからないものが多いので、火葬墓・土葬墓それぞれに葬られた人々がどのような階層の人たちか不明な点もあるが、ＳＫ85の蔵骨器からすると火葬墓の被葬者は上級の階層に属していたと考えられる。

静岡県では、①集落外の丘陵地などに造られること、②集団墓を形成すること、③墓の形態が多様な

こと。特に集石墓のあり方、④火葬と土葬の両者がみられること、⑤遺存する副葬品の希薄なこと、⑥銭が副葬されること、⑦墓標が立てられること、⑧造墓する階層が広がったことが中世墓の特徴として挙げられ、14世紀に被葬者層の変化が考えられている（静岡県考古学会　1997)。こうした状況のいくつかは長野県内でも当てはまっている。調査地点では、寛文以前の墓塔は天竜川が氾濫した折堤防を作るのに使われたという伝承があり、墓塔が立てられていた可能性が高い。

5．近世－土葬墓を中心に－

近世になると、支配者層では儒教の影響、庶民階層ではそれまで土葬をしていた階層が墓地へ流入したこと（藤澤典彦　1997）から、一部都市住民を除いて土葬が主体となる。

近年墓埋納の貨幣研究が急速に進展し、渡来銭から古寛永通宝への移行はきわめて不連続であり、その短期間の交替には効果的にかつ広範囲で実施された政策を伴っていたことが鈴木公雄によって明らかにされている（鈴木　1988他)。飯田市松尾北の原遺跡で調査された中・近世の火葬墓・土葬墓では、「６枚完全な六道銭のセット」に限らないものの、渡来銭が出土した遺構61例のうち50例、実に81.9%が古寛永以降の銭貨と共伴しておらず（飯田市教委　1996)、渡来銭と古寛永の間にはヒアタスが認められる。すなわち今次調査された火葬墓・土葬墓についてもその造墓年代を推定する上で銭貨が有効であるといえる。なお、松尾北の原遺跡の11例の共伴した事例についてみるといずれも土葬墓であり、渡来銭が出土する土葬墓はあっても火葬墓からは古寛永通宝以降の銭貨は出土していない。こうした状況は本遺跡においても同様である。

今次調査地点の場合、土葬墓の中には詳細時期不明なものが多いが、大部分の土葬墓は近世に下るものと考えられる。また、僅かにＳＢ09付近で19世紀以降の瀬戸系磁器が出土しているものの、出土した銭貨には寛永鉄銭が含まれていないことから、おそらく18世紀以降に位置づく土葬墓はないと考えられる。

今次調査地点では近世と考えられる土葬墓は長方形の平棺が埋葬されたと考えられ、一方松尾北の原遺跡では平面方形・長方形の墓壙よりも円形のものが多く違いがある。これは本遺跡が18世紀以降に造墓されたものはないと判断されるのに対し、松尾北の原遺跡ではごく近々まで埋葬が行われてきたことによると考えられる。松尾北の原遺跡では、古寛永以前の座棺が６%程度であるのに対して、新寛永以降は22%まで増加している。調査担当者は形態の違いは宗派の違いも考慮しなければならないとしているが、近世前期に平棺から座棺に転換していったのではないかと考えられる。これに対して、本遺跡周辺での近世墓の調査例をみると、川路辻前遺跡・同月の木遺跡（２例子供の埋葬例で平棺があるが)・龍江細新遺跡（飯田市教委　1998）では座棺に遺骸が納められている。辻前遺跡例は寛永鉄銭が、月の木遺跡例では文字寛永通宝・新寛永・文久永宝が多く、これらは副葬銭からみて本遺跡例より時代が下ると考えられる。すなわち都市の外縁に位置する松尾北の原遺跡と農村部では座棺への移行に時間差がある。これは都市の墓地事情とともに、共同墓地から家を中心とする墓制に移行する時期に差があった可能性を示唆している。あるいは都市の方が早く浄土信仰が薄れていったのかもしれない。

土葬墓の長軸方向はＮ11～60°Ｗ、Ｎ20～89°Ｅのまとまりがあり、後者はさらにＮ50°Ｅを境に細分できる。これらの長軸方向は、北方向を採るというよりむしろ地形に平行している（挿図11)。埋葬体位については、墓壙の規模・形態から屈葬の可能性が考えられ、北頭位西面屈葬には当てはまらない

ように思われる。

江戸では18世紀になると身分・階層差が埋葬施設に反映されるようになり、また墓標を立てる先祖供養のやり方が家を中心にして行われていくということが定着し、さらに戒名の格式が成立するとされる（谷川章雄　1993)。「村落における農民の中に、家意識というものが強く出てくるということ、そして、墓が社会的な秩序の一つの表徴として認識されてきたのが、18世紀であろう」とされる（谷川　同前)。また、笹本正治は、信州では17世紀半ばぐらいから石碑を持ったお墓が見られるようになり、屋敷墓の成立時期もこの時期である（石井　進他編　1993）ことを指摘している。今次調査地点に隣接する笹岡家の墓では寛文12（1672）年以降の石塔が確認されている。この時期にそれまでの共同墓地から家を中心とする墓制に移行した事実の一端を示すものといえる。

6．今後の課題

今次調査は、工事計画把握から工事実施まで期間がなく、また、現地調査に引き続き単年度中に整理・報告書刊行をしなければならないという制約の中で、特に中・近世墓の調査については十分精査できなかった。加えて、調査者の中・近世墓に対する見識不足があったことも否めない。

まず、調査では遺構検出時に形態的な把握によりＳＫ（土壙墓・土坑)・ＳＩ（集石墓・集石）の区分を行った。それは完掘して遺構の性格が把握できるまで遺構名を付さずにおくことが作業進捗上困難であったことによる。この点、ＳＢ（竪穴住居址・竪穴）についても同様である。中・近世墓の場合、形態上の集石墓・土壙墓という区分の他に火葬墓・土葬墓という区分があるが、これらの明確な定義・峻別を行わなかった。現状の場当たり的な取り扱いは、該期の墓制研究を混乱させかねず、早急な定義が必要である。

さらに冒頭掲げた制約等の中で、遺骸の残存部位・残存状況等の記録は残していない。多くの土葬墓について良好に生骨が遺存していた訳ではない。しかし、中には頭骨や大腿骨等把握できたものがあることも事実で、断片的ながらも埋葬体位が把握できたであろう事例が少なからずある。上記時代別の総括で触れたが、浄土思想に基づいた北頭位西面屈葬は当地方の中世から近世の主要な葬法であるが、その消長や地域性・性差等々については不明な点が多い。当地方で生骨が遺存していない遺跡が多い中で、今次調査でこの記録が欠損していることは、同様に恵まれた条件下で記録が残されていない幾つかの遺跡とともに悔やまれることである。今後の調査では遺骸の残存部位・残存状況を精密に記録しておくことが必要である。

また、ＳＫ・ＳＩからは副葬銭が出土した。この副葬銭は一般に六道銭と呼ばれ、中世後期まで遡るとされる（桜木晋一　1993)。広く墓中埋納銭貨数が６枚に収斂していくことを捉えて六道銭の成立とする立場、「六道能化の地蔵に対する奉斎銭としての意味を強く持っていたと言うべきで『六道銭』の語は中世においてこそ相応しく、中世の成立と考えるべき」（藤澤典彦　2002）という積極的に中世に位置づける立場、「中世墓における銭貨の意義は多様であり、それらを刈り込んで頭陀袋に収斂させていく中で六道銭は成立する」という立場（小林義孝　1999）等がある。小林は頭陀袋への埋納という定型化を六道銭の成立と考えているが、藤澤も近世には「三途の川の渡し賃」へ転化することは認めている。今後は「墳墓のどこの場所から、どのような状況で、どのような状況の銭貨が出土したか」（小林同前）を克明に記録することが、頭陀袋に銭貨が納められていたかどうか等の把握や、中世～近世の葬

送儀礼や死生観・銭貨観等を明らかにするために必要となってこよう。

今次調査の結果、弥生・古墳時代集落の周縁的な状況が看取されたわけであり、むしろ調査区北側に集落の中心部分が展開することは明白である。県史跡御猿堂古墳・馬背塚古墳等の築造を支えた集落として一体的に保護策を講じ歴史的景観を保全することが、これら文化財を愛護し活用していく上で不可欠と考えられる。また、中・近世の諸遺構は古刹開善寺との緊密な関係を有すると考えられる。当地方における墓制研究上注目される遺跡といえる。現状のどかな田園風景が広がる一帯とはいえ、基幹道路が開通したことにより今後本遺跡内での諸開発が加速することが懸念される。今後、調査地点周辺で文化財保護の本旨に則り不断の努力を行うことこそ、肝要といえる。

引用参考文献

〈第Ⅱ章関係〉

飯田市教育委員会　1967　『鏡塚発掘調査報告書』

飯田市教育委員会　1968　『内山・花の木発掘調査報告書』

飯田市教育委員会　1974　『開善寺境内遺跡』

飯田市教育委員会　1975　『前の原・塚原』

飯田市教育委員会　1976　『駄科北平遺跡』

飯田市教育委員会　1978　『毛賀御射山遺跡』

飯田市教育委員会　1990a　『前の原遺跡』

飯田市教育委員会　1990b　『鈴岡城址』

飯田市教育委員会　1991a　『開善寺境内遺跡』

飯田市教育委員会　1991b　『ガンドウ洞遺跡・飯田城跡』

飯田市教育委員会　1993a　『久井遺跡』

飯田市教育委員会　1993b　『三尋石（Ⅱ）遺跡・富士塚遺跡・中村中平遺跡・西の塚遺跡』

飯田市教育委員会　1995　『安宅遺跡』

飯田市教育委員会　1996　『久保尻遺跡』

飯田市教育委員会　1997　『龍江城・龍江阿高遺跡』

飯田市教育委員会　1998　『内山遺跡』

飯田市教育委員会　2001　『開善寺境内遺跡』

飯田建設事務所　1969　『安宅・大島』

大沢和夫　1961　「前林発見の瓦塔について」『伊那』７月号

遮那真周　1966　「飯田市竜丘宮洞発見の塼仏について」『伊那』４月号

下伊那史編纂委員会　1955　『下伊那史　第２巻』

下伊那史編纂委員会　1955　『下伊那史　第３巻』

下伊那史編纂委員会　1967　『下伊那史　第５巻』
下伊那史編纂委員会　1991　『下伊那史　第１巻』
下伊那誌編纂委員会　1984　『下伊那誌　第１巻　地質編』
下伊那地質誌編集委員会　1976　『下伊那の地質解説』
竜丘村誌編纂会　1968　『竜丘村誌』
長野県　1961　『重要文化財開善寺山門修理工事報告書』
長野県教育委員会　1990　『天竜川』歴史の道調査報告書ＸＸＸ
長野県教育委員会　1992　『ギフチョウの保護活動と棲息環境の保全　古墳の景観保存のための啓蒙について』
長野県史刊行会　1983　『長野県史　考古資料編　主要遺跡（中・南信）』
長野県史刊行会　1988　『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』
長野県史刊行会　1989　『長野県史　通史編　第１巻　原始・古代』

〈第Ⅲ章関係〉

飯田市教育委員会　1998　『美女遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－』
長野県埋蔵文化財センター　1999　『更埴条里遺跡・屋代遺跡群　古代１編』
山下誠一他　1999　「長野県における古墳時代中期の土器様相－屈折脚高坏の出現から消滅までの予察－」『東国土器研究』５

〈第Ｖ章関係〉

飯田市教育委員会　1992　『殿原遺跡』
飯田市教育委員会　1996　『北の原遺跡』
飯田市教育委員会　1998　『細新遺跡Ⅱ』
飯田市教育委員会　2000　『宮垣外遺跡　高屋遺跡』
飯田市教育委員会　2001　『井戸下遺跡』
網野善彦・石井進編　1988　『中世の都市と墳墓』日本エディタースクール出版部
石井進・萩原三雄編　1993　『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集、名著出版
井之口章次　1979　「墓葬礼」『葬送墓制研究集成４　墓の習俗』名著出版
今村善興　1992　「高森町大島山『上の平火葬墓群』」『伊那』1992-6
岩城隆利　1988　「供養具の意味について」『仏教民俗学大系４　祖先祭祀と葬墓』名著出版
上田典男　1992　「長野県における中世の火葬施設をめぐって」『帝京大学山梨文化財研究所報』16
江戸遺跡研究会編　2001　『図説江戸考古学研究事典』柏書房
岡田正彦　1986　「飯田市座光寺石行遺跡発掘調査概報」『伊那』1986－６
尾野善裕　1995　「中世の火葬－東海地方－」『シンポジウム中世の火葬－その展開と地域性－』
河西克造　1989　「中世墳墓の地域的様相－中部－」『考古学ジャーナル』304
勝田　至　1987　「中世民衆の葬制と死穢－特に死体遺棄について－」『史林』70－３
勝田　至　1992　「六　村落の墓制と家族」『中世を考える　家族と女性』吉川弘文館

勝田　至	1993	「文献から見た中世の共同墓地」『中世社会と墳墓』
兼康保明	1976	「古代・中世の墓制」『日本仏教民俗基礎資料集成　元興寺極楽坊』
鎌倉考古学研究所	1994	『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部
上井久義	1979	「喪葬史序説」『葬送墓制研究集成　第五巻　墓の歴史』名著出版
橘田正徳	1991	「３土葬墓二態－中世前期の土葬墓の系譜について－」『中世土器研究』63
小林義孝	1999	「『六道銭』小考」『ＨＯＭＩＮＩＤＳ』２
齊木秀雄	1997	「鎌倉の寺院配置と墓域」『都市と宗教』中世都市研究４
斎藤　忠	1988	「墓と仏教」『仏教民俗学大系４　祖先祭祀と葬墓』名著出版
斎藤　忠.	1987	『東アジア葬・墓制の研究』第一書房
坂詰秀一・森郁夫編	1986	『日本歴史考古学を学ぶ（中)』有斐閣選書
桜木晋一	1993	「六道銭」『国史大辞典』
佐藤米司	1971	『葬送儀礼の民俗』民俗民芸双書62
塩入伸一	1988	「葬法の変遷－特に火葬の受容を中心として－」『仏教民俗学大系４　祖先祭祀と葬墓』名著出版
静岡県考古学会	1997	『静岡県における中世墓』
下伊那誌編纂会	1991	『下伊那史』第一巻
頌文社刊	1971	『貨幣手帳』ボナンザ別冊1972年版
新谷尚紀	1986	『両墓制と他界観』日本歴史民俗叢書　吉川弘文館
新谷尚紀	1996	「火葬と土葬」『民衆生活の日本史　火』思文閣出版
鈴木公雄	1988	「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学』53-6
鈴木公雄	1993	「渡来銭から古寛永通宝へ－出土六道銭からみた近世前期銭貨流通史の復元－」『論苑考古学』天山舎
鈴木公雄	1999	『出土銭貨の研究』東京大学出版会
瀬戸市埋蔵文化財センター	1994	『東海の中世墓』
高森町教育委員会	1996	『上ノ平遺跡』
田代郁夫	1997	「鎌倉における寺院境内墓の発生－長勝寺遺跡検出の土壙墓群について－」『湘南考古学同好会々報』67
田代　孝	1993	「山梨の経塚」『山梨の経塚』山梨県立考古博物館
田中久夫	1975	「文献にあらわれた墓地－平安時代の京都を中心として－」『日本古代文化の探究　墓地』社会思想社
谷川章雄	1993	「考古学から見た江戸の生活史」『特別展「江戸の暮らし」〈近世考古学の世界〉』新宿区立新宿歴史博物館
中央公論社	1989	『日本の陶磁　古代中世篇３　瀬戸美濃』普及版
帝京大学山梨文化財研究所	1992	『村の墓・都市の墓』
帝京大学山梨文化財研究所	1997	『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』８
土井卓治	1975	「民俗資料にあらわれた墓地」『日本古代文化の探究　墓地』社会思想社
東京大学出版会	2001	『図解・日本の中世遺跡』

橋口定志	1997	「考古学から見た中世から近世へ」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』8
畑　大介	1992	「中世民衆葬制と考古学－甲信地域の土坑墓をめぐって－」『帝京大学山梨文化財研究所報』16
原　茂光	1997	「伊豆韮山における中世墳墓について」『静岡県における中世墓』
藤澤典彦	1989	「中世墓地ノート」『佛教藝術』182号
藤澤典彦	1997	「中世墓地の成立と終焉」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
藤澤典彦	2002	「墓中埋納銭貨の変容－六道銭の成立をめぐって－」『季刊考古学』第78号
藤沢良祐	1979	「長野県出土の古瀬戸について－特に蔵骨器を中心として－」『信濃』31-11
名著出版	1991	「小特集　中世社会と墳墓」『名著出版』19－11
桃崎裕輔	1995	「関東・甲信地域の様相」『シンポジウム中世の火葬－その展開と地域性－』
桃崎祐輔	1997	「中世墓の成立と終焉（関東以東の事例）」『静岡県における中世墓』
社会思想社	1975	『日本古代文化の探究　墓地』
山崎克己	1993	「一ノ谷中世墳墓群遺跡とその周辺」『中世社会と墳墓』
雄山閣	1975	『新版仏教考古学講座』

報告書抄録

ふりがな	かいぜんじけいだい いせき
書名	開善寺境内遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬場保之・伊藤尚志・羽生俊郎
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　TEL0265－53－4545
発行年月日	平成14年3月　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
開善寺境内遺跡（かいぜんじけいだい いせき）	飯田市上川路1077他	20205		35°27′20″	137°49′10″	平成13年5月9日～8月30日	1710.8㎡	県道改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
開善寺境内遺跡（かいぜんじけいだい いせき）	集落址 墓址	縄文時代草創期～晩期 弥生時代中期～後期 古墳時代中期～後期 中世 近世	弥生時代後期 竪穴住居址　1棟 古墳時代中・後期 竪穴住居址　36棟 掘立柱建物址　17棟 一本柱列　1基 竪穴　9基 時期不明 竪穴住居址　2棟 掘立柱建物址　1棟 竪穴　1基 土壙墓・土坑　74基 集石墓・集石　61基 溝址・溝状址　7条 埋設土器　1基	縄文土器 石器 弥生土器 石器 土師器 須恵器 灰釉陶器 陶器 銭貨	弥生時代後期・古墳時代中～後期の集落と中・近世の墳墓群が調査された。 古墳時代の集落は、御猿堂古墳・馬背塚古墳等の築造に関わった人々が生活したと考えられる。 また、中・近世の墳墓群は、墓制の変遷を解明する上で重要である。

かいぜんじけいだいいせき
開善寺境内遺跡

－ 本 文 編 －

平成14年３月　発　行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会

印　　刷　龍共印刷株式会社